

より聳を入たるに。二家ともにむこの名代にして諸式をゆづり。若不縁ならば身體二つにわけ取て別るべしとの書置に夫婦納得の判させて家財半分は初めより聳引出物との約束也。むこは忝なく娘は萬大事にかけて。其家富さかへけり。今比地下の養子入聳。みな娘に譲りて。すこしにても女の心に入らざれば。其まゝ追出し子ある中は生甲斐もなき男の胸をさすり暮し追從輕薄をいひならべ下人にとりたる事おほきに。それはいゑの滅亡と見て。むすめに跡をゆづらず聳を大切に仕たる事。めづらしき親心と世の取沙汰に合けり。

遣ふたり柳生流の心法

去物しりのいへるは。大行は細瑾を顧見すとて。大事を心にかくる者は小事に目をかけぬものと也。それも大望の用に立事は小事といへども塵積りて山となるたとへなればつゝしんで守るべし。只用に立ぬ事を問ふまじとなり。武士の主君より恩賞を蒙りて事なけれ。文を學びてつかへ事あれば勇をばげみて命をなげうつは大事なり私の遺恨は小事とて。剩身を亡ぼし家をうしなふにおよべり。是小喧嘩にとらかされて大忠節を忘るゝものなり。此心農人賣人まで皆有事にて忠節のさはり。商賣の邪魔ならば分別有べし。人のわれに慮外をいたすも悪しと思へば腹たち。笑止と思へば不便なる物なり。又不禮にはなけれども此方のまはり氣にて奇怪に覺ゆるも有ぞかし。唐土には游俠とて氣隨存外に身を持。鬭争口論をこのみ腕だてをして人をこなし理屈をいひて寶をむさぼり頼む頼まるゝなどいへば無理非道にも味方して命をすつる事を塵とも思はず。他の喧嘩を買ふものあり。是こゝもとの男だてといふ者なり。其樂しみ鼠の荒るゝがごとくかけあるき飛めぐる所はいさましく見ゆれども明りへ出る事ならず。あれ過しては升をとし地獄わなにかゝり。猫鼬にぶくせらるゝ類にて。くゝり上られ牢獄に入る有様淺間敷事いふばかり無くて天井のつかへたる事。鼠の中にくすにてぞ有ける。むかし都の町に。金十郎。鳥丸の鹿。龍谷金土河原町のおどろなどとして。あはれ者

の名を得たる有り此等猶かさしき名なり。假ば鼠を糞かふり。油わふりなどいふがごとし。今はむかし大坂の町にも。どろの八。宿なし團七かり金文七。國司の吉兵衛。ねぢがね。狸。みぞ板。獄門などといふ喧嘩好み有て。只貧弱の者は相手に不足として富者。或は出家。侍をこなして手柄と仕けり。ある日阿波座といふ傾城町を西國方の武士と見へて。三十年あまりと二入ばかりと二人笠ふかゝと忍びて見物の體なるを。件の知れ者等打寄て。しや胡蓋なる侍。若衆をつれしこそこしやくなれ鬨りて慰まばやといふよりはやく欠出し。矢庭に立廻り。若衆のあみ笠を取て引あをのけ男かかと視見けり。若輩人とびしさりて推參者。何やつ成そのがさじと。氣色しけるを兄分らしき人ふり歸り見て。少も驚く氣しきなく。是くそつじ致すまじ。此方へ來るべしとしきりにとどめて。しづかにいざなひ行けり。くせ者等手を叩ひて是は氣だてのよい侍かなやれ其腰にさしたるは竹光か金光か。いやゝあれは音密であらふなどと。様々に悪口しければ。又こそくるわに喧嘩が出来たりと。町人商人ぞめきの者共雲霞のごとく逃尻をかまへて見物仕けり。二人の侍はわき目ふらず北の方へあゆみ行いよゝあざけりて。是く其方は。門を閉て通る事ならず餘りうるたへて。ゆくさきも見へぬそうなりと。笑ひのゝめきけり。侍はメたる門の際に立とゞまり。若輩人に向ひ。其方は知らずや。きやつばらは國土にわく悪虫といふものなり。刻みてもあきたらわ共。身が手をおろすまでもなし。殺す役の人が有て。おつゝけみちんにせらるゝそうよ此方へ來れといひさま。門の屋根にとびのぼりけり。じやくはい人も同じくつつかかけのぼりしばらく跡をにらみつけてあなたへひらくと飛をりたるありさまひとへに飛鳥のはたらきのごとし。見るひとをぢおそれあきれて跡をながめ居たり。もとよりひらく事かなはぬ門なれば。東西の兩口より我さきにとかけまはり。尋ね見けれどもはや行がたなくて。何國の誰といふ事も知れざりけり。誠に彼さふらひの言葉のごとく終にことごとくとらへられて御成敗にぞ合ける。其後風聞しけるは彼二人の侍はちかき頃敵討たる人なりとぞ申き。

當世誰が身の上卷之五

正直は首に宿る親心

去智者のいへるは。遠き慮なければ。ちかきうれへありといふ事を。愚成ものはあやまりて。行末ばかりをあんじ。當分の事をおろそかにす。只後世ねがひの死して佛にならんとばかり念じ一生悪業をなし終るがごとし。其本亂れて未納る事あらじとて。たとへば的は遠きを見付たるなり。是に中んとするは。手前にあり。刀にて物の切るゝはおもんばかり也。是も兼てよく磨ざれば事にあたりて益に立べからず。智慧才覚もつね々みがかずしては俄に出るものならず。諸の藝能皆此ごとし。其内若き時よりはげむ事は。素地に物のしみよきごとく。年よる迄元ぬもの也。依一日片時もはやく思ひ立べきは善と名の付たる道なり。猶中年におよぶ人の迎もかなふまじとて打捨るは恥の上塗にてうるさしと申されし。今はむかし江戸の町に菱川師宣といふ浮世畫工有。其比世に名知られたる本繪師も此菱川が妙術凡筆の及ぶ所にあらずと取沙汰して終に上つかた迄も召出されけるとかや。角て其弟子其門葉とて菱川を名乗畫工幾等といふ事もなし。然はあれど師宣におよぶものなかりしと也。凡一流の元祖と成事通例には有べからず。爰に品川の邊に年比住ける醫師あり文才大方に恥かしからねど。いか成ゆへにや藥吞人すくなく。漸々難經十四經などの講談任て手前かつくなる暮しに男子二人持り總領に我が醫の道はげませ。弟ははまだ童なればゆくは武家方の奉公か。もしは職商賣にも有付ばやと見つくるひ過ける。此子いつとなく彼うき世繪を書習らひ。しかも筆だて器用肌にて好ば上るならひ。程なく人にも見する比なりければ。親もすこし子自慢にて貧家の樂しみとぞ成ける。斷哉此繪をそらしたる此みちの修行者ざりとは恥かしき事などと陰にても云あへりまた爰に深川の邊に何某といへる繪師

此こと傳へ聞。我娘一人あり。早十歳に成れ共此次の子なし。依て男子を養ひて是と妻合。名跡をもつがせばやと。兼々のぞみ金銀持て來る者あれども手に懸持て來る者なし。是くつきやうの事なりと色々縁をもとめ結入れれば。親は元來貧數身の上。中々釣合まじき由。云はねば理も聞へずと旁々辭退仕けれども。其段はよく合點の事。菟角丸裸にて申請る上はと。互に一札取かはして。先は五人十人過兼ざる家の養子息子とぞ成ける。かくて繪を誂へに入來る者此家の細工は里芋か鰯の魚か親より子が見事なりと。左禮言どもいひけり。それより三とせを送る間に實父の醫師は相果けり。やしなひ親のもとには實の男子生れて。なげきやらよるこびやらわけもないうき世のありさまかな。此親の寵愛また類ひなし。殊に母おや養子せし事をくやみいかにもしていなさばやとおもひしきりにつれなくあたりけるが。終にさまの難題どもいひたて兄がもとへ送り歸しぬ。さもしき仕かたと思へども親の忌中といひ。殊にとがめて益なき事をさとり少々損失あれども逆も堪忍するうへはと所の人の耳までも入れずすましかけるが。かくても有べき身ならねば覺へたる繪を書て。世わたるいとなみとぞしける。養子親つくくおもひけるは。此者當地にありて繪を書ば。わが家の得意かれを尋てあつらへやすらん。然らば大きな妨なり。此事いかとすべしと。淺瀬にもやふもがり舟。そこ叩ひて談合しければ何の子細の有べき。此ものは其方の弟子なり。弟子として師匠の邪魔湯命におよび候よし申上んに此職とせめずして有べきか。急ぎ訟へたまへと評定一決してすてに訴狀しためけり。此事ひそかにつげしらせいかと思はるゝといふ者あり。兄弟の者かぎりなくうらみ。此繪の事養子に行かぬ内より書たるは實なれども。世けんへ出されば椽の下の舞にやならん。いかとあんど煩ふ所に父の朋友何某といふ醫師はしり來りて。兄弟の人達少も氣遣する事なかれ親父末期に及びて某に頼みをかれし事。二十ヶ条あり。其中に小人の心は替りやすし。若世伴が繪に付て師匠と親方よと非道をいひかけられ難儀におよぶ事あらば不動堂のくさず引觀音堂のさるの繪馬掛奉りし年號月日。みな幼少にて書たる證據これにて申ひらくべしと申されたり。死後までも親の慈悲。遠

きおもんばかり。爰にあらはれたりと喜び合ふ事かぎりなし此事又養父の元へ聞へ彼くは立泣寝入に仕ければ扱はまた此事聞へてなつとく仕たるならんと。それより互ひにいこんなく。浮世をわたる家とぞなりける。念の入たる仕わざによりて善人あまた出来たり。よい中のかきとはこれらならんと申つたへ侍りし。

頓智は奇の端の小僧

結構は阿房の唐名といふ諺よく覺悟すべき事なり。噴べきをいからざるは大かた愚鈍にあらずしては欲ふかき人か此人は損有か。又目下に逢ては噴るまじきをいかるなり。但しかくいへばとて。心に針を持って人にくまるべからず。只其位によつて理を以て非をおす事なり。くらゐとは君父兄夫といふ位有て異見を加へ引廻し。臣子弟妻の役有て。悪しき事を異見申し。友達といふしたしみ有て信を以て異見をする事なり。其外はいふべからず假ば大名にあやまちあれば。家老いさむるなり。宋々の者は慮外といふ科あれば申事かなはぬがごとし。我にかまはずいふべき筋にもあらぬ人にけぢめをとらせ某はいひたひ事云などと自名乗やからは金銀にたかぶるか。強力を頼みにするか。又は極貧にて。目だれを見るか。是も又聞人の心によりて恐るゝもあり。狂亂と見るもあり。また主君師匠など恥に成る事は。一命を投打ても雪むべきなり。彼齊の晏子が。楚國へ使に行しを。楚王是に恥をあたへんとはかり。齊は人の不自由なる國にや。其方が様なる不仁物者を使者にこされたりと有る晏子答へて。齊は人の自由なる處ゆへ。上國へは器量よきをつかはし。下國へは某が様なる者をつかはるゝといふ其外色々なぶれども一つもつもらずして君の名も我が名も上げるとなり。人の心ほどあぶなきものはなし。夫柔ければ女のさばり。女阿房なれば男氣隨を出す。依て互によく工夫めぐらし不謂を云てそなふべからず。いふべきを云はずして悔むべからずと申されし。今はむかし。蘇州賢者蘇山とて。其比羅宗の三弟僧と沙汰しける老和尚有。中にも賢者蘇山は同學のちなみふかく諸國の學究

悉立めぐり。終に道德天下に秀てたり。然れ共兩僧行跡の風儀同じからざる事あり。南山は阿波の國の精舎に居りて。紫衣僧官にのほり常に威儀高し。賢岩は豊後の國の山庵に住して僧綱を辭し。黒衣を着手づから田島耕作して拜誦も心安し。何れも數百の弟子數千の且徒有て歸依崇敬する事おびたゞし。爰に賢岩の弟子に菊藏主とて小僧あり。町家に生れて稚より才智人にすぐれければいかさまにも大丈夫の完とも成べきと云あへりけり。ある時屋敷方に齋の施主ありて参りしに。主は常に此小僧の頓智なるを見及び。いか様にもいひつめて心見ばやと思ふ折節。隣に屋敷にて魚を炙るけぶりの風にさそはれてや一筋に匂ひ渡りけるを。主何やらん惡敷香の仕るといひければ。菊藏主是は鱸魚を焼にほひにて侍らふといふ。主扱こそと思ひて。盗よく賊を知ると承はりしが。御ぼうには鱸魚の匂ひをよく御存知あるこそ不審なれとがめけり。舌を引入ぬに菊藏主。其方様は尿を参りけるかと云。主氣色をそんじ。抑尿は人の喰ふ物かと問ひければ。さればこそ人の喰はぬ尿をも香ひは御存知有べしと答へけり。座中大きに感して一休和尚の昔もかくやと頼もしく思ひいよ／＼念比にぞもてなしける。其後年十七の春他國見學の爲にとて初て南山のもとへつかはれたり。遙々海路をへて寺に案内しかくと申入れば。即和尚御逢有べしとの事也とて奥にいざなひ行けり。折節南山は座敷に樂寐して其儘仰ながら。賢岩の書翰など披見あり。扱菊藏主を覗かへりて豊後より來りたる坊主とは汝が事が。白杵に替りたる事もなきか賢岩は今に定て麥作りて喰はるゝであらふと有ければ。菊藏主承はり。さんい仰の通り。和尚には耕作仕ながら常に御前の事を申出され定て高枕して寐て斗御ざりませふとて。時々私共も大笑ひ仕りますとこたへたり。南山とかふの言葉もなく草臥しならん寮に行て休息すべしといとまを出されたり。其後南山弟子衆に向ひ。扱々氣の有坊主に出合て起もならず寐もならざりしとて一笑有しとかや。誠に云にくき所を能云て師弟の名を穢ざりし。此事一宗に無隱。今に語傳へ侍る。

夫は名作の守り刀

去者知のいへるは夫婦の道は陽陰相調ひて家おさまり子孫を求るの根本にて一大事の義なり。されば子孫なければ君臣も父子も勿論天地萬物ともになきもの也。依て上古の聖神其大切なる所を知らせんために婦に七ツの去あり。三ツのさらざる有と法をたて給ふ。所謂七ツの去とは父母に順がはざれば去る孝徳にたがへば也。子を産されば去る子孫たゆればなり。淫亂なれば去る一族をそこなへばなり。悋氣ふかければ去る所帯を持崩せば也。悪しき病ひあれば去る姿をみだらし榮へ樂しむ事なければなり。言葉多きは去る其親をへだつればなり。盜人心あれば去るいつはりあればかならず不義なれば也。此七ツは家をととのへ國を治め天下を平かにする。萬世の始りかけて下にていへば。其日過の境界にても一身の上立事かなはざる故なり。又三ツのさらざるとは迎ゆる所有て。返す所なければ去らず。三年の喪にあつかりふるれば去らずとて舅姑によくつかへて子と同じく孝行をつとめしは去らず。前貧賤に後富貴なれば去らず。かくのごとくの教有といへ共此外の事にて退去する者多し。是夫婦いさかひより起る。此喧嘩貧家にあればくらしの不自由よりおこるといひ富家であれば榮耀のあまりなりといふ。然れども左に非ず。夫の愚鈍なるか婦の小ざかしきかより起れり。詞は男めきていかつけれ共。心は女同前に成て。小間事をせはしくいひならべ。又すがたは女らしけれども。心は世間をはるごとくいきりて。只親が子に恐れ。兄が弟にのまるゝごとく天くだり地のほり。位混亂して心易だてより出る事にて。文盲と氣儘とのなす事なれば。其口論理共に非なり。依て夫婦いさかひをあつかふ人は夜日と翻られに行がごとし。只夫おとなしければ。異見をすれどもよく用ひもちひざればざる。堪忍なれば堪忍す。又女貞節なれば夫は馬鹿なりといへどもあなどらず。色ふるけれども妬まず。不仕合なれどももどかしからず。勤ておんにさせず。野の末山の奥までも。いとおしくて付まとはば。心臓はひとりみかけたる物なり。二人

の内一人よくてもかくのごとし。況や兩方そろひたるをや信の夫婦とは申べし。親は夫にそむけとはそだてねども甘ければ氣隨に成者なり。それも夫の許にて直るあり。神妙にそだてても夫を持て悪しく成あり。皆夫のこゝろよりする事なり。又底までしみ入たる姦女ならば妻に持べからず。一に氣質二に藝能三に容儀四に財寶と吟味すべきなりと申されし。今は昔江戸の駿河町に少したる商人あり。此人こゝろ美しく終に家來をしかる事なく。友達と争はず。剩さへ我より上めなる人につき合ながらつねにうやまはれ。何に付ても此人の指引にもれたがはざるは何れおとなしきゆへ成べし。三十の年始て妻を迎けるが此妻生れつき律義一遍にて去とは毒にも薬にもならぬ心安き人と。一家の者共といをしがりけりされども色欲にぬかりたる女はなき習ひにて。此女房よく夫に思ひ入て。只敬ひ貴むのみにあらず。入ばかゝり見。出れば見送り。尤女の道ながら。餘りしたゝるきなど難ずる者も多かりけり。されども亭主は物事有べかかりにもてなし。過有ればへつらひなくしかりて少もとらかざるゝ氣色なし。妻は思ひあまりりてまめやかなる姿を引かへいつとなく煩らひ付たり。扱はいか成やまふぞと醫師にみせて薬をあたゆれどもしるしもなくさのみ打臥にもあらずしてひたものねたみがましき事はしゝにひければ。夫不審に思ひ。氣ぶんは如何あらせて只物悲しく侍らふといふ。さこそあらめ。遠慮なく聞されよと責ければ。妻少打笑て別の義にも候はず。わらは、常に二人の中二世かけて替るまじ。假ば親のさゝへ成とも。此事におゐてはしたがはじと。兼て存候へども。其方様の御心。なにとやら難面にもあらず。又かはゆく思召にもあらずして。よろづうちとけ給はぬやうに見まいらせ候へば。便りなく力なくさふらふなり。先わらはを如何と思ひ給ふぞ。御心の底うつして聞させ給へと袖を濡せる有様。亭主打わらひて。扱々左様の事ならば。と尋ね給はて人知れぬ苦勞をめされたり。某が其方をおもふは眞角のごとくなりとて刀懸に有つる脇ざしを取出して見せけり。妻は一圓合點ゆかず。何座興を宣ふぞや。わらはが事を申さ

せ給へ。但し此脇指にはれのましますにやと。猶うらみ良にぞ云ける。亭主聞て中へ道理を語るべしよく聞給へ。抑此脇指は宇田の國宗の正銘にて。長さ壹尺五寸。上手に誂へて能研がせ。毎年錆の出ぬやうに拭はせ禮にさし旅にさしつねに身のあたりをはなたずして。一代人を切るべからずと。堅くおさめ置ければ。凡切る事有べからず。又刃をよく付たれば。何時にてもわざはひに逢ば其儘ぬきて切るべし。依て切るまじき爲の脇指にて切るための脇指しなり何と聞へたるかと云けれども。元來愚なる女房にてのみも切らずかみも切らずなる仰哉。童に一期添給ふか。そひ給はぬか。其事ばかり申給へといよ／＼かこち歎きければ。夫打うなづき。聞へねば是非もなし。然らば安堵し給へ。たとひいか成事有とも。二世三世替る心あるべからずとちかひければ。妻は眞言に嬉しき體にて其儘病も平癒し。頼もしくよろこばしくて年月を送り。四十歳をこへて彼脇指のたとへも悟り猶／＼むつましく老後の思ひ出とぞ成れりける。

仕合は流あるく往還

儉約といふ事を俗には始末といへり。身業第一の義にて是をせざる者。薬袋なしといひ又仕過る者を香齋坊と號く。よい加減を知る人は即奢を止費をとめて。若事に逢時は身をたすけ人を救ひて寶を惜む事なし。是始末者なり。吝きは己が名聞利欲にふけりて金銀を出すなれば。かならず義にあたらす。入魂の人に貧窮なるあれ共引立す。剩さへ御身の一大事あらば。某役に立べし。頼もしく思ひ給へ。廣言を咄きちらし。是に祈られて萬一火難病難などに逢事あればあらゆる不足をいひならべ其人に疵を付て逃る分別を致せり。簡様の金持は娑婆衆とせられて三代共續きがたく人の見る内に寶はちり／＼に成ものとかや。往昔青砥左衛門が美服を着ず美食を喰はざるを。欲ふかき人と心得て。賤を送る者ありければ。かへつて恥辱をあたへられしとぞ。其心より十餘は國士の重寶とて數多の寶を出し

なめり川をさがさせしなり。これらの事をよく感じて始末はすべしと申されし。今はむかし。都は花ざかり吉野といへる書物屋に次郎助とて板行を紙を摺うつ業をして雇はる者有けり。總じて此職をする者京都に多し然るに此次郎助骨體始末よく生付一生遣ふ所の細工道具皆朋輩のつかひあらしめて。塵塚に捨たるを拾ひて事をすまし。猶其次手には。紙屑あるひは風呂の燒物等を撰出して。主人にも得をつけ。夏はたんばの帷子一重冬は河内の木綿布子。幾年着れどもそこねたる體も見へずたばこのまず茶のまず下戸にして魚喰はず。衣食の味しらず。色を見てもまどはず。花と開ても進まず。自髪に髪ゆふて終に油つけず。水ばかりは澤山に汲てあらひみぎければ風俗さしてむさからず。永々の年季勤て自分と成り。小借家に住て廿年あまり其間けだいななく。細工に通ひて米買はず薪かはす深草なる親の許へをり／＼見舞に行も伏見下りの旅人の風呂敷包かたがて賃をとり。戻りに火打石拾ふて賣て歸り。其外俵荒物によらず下直なる時は買置て近付の間へ賣拂ひ。凡其身持書にいとまあらず。中にも銀廻しの利はすさまじくて。人の惜しまぬ銀を人知れず延しけり。角て妹三人有けるを皆二郎助が世話として。よき百姓の許へ縁に付け。此聲どもの馳走によりて。親は活計歡樂にぞくらしける。爰に此おやの兄次郎助のためには伯父なる者。同在所にて左右袖渡世し居けるが。比に正月十六日。女房は一子諸共下女を供につれて。宇治の親里に遊び行。下男も思ひ／＼に養父入して留守成けるに隣家より火出て頻に燃來りければ。主は取物もとりあへず。九十になる老母を顧ふて漸々に逃のがれ。家は丸燒にぞ合ひにける。知音親類の愁傷いふばかりなし。次郎助少も悲しまず。人々の無事をよろこび。早速銀子を合力しければ。伯父は大きに満足して。有しに増る家造り程なくわたまし仕ければ。所の者共も羨て甥の草刈世の中に金の生る木持たる伯父有といひあへりけり。又爰に京都の書物屋いひ合せて件の板の手間賃を下直にすべしと。一黨仕けり。其比此細工して世わたるもの三百餘人有ける中に其日過の者半分有けるが。いとゞさへ過し兼たる作料を値切られは猶困窮なり。さればとて又外に覺へし所作もなければいかに共爲方なしと談合とり／＼にて時をうつしけり。次

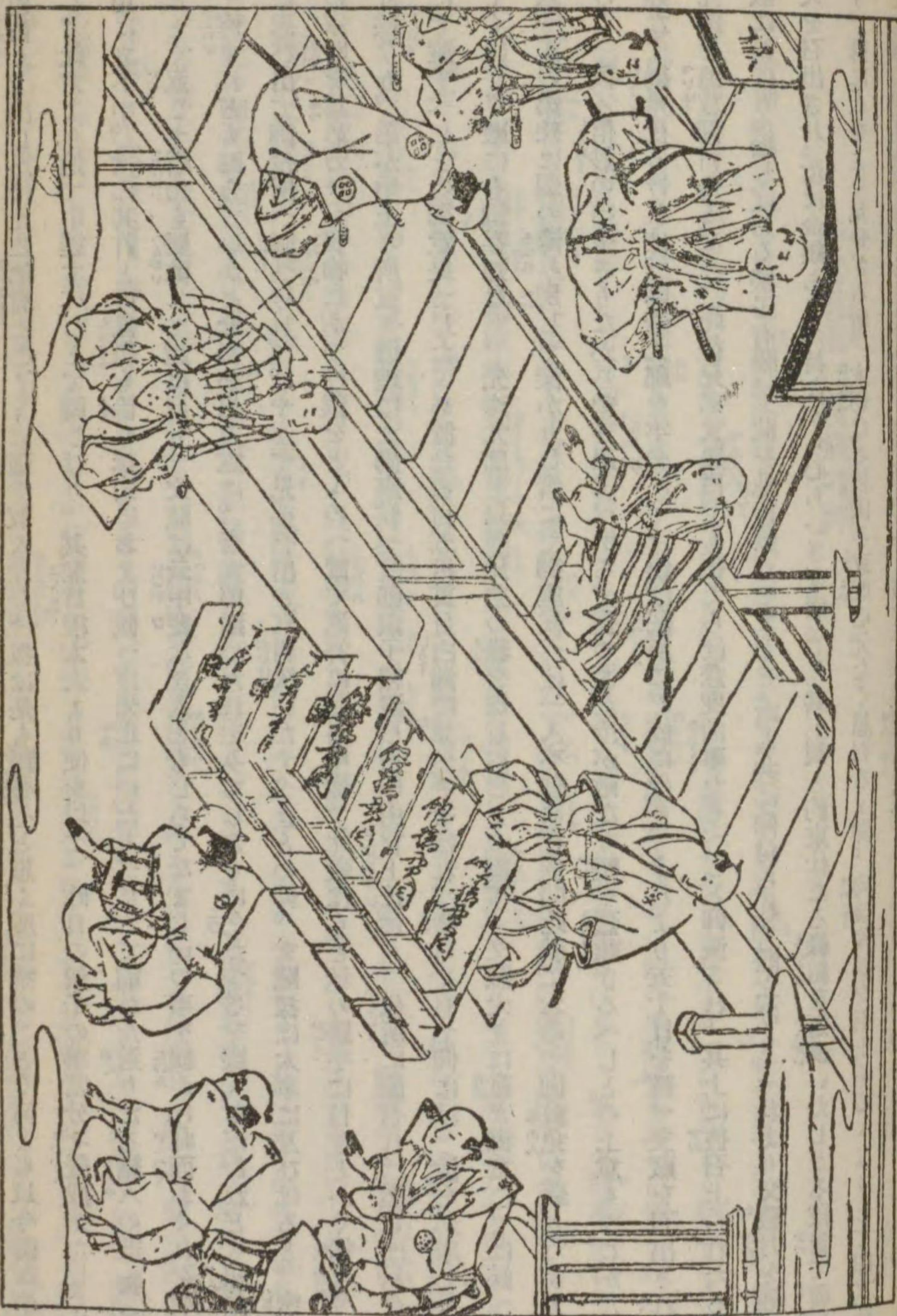
郎助いふやう。此上は力なし。我等持合せたる銀子あれば。各々の中へ進上致すべし。是をすこしの望性として。餘の身過を仕給はんやと尋ねければ。皆々喜び。こは過分なるうしろ立。偏に頼みまいらすと。夫より思ひ／＼の小商に取付けり。かくて書物屋にはよしなき事云出し。大きに事を欠ければ。漸々に詫事して舊のごとくに直しけり。其後又。次郎助が従弟なる者松原通りに妻子持て人形商賣し有けるが。のがれぬ時宜有て去吳服所の手代の請合に立て七八年過ける間に此手代三百兩の引戻して請人なれば預けられとやかく僉儀すれども悪所に遣ひ捨て行方なし。段々訛言に成て銀三貫目まであつかへども主人得心せず。爲方なく／＼次郎助に様子を語り如何すべきと談合しければ次郎助聞て世の中の憂不祥はまどふもまどはるゝも習ひなり。先其方の身體家財かけていか程有ぞと問ふ。されば百兩斗の所帯といふ。然れば丸に渡しても。主人には損失あり。されども百貫に縁笠一蓋と申せば所詮身體を有尺渡さんに子細はあらじ。依て家財不殘投出して濟し給へ跡は某がはからふべしと云。従弟は心もとなきながら次郎助がこと葉をたのみにて角／＼と披露しければ。主人はいふに及ばずあつかひたる町人も。扱は家財をぬすみ出し内を明敷にしてかくいふならんと推量し。先諸式いか程有ぞ勘定すべしとて其徳双方立合て摺ばち鉄火箸まで算盤に入れば七貫二百何十匁と置あげたり。其上家内の體たらく何一つ隠したり共見へざれば。二言と物云ふ者もなくて。さらりと埒明濟しけり。其時次郎助罷出て。此諸道具受取給ふや又我等方より銀子にて高の通り渡すべきやと云ければ。それ社猶珍重なれ丁銀にて請取べしと。損は仕ながら有程禮いふて事は丸く納りけり。其外遠き縁者まで。未進の残り。田地の質。二郎助に濟しもらひて高低なき一門と成し者。幾人といふ事なかりけり。誠に金銀に泥に似て泥に非ず。捨るに似て捨るに非ず。古今の稀者と今に語り句にぞなれりける。

當世誰が身の上 卷之六

欲は摺合て燃る檜山

有人の云へるは唐土に有者の親羊を盗みけるを。其子奉行所へ訴へたり。是誠に正直なる者と褒ければ。孔子聞召。正直にあらず。子は親のために隠すが正直なりと宣ひし。惣して親類友達に至るまで此心持肝要なり。愚人は貧しき親類あれば恥のやうに思ひ。或は役害にならんかとうるさがり。貧なる方には心ひがみ。或は欲疾くて終に中違ひ。縁を切て付合ぬ也。其時仕合よき者は疫病を拂ひ落したるやうに悦び。人有つて御自分の一門のよし承はると尋れば。いかなく。半銭にても候はずといひ隠し。或は親類なればか様／＼の不足故因を切申て。他人よりおとりて御座ると。みづから答ゆるやから。心底見へ透て浅ましきものなり。又兄弟は他人の始りといふ事有り。是は愚人の身の上を愚人の云ひたる諺なるべし。凡て人はいふに不及。衣類器財に至るまで。親の愛したる者は。子の身の終るまで愛するを孝の道といへり。然れば其愛し給ひし中に子よりふかき者はなし。其子は何ぞや。則兄弟なり。是いとをしく思はずして。疎に思ふは大不孝に不非して何ぞや。君子の書には兄弟は左右の手のごとしと書れたり。されば前の諺のごとく思ひて兄弟は水くさき管のやうに覺ゆべからずと申されし。今はむかし東國方に數代つゞきて名高き町人あり。されば時節の廻り合せとや内證少ふもとをりにて。から分限といふ者になりけるを。何とぞ取り直したく思ひて。二人の男子兄を文藏弟を彦九郎といひけるを引まはして。角を倒さず大商ひする體に見せかければ。人知れぬ財寶有よし取沙汰する者も多かりけり。又同所に權太夫とて柚山の支配を承りて日々に榮ゆる金持あり娘二人持けるが。此親同士つね／＼出合て。權太夫いへるは。某がいと娘縁付比に罷成り侍るが。あはれ御子息兄弟の内。何れに

成共送て聲にいたし度よし望みけり。親は幸の事と悦び成程拙者の惣領家に申請べしと媒いらすに談合宛め金子千兩の數銀にて縁組の約束事して別れけり。角て此嫁むかへざる其内に親は病の床に臥て例ならず重かりければ。一家大きに驚き子共は東西に求め下人南北に走りて療養心をつくしけれども終に限りの命と見へける比兄弟の者を枕もとに近付け我最早此世の限りと覺ゆる也。それに付此身體五百貫目の分限とよばれし家なれども。おこたらが知るごとく。うちつゞきたる損失にて。今はわづか百貫目斗の所帯也。然れ共人は左様にもいはぬよし。其上有得なる權太夫むすめを嫁に取約束あれば。彼是以て大事の所必ず油斷すべからず。隨分心をめぐらして。今一度むかしの花を咲すべし。就夫暫らくの方便なれば有りもせぬ銀なれど彦九郎に百五十貫目の讓狀を殘すなり。相かまへて此銀をも分る程の出世をすべしと。くれ〜いひふくめ町所の人にも書置の披露して終に空敷成にけり。文藏は別れの歎き遺言のていたらく骨髓に通りに悲しく。無跡念比にいとなみ。親の望みを達するは。死後にも同じ孝行ぞと明暮心に懸けるが。念力強盛の家には福祐の月光を増とや。程なく銀五拾貫目もふけけり。弟彦九郎此由を見届忽野心をさしはさみ件の所務分を請取べしと云懸けり。文藏大きにけてんし。沙汰の限の申条何成意趣出來て斯はいふぞと云ひけれども遺恨とは心得がたし。一廉の銀をもふけ給ひ何迄かくて置給ふぞ。申出る此上は。一日もまちがたしと。理非をもわかずこひたて。既に御役所へ訴へんとつものりけり。又權太夫方よりは。最早忌中も過候へばいそぎ娘を御迎へ給はるべしとせがみけり。文藏は一かたならねば案じ煩ひ。わきて彦九郎が悪心血で血を洗ふごとし云懸はしては世體の疵瑕しるゝなれば。殊更なき父の恥辱と千々にくだきて分別し。密に權太夫方に行。誠に婚姻の約束致候へどもいまだ呼むかへ候はねば其御事は二段にいたし親の代より入魂の間。萬御相談申てもくるしからずと存すこし無心に参り候なり。ゆへは弟彦九郎かやうくの申懸。にくき所存ながら。かへつて不便に候へば何とぞ首尾を繕ひ。事の不破やうに仕り度願ひと。委細を打あかして。銀子百貫目御借し給はるべしと願ひけり。權太夫つ〜聞て。忽ち面



色替り。出しかけたる酒肴をこゝに強て取入けり。扱は是も變心ぞと思ふ所に案のごとく何とも只今御返事成がたし。此方より追て申達すべしとて歸しけり。其翌日權太夫より使を以て。昨日の銀子の事當分才覚成がたし。依て御用に立不申。次に其許との縁組も餘り延引におよび候へば先止にいたすべしとて前かた送りたる結入の進物をことごとく返して婚禮も變改して越にけり。文藏は云甲斐なき人ともしらすなまじいの事を頼かけ却而おくれを取たりと千悔すれども歸らていかせんと思ふ處に。彦九郎猶めだれをみてしきりに乞たつるを様々なだむれども聞分ず。終に忍び出て御役所へ訴へければ。やがて兄弟召出され對決いたすべきとの仰。文藏扱は大事に及びけると。密に重代の家財を集め方々へ質物にあづけ銀をととのへ置て返答に罷出申様。此義はもと私の勝手に付きとかく相延今日に至り候なり。弟が申上る所重々道理にて御座候へば即銀子相渡し可申由言上仕けり。役所に聞召れ。然らば只今目通りにて渡すべしとの御意畏てしたゝめ置たる百五拾貫目白洲に並べさせれば暫らく有て仰には。汝らが事一々訟人有てくはしく殿にも御存知なり。先彦九郎と只今兄弟の縁を切るべしとの御事。文藏大きに歎き御意にては候へども。只一人の弟殊に親の憐み別して深かりし者にて御座候へば一入不便に存候間此義におゐて御赦免を蒙りたきよし申上けり。段々信妙の申条さりながら弟と思ふべからず親のあだ汝が敵なり堅く舊離さるべしとの上意もだしがたくて是非なく勘當仕りければ。即彦九郎を牢舎にて。銀は關所にぞ成にけり。それより五十日を経て文藏を召出され今日彦九郎を追放仰付らるなり。此後兄弟文通にても仕たらば急度曲事たるべしと仰渡され。其上に彼召上られたる銀子文藏に給はり。猶しばらく様子有間。文藏を他行致させまじと。町人共に仰付られて罷立けり。それより又數月を経て權太夫を召出され。汝は金銀あまた持ながら心ちいさき者なり。其上親と約束仕たる縁組を返改いたしたる段曾て義理知らず。殊に人をよく見分ざる所。大切なる柳山の支配心元なく思召るゝ間。向後役義を召上らるゝなりとて即文藏を召て此義仰付られけり。それより永く御用の町人と成て。二度繁昌の家とうるはひけり。誠に陰徳あれば關報有とて人

の見ず知らぬ所を。よくつゝしむ者は顯れたる善果に逢ふ事明らかなるためしにぞ有ける。

時勢言葉は疫病の神

去者知りのいへるは人の眞言偽りはこと葉にあらはるゝものにて。この葉靜かなれば心もしづかなり。心さわがしければ。言葉もさはがしし。されば心の看板にてつゝしむべきはこと葉なり心よこしまにて口がしこく物いふ人は古しへの名歌などを見ても是程の事誰もいはてはと思ひ。君子の明言を聞ても。それ程の事我等も云べし皆しれたる事なりと思へり。心に徳なくして奇句妙言いひ出らるゝものに非といふ事を知らざればなり。惣じて野卑成ことはまして當分の時花こと隠語などいふまじき事也。殊に女子などの下劣の言葉をつかふ時は興覺て淺ましきものなりとされし。今はむかし西國方の御家中に朝倉郷左衛門とて千貳百石拜領して脇家老をつとむる人男子なくて娘三人あり。何れも相をとらぬ容儀よしにて梅にふれ櫻になぞらへて二親の寵愛いふ斗なし。かくて姉むすめに殿の御指圖を以て一門中より養子聲を給り。次は隣國の武家方に縁付。乙の息女はいまだ十二歳なるとき。同家中に安藤儒仙とて三百石給る御手醫者の子息へえんぐみのけいやく。日限も近付さまぐのこしらへ物にて上下さゞめきのゝめく所に。此息女何成心や出来けん彼方へ參ること先止て給はるべし。心にすゝまずさふらふとある。是は以ての外の申条約束といひ。殿の御耳に迄たちたる事變改は成へからず扱いかなる思ひ入ぞと。さまぐ穿鑿あれども。只不諾にて候と。泣悲しみて何ともすべき方なし。父はけしからぬ立腹にて急度折檻をくはえんとたくまれけり。此こと聲の元へもれきこへ。舅より内通して。御息女こゝろにそまざる由。つよく御異見は御無用なり。年もゆかぬ御事なれば。靜に御なだめ候はゞ。なつとくも候べし。必ずいそがぬ御事と。ひたすらの託言あれば一まつ其通りにして止分にぞ成にける。角て其年の冬都より絹の糸賣下りて。家中を商賣廻りしが。此屋敷にも色々所望とて女共立かゝり。男も羽織の緒柄

糸など直段尋ねて下直成はいやなり高直成はいしやぼんなりと云ひけるを。糸うり聞て是は御當地にもいしやぼんと申事時花候にやといふ。さればく。大坂にはやるとて。爰許のをとなわらべに至るまでもつはらいひちらし。馬鹿らしき事と思ひながら。調子にのりては我々も申なり。是はなに者のいひ出せし事ぞや。如何様いはれ有べき事聞かまほしと有りければ。糸賣さん候。此いはれさまに申すげに候へども。實は伏見の小商人ならては存せぬ事。私は京の者。西國へは此度初めに候が。數年伏見へ通ひ候ゆへ。くはしく存知候なり。先伏見と申す所。御存知のごとく。年々御大名方の御着にて。御本陣の近所隣町まで皆御家中の宿仕り候所に。近郷の商人さまの土産物。賣に参りおびたしき市をなし候なり。其中に藥うりもあまた候が。宿に立入り薰物掛香萬能膏藥或は延齡丹返魂丹などよばわり候にもし御醫者方の宿へ参り候へば家來衆聞あへず。此方は御醫者なれば。賣藥はいらなひと有るにすごく行出候事也。これによつて彼等打あつまり仕合いかにと尋ねれば。けふは先くいしやぼんにて商賣なかりけると答ふ。それより餘の商人まで不仕合は申に及ばず。凡て心に不叶事をいしやぼんと申はやらかし。或は巾着たばこ入とておどけ事よばりし。小間物賣も候ひて程なく京都にうつり時花其後四五年を経て大坂にはやり又四五年に罷成り最早上方には申止候が。今御當地に時花申よし段々次第送りと覺へ笑しく存じさふらふと語りけり。皆々手を打て。實にくさも有げなる事いはれを聞ば面白しと。大笑ひに成て果にけり。其夜かの息女ひそかに母の前に参り。扱も今日京の糸賣が物語にいしやぼんと申いはれ。物ごしに聞まいらせ候へば。何分もなきをこりにて侍らふを。いか成事ぞと心にかゝり彼方へ参るをいなと申せしなり。此上はとく様へよきやうに申直し嫁入せさせ下さるべしと。しみくわびごとあれば母は喜びいそぎ父にかくとしらせ。扱はしれぬ事どもと打笑ひ先様へ付とゞけて首尾よく婚禮ありて。猶其糸うり一門中へ永く出入いたせしとかや。

思案は近江の湖水

去人のいへるは。凡て神のおしへ佛のさと。藝能世渡りにいたるまで工夫第一に動かざれば物毎おそしと申されし。されば京の中紅梅。大坂の土朱。江戸の彌左衛門裁。其外みす屋針。打出し鹿子の類あげて敷へがたし。皆工夫よりいで、拔群の金銀をもふけ。しかも世の重寶とぞ成れる。今はむかし九州方にて勇々敷武士。林に高き樹の風にそこなはるゝごとく人の讒言によつて浪人となり。江州高宮といふ所に逼塞し居けるが。仕なれぬ民家の住居に少のたくはへも拂底して似合敷奉公の口ありといへども身のまはり不自由なれば叶はざりし。されど少もわるびれたる氣色もなく。いかにもして金銀をもとめ武具一通り拵らへばやと所案し居ける所に。此近郷皆布を織て家業とす。其紳糸を卷子といふ者に仕けるが。賃を取て是を卷子所にたらずして。他領まであつらへ出しけり。此人つくく見て。如何様にも早業にまく思案有べしとて。終に卷子車といふ物を工出し。一間に取籠りかたく秘して卷出しけるが。常の二三十人前づゝ出来て。しかも手際よかりければ。是凡夫わざにあらずと。取沙汰して誂ゆる者多く。程なく一廉のかねをもふけ武具馬具等荒増こしらへける。折ふし東國方の城主に奉仕の望み叶ひ。すでに罷立よしにて暇乞の酒どもつどく盛かはしけるが。此家主常に情ふかき者なりければ。一入名残を惜しみけり。家主も其言葉にのりて今は御用にもなき卷子のまきやう。御をしへ給はるべしとひたすらに願ければ。此人しばらくの方便にせし事にて人の手をあくるわざなれば。世界の重寶にあらず。然れども今までのよしみに相傳すべし。又人に教ゆる事は無用ぞとて彼からくり車を取り出して譲られけり。それより此家主請傳へて。つるには世にひろまりけるとかや。かくて主君の御國に参り。首尾残る方なく相濟て。二度武備の器用をあらはしければ。皆人陳平張良爰にありとかんずる事ども多かりけり。有時大殿の御前にて仰けるは。身が家に智慧の環といふもの有。終にぬくものなし其方工夫を以て是をぬく

べしとの御意畏つて見奉れば木にて作りたるか竹にて製したるかうつくしく黒ぬりにしたる輪達にて淨土宗の輪敷珠のごとく威ものなり。彼人古老の衆にむかひ。いかゞ仕るべきとかゞひければ御所望なればとく／＼ぬき申さるべしと有頼而小柄をぬき出し膝のうへにおしあて、一つの輪を切はなしてければ。即われ／＼に成にけり。扱ぬき申候と申上ければ。殿わらはせ給ひ。是ひとへに無事にしてぬく道もや有らんと迷ふ者ばかりなるに破ざればぬけずといふ理をきはめて切はなしたる所。誠に智なりとて大きに感じ給ひ。それより段々出頭して即若殿の御後見役の内へぞ加へられける。其後年経て大殿は隠居有若殿の御家目出度治りける所に風興御妾を寵愛有て。けしからずめて給ひ。已に國法も見だりに成ければ。何れも心を合せていさめ申せども。少も用ひ給ふ氣色なく。比は彌生の半ぞら山屋敷の櫻の花。吉野を爰に寫して嵐も白き雲の色。散も初めず。咲も残らぬ折ふし。彼女中と主居客居の御遊興有べしとのもよほしにて。兼日より掃除やらん。拵らへやらん。さゝめき合て。すでに今日といふ其朝さかりの櫻ども悉く枯しほみけり。番に付たる下々共肝をつぶしかやうと申上げければ。是たゞ事に非と僉儀まち／＼にて。其日の御出は止まり先穩密の沙汰に成て祈禱坊へ被仰あるひは卜筮の職者を召て吉凶を尋ね給ふに。何れもこと葉をそろへて。是即女色にそみ。國の政をおこたり給ふゆへ禍ちかきに有べきとの前表なりと考へ申上ければ。大きに忌憚給ひ數多の女中に御いとま給るもあり。又里々へ歸しあづけ給ふも有て空屋敷ともからめきわたり。物事ひつそりと成にけり。此時家中は申に及ばず。町人百姓迄日出度き御事とて悦び合事かぎりなし。角て年ふるまでいよ／＼身をつゝし。國を治めたまひけり。去にても彼櫻の枯し事不思議といひくらしけるが。其後城下に火事出來ける時。かの人火消番にて行むかひ水はじきといふ物にてたゞちに十間廿間をらへ水を揚雨のごとくに落かゝらせて猛火をたちまち静められたりけり。是を見て人々推量しけるは。彼櫻にもかくのごとくして煮湯などを懸たる物か。大方は此人の半ごとならんと思ひ合せて噂やきあふ者も多かりけるとかや。

浮世は懸弧の唐衣

今はむかし津の國の片里に薪の庵引結びて。あたりの童を集め。手習物讀などおしへて。有合に世渡る老人あり。此人覺へつよき人にて四方山の昔物語どもおもしろく咄しければ。所の人々假に行ても徳をとると悦びつねに入替り。澤山にあらねど。粟栗の初穂送りにて養ひ置やうにとかしづきけり。殊に風雅なるみちにも心ざしありて。有時其里の二郎左衛門といふ富者。よき家を買求めて。何れも祝義の進物を仕けるに。此人にも何ぞ遣はし給へとすゝむる者有ければ。頼て短尺を取出し。君は牡丹芍薬や誰れもあやかり者と書ておくりければ。次郎左大きに悦び其座敷につねに懸置けるとかや。又其里に櫻谷氏といふ人大病に取合既にあやうかりしが。不思議に命たすかりて喜びの振舞に此人をも請じ何にても當座承度と望みければ。其儘とりあへず。あさくらや。氣のまめどの、煩はなをりぞしつる醫者は誰様と。聞へければ。一座輿に入て。もてはやしけり。惣じて心かるく見へて。さりとは苦のない境界あるものいふやう。某は歌舞妓が好きにて候ゆへ折々見物に參るが何と。見てもくるしからぬ事にて候やと尋ねければ。さればかれは狂亂の番に行やうな物と答へられけり。又ある者今日は川口に結構なる御舟の虫干候が。よき傳有て拜みに參るなり。同道なざるべきやとさそひければ。今日は用事茂し。重ねて參るべしとある。彼者聞て少々の用は闕てなりともかやうの物は見物して置給へかといひければ。いやとよ其御舟階分結構にて金銀の高蔭繪梨地砂子にてこそおはすらめ。然ればよき提重のごとくなる舟ぞと思へば。見るには及ばずと答へられけり。又ある人間ひけるは老人にはいつ見ても節季節句の差別なく硯に向ひ書にむかひ居給ふが。氣も盡候はずやと云ければ。されば聖人は。天地一統の氣と申て。日月の廻り給ふごとく身をつとめ給ふなり。愚智の我々は随分うごくと思へども。其九牛の一毛にもあたらず。されば日月の光りに當るものは手足をいたづらに置ぬ管の物と心へて。かなはぬまでも勤むる

者にて候と申されければ。此人聞とゞけて然らば此事つねに忘れぬやうに一ふて書て給はれと望ければ。爰に若き時てんがう書いたし置し物あり。是を進ずべしとて出されけり。即身といふ字を舟に作り。心といふ字を帆にしたるつくりものなり。

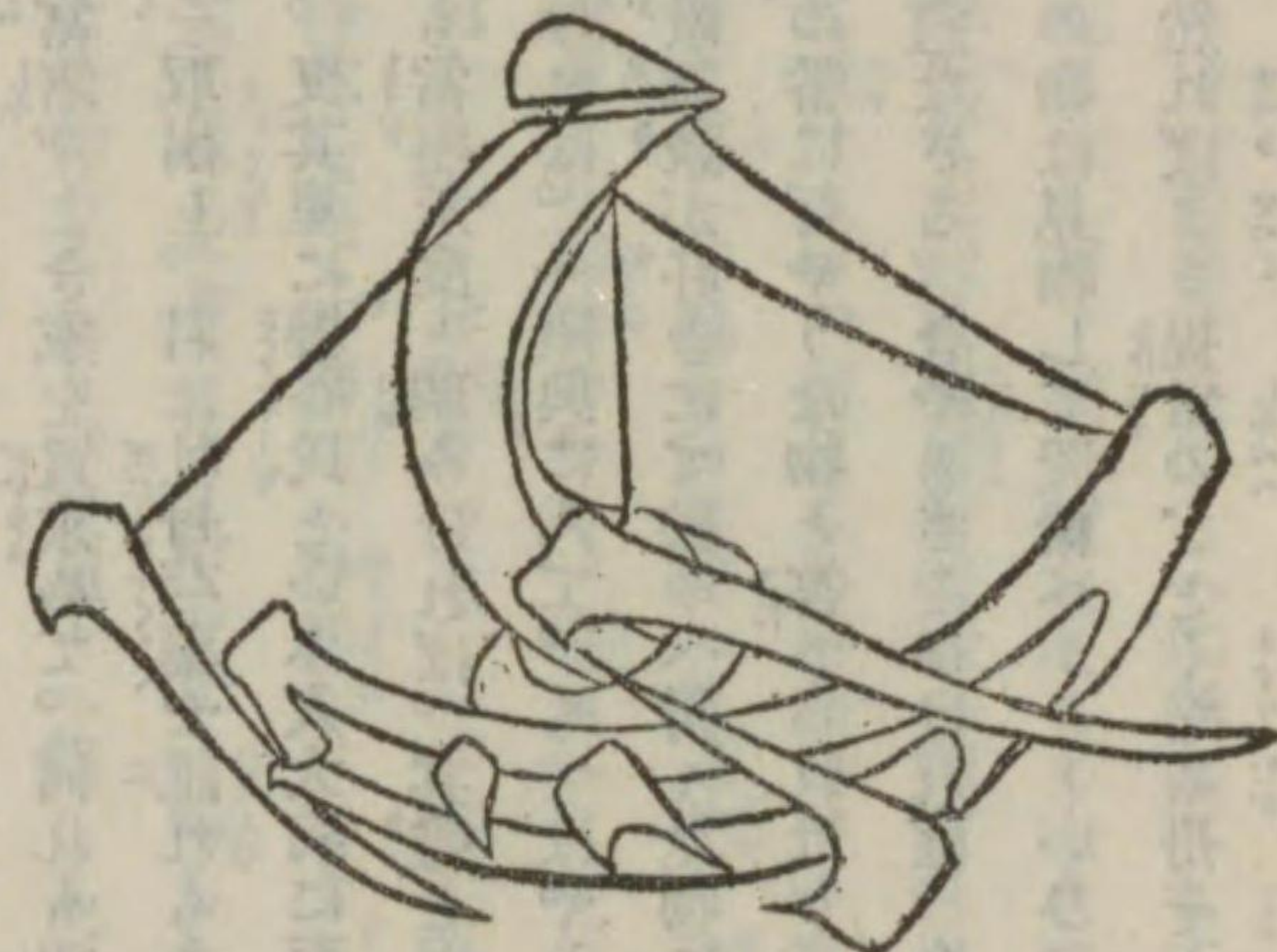
身のふねに

心のひとつ

とり乗て

立居る波の

世をわたる哉

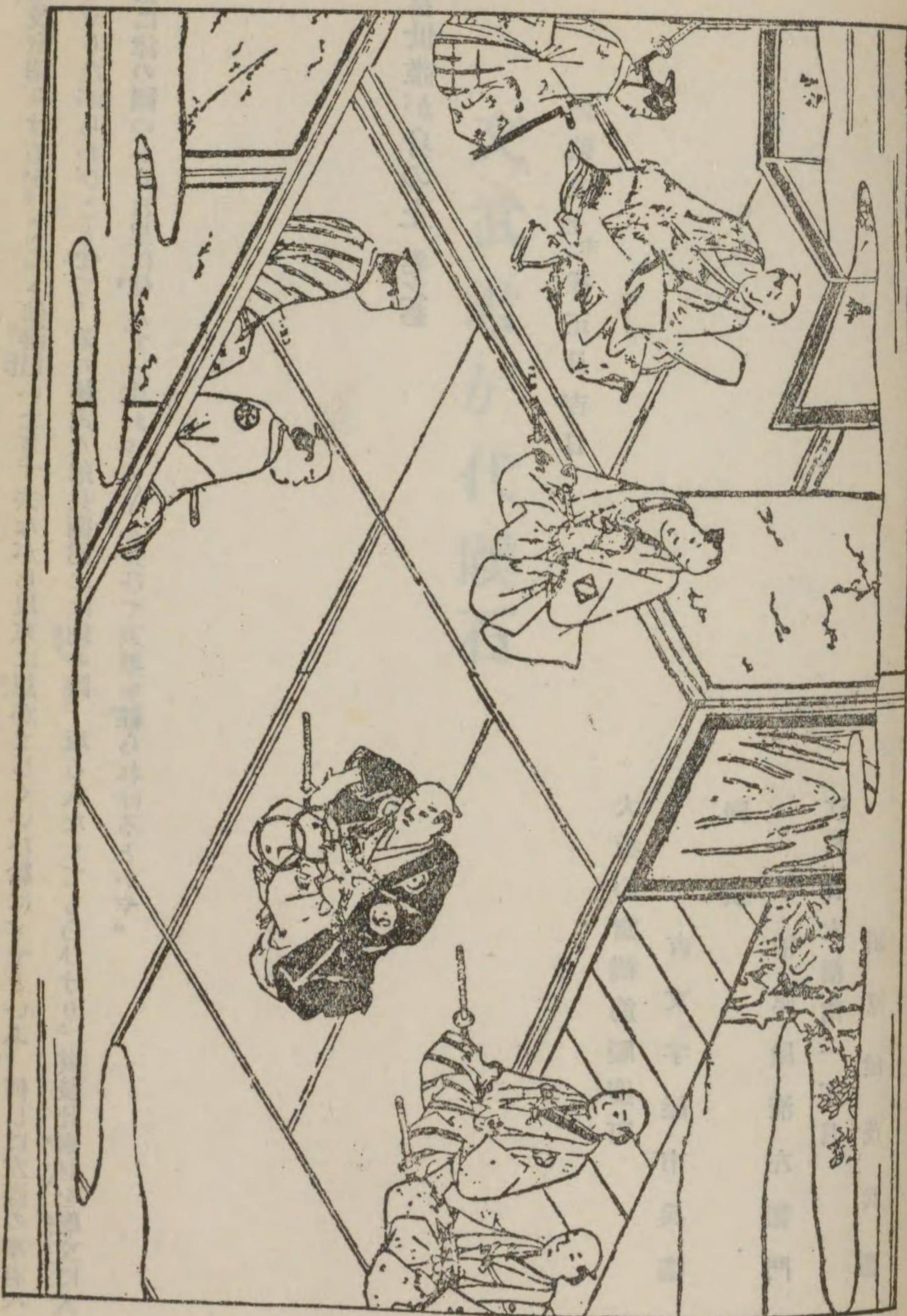


此人限りなくよろこび持かへりけるとかや。其外歌の家より合點有りし本歌どもゝあまたありけるとぞ。此人のむかしを知りたる者有てかたりけるは。根本都立賣と云所に蟹居してありつる浪人。子あまた有ける中の八番目なればとて雅名を八三郎といひけり。才智ふかき事餘の子どもにすぐれば。親の寵愛一しほ厚く末たのもしくそだてけり。かくて惣領むすめは寺町といふ所に。少の職をいたす家に縁付けるが。十年あまり添ける中に子といふ者なし。夫此八三郎を養子にすべきよし望みけり。妻は我が弟にてしかも常にかはゆく思ふ者なれば悦びやがて父母にかくと語りけり。親はあまたの子を外へ出す共此八三郎は離しが

たき心なるを。姉が子にするとなれば。又外ならぬとて。ともかくもすべし。去ながらいまだ年もゆかざれば。いま一兩年藝能をつけて其後の事よと定め置にけり。かくて此姉よりもあね舞いまだ弟子もなければ逆も貰ふものならば一にちも早く職をも習はせたく思ひて密にこまづけて。其方は最早我が家の子なり。はやく職を仕ならひ。姉や我が腕に成るべしといひふくめければ。小心にのみこみて親兄弟に隠れて。此家の細工をはげみけり。其後八三郎が手

習の師匠四条といふ所なりけるが。其翌の正月に此親の許へ來りて。去にても御子そく八三郎は。某數多の弟子の中に勝れて器用の生れ付。今少し修行させ給はゞ。めづらしき能書にも成べきに。何とて手習を止させ給ふぞと悔まれけり。親は一圓合點ゆかず。日外寺入させてより只今まで一日もけだいはさせ侍らず。扱は姉が方へ呼入てつかふ者なるべしと。それより穿鑿仕ければ案のごとく姉が職を手傳ひに通ひたるにてぞ有ける。親は師匠のこと葉のごとく。今少し手ならひすべしといひけれども。八三郎用ひざれば。それも幸よと一向に親子のかためして聲が方へ渡しけり。されば器用の者はかくべつなり。其間取あつめて百日斗手習ひしけるが十人並の手跡にすぐれて額あるひは看板などをもおし出して書程の手跡にぞ有ける。かくて實父の方には娘といひ聲といひ寵愛の八三郎といひ彼は以て大切なれば。此家を起させんと。おのゝ心を合せければ程なく餘程の望性出來て。それより商に取付。下人も段々抱へて次第に榮へ出けり。爰に不思議の事ありけるは此姉常に色あしくやゝもすれば煩ひけるを八三郎悲しき事に思ひ即我が手跡の師匠は病功の醫者なりけるを。ひたすら頼みて療治させけるが。半年斗薬を用ひて健に成たる事二十年もむかしのごとし。一家の悦び又たくひなかりしが。ほどなく懷妊し。夫より五年の間に男子二人女子一人もふけたり。かく年月を送る間に。仕合は吹付ることよく成けるが。定めなき人の命。此姉風の心地重りて終に空敷なりけり。死ぬる者は損とかや後妻なくてはかなふまじと。のちづれを呼むかへていよゝ商賣繁昌しけり。角て八三郎元服して八郎兵衛といひけるを江戸へ商に下しけり。時に八郎兵衛養父に向ひひけるは。此度江戸店に參るに付て少し望みの候なり。ゆへは其方様には實子出來姉なる人は相果られ。今の御つれあひは某と墨付あしく候へば所詮當地の住居望みなし。依て行々は江戸の住人に罷成るべしとぞ申ける。養父涙をながし申處尤なり。去ながら我が所存さまゝ有事なれば。其時の宜敷に順がふべし。先此度は其方ならてつかはす者なし。随分精出すべしとて心つよく盃して。大津まで送り出られしが。是即一生のわかれにてぞ有ける。扱それより三人の實子成長して中に

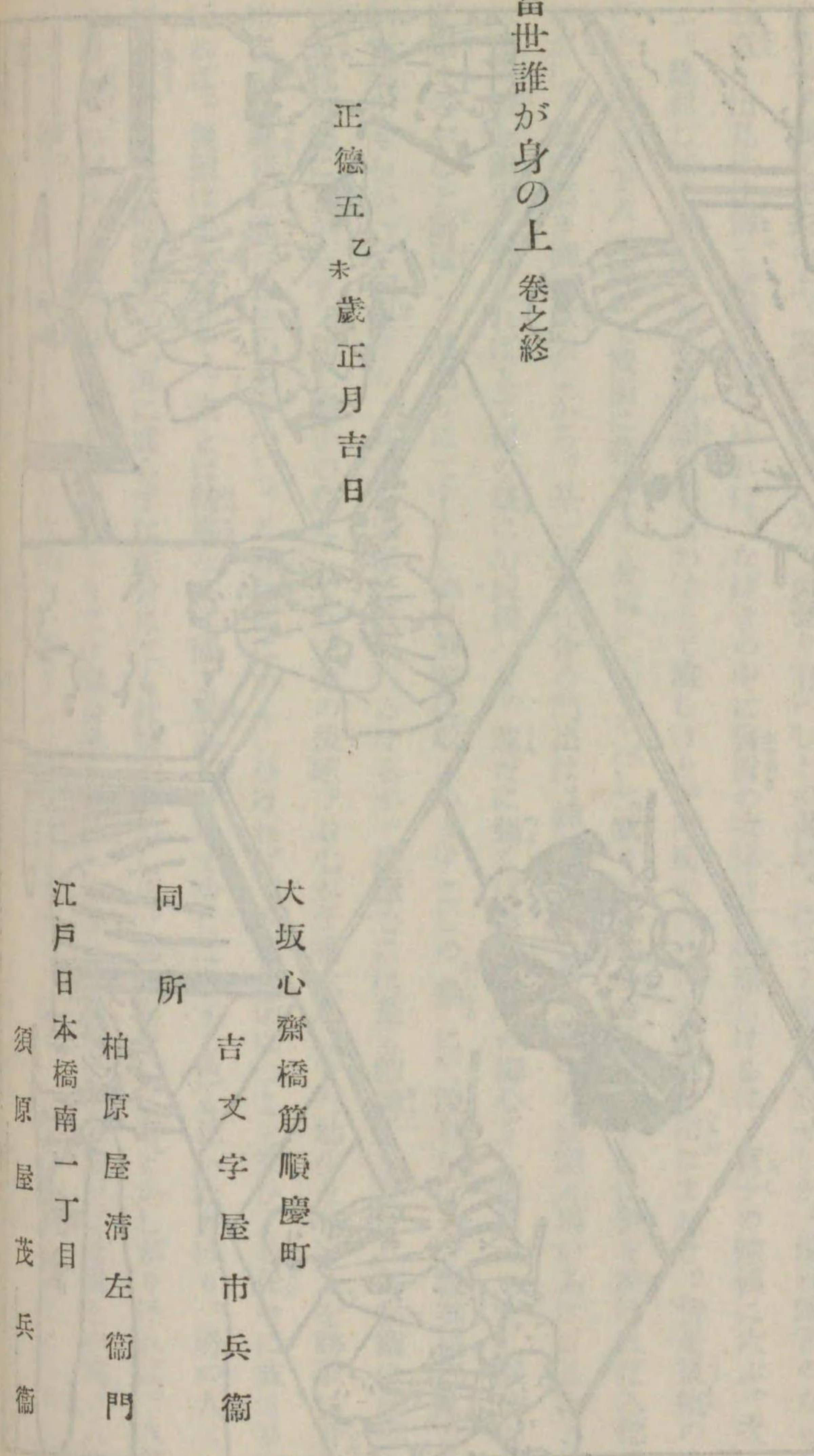
も姉むすめお七といひけるが他家に縁付て間もなく夫にはなれ忘れ形見の子二人兄を善太郎。妹をおかんとて。是等を末の頼みにてお七米やとよばれ。甲斐く敷跡を立てけり。角て八郎兵衛。江戸の店にて仕合よく。銀もふけて上しける程に。京都には御商人なりけると悦びて。江戸へくはしく書おくれ。八郎兵衛満足いふ斗なし。かくて八年過ける春。養父死去の上。其表の店たゝみて御登り有べしとの書状。はつと前後を忘ぜしが。愛別離苦のならひと心を取直し出見世仕舞て京都に登りければ。なげきの中に書置の次第とて披露しけるは。實子の物領に六ぶ。次男に三ぶ。縁付し妹に壹ぶ。其外は衣類を形見わけとて渡しけり。町所の人々八郎兵衛を密にまねき。皆是後室のはからひぞや。其方を下人一同にて置所に非ずよく分別いたさるべし。我々は合點ゆかずと口く腰を押しければ八郎兵衛涙をながし。誠に忝き御異見ながら。某一生不仕合の門出は。姉たる人におくれ。今の後室と馬のあはざるにとゞまり候へば。假金銀少し取たればと何の益にか成候べき。運だに強くばおのくの御心ざし無にはいたし候まじ只御すて置給はるべしと辭退し。其通りにてすまし終に別家に取てのきすこしの動にて渡世しけり。扱其後程もなく實子の物領妻をもむかへず相果けり。其弟も別家と成つてゐけるが。後室心には是も即繼子なり。八郎兵衛は前妻の弟なり。彼是我が爲に宜からず。同じ繼子の筋ながら三条の後家。お七が子善太郎いまだ幼少なりけるを跡取に介抱せば末末にては馳走に逢べしと心をうつし。八郎兵衛にかくいひければ。八郎兵衛につこと笑ひ。心任せに成さるべしと云ければ。後室は手を合せて。去とは結構なる了簡と恥かしげにて少しは感する色も見へたりけり。所の人々是を聞て。阿房とは八郎兵衛なり。丸に成らずは半分にては此跡式取べしと。齒がみをしてもどかしがりければ。八郎兵衛いふ様各の御ひいき忝し。去ながら申かゝりては御公儀へも訟へ申さねば成がたし。惣じて公儀と申處。人に仕かけられては是非もなし。此方より申上るは。死ざい流ざいの者の同座と成り。穢はしく候へば。只金銀は世界の寶。貧福は同次第。何とてむさばり申べきとて。一言も云出さずして納めけり。其後又實子の弟相果て。此跡八郎兵衛にと漸



漸後室望みけるを。くるゝは辭退いたさず去ながら以來に恩がましくいひ給はゞやといふ。何しに左様の事有べしとてやりながらわびこと仕て。弟の跡式八郎兵衛爲には甥の跡。取る人なくてもらひけり。其後此家財を學文に入れて終に津の國のかくれ里に住んで一生わさくと笑ひて天年を経られけるとかや。

當世誰が身の上 卷之終

正徳五乙未歳正月吉日



大坂心齋橋筋順慶町

吉文字屋市兵衛

同所

柏原屋清左衛門

江戸日本橋南一丁目

須原屋茂兵衛

文武君が代硯石

文武君が代硯石序

文を袂たもとに武を袖そでにして。心こころの帯おびのむすび。別わかるゝ道みちは五ツいつの常つねの外ほかなし。されば其その端はしをさぐり。此この綺語きごをつひやし
て。八百やっ日の濱はまのさゞれ石いし。ひろふものか
時ときに正徳しょうとく二ツにのとし千代ちよの春はる

うらゝかなる日

石 別 子

文武君が代硯石序

卷之一

智 熟柿の味ある男

附 いつわりは誠のおもて義はなさけのうら

誰もかれも見るとしるべしけるべしける志

孝 二度の墨染

附 師の恩に一言の悪。親の詞に百兩の損金

我もかたきも善也。無常にもろしもとゆい。ばらり

悪 おんなの髪は心の鬼

附 本草の花の色世にふるゝ罪

情に筆の命毛切はてたるゑにし

卷之二

義 女の半弓つるある妹育

附 宿札にかな付よめたり。傘人の心

はやまつた。兄弟か刀ぬいたり。

非 第八身の爲に砥箱石

附 角入れたる女あり

鐵付たる。男あり

理 京信國の棒さや

附 歸參の侍一言の冥加

色は武道の花親を仲人

卷之三

勇 紅葉の雨ぬれたが手柄

附 立野の庄亡靈川わたり

一枝多生の兄弟。けいやく

仁 似た人にまよふ戀の深草

附 身の癖うつす墨染櫻

陣配うちは。丸き人心

情 祝言の盃に名代

附 竹刀につきつめたる女心

土手の並松つよきさふらい

義

稻荷壽福の参銭

附 本タリの女こばうが情なさけからぬ大溝おほいぬ
烏帽子えぼしおや。恩おんにきたる侍さむらい

一言いっごんに義理ぎぎをふくむおとし

卷 之 四

禮

二にの手ての討手うって三人さんにんの躰はらまき

附 切タリツてすてたる刀かたなの鞘さや侍さむらいは情なさけの風俗ふうぞく

義

男女なんにょ手習てならひの指南しなび

附 表門おもてにひかへたり裏門うらにかけや大槌おほづちのおと

智

雪舟せつしゆの掛物かけもの極きまめ札有しやくあり

附 我われをかたきとしらぬが佛ほとけ寺でら参まゐりのけんくわ
迷まよふた／＼振袖ふりそでの紅裏べにうらまつかいな作り名

附 といたり／＼蚊帳かむしやうの沉衣しんい
おもふた／＼おとこの難義なんぎをすくふ編笠あみがさ

卷 之 五

禮

子こは親おやに似にる釣鬚つりひげ

附 落馬らくまの妙薬めうやく旅たびのたしなみ
二十年にじゅうねんの恨うらみはれ業わざの勝負しやうぶ

仁

腹はらはかり物もの半分はんぶんの主ぬし

附 兄弟たいていは他人たにんはしめ〇〇對面たいめん

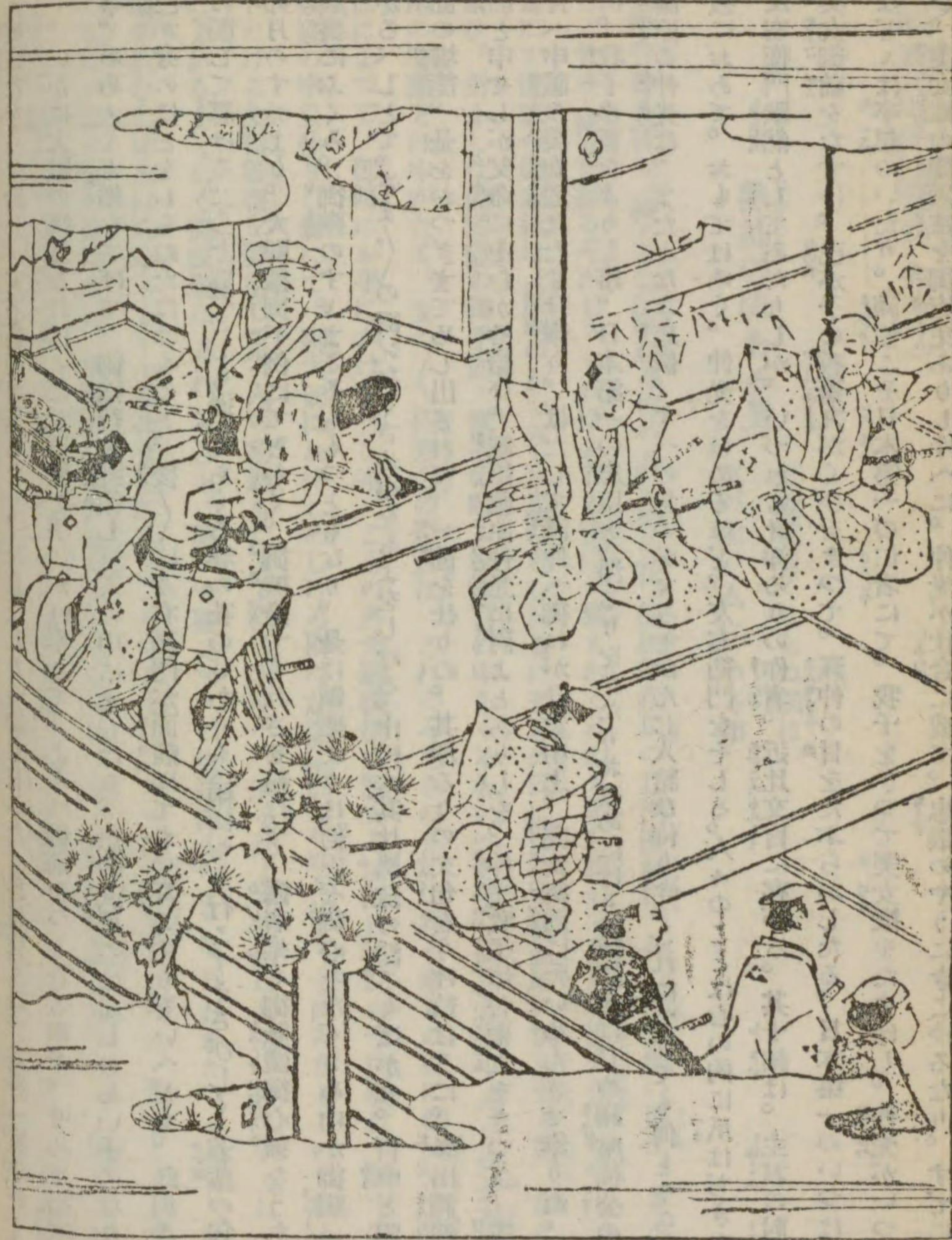
文武君が代 硯石卷之一

熟柿の味ある男

仁義禮智くもらぬ鏡は
萬づ代の人にある事

天津菅曾の種々。神ことの直なる竹のふし松の花。催馬樂指馬の目出度風俗。今の淨瑠璃の博士。そのいにしへをう
つし。世の倂を探るぞかし。さればあの、遠山。數もかくれぬと讀し國の守星川將監久信と申せしは。其比武武の
高名にて御家の御政道は。他國のかどみとも成し。しかるに若殿久氏には。父將監殿の御氣質と違。酒に亂れ色にほこ
り給ひ。折ふしは御短慮の御手討。家老中時々御諫言の申あぐるといへども。御用ゐなし。今の御身持にては。中々
大國の守護とは申がたく。をの、内寄合の時分は。これのみをきのどくに存じ奉りぬ殊に御附人。澤井十内少の無
調法によつて。即時にお手にかけれられし事。ことの外大殿様御立腹あそばされぬ此の十内義は。親十左衛門先代當代
に拔群の奉公仕りし者にて。御大切におぼしめしける所に。十左衛門若死を仕り。十内みなしごにて侍りしを。御取立
なされける生得經書を發明して。人の善惡もたゞす程の者ゆへ。去る比より若殿にめしつけられしに。外様もの、や
うに。かるくしく御成敗なされしこと。第一大殿さまへの御遠慮もなきなされかた。いろく此義に付ては。
年寄中取なし申あげらるゝといへ共御かんにんなされがたく。すでに村越友右衛門に。御こしものを下され。是
にて久氏が首うつて見せよと。扱もせひなき上意をかふる事。何とぞ御侘の願を申あげたく存じ奉れども。中々
つよき御立腹にて。申出すべきことばなく。とても御宥免なざるべき御氣色にも見へざれば。友右衛門お請を申て御
前の罷立。夜に入て私室におゐて。若殿を討奉りしとて。御刀をさし上すなはち双に血を引て。御目にかけける。大殿

御機嫌なをらせ給ひ。友右衛門出來したり。休息仕れとの御意有がたく退出仕りぬ。其後一家中此とりさたやむ事な
く。いかに大殿の御意なればとて。若殿を手にかけ奉りて。よふは御前をつとむる事ぞ。せめて出家はすべきはづの
事。のめ、と頬をさげて。御知行を拜領し。人の中にまじはり。忠義武勇のはなしのあい手になり。とやかく申は。
己が身のほどをしらぬたはけものと。後々友右衛門が面前にても。耳こすりをいへども。此男さらく氣のつか
ぬ顔して暮ける。すでに其としも過ぎ。あくる春の花のさかりも。雨にちり行なすえさびしく。若葉の匂ひなつかしき
卯月のすへより。大殿様御不例にてとかく。御機嫌すぐれさせ給はず。醫者衆も御脉體御心氣をうち給ひて。鬱症胃
熱裏にふくみ。御膳のすまざるもつともなり。是は鍼藥よりは何とぞ御心をなくさめ申か御病症のためにはし
かるべしとて。さまざまの御んなくさめ事をもよをしける。中にも其比風流の淨るりばかせ。百中と申せしは。音聲曲
節の堪能。是をおつぎまてめし出されて。一節を仕りぬ。其淨るりの文句をうけ給はるに。多田滿仲の御子。美女御
前と申せしが父命にそむかせ給ひ。家臣藤原仲光に討よとありしを。仲光我子の香齋丸をきつて。美女御前なりと滿
仲へ申誠の美女殿はたすけ奉り。はたして滿仲へ御ねがひを申上。美女御前にたいめんさせ奉りぬ。是主の身がはり
に。我子の首をきりし事。日本第一の忠臣と。淨るりをかたりおさめにけり。殿様をはじめ滿座伺公の面々扱もく
藤原の仲光は。またとなき忠儀。すへの世のかどみとかんじ入給ひ侍りき。これにつけても何とやら友右衛門事。此座
敷におゐて。おもてはゆく。仲光をはめるほど。友右衛門をそしる。人々のことは心の内に爪はぢきをぞしたりけり。
友右衛門黙然としてゐたりしが。いづれも此淨るりの作者。近比文盲に存づる。其子細は。主君の討と仰付られし。
美女御前をたすけ。己が子の香齋丸がくびをきつて。滿仲の目をたぶらかしたる。日本第一のいつはりものを。忠臣
など、は卒忽のいたり。滿仲こそ日本第一の仁者にて。我子をきつて美女殿をたすけし。仲光がいつはりをゆるし給
ひ。美女殿の御勤當を御宥免ありしゆへに。仲光が仕合に成て。忠儀のやうにきこゆるなり。すでに滿仲。なか光が



いつはりをにくませ給ひなば。我子をころしなから。世に私曲の名をうたはれん。向後此淨るりの文句をなをし。満仲は大仁者なり。仲光は日本第一の仕合ものと。かたりいへかしと申ぬ城主も一たん仰付られて。若殿を討奉りし友右衛門に。今さらおうらみを。仰出さるべきやうはなけれ共。久氏若氣のいたりにて。不行跡に有けるが。何とぞ異見をくはへなば。又もや氣質なをるまじきものにもあらずと。友右衛門いかに身がいひつけたればとて。早速にくびをうちける事。あまりに思慮なきいたしかた。扱も不便の久氏がさいごやと。御くやみ大かたならず。御心底に愁涙しきりて。御心氣をなやまし給ひけるゆへ。いつしか御所勞と成ける。ことに今晚百中が仕りたる淨るりの文句。御身のうへに。ひし／＼とおぼしめしあたらせ給ひ。いよ／＼御物思ひのいやましに。積鬱五臟をなやましける。所に唯今村越友右衛門が申條をきこしめし。うらめしくおぼしめし。いかに友右衛門。凡天地のうちに。大にしたがふが小なり。仲光香鬘をきつて。美女なりと満仲をあざむきしは小にて。我子をきつて。主をたすくる忠儀は大なり。しかれば小のいつはりをもつて。大の誠をおほはんとは。かへつて其方理にくらく。大文盲のいたりなりと。御上意の時。友右衛門。恐れおほくいへども。仁は忠のおしへとこそうけ給はりぬ。是満仲の仁あるによつて。仲光忠の名を多たり。満仲ふ仁にいはじ。又仲光もふ忠の臣と罷成て。我子をころして損といひ。末代に恥を残りしは仁にあらる満仲につかへしゆへ。仕合の名をとりいと申。城主いよ／＼御せきなされ。我満仲のごとくの仁をほどこさんか。汝又仲光がやうに忠をなすかとの仰せ。友右衛門すこし御前へちかよつて扱は若殿様の御勘氣。御赦免下されいや。先以て有がたく存じ奉るなり。去ぬる比。御首を給はりしと申せしはいつはり。誠は御堅固にて。私宅にしのびかくれ給ひ。御勘氣をくやみ給ひ。孔孟傳授の心法。治國平天下の道をまなびおはしまして。只今の御美質。いかなる大國強國をも。安民になし給へん御發明。すぐれ給ふ。其みぎり御刀に。血をひいて御らんに入れるは。熟柿の澁にて御座い。御夜目と申。ことに若殿をうち奉りし刃なれば。いまはしくおぼしめし。しるて御賢も有まじく。かさねて取

出させい事も候はじと。愚意を以て賢慮を謀いと申。一座の面々何若殿さまには。御堅固なるとや。はやく御前へ御とも申されよと有ければ。友右衛門私宅にかへり。久氏の御供申して御前に罷出ける。御父子の御對めん。誠に御蘇生の御心地にて。御よろこびの御なみだ。御祝儀の御盃をの／＼千箱の玉をうたひ。千秋萬歳つさせぬ御いはる。上中下にいたるまで。友右衛門が忠儀を感じ入侍りぬ。扱友右衛門御訴訟申あぐるには私には御いとま下さるべし。さいぜんも申上いごとく。下として上をあざむきし科のがれがたし。家來たるものは。かりそめにも主君にいつはりを申さぬはづなるに。是ほどのいつはりを申上ては。禮義の誠をそこない。道をわすれい。これによつて牽人仕りたきとの所存尤ながら譜代といひ。殊更若殿様への忠節。御家の礎ともおぼしめすのあいだ。御加増仰付られて。御仕置役にめしくはへらるべきむね。家老外山兵内をもつて仰わたされける。いよ／＼友右衛門御請申がたし。人はかならず己が功にほこるものなり。私儀御いとまをねがひたるも。さやうの立身を。仰付られんかと存じ。それをきめして。何事も御用捨なさるべし。さ候へばいよ／＼慢氣生じ悪心つものなり。後には身をほろぼす事をわきまへ侍らず。是凡人の淺ましき。かならず人は。出來したると存ずる所より。仕損づるものなり。御家をはなるれば。かへつて此友右衛門が身のうへ無事なり。御加増を拜領して。大役をつとむる時は。村越が家の滅亡遠きにあらずと。たつて御ねがひすてに仕つり。國遠して行衛まれず。いろ／＼御たづねなされるれども。つるに村越が有家なし。これによつて村越友右衛門がやしきを。其まゝにさしをかれ。御知行をも下されて。此家におさめおき給ひぬ。誠に城主の御めぐみ。友右衛門が廉直。つたえてすえのをしへや

二度の墨染

うき世の中助られても
うれしからぬは自然の道なる事

難波の浦の人忘れ貝も。玉となりぬるむかし。染屋形におゐて。牢屋敷の破損の御普請。入札をもつて仰付られ侍りぬ。定日に銘々。入金持参仕り。札をひらくに。勘助と申もの。落札にて。ことの外下直なり。二番札とは大分のちがひ。御念のうへ御目録をうつしあやまりたるか。萬一手ぬきなど仕る所存にてはなきか。さやうの事これありては。後日に役人中無調法に罷成其方も越度すくならず。かならず只今なるぞ逃札に仕りて。二番札へおとし申やうにといづれも勘助に仰付られける。勘助ちかごろもつて御念のいらせられたる。牢屋敷の御普請。毛頭わだかまりたる義仕る心底に御座なく。成ほど札の表の金子にて。急度御目録の通りに少も相違なく仕立あげ申べし何分にも私へ御普請仰付られ下さるべし。捨金百兩の外に。又百兩金子さしあげをき。普請のなかばに不埒の義申は。右の貳百兩の金子御取もぎになさるべし。さかおうらみに存じ奉らざるむね。再三申上るうへは。いかさま功者にてよくつもりたる物ならん。しからば御普請は。勘介に仰付らるべし。くれん念を入萬事疎末に仕るまじき段。證文仰付られ。牢屋普請の落札。勘介にさだまりける。したがつて仰出されし日限に。相違なく。端々にいたるまで。存じの外に念の入御目録に引合。御普請奉行へ相わたしける。諸役人御立合にて御見分なされ。何の御桐度もなく。御普請の代金下され。御褒美の御ことば有がたく存じ奉りぬ。勘助申上るには。舊例として。牢屋敷の普請仕りたる大工に。科人を一人下さる。御儀。それにつきては。里木尉右衛門と申もの。去年酒興のうへにて。町人と喧嘩仕り。あい手を少しばかり疵を付へども。あい手も別義なく御座。然れども御代官所をかるしめし科によつて。牢舎仰付られ侍りぬ。此尉右衛門義を。此たび出牢仰付られ下さるべしとのねがひ。尤におぼしめし。尉右衛門に出牢仕れのむね。仰わたされける。尉右衛門の内より申には。此たび私義出牢仰付られ。有がたくは存じ奉りぬへども。ね

がはくは此牢に。田内正入と申者罷有候。是を御赦免下さるべし。私の義は此まに牢舎仕るべきと申す。御役人衆扱々尉右衛門出牢の義を。よろこび申べきの所に。其身にかへて。田内正入を出したく存づるは。いかなる子細ぞ。尉右衛門私幼少の時分。田内正入に。手跡をならひ。讀書をおしゑられし厚恩これあるによつて此たびの出牢をゆづり申たく。いかに私出牢仕りぬがよろこばしきとて。物をならひし師匠の正入を。牢舎させ申事。いかにしても道理にあらず。此段尤にきこしめし。しからば正入を出牢さすべしと。御帳面を御吟味なさるれば。借金の出入にて。牢舎仕りしこと。これもつて大科にあらず。尉右衛門がねがひにまかすべしとの上意の時。大工勘介申には。私義此たびの御普請に。大分損金の仕り。御請負申あげたるも。里木尉右衛門をたすけ申たく存づるゆへなり。それに正入を出牢仰付らる。議。何共迷惑仕る。せひに尉右衛門を御赦免下さるべしとねがひける。此時普請に勘介損を仕りたる所存あしれ侍りぬ。扱それほどに尉右衛門牢舎の義を。苦勞に思ふ勘介は。尉右衛門爲に親類にてばし有か。いかなる所爲をもつて。せひ尉右衛門が。出牢をねがふ事ぞ。勘介つゝしんで。私親は鏡山勘左衛門と申。尉右衛門親は尉之助と申て。ともに近江の生れにて。三上のお家に相勤し所に。信濃の國桐原のさとより。毎年若馬を商ひに参る。武平次と申馬口勞。大墨と申馬を引のぼり尉之助勘左衛門に見せけるに。是を兩人のぞみ。はり合になりて。日比の懇意を武士の一言にいひやぶり。即時に尉之助をうつて。親勘左衛門は江州を立退。當國に蟄居仕り。其後病死仕りぬ。親末期に及んで。私へ申には。未來の事。いさゝか心にかゝる事なし爰に一とせ國もとにて。手にかけて傍輩尉之助こと。さしたる遺恨もなく。たゞ當座の口論にて命をとりたり尉之助が子ども。我を敵とてねらふべきが。終にめぐりあはずして。我無事にて病死する事。さぞやむねんに有るべし。此存念わが見らいの罪となり。子孫に報ひのあらん事かなしく。今臨終に及んでこれのみ心にかゝり侍るなり。かならず外の吊ひをさしやめ。尉之助が子共の爲にせよ。もしも難義にあい。命のはつる事もあらば。其方一命にかけて。尉之介が子どもをたすけよと。くれん

遺言。今に忘れがたく是をまもりぬ。此尉右衛門と申は。若年より出家仕り。他國に罷有て。親尉之助がうたれたる事をしらす。はるか後にうけ給へり。武士の世倅なれば是を無念に存じ。近年還俗いたし當國に罷有ゆよし。されども私親が面を見しらずいたづらに打過ひうちに。親は病死仕り尉右衛門は右の不調法にて牽舎仕りぬ。私親の遺言なれば。御普請に損金を仕り尉右衛門を出牽させ申度右の通の御訴訟。御聞とゞけ下さるべしとぞ申ける。おのゝ至極の道理。かんずるにことばなし。早々尉右衛門出牽せよとの上意。尉右衛門猶以て出牽いたしがたし。現在親の怨ある。尉左衛門が世倅勘介がねがひによつて。牽屈をたすかりなば。親のかたきのすへに。恩を請て。是怨をわくふにせひのまよひあり。たとへ此まゝに牽死仕るとも。勘介がねがひによつて。たすかる事おもひもよらず。ひたすら私めけ。このまゝにさしおかれ下さるべしとの義。是れ又もつともながら。其方がかはりに。正入を出牽させるは何ゆへぞ。ひとへに勘介が御普請に。損金をして仕りたる。御褒美なり。しかれば勘介が恩。いづれもへもついでまわるといふ物なり。とかく理を非にまきて。勘介がねがひにまかせ。其方出牽して。親尉之助が菩提を吊ふべし。しかれば尉左衛門が心もやぶらず。勘介が遺言をまもりし貞心もたち。其方が孝もたつ道理なりと。ことばに理をつくしとの給へば。尉右衛門御意御もつとも存じ奉り。しからば勘介がねがひにまかせ。私出牽仕るべし。扱出牽仕りたれば。勘介其方が親尉左衛門がせめて墓成ともうがち。是をもつて親の無念をさんづるが。是にても我をたすくるか。勘介いかにも。親尉左衛門が墓をそこなはんとの事。是狼籍のしごく。子の身としては見すてがたし。其時は其方をうつてすてん。たとへさやうの。狼籍に及ぶ其方にて。まづ一たんは親の遺言なれば。せひたすけいではかなひがたし。早々出牽せよといふ。しからば尉右衛門牽より出ける。をのゝ義ふかきものどもかな。しかしよく思ひわきまへよ。さやうにたがいに意趣をのこす時は。相果たる親もどもが。追善にはならず。かへつてしゆらの苦患とならん。爰は左右方りやうけんして。向後和親仕れとの上意の時。兩人落涙に及び。一度に御前にて。もとゆひをばらひ。ともに出家して。二世のちぎりをあつくし。未來の友と結しけるぞたのもしけれ

女の髪は心の鬼

情の花せきせはしき
禁制札は日本一の無用

女の性はひがめり。されば當歳より。あかきをよろこび艶のこのむ。そのねざし色にふかく。着するにつよし。さればあきつ野や。かげろふをのゝおみなへし。朝ある雲のさだめなく。過にし比ならの九重。飯盛町に。眞鹽といへる女筆のきこえありて。あまたの子供をあづかり。つのもじのはじめより。なさけある文言ば。女の居すがた。しつかけがた折形花むすび。琴のくみまでを指南して。世のたすけとなり。是をわが身の。家業にして。心をとなしくありわたり侍りき。卯月八日灌佛會は。此家にして弟子の大勢。木草の花を机にさゝげ。をのづから毎年。子共の花くらべになりて。かねて銘心かけて。なさけをつくす事にてぞありぬ。爰に三條通曝屋作左衛門がむすめ。おさくといへるは。年よりも心おとなしく。師の手をよくならひうつして。器用のものにておやも一しほ愛しける。此母其比は懐胎して。卯月六日のあけがたに。無事に安産し侍りぬ。これによつて。家内いそがしく取まぎれて。けふの花くらべを心の外になしぬ。されども父作左衛門取まかないて。八日の花瓶を出しける。誠に大勢の子ども。花桶花籠をならべ。灌佛にこれをさゝげける有さま。紅白薫濃の前裁。後園百歩の光り。千畔の清風座敷に吹て。にしきにあやをたてぬきたり。子共はいづれも初給。白ぬめに金糸を模様し緋にむらさきの風流。紅梅すわうのいろく。古風上代當世の染こみ。皆たらち女の物ごのみ。心のをくをみせかけ。戀の實うへのこむすめ。花をあざむく魅たらく。諸人見物して。心をやはらく花の臺。暮春のゆかり梨花山吹つゝ。岩なし九りん一八。あふひ風車てまりいわ藤。かほよばな。しやくやくぼたん美人草。ゆりの早ざきわすれ草。其外若葉のてり葉まで。色にまじへてさゝげゆる。しかるにさらし屋おさくが花瓶。ならぶ中にもさびしげに。人もすさめぬ大荒木の。もりもつかねば何とやら。けふの晴居

をきのどくに見へけり。師匠の眞鹽。いろ／＼とことばに艶して歸せしが。おさく宿にかへりてのち。大熱發出盜汗し。ゆい髪ほどけて一すじづゝにわかれ。うごきはたらくありさま。中／＼他人にはみせがたし。父作左衛門をはじめ一家の者ども肝をつぶし。ひそかに良醫をまねき。さまざま薬をあたゆるといへども。いさゝかしるしなく日をかさね。髪筋うごきやまざりけり。すでに是は天病ならん。何とてかゝる業因ぞと。作左衛門が物思ひ狂氣にひとしく。氣をもみける。其比難波に。高原見桃と申て。醫學の初生をあづかり。才力四方にきこえしを。作左衛門樞機をもつて。むかいの乗物を遣しける。早速見桃奈良に入來ありて。病人のていをうかゞひ給ひ。かみそりを。こせよとの御意。心得てさし出しぬ。見桃むすめの髪を。つかねよせてねぎわより。きりすて給ひぬ。猶もかさねてはゆる髪は。もとのごとくにして。うごく事有まじ。是女の性として。物をねたむ事の取り分け此女。ふかきゆへなり。されば毛髪は心火のつかさどる所。凡百病は不正の心よりおこる。其たゞしきは神。たゞしからざるは鬼。是奇病にして。薬力の及ぶ病にあらずと。醫案つまびらかにのべ給ひて。難波に歸り給ひぬ。誠に見桃の醫案のごとく。其後は此むすめ病氣本復して。はへいづる髪うるはしく。烏鵲のつやあつて。とこしなへなるふうりうを仕出し。世のだて女とよばれける。すてにすがたをもつて。女は高き御んかたへも立いづるならひ。おさく十六の時。西國方の御大名へめし。いざされ。御寵愛人にこへて。親一門も御扶持をかうふり。他人に果報をうらやまれけるに。いつしか此女のくびをきつて。親のもとにおくらせられぬ。御慈悲のうへ。親類どもへは。御んたゝりなされざる事を。有がたく存じ奉れとのむね。いかなるあやまりを仕りけるぞや。扱かやうに今さら。うきめを見侍る事かなし。せめて其やうすをうけ給はりて。とてもならば得度仕りたきむね。御使へ申せどもそれがしは外ざまものゆへ。お部屋むきの御やうすはしらず。さだめて御成敗なざるゝからは。よく／＼の科あるゆへと。思ひあきらめよと。いひすて歸られける。親の身としては中々。是がそのまゝにはすてをきがたく。ひそかにその御國にくだり家中へ出入の町人にたづねければ。

されば此女殿様の御氣に入て。外の女中はおつてなしもの成けるが。次第に人はおごりのつくものかな。先に殿の御寢間をつとめられし。おてるどのと申女中をそねみ。殿様へさまざまあしさまに申あぐるのみか。其身手跡の見事なるを幸に。男の手に似せていろあるぶんしやう。しかも四五度もあいなれて殿のめをくらまかせしともしゆびよく書こなし。これをおてる殿の寢間におきて。おつぼねがしらより。御せんぎになりて。いかほどかおてる殿は。おぼへなき事を。おそろしき誓紙までをかい。申わけいたさるゝといへども。殿様御聞わけもなく。不義のあい手を申さぬかと。御手づからせめ給ひて。つるにお手討になされぬ。これ戀なればこそ。一國のあるじ様の。女をせめ給ひぬ。そのゝちはいよ／＼おさく出頭して。よろづ我まゝをはたらき。傍輩のにくみをうけ。おてるどのはさら／＼不義なきものを。無實にて相はてられしこそいとをしけれ。誠不義をいたされなば。そのあいていかで。我ゆへに命をすてたる。おてる殿をよそに見て。世にたてるべきぞ。名のつて出て腹きるべき所に。さようの人今にあらず。さればあい手のなき不義はいたされぬ管。是はあまりにいとをしきさいごと。女中仲間より折／＼殿様へ申あぐるに付て。殿様にも御立腹のうへ。そこつに御成敗なされしと。御ん後悔大かたならず。せめて此無實をあかしとらせんとおぼしめして。さまざま御心をつけらるゝに。いかにそれと御推量なざるゝ事なし。しかるにある時。殿様御手づから朗詠の詩歌をあそばされて。御たはふれにおさくに。此詩をかい見よと。仰せらるゝをかしこまりて。仕りぬ扱も見事。男の手にも見まさるほどなり。いよ／＼これを興になされて。御寢間にいらせられぬ。そのゝち是をおぼしめしいだされて。いぜんの作りぶみは。まさしくおさくめが書しものよ。何とぞ白状せんと御思案あつて。むかし物がたりをなされける。男のある女に。執心したる男あつて。その男をきつてすてゝ。おもふ女とをひはてける。是人をころす事は。大きな科なれども。戀ゆへなれば。かゝる悪事をなしても。心がけたる女と。ふうふになる。これ誠の戀といふ物と。おさくにたはふれて。餘念なく見へさせ給へば。さすが女の心あさく、みづからも殿様に。あまり

心をつくしまして。ひとり御不便をうけまいらせたく。過し比作り歎をこしらへ。おてるどのを無實のつみにおとし。御手うちにさせまして。今こそみづからひとり。殿様におもわるゝ事のうれしさ。御物かたりの男にかはらずと。いぜんの悪事を。我とあらはしける。殿様即時にぬきうちにくびをおとし給ひ。からだはおてるが親共へ下され。せめてのはらいせに。切さいなみて。うらみをはらせとの上意。有がたくをのく。ためしける事。女のむくろを。かかるとしわざにおこなふ事。よくくゝの悪人なればこそなれ。まだしも御ふびんのくはへられしお情のあまりに。くびをならへおくらせられぬとかたりぬ。作左衛門も我子ながらも大悪人かな。さきだつて無實にてころされし。おてる親の心にくらべては。我くゝがなげきはいふにたらず。さりながら此世にて。かゝる悪事をなしたるもの。みらいのつみさぞかしおそろしく侍れば。せめて當來におゐて。かゝる悪人なりと。世にうたはせて。つみをはたし。のちの世をたすけ侍らんと。我子のなしたる悪事を。あふ人ごとにかたりける。是ぞさんげに重罪をほろぼすの因縁。親の心ぞあはれなり

文武君が代硯石 卷之一 終

文武君が代硯石 卷之二

女の半弓絃ある妹脊

かたきとしらで夫婦の盃
急な所でないたり笑たり

すまでやみなん。すがたの池のむかし。今井丹右衛門と言牽人らく外。柳はらの北に夫婦。住けるが。高市の御家に断金の古傍輩声澤九郎右衛門御いとまをいたゞき。以前のよしみをおもひ。京都にのぼり丹右衛門をたづねけるに竹のひしがきの。軒をあらみ門のはしらに。書付有て何ごともなきかと九郎右衛門案内にも及ずつゝと入ればどなたにて御ざると言。人のかほを見ればなで付のしらがあたまを一寸ちもそゝけぬ。ふぜい行義たゞしくきおとこに九郎右衛門とうはくして。今井丹右衛門とは。入魂のもの用事あつてたづね來りし也丹右は他行致されしかといへばあるじ扱はきのふまで。爰にゐ。めされし人へのお見まいかそれは。昨朝變宅致され。夜前それがし此家にかりうつりさつそくせつしやの宿札を出しおき申べき所に老がんにて筆のあゆみ人のよめかねんことをおもひ。他筆をたのまんと存し延引いたしたりまづ。お茶ひとつ參て。お出あれと言。九郎右衛門さりとは倉相千萬昨日迄爰元に居申たると仰らるゝ丹右衛門とは無二に心やすき中。宿かへたることも存せず。名札の書付は有。丹右衛門宅と存し推參仕りぬ。無禮のだん御めん下さるべし扱丹右衛門はいつかたへ宿を引こしゆや。御存じり御おしへ下されと。申せば。主せつしやへ家主の物がたりには。本國へ參られしよし。何方のことやらうけ給りをくべきことにもあらず。しかくゝと存ぜず家主にこそ存じられん間あれにて御尋なさるべしと。云所へ二十ばかりの女。十五六のまへがみ兩人かけ入てあるじを取てをさへ兄のかたき。おぼへたかと。切つくるあるじこはらうぜき人たがへなるはといはせもはてす。首

をとつてゆく時。九郎右衛門兩人をおしとめそれがし義。ふときかゝりし者なるがあるじは身におぼへなきよし。申されしを。りふじんにつつてすてくびをとつてかへる。その方どもは何者ぞ。やうすをかたり名を申せ。我すなをにはかへさじと言ばをかけられ兩人いかにもしさいをかたるべし我々は豫州道後におゐて野村才右衛門がいもうとおゆき。弟才次郎といふ者ども也。才右衛門こと。當所の。三十三間堂のけいこ矢にのぼし所に。今井丹右衛門と芝射の。ゐこんによつて去月廿三日夜。眞葛原にいで、はたしあいぬ。もつとも一騎うちの勝負にかたくけいやくせしを。丹右衛門妻女をめしつれきたり。木かげより半弓をもつて。才右衛門を射させふうふしてうつてすてけるよしけらいの者。國もとへかへりいさいにつげしらせけるゆへ。兄弟むねんにおもひいそぎはせのほり。丹右衛門ありかを。一昨日見とどけ。今日かく。切り込んで本望をとげたり。兄のかたきうちなれば外より云ぶんはなきはづ。御自分にも其とをり。まづやうすは。かくのとをりといふ九郎右衛門尤なりしかし兄のかたき丹右衛門を其方たちは見しつてうちけるか。おろかや。おとゝひより。念を入。宿札をも。見とゞけ此家におゐて本望とぐるうへに何のしさいの有べきぞ九郎右衛門ちかごろ夫はそゝうのいたりなりなせ。丹右衛門と名のりかけ其うへにてせうぶはせぬぞ。丹右衛門は昨朝此所を立のき。其くびは昨ばんより此家につりたる外のもの、首也いかさま宅をかゆるものか宿札をまくらさ其まゝにのこしをきけるは。丹右衛門立のくに心せきてわすれたるか。もし又わざと心入あつて。札を其まゝにはりおきけるか何ぶん此家のあるじおもひもよらぬ命をすてけるこそ。ふびんなれ某もなんぎなる所に。ゐ合せけることかなめのまへに人を討てゆくものどもをさふらひの見のがしにも。ならず又身にかゝらぬことにさし出んもきのどく也。是ぞしあんの有べき所と。もくねんとしてゐたりけり兩人ことばをそろへ此くびは丹右衛門にあらずとやして又此くびは何ものぞ名はなにといふぞと。つめかけられ九郎右衛門もとよりきかぬことなれば。名はしらすしからば其方もうるんもの。のいてとをせと立いづる九郎右衛門もとむべきいわれなければ。せびに及ずだまりある所へ十八九なる女。此

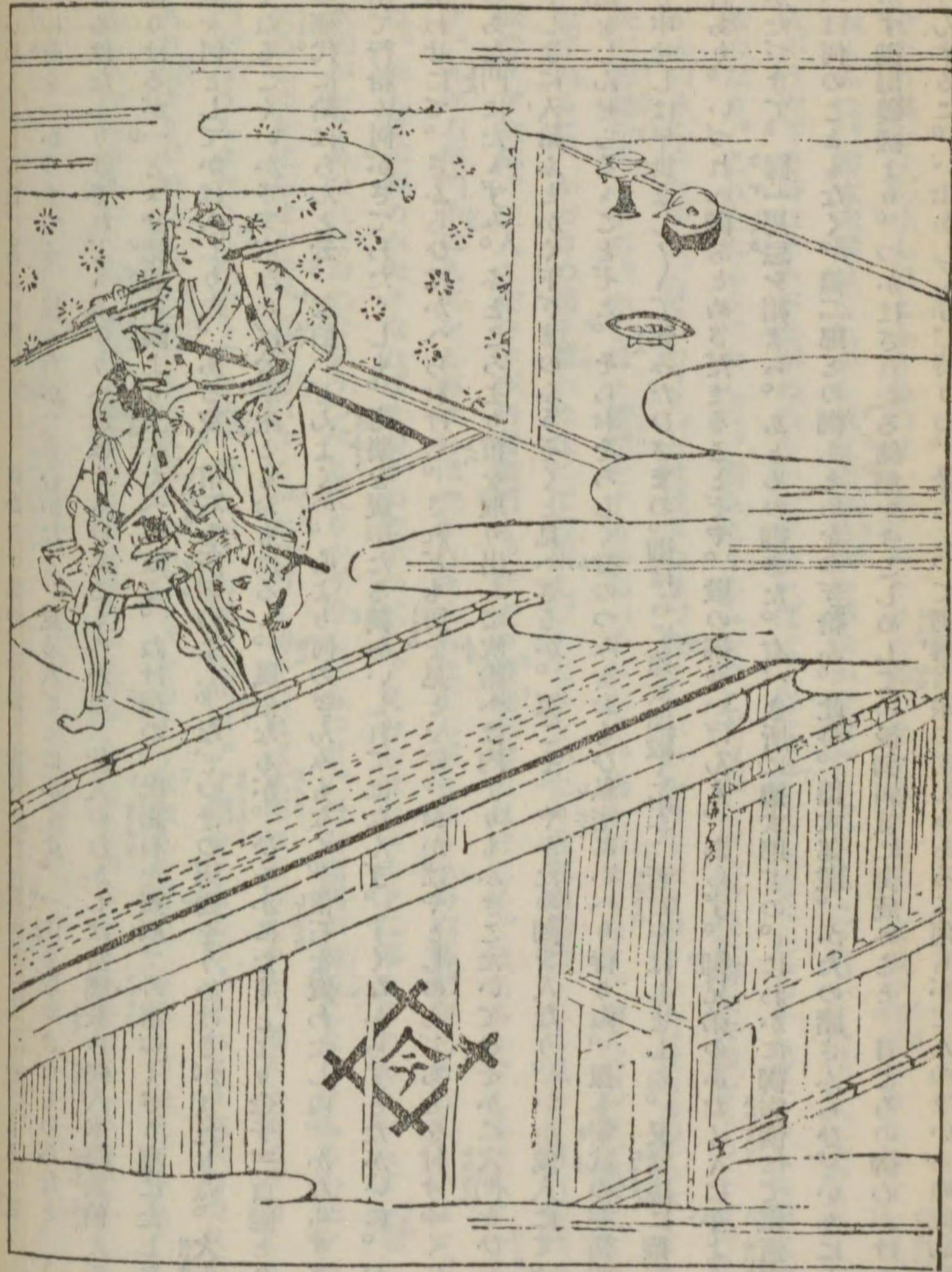
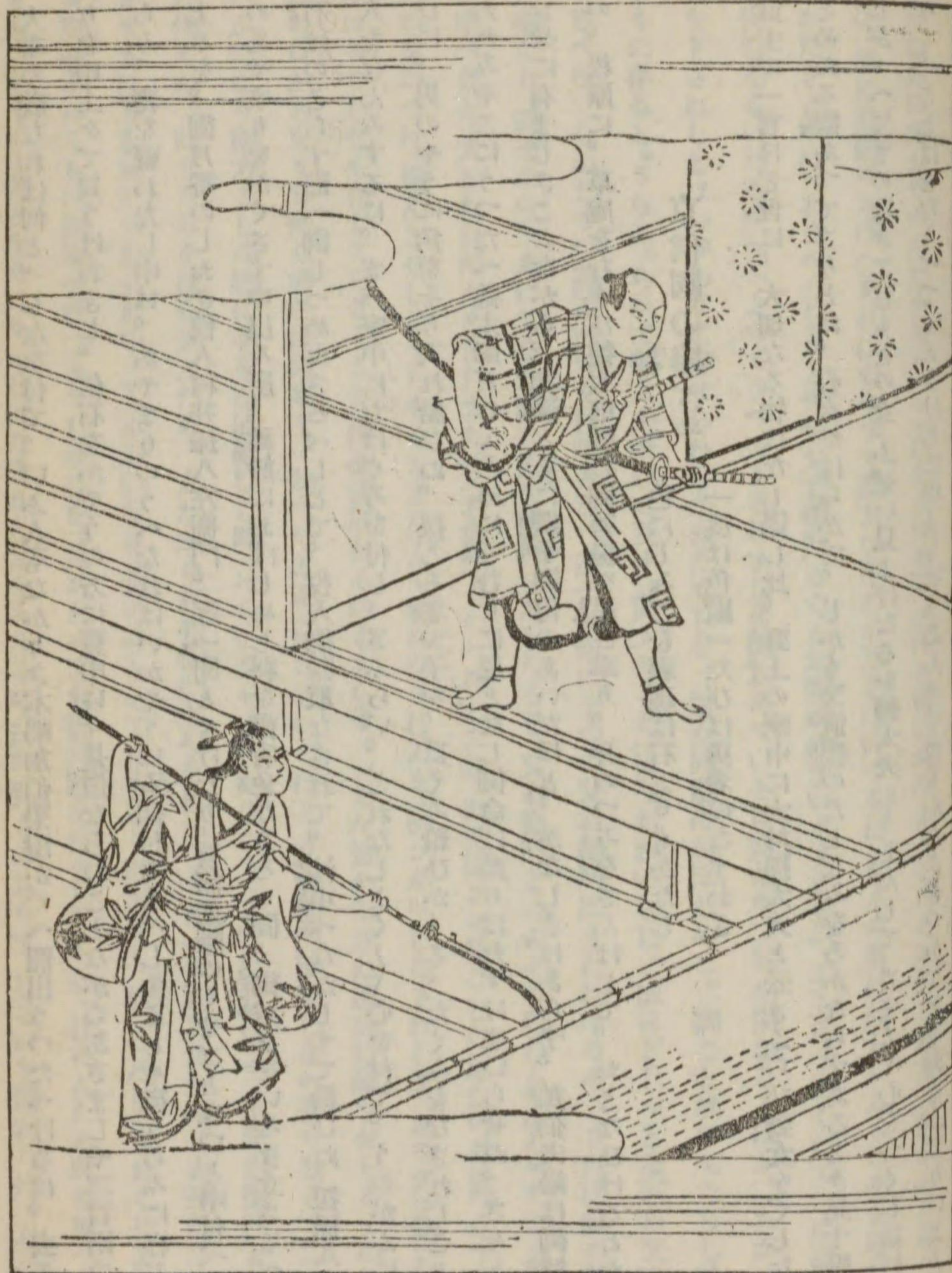
家へかへりやうすを見てみづからが親は。何ものがころしけるぞ。親のかたきは此内にこそ。あらめ三人ともにのがさぬと。かべにかけたる。長刀おつとりなみだと共に。いかりける。其時九郎右衛門始終をかたり是は。かたきの人たがへにてその方の。親父をころしたりそれがしもさいぜんかゝるしゆびにて。宿札を見てたづねより一ツ二ツあいさつをいたすうちのことにて。あるじの名もきかず人をうつて立のくものどもを見ながらも。よしみなければとむべき道理。なくをめくとしてゐたる所へ其方かへり申されてかくの仕合是はむづかしきかたきうちかなと云。あるじのむすめ御自分さま身にかゝらぬゆへに御了簡もなされがたきよし御もつとも存ずるしからば。みづからと夫婦になつて下さるべし。是急感ことながら親をうたせてむねんあまりにおぼしめしをかへりみず。女の口よりかやうのこと。申心を御すいりやうあつて。たとへ御心に入ずとも色香をはなれてのふうふの。けいやくはやうなされて下されとなみだにこゑをなきからしてぞいひにける九郎右衛門むすめの心底をかんじ成ほどふうふになつたり扱討れたるあるじの名はいかにとたづねれば相州の佳人にて父は鹽山善太夫みづからは。小しほと。申ていまだ云なづけのおつとも持申さず。いよくふうふとなつて兩人の。しゆの。兄うへのかたき。今井丹右衛門を御うたせ下されそのうち兩人のしゆは。自が親のかたきなれば。我にうたせて下さるべし。此助太刀といひうしろ見なくてはかたきうちのどうりすむまじきやわおぼへ。扱こそおつとにたのみ申なりと。さりとは女の身として。武士のいきぢをたてることば兩人もなみだをながし。我くはやまつて人たがへに。善太夫さまをうちましめんぼくもなき仕合。御はら立の上。なればたゞ今我々をうつてすて給ん所に。御了簡なされ兄のかたき丹右衛門をうたせ下さるべしとのこと何がさてかたきをさへうちたるうへは兩人の御手にかゝりうたれて今の御無念をはらさせ申さん。これと申も丹右衛門きうに宅がへをいたしをのれが宿札を其まゝにはりをき我くに入たがへさせて手もおろさずかへりうちにいたすべきたくみいよく片時ものがされず。これよりすぐにたつね出さんと云とき九郎右衛門扱もせひなき仕合かな鹽山善太夫はそれが

しが伯父のかたきにて此たび。善太夫をうたんばかりに御主人へ御いとま申うけてのほりし所にそれ共しらず此家
きたり其むすめ小しほとふうふのけいやくかたきの聲になりまうとなればおや同前さりとはいか成。宿縁やらん是を
おもふに。善太夫殿はそれがし叔父佐熊主水を手にかけて給ひし。むくいによつて人たがへながら兩人に。うたれ給ふ兩
人がうたざる時はそれがしがねろふかたきなれば。つゝみには手にかけて申べし。しかればどのみち善太夫どのの命はなき
ものなり。これをおもふておしほ。兩人にうらみをのこすべからず。兩人が善太夫殿をうちたるゆへに。今ふしぎにふ
うふのゑんをむすび。むしうと。とは成りぬまづ御んしがいをほうむり申さんと。世のさだめなきことをうらみ。善太
夫が葬禮をするやら。おしほと婚禮をするやらいそがしく。物を取まもなく。四人打つれて爰をたつて。丹右衛門を
たずぬるに。かづさの國千草のはまにて付出し。しじうをかたり九郎右衛門うしろ見して丹右衛門一人と。おしほ。
おゆき才次郎。三人と切むすび丹右衛門も。武士の義理を存じはげしく。はたらかずして三人に。一太刀づゝ切るゝと
き。九郎右衛門中に入てをしわけもはやかたきうちはすんだり此うへ丹右衛門命をとらんといはゞ。おゆき。才次郎
は。おしほが親のかたきなればまづうつてすつべし。又おしほおゆき才次郎をうたんといわば某。おぢの。かたき善
太夫がむすめなればおしほをうつべし此りやうけんをもつて。丹右衛門が勝負になさけある心底をかんじ命をたすけ
てのしゆをはらせと云。三人何がさて一太刀づゝ切つたれば本望はとげたりと。五人一所に。るよりける所へ丹右衛
門女ぼうもきたり右のやうすを聞。ひとへに九郎右衛門が。了簡をよろこび。それより六人打つれて丹右衛門が家に
入れ疵ようじやうして本腹のうへ本國に立かへり。をのゝ御主人の御めぐみにあづかり。のちゝ迄。一門どうぜ
んにちなみをあつくし。道後と高市のみははるかにへだ。たれど心のまことはちかくしる人のうへこそゆゝしけれ

第八身の爲に砒霜石

欲に目のみへぬ侍有り
女のひたひに角の入たるはいか様くせ物ぞかし

いつともしらぬ。あふの松ばらに。はかなき世の。すがたをくらべ。老せぬ。ふうふ。ともに成なしの。にふ色。
佛に身をつかうまつる。扱も有がたき心かなと。見る人ごとにかくぞ。一生を取おきたものかなと。うらやましから
ざるはなかりきされども人のうへにはおもひあるものかな。此人のむかしは當國萩の住人木嶋加伯とて醫を業として
侍りけるがひとせ肥前の國より上がったへのぼる。ぬけ荷の。砒霜石を買取て外事のくさり薬にたしなみをきける。
是を何としてかは人しりぬ。ある夜。信石を所望のよし。なてつけの男齒をうめけるがきたりぬ。大小のさしぶりな
まぬるこくいかさま京ならば公家衆ともおもはるゝ。風俗なるが。ひそかにたもとより金子三百兩とり出し。すこし
の薬代に給はらんと云。加伯。どんよくの。心より何のぎんみもなく。信石を賣わたしぬ。かならずさた仕るなど。
出て行給ふ何がさてわたくしも。毒薬を賣申たる義あいしれてはなんぎ。すくなからずとたがいに。おんみつの申し
あわせにて。さふらひはかへられける。されども所を見とゞけ。おかばやとしのんであとを付けゆくに安武のやかた
のあな門にたゞずみ。ふところより笛を取り出して吹給へは内よりもふきこたいてひそかに穴門をひらきそれより。
やしきに入給ふとかく下さまのふうぞくと見へざるが。扱こそ。やかたの御人なり。いか成人にて。いかなる人に
毒をしんぜらるゝことぞと。そらおそろしく身のつみをおもひ私宅にかへり侍りぬ。扱も安武の左衛門。きよとし。
と申せしは早世ましゝて先みだひさまの。御はらに徳太郎殿と申て。若君をはしましぬ。又當腹に徳二郎殿と申ス若
君あり。いづれへ御あとめさだまることぞや。殿の御ゆいげんも。あらず。御兄弟のかたゝに手よりゝの諸侍
かたづきて。御一周忌を相まち。あとめの御さた。有べき所に徳太郎どの。にわかには御病惱にて御逝去なされ。此う
へは何のこともなく。徳二郎との御あとめをつぎ給ふ。此時。徳太郎殿。かたの諸さふらひ。いかにしてもがてんゆ
かず御母義様より。つかはされたる銘酒をきこしめしての後御病氣に御成ひこと。日ごろの御心がけをもつてりやう
けんするに。いぶかしく存じ侍りぬ。是によつて御醫者衆にぎんみあるに何もがてんのまいらぬ御病症かなと斗にて



一大事の義なれば何と。しなを付て。いふ人もなかりき木嶋加伯染屋かたへ罷出うつたへけるは。去る。ころ御ことわりを申上ケて買うけおきし。信石をかやうの方に賣申。是道ならぬことながらあさましや三百兩の黄金にまなくらみ。毒を賣わたし申。あやまりのうへなればいかやうにも仰付らるべしすこしも御うらみに存じ奉らざるむね申上るを。御月番のしおき役人村井孫八左衛門。逐一聞とゞけたり。言語道斷のくせごときつと申付べきことながら。身のあやまりをかくさず申出ル所。神妙におぼしめし科を御宥免なざる間。御城下をいそぎ立さるべし。かつ又砒霜石はのこらず海へ御しづめなさるべしとて。役人御請取なされて。沖中へながしすて給ひぬ。扱孫八左衛門。毒を買し人をぎんみするに。まづ家中におはぐるを付し。さふらい。これなしよく心付て。うかがふに御母義様のひたひに。男のやうに角をそり入れ給ひぬ。扱こそまゝ子を。にくみ給ひかゝる。たくみをなされしこと。たしかにあらわれみやこにうつたへ徳太郎どのために。むりに尼となし御命ばかりはたすけまいらせぬ。さりとはうへへの御ン身に有まじきことながら。和漢ともに繼子繼母のあいだほど。かなしきはあらず。加伯夫婦は御城下を立のきあふの。松原に。草庵をむすび徳太郎殿の御菩提を吊ひ奉り。身のつみをさんげして。おこなひけるとかや

京信國の棒ざや

色にしみこむ義理は石よりもかたし
一度は色殿一たびは勇者のなすわざ

武士の一言ほど世に。大切なる物はなし過し比。野上の家中に大杉孫太夫と云さふらひ妻女をくしながら外の色をもとめぬる癖あつてさりと。心もやはらかて。しかも又武藝のたしなみをろかならずあるとき兄十野右衛門かたへめしかへてまのなきこしもの女。ふせい見よげなるを彌太夫しうしんして。さましく心をつくし折にかこち時にうらみて。ことばをならべてくどきけるに中へせうるんせず扱もかたきやつかなと。おもふよりいよ／＼おもしろくいかで。いひなびけいてはと。うは氣ならぬ。しんじつを云しらせ。親をせひごんに入て。命をそちにやるといひ遣

れば女しからば。御命はたしかにもらいましたことばをかためて。かりの枕をかわしいよ／＼あだならぬ中となりてみづからにはおやのかたきあり。これをうつて下されと世にまみ／＼とたのみけり彌太夫色からしみこまれしことといひ。身に武藝のおぼへあれば心やすく請あひそのかたきはいづくに。あるぞ名は何といふものぞと尋ければ私のおやのかたきと申は。おまへのしうと角崎又右衛門どのと云彌太夫きいてきもをつぶしとうわくのていに見へければ女。扱は御しんるいたるゆへよつてうつて下されまじき御しんていと見請たり。ちが頃おことばが。ちがいまする御いのちを下されしとはいつわりに仰せられしかわたくしを。遊女同前におぼしめし。御ことばにてたらし給ふか。御ひきやうに存ると。うらみ。られて彌太夫せひに及ず。武士のことばに。ちがいなし。成ほどうとながら又右衛門をうつてやるべし。しかしまづ其方がおやは町人か。武士か何によつて又右衛門にうたれるぞ。されば私の親は白石角之丞と申たる。武士のらう人にて京信國の刀を所持したるを。又右衛門どののぞみ給ひらう人のたつきのために賣はらひ申べきと。大かたねだんもきわまり。又右衛門どのへ相わたし。ぬり砥させ給ひしに思ひの外成。きず出申かやうの疵ものをかづけ。賣んとせしおうちやくとさん／＼悪口なされ刀を。御ンかへしなされしを。おや角之丞むねんにおもひ。疵はせつしやも存じよらざること。代金請取たるにもあらず。いまだ賣わたさぬ道具に難を付らるゝのみならずさふらひの口からをうちやく者とは何事ぞ。此うつふん。はらさいではと。又右衛門殿屋しきへ参りひとつ二ツ申うちこゑだかになり兩方こしの物に手をかけ給ひし時。けらい大せい折かさなりつゝるに私のおや。を又右衛門どののお手にかけれ侍りぬ。此うらみをはらさんため。女ながら又右衛門どのを付ねらふといへ共あなたは。大身にてふだん大せいのもまはりをめしつれられ中／＼ふがいなき。女身としては本望とげがたく。徒に月日をおくりよう／＼に存じつき御家中のうちに御奉公仕つりてしゆひを。見あわせ又右衛門殿をだましうちに。仕らんため此お家へまいりしとかたりぬ。いよ／＼其とをりにちがひはなきかと念を入るに。いつわりにあらず。しさいを聞からは。身にかへて成ほど。

又右衛門を討べしと女にやくそくして。又右衛門に此ことを内證より。ひそかに尋るに。いさゝか。おぼへなしと申さるるは扱も。さもしや。ひきやう。なる又右衛門。しんていかなしんるいになりてもたのもしからずと。さい女にいとまをやり。又右衛門と他人になりておもてむきよりきつと。々々彌太夫角之丞がむすめのうしろ見して助太刀をうつぞと名のりかけたれば。又右衛門今は。あらそうに及ず。成ほど。其らう人こそ。それがし手にかけてたり。しかしむすめには何のあやまりあつて。りべつはいたされしぞ。是をうけ給りと。けて。いかやうにも仕らんと云彌太夫其方はちかごろひきやうものかな。まさしく手にかけてる角之丞をうたぬと。あらそふしかれば。いつはりものにて。誠なきさふらひ。これによつてしんるいのちなみを。きつたり妻女が身にとりては。あやまりいさゝか。これなし其方が心によつてりべつ申侍りぬ。此うへは他人なればいそいでそれがしとせうぶせよといふ所へ角之丞がむすめかけ付親のかたきのがさぬと女ながら一こしをぬきもちたり。其とき又右衛門いかにも。それがし一たん。あらそいしはあやまりなり。しかしかくかたきと名のる上は。しさい有まじ爰はりやうけんして其まゝむすめとふうふとなつて下さるべし。此だんはぜひにたのみ申すあやまりもなきむすめが。貴殿にえんを切ることに。我がひきやうのことば故也。誠に親子の中におゐても。尤はづかしうこそ侍れとなみだにくれて。申ける。彌太夫つくゞきゐて又右衛門申さるぶん道理しごくに存る也。いかにも夫婦のゑんをむすび申さんといへば又右衛門悦びしからば角之丞がむすめとせうぶ仕らんと身づくろふ。彌太夫女に心を付。おもひこんたる一念おやのかたき。又右衛門どのをうち申せ。もしかへりうちにあいなば。やくそくのごとくそれがし又右衛門殿ヲうつてたむけん。必をくれな。いざ又右衛門どのせうぶとのぞみければ。左右方いかにもせうぶはうんにまかせんと立わかれて切むずびつるに又右衛門は女にうたれ。女も手をい同じく相はてける。此しだいを城主。きこしめし彌太夫ぶしの一言をちがへざる所は。尤なり。しかし。女に戀慕をしかけける故。よしなきことをたのまれしうと又右衛門を。うたせしこと色欲におぼるゝゆへ且又主人をもちたるさふら

いのかる。しく女に命をやらんと欲言をかためけること。態度におぼしめし彌太夫に御いとま下されける。影城主の。上意おの。御もつとも存じ奉りぬはたして又翌年彌太夫に歸參仰付られ二たびつきせぬ。君の仁政をあふぎ奉りてさかへ行末につかへ奉りぬ

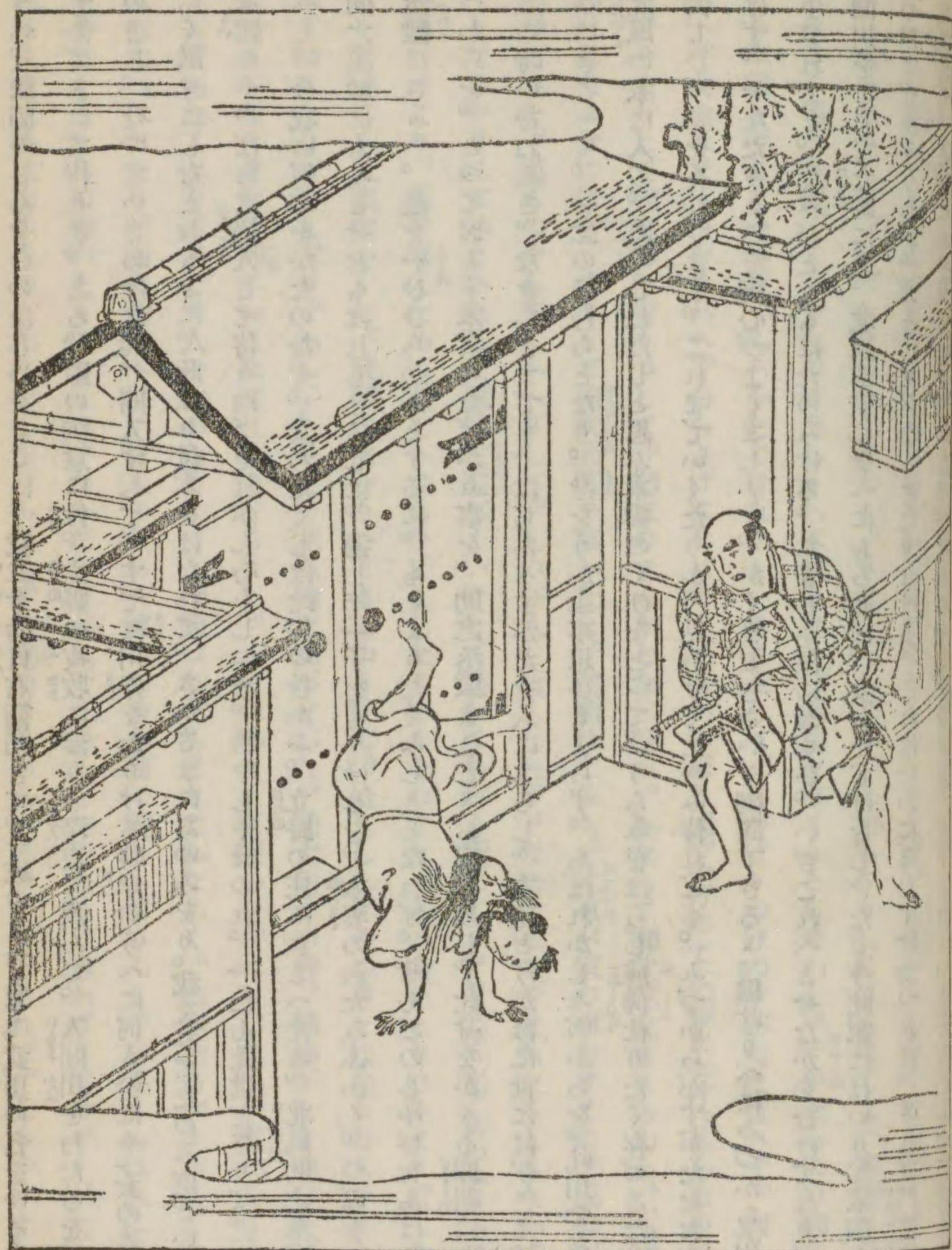
文武君が代碓石 卷之二終

文武君が代硯石 卷之三

紅葉の雨にぬれたが手柄

おもひ入ちがひたる古今集の歌
時ならぬ山吹は俄兄弟の仲だち

春くるゝ行衛はいづく霞の關と。ふるき女の口すさび富士のみへぬ所。物はかたいちにいふまじき事。されば川の流ふかゝらず。夜聞ものゝ一しほ耳のたのしみ。世をすてふならばと。人にうら山しがられける。法師の昔を聞に。秩父の城主につかへて。歴々のさふらひ。子細あるによつて。仕官をしりぞき。鎌倉にしがやつに。ひくからぬ軒をわらにかまへものずきに窓を四方にきつて。山をみて心をうごかさず。靜心をやしなふ。されどもおかしきは色の一とをり。時雨せしふゆのはじめ。わたり小性にはあらず。武士の子と見へて。しかもきしやなるふうぞく。見かけよりは心のやさしさ。花よりも猶のこる紅葉を見すてがたく。さうり取一人めしつれて。そこ爰かりつくして。此谷に取つく時。いくたびか空のけしきかはりて。ふり袖をぬらす事わりなく。下人さいかくものにて。庵へまいり。少年の主人雨にあいて。めいわく仕りぬ。あはれ御用にとをき。ふる傘恩借仕りたし。本庄がやつ町まで参りへば。ちかづき御座いあいだ。からかさをかきかへ。早々返上仕るべし。ちかごろ無心のいたり。たのみ奉ると。ことばをならべて申せ共。戸をさして明ず。おうともいやともこたへず。扱もあたらことばをついやして。くやくしく。あるじは耳がとをいそうなど。舌つゞみうつて立のく時。此ごろ小春の。かへり咲の山ぶきの花を。一えだまどの内よりなげ出しける。かさをかすまいとか。かさふとかいへば。ついらちのあく事を。これは向上すきたる返事。しかし心こそあらめと。主人に此よしを申。雨のはれる内。御なぐさみにはんじて御らんなされよと。山ぶきの花をさし出せば。主人の若しゆ。されば古今集の十九卷めに。山吹の花色衣ぬしやたれ。とへどこたへず。くちなしにしてといふ歌有。さいぜんその方が。傘借用とたのみけれど。ふかくおこなひすませし。尼の身なれば。男たるものにとはをかはずこと。成がたしといふ心にて。とへどこたへず。山ぶきの花のえだをなげ出して。埒をあけゝるは。扱もなさけふかし。ぶふうりうなる人の。傘かりたるより。からでぬるゝ雨こそおもしろけれ。いかなる御ふせいぞ。とてもに見てかへらばやと。まどのほそめより。主従立かはりてのぞくに。いかはまりかな。六尺ゆたかな大の法師。にしあかりに書籍くりひろげ。ひとり心にかてんして。わらふかをさへつねの人の。いかるにまさりて。武士のはてとは見へぬ。さいぜんの歌の心は。女にてこそおもしろけれ。男のなげ出したるは。又こそ心もあらめ。とかくすいさんして。うけ給はらんと。網戸をおしやつて竹ゑんまでまいり。傘恩借の御こたへに。山吹の花を下されし心こそなつかしけれ。ひゝき心の我ゝがてん仕りがたし。後學にもいたさん間。あかし下されと申せば。法師此いほりに雨具も申さず。御用に立たしと申こたへにて候。その雨具のなきに。山ぶきはいかに。されば國士にはへ出る草木花咲て實のらざるはなし。山吹ばかりが。花のあと實にならず。古き歌にも。入重ひとへ花はさけども山吹の。みのひとつだにもたぬなりけり。さいぜんちらと美小人の袖がさに。雨をしのぎ給ふふせい。木のはしの身にさへ。心みだれて。せつなや。雨具をかしたく存づれども。みのひとつだにももたぬあばらや。山ぶきによそへて。せめて心の花は。ちらぬものをと。そとしらせましたるばかりといふ。さりとて風雅の世すて人様。一枝多生の奇縁に存じ奉る。何ぶんにもこれよりは。きたり参りて。御茶の給仕にても仕らん。是はけつこう過たる御あいさつ。花のものいふ御すがた。かまいてさへなくば。法師があづかりませんと。けらいへ對して。いふことばをうけて。此身御ふびんにおぼしめし下るゝうへは。一命もさしあげんと。おわかしゆの仰。せんをこそされ候。此身こそ命もみらいもと。佛をせいもんに入て。かりそめの事より。金を断ちぎりをむすび。身にあるほどの事。いさゝかかくすまじ。かくさじとのかための



うへ。法師のとんせいのはじめをきくに。我五十鈴貞右衛門とて。一家中におゐて。武勇の名をゆるされ。心もあくまでふてきにて侍りき。ある時殿の御意に付。立野の夜牧に参り。深更に及んで。入間川をわたるを。けらいども無用のよし。たつていさめけれ共。開入ずして。すでに川岸をおりける時岸のうへに何ものにか。女のさかばり付ありて。ふく風身にしむとおもふに。此はり付本をはなれて。さかさまにあゆみをり。我をみてたのみ度といふことをきいて。家頼のやつばらは絶入して侍りぬ。それがし心をしつめ。あやしやおのれ。一たん此世をさりて。五りんをくうにかへし。今我に何事をかたのむぞ。女わたくしは此川のむかふ。立野の庄にきこへたる。北風助之丞が妾にて侍りし。助之丞殿にもみとせおもはれしるしに。過し年一子をもうけしを。本妻のねたみふかく。つみをこしらへて。助之丞殿にさへ。是をいひひらかんとするに。もとよりたくみしことなれば。せんごのしゆびをあはせ。何ぶんにもみづからを。とつておとす本妻のたばかり事を。助之丞殿まこととおぼしめし。此身をかゝる罪科にをこなはれ。さいごの時のむねんさ。なきあとまでも。はぢあるすがたを人にさらし。本望とげがほに世にはびこる。本妻のうゑみらひにきこへて。一念のほむらとなり。身をうかぶ事思ひもよらず。あはれかしみづからを。此川をおいこし下されよ。北風の家に入て。にくしねたしと思ふ本妻のくびをとつて。うらみをはらし成佛仕りたく存づるなり。是こうだいの御じひ。あをぐにつきず。これまでいくたりか。見かけてたのみ侍れども。みづからすがたをおされて。立より給はず。そなたさまこそ御心づよくまし。かくまでしさいを御聞下さる。猶此うへにみづからがねがひを。かなへ下されよと。なみだとともにたのみける。あまりふ便におもひ。いざこれへとせなかをむけてはり付の女をおい。入間川をこして立野に入。北風が家のまへにおるせば。女かたじけなし。たゞ今此家にはいりて本望とげ申さんと。門の戸に立かゝりしが。おそれてわなきたをける。これはいかにとたすけたつれば。されば門柱に。千手だらにの御礼あり。これにおそれている事かなはず。あの御礼をひきまくり下されといふそれがし心におもふには。まさしく

祈禱の御礼をまくりなば。亡霊家に入て。立どころに内なる本妻の命をとるべし。これは人職一人をこらすこと。我身にとりて怨もなし。ふびんの事に思ひ侍りぬ。又のぞみをかなへなば。亡霊がしんあやむ事なく。みらいをうごううかむ事有べからず。いづれをかたすけん。さま／＼ふんべつにおちざりしにさるにても。本妻は悪なり亡霊がうらみはさる事なれば。よしやたのまれしうへはせひなし。御札をまくりとらせんと。千手だらにの御まもりを取さあ今こそ本望とげよといへば。あらかたじけなやといふこゑして。さかばりつけのすがたは見へず。扱もふしぎやと思ふ所へ。女のなまきびをくわへ。心ちよげにそれがしがまへに來り。御かげにて本望をとげ。しんあのはむらをはなれたり。今よりして我すがたをうつして。御家のまもりとなし給へ。かならず御武運をまもらんと。一禮して行衛しらず。跡けしてうせにけり。さりとて前代未聞の事かなと。夜明けてのち。北風が家の事をきくに。成ほど夜前助之丞が女房のくびを。何ものやら切てかへりしが。しのび入し所もしれず。双物にてあやまちたるともみへず。狼などのくいきりたるやうにていとかたる。扱は亡霊がくいきりて出しにちがふ所なし。あらふびんや女の心ほど淺ましきはなし。我勇にほこり。名を求めたために武をへつらひ。よしなき事をたのまれ。人の命をとりけるよと。つよき心やはらぎて。しんあにも此事をかくし。殿様へはむりいとまを申うけて。ほうしんじやの身とはなりぬとあたり給へば。若衆はふり袖になみだをしぼり。わたくしこそ北風助之丞がせがれ。助太郎と申者。御物がたりのさかばりつけは。母人にてとがなき身を。刑におこなはれ給ひけるよし。二才の時なれば御かほさへみしらず。事のあらまはしは母人のいもうと。わたくしをばにて母人の物がたりにてうけ給はり。あまりにかなしく。出家仕るべきかくごにて。仕官のぞみはたへはてたり。猶も此うへは。母人のために紋なしの小袖に着かへ申さんと。いふもあはれにきこへける。法師も今はよそならぬ物がたりにおもはずなみだをながし。うつしとよめたる。さかばり付の。すがたを取出し。助太郎に見せ。是はなき人のかたみながら。かならず武運のまもらんとのけいやくあれば。しゆつけをおもひとまじり。

長劔を帶し。武名をあげて。孝のおほりをつとめ給へと。道理にあたる異見を申せば。助太郎はともかくも。兄ぶんの御意と申。母人のまもりを。いたづらになしはたさんも不孝なりと。是にふんべつきわめて。秩父の城主へだんだんをうつたへければ。五十鈴貞右衛門義。かくべつなる御譜代のものにて。日ごろ御家をはなれし事を。おしみ思召御機嫌なれば。桐機よろしく。みやうじをあらため。五十鈴助太郎と申て。御奉公にまかり出。勤仕ゆだんなく。非番のみぎりはしがやつにかよひ。法師をなさけの兄とちぎり。すへんかはらぬ松の二葉。色道より武道を達し。孝行にかなない主君につかへる忠の道。しるべはふゆのみぢなりけり

似た人に迷ふ戀の深草

はやまらぬは武士の肝要
ふた子でもなし女兄弟

かつらきや高間の城主の御家の吉例として。若殿様當年九才にて。御具足をめしはじめらるゝ事。古實作法嚴長の御義。したがつて内海の家より。前兆にて陣配團扇をさし上る事なるに。内海文之丞義。先年三室主計いもうと。不義の密通して國を立退けるゆへ。關井甚藏。内海の家わかれによつて。先此たびの佳儀をさしあげ。目出度御祝義おさまり。終日終夜の御酒宴大殿様ことの外。御機嫌すぐれさせ給ふ。翌日家老中申合して。御前にまかり出。御そせう申上り。内海文之丞儀ふとどき千萬。御ふくりう申あぐべきやうも御座なくいへ共。文之丞が親文内。祖父文藏は御先代におゐて。拔群のはたらきを仕りし者共に御座り。あはれ祖父親に御めんじあそばされ。文之丞がふとどきを御ゆるし下されて。歸參を仰付られ下され候は。年寄ども有がたく存じ奉るべしと。おのゝ口に御ねがひを申されければ。殿様にも昨日は。べつして内海事おぼしめし出させられ。文之丞義じつていにこれなきゆへ。國遠仕り。一大事の吉禮を他家へゆづりしこと。御ひいきのうへふがいなくおぼしめし給ひぬ。申さば色欲一をうの事はかりにて。城主へたいしては御奉公は能仕り。むまれつきもかいしきゆへ。しせんの時御用にもたつべきものと御目をかけさせられし所に右のふてうほう御腹立大かたならず侍なれども。御祝義といひ。年寄中先祖の者共の義を。申たてらるゝにつき。みながさやうにもおもはるゝうへは。ともかくもとの上意有がたく。家老中御そせう相かなひ。よろこびかぎりなかりき。是ほどの取もちにあづかる事。文之丞が日比心だてよきゆへぞかし。扱文之丞義。伏見か深草かに。夫婦しのびまかりあるよし。内々のふうぶんなれば。さいわひかな。三室主計。此たび京都へ御用につき罷のぼるついでに。文之丞ふうぶをたづね出し。つれかへり申されよと。をのゝの仰せ。ちかごろもつてかたじけなし。主計も妹事なつかしく。文之丞もかねて入魂のほうばい中。あまりにむつましく。朝夕心やすくかたりし故に。妹をぬすまれたり。いかでしんていに。にくからぬことをおもへども。さむらひの面むきなれば。ふつうに仕り。是までいづくにまかりあるも存ぜざるに。此度年寄中の御わびにて。殿様の御めん下さるゝうへは。したしき妹の事の事なれば。主計身にしても。文之丞同前によるこび。都にのぼり。御公用しゆびよく相つとめ。そのふしみふか草の内を。くはしくたづねけるに。文之丞在家しられず。いかに家老中よりの。内意もあればとて。公用の外に。數日のとおりうはかりに存じ奉れば。今日ぎりにたづねて。一先罷下り。私用の御いとまをねがひ。わざ／＼たづねにのぼるべしと。未明より日の暮がたまで。ふしみいなるの間を。たてよこもんじにたづねけるに。扱も文之丞行衛しれず。主計はせんかたつきて。深草寶塔寺の内に入て。やうすをたづぬる所に。馬場さきの松に。若き女のかゝえ帯をゆいつけ。すてにくびを纏る所を。主計こゑをかけて。それ死なすなとあれば。けらいどもいそぎ立かゝつて。女をだきおろしける。主計たちよつて。年わかなる身として。捨身するしさい。大かたならぬしゆび成べし。かくそれが見付たるうへは。いくへにもやうすをき。死なしはせじとかほを見れば。我妹おつまにてはなきかと。よく／＼みるにちがひなし。しかし風俗をみれば。あらふしぎや。常の女のすがたにあらず。髪ゆひぶり小袖のもやう。遊女のありさま。いよく／＼がてんゆかず。扱は文之丞一人は國をつれ立のきけれども。牽人の糲につかれ。妻女を

と御目をかけさせられし所に右のふてうほう御腹立大かたならず侍なれども。御祝義といひ。年寄中先祖の者共の義を。申たてらるゝにつき。みながさやうにもおもはるゝうへは。ともかくもとの上意有がたく。家老中御そせう相かなひ。よろこびかぎりなかりき。是ほどの取もちにあづかる事。文之丞が日比心だてよきゆへぞかし。扱文之丞義。伏見か深草かに。夫婦しのびまかりあるよし。内々のふうぶんなれば。さいわひかな。三室主計。此たび京都へ御用につき罷のぼるついでに。文之丞ふうぶをたづね出し。つれかへり申されよと。をのゝの仰せ。ちかごろもつてかたじけなし。主計も妹事なつかしく。文之丞もかねて入魂のほうばい中。あまりにむつましく。朝夕心やすくかたりし故に。妹をぬすまれたり。いかでしんていに。にくからぬことをおもへども。さむらひの面むきなれば。ふつうに仕り。是までいづくにまかりあるも存ぜざるに。此度年寄中の御わびにて。殿様の御めん下さるゝうへは。したしき妹の事の事なれば。主計身にしても。文之丞同前によるこび。都にのぼり。御公用しゆびよく相つとめ。そのふしみふか草の内を。くはしくたづねけるに。文之丞在家しられず。いかに家老中よりの。内意もあればとて。公用の外に。數日のとおりうはかりに存じ奉れば。今日ぎりにたづねて。一先罷下り。私用の御いとまをねがひ。わざ／＼たづねにのぼるべしと。未明より日の暮がたまで。ふしみいなるの間を。たてよこもんじにたづねけるに。扱も文之丞行衛しれず。主計はせんかたつきて。深草寶塔寺の内に入て。やうすをたづぬる所に。馬場さきの松に。若き女のかゝえ帯をゆいつけ。すてにくびを纏る所を。主計こゑをかけて。それ死なすなとあれば。けらいどもいそぎ立かゝつて。女をだきおろしける。主計たちよつて。年わかなる身として。捨身するしさい。大かたならぬしゆび成べし。かくそれが見付たるうへは。いくへにもやうすをき。死なしはせじとかほを見れば。我妹おつまにてはなきかと。よく／＼みるにちがひなし。しかし風俗をみれば。あらふしぎや。常の女のすがたにあらず。髪ゆひぶり小袖のもやう。遊女のありさま。いよく／＼がてんゆかず。扱は文之丞一人は國をつれ立のきけれども。牽人の糲につかれ。妻女を

遊女にうりけるよな。いかやうにもいたしかたの有べき事にさりと侍ちくしやう物しらずかな。妹は夫のいふ事なればせひに及ばず。遊女とはなつたれ共。侍の娘なれば。むねんにおもひ。はぢみんよりはと首をくゝり。死なんとはせしな。いまだ兄弟のえんつきず。すてにあやうき所を。それがしに見付られ。おもはず命をたすくる事のうれしさよ。おのれ此うつふん。文之丞につめひらきて。うちはたさではかんにんならずと。主計心をせきけるも尤ぞかし。女は人々に水そゝがれていきをつぎ。いづれもどなたかは存せぬに。私が命を御たすけかたじけなく。しかし死なて叶はぬわけあつて。捨身仕る事に叶へば。御しひには見のがしになされ。はやく死なせて下されと。又松がえに取つくを。主計いだきとめて。こりやかんどうゆるすからは。まこと其方があになり。それがしかく來かゝりしゆへは。いかやうの事にても。死なせはせじ。成ほど夫ながら文之丞にはうらみ有べし。それは身どもが文之丞とうつふんのはらす間。もはや其方はかまはずとそれがしにまかせをくべし。文之丞めはいづくにいるぞ。扱々國を立のきてより。今までにさまゝのくらうをしつらん。ふびんの者のなれのはてやと。主計はなみだに袖をひたしける。女さら／＼がてんゆかず。私はおまへの様なる。侍をきやうだいに持ませず。人たがへとこそ存らるれ。ひらさら死なせて下されと。ふりはなつをかずへしつかとだきとめ。さすがそれがしが妹ほどあつて。今かゝる遊女の身となつたれば。世のはぢをおもひ。侍をきやうだいにたぬとは。でかしたり／＼。しかしそのほうがいたづらで。遊女になつたるにてはなし。みな文之丞めがために。しづめたる身。いかではぢにあらず。此うへは金銀の入事ならば。いかほどにもそれがしが出し。事をすましゑさすべし。何しに壹人の妹が事。母人も御りんじうまで。その方が事をくれん／＼たのむと。それがしめが手を取て仰せをかれし御言ば。今も承るやうにて。いよ／＼ふびんに思ふなり。かならずけらい共にゑんりよ仕るな。もはやくるしからぬ間。きやうだいの名のりをいたせと。仰られても私には。さやうの覺へなし。いかほどにの給ひても。おまへの妹にはあらずといふ。しかる所へ。内海文之丞。此女のゆく節をたづねまどひて。

爰に來るを主計やがて文之丞がむなつくしをとつて引すゆる。文之丞は主計をみて。扱もめんぼくなやとさしうつむく。主計こゑをあら／＼げ。やい侍ちくしやう。まだしもそれがしにあふて。めんぼくないといふは。どこやら人間らしい見ゆるなり。おのれにあの妹は。だまされて兄をやをふりすて。國を立のきて。おのれひとり。夫にも親にも。兄にもたのむものをよは遊女にうりけるよ。さやうのしやうねとはしらす。國を立のきしより此かた。毎日／＼ふたりが事を。おもひ出さぬ事はなかりしに此たび家老中のねがひに殿様も御かんどを御ゆるさる。それがしとても何しにくかるふぞ公用ながらまかり上り。けふ廿日といふもの。此邊をたづねめぐり。あふて夫婦に。國かたのしゆびをかたり。よろこばせてつれかへらんとおもひしに。けふまでたづねあはず扱は此所をたちのきさいこく方へも下りけるか。いよ／＼夫婦共にそく才にて。居るか。いかゞなりはてけるぞとさま／＼ひとりむねのうちあんじわづらひとかく急には行衛しれまじき間。國にかへり重てわざん／＼たづねにのぼり。その時はいづくいづかたまでも尋ねめぐらんとおもひ明日はそう／＼國へくだりしたくして。けふもすてやりがたく。今まで方々たづねて此けいだいに入し所に。松の木にてくびるゝ女あり。思わず立よつてたすければ。妹のおつまなり、姿をみればむかしに引かへて遊女の風俗。兄の身として是を見て。まんぞくに思ふべきか窄人の糶につきまじきものにはあらねど女房を遊女にしづむる法やある。いかでふうふ手を引あふて乞食はせぬぞ。人の門に立たればとてそれで侍の一ぶんすたる事にあらず女房を遊女にうつたといはれては中々其方が武士はたつまじ腹をきれ國へくびを取てかへり。殿の御目にかけん。しかしこれ程のふがないしやうねをさげたる者なれば腹もゑきるまい。さりとほみちがへし心底かなと。地をうつてはらを立。むねんのなみだをしやくりあげける文之丞おもてをあげ。まづ以御殿さまへ。いづれもの御訴訟ゆへ御勘當を御ゆるされ。此たび夫婦の行衛を御たづね有て。國へつれかへり下さるべしとの義。だん／＼ふとゞきの拙者に御あはれみの程かたじけなく存じゆ。しかしのこり多き事は夫婦一所にその義を承らば。いかばかりの悦び。是につけ

も妻女が事。わすれがたしと聲をあげ男なきに泣出しなみだの瀧をながしける。主計ふしんはれず。それがしが妹と其方が妻女おつまはこれにあるが。何事をかいふぞ。文之丞なみだをおさへこれなるは當所の遊女松がえと申もの。御自分の妹。それがしがつれて國を立のきしおつまは。去年七月十日に病死いたし侍りぬ。恥しながらおもひ合たる夫婦の中。御自分の家をはなれ。それがし故に。此所まで立のき。牽人のうき世わたりの暮し。二世三世のちぎりを。いひかはしたる女房の事。何とも身まかりて後忘れがたく。心もみだるゝ折からさる人のいふにけ。當所の遊女松枝といふこそ其方内義に其まゝなり。うきわすれにゆきてみよといくたびかすゝめけるゆへそもく去年。冬のはじめの五日に。行て見ればにたりといふにあらす。死したるおつまがふたゝび歸りて爰にゐるかと思はれ。うつゝを忘れ夢のやうになりて。此遊女になれそめける。扱も貌かたちばかりにあらす。物ごしをはじめ。心だても其まゝにて。立るのくせまでもおつまにかはる事なし。とかく是は死したる女房よと。忘れぬからにひたとかよひくゝて。遊女くするひをいたし。あるほどのものをなくしはたし。其上に遊女の身の代を買がり。其金子をさいそくにあい。もはや侍の一分も。すたるほどのちじよくをとり。死るにかくごきわめけるを。これ成松枝も身にかゝりたる難儀。いかゞひとりとはあとにのこらじと。ふみにて心をつうじけるはうれしけれども。我まつたく其方を。れんぼして金銀をつかいはたしたるに非ず。死したる女房に。似たるをみすてがたく。かよひしげくして。かゝる難儀とはなりぬ。必我と死するは無用の事と。いくたびかとどめけるに。けふ行衛なく成しよし。扱は川に身をなげけるかと上下をたづねあるき。しれぬ行衛をかこちたどりて。これへまいりし所に。右の仕合切腹を御すゝめまでもなしこれにてあいはて申の間。此うへながら。此松枝を親かたのもとへつゝかなく御をくり下さるべしと。押肌ぬぎしを。主計をしとめ扱を存じもよらぬ事どもや。扱は妹おつまは。相果けるか。よもやいつはりには有まじき事ながら。いよゝさにて有けるかと。又も涙をくりかへしけるが文之丞いかに。此世の別に女房が墓へまいり申さん。御自分にも。御るこゝを被成

つかはされよと。然もあたりにもた新しき石松。秋意紅顔信女。御名内瀬文之丞が妻女つま。是をよみも取さず主計はとほうにくれ。あきれて詞もなかりしがしばらくしあんして妹は死して。二たびかへらぬもの。それを深くなげくはぐちの至り。此松枝こそよく妹ににたれば。我もさきほどは妹と存じ。さまゝ御自分へも。よしなきうらみを申たり。此うへは松枝を妹と存じて。主人の手まへを金銀を以てもらふべし。文之丞もおつまと思ひ。夫婦になつて。死したるものゝ見らいをながくとふらひ給ふべし。中々他人とは思はれず。いかにしてもおつまなりと。主計が頼もしきことを聞て文之丞は切腹をとどまり。とかく御心底はそむき不申。いかやうにも宜しく頼奉るといへば。主計かならず切腹いたさるべき道理なし。いそぎ國にかへり。殿様へ忠義をつくされよ。松枝はそれがしに任せ給へと。遊女の親かたへ金子を遺し。妹にして。二たび文之丞と夫婦となし。本國へつれ歸りける。

祝言の盃に名代

かなしみ有樂みあり侍の一生

小袖はくろく。人は武士の行義こそ見よけれ。過し頃河州石川の城主に鈴鹿房右衛門房之丞とて。家中にならびなき兄弟の美男。ことさら心底に武藝をほげみ。御奉公にもさらに私なかりける。折ふし中國の浪人にて。大嶋流の鎧を申たてに仕りて。新參にお家へ相すみし。葉岡源藏。御廣間におゐて自分の一流をじまんして。みな武士の付合なるに。傍若無人の言ばをきゝかねて。房右衛門とかくけいこなれば致して見申さんといふ。いづれも是は一段とすすめけるゆへ源藏竹刀をおつ取て立あがれば。房右衛門しなへを持て出むかひぬ。をのゝかたづをのんで見物す。扱もはれなる勝負。源藏いらつてつき出すを。房右衛門ほさきをはおきすかゝと入て源藏が見けんをしたゝかにたゝき。見へたといふをきゝ入す。さいぜんの廣言かくければ。つゞけてさんぐにたゝき。どつと笑ふて仕廻ぬ。一座もしらけてあいさつなし。源藏も面目なく。ひそかに私宅にかへりぬ。扱もむねんや房右衛門にたゝかれしみけん。

腫あがりて。何とも人に面はあはせがたし。しよせん房右衛門とうちはたさでは。一分すまぬものになりて。源藏他國ものといひ。いまだ妻子ももたざれば。手ばやく家内をしまひ。譜代の若頭二人をめしつれ。房右衛門が役日をかんがへ。お屋形よりさがる所を。土手の並松のかけに待かけ。やりすごして。後よりだまし打に。おぼへたかと切つくる。房右衛門初太刀をうけながら。ぬき合せて三人をあいに手にして。切むすぶ。房右衛門がけらいはにげてやしきへ歸りける。源藏主従房右衛門を取こめてさんぐに切まくる。房右衛門運のつきにや。松がねにつまつき。あをむきにこけるを。源藏立よつてはらをつきける。所へ房右衛門弟房之丞下人がしらせたるによつてかけ付けり。是をみて源藏かなほじとにげて行衛なし。房之丞追かけけれ共。房右衛門が疵のほど心もとなく。立もどつてさまぐかいほうする所へ又戸川民右衛門。娘おいくをめしつれかけつけ房之丞と一所に。房右衛門をいたはりける。房右衛門まなこをひらき。むねんや葉岡源藏めに。だまし打にあふたり。くれくれ房之丞。源藏が首を打て手向てくれよ我中。此手にては。命たまらずとはがみをなしていひにける。民右衛門よく疵のほどを見るに。いかさま房右衛門が命ながらふべきとおもはれず。なみだながら房右衛門が耳にくちをさしあてしれたる敵なれば。心やすかれ。源藏めをうつて追付たむけ申べし。扱それがし娘は。かねて御自分の妻に送り申契約いたしおきぬ。され共婚姻これなき内に。かかる仕合互の残念ことばにつきず。され共夫婦に紛なし。今生の内に。娘と盃をいたし給はれと。則はさみ箱より。用意のさへを取出し。涙ながらに望しは哀れなり。娘は涙にことばなく。情なしとばかりにて。たもとを海にくらべぬる。房右衛門しばらくしあんのていみにみへけるが。ほゝゑんで眼をひらき。民右衛門の仰せにまかせ申さんとあれば戸川悦び祝言の作法なれば。娘より盃をとつて房右衛門殿へ慮外申せいへば。娘世にうらめしき夫婦の盃。なみだをまぜてのむ酒の。二世の結びとさしにける。房右衛門此盃を。それがしが名代に。房之丞いたゞきて女房へ戻せといふ。是は名代仕る事にあらず。一たんの御けいやくをたがへしと。是まで民右衛門殿御出なされ。御さいこ

近きこなたへ。しうげんの盃を望み給ふ是民右衛門殿親子の心底はしれたり。もはや重ねて御慰女に。夫をもたせまじきためならずや。然ればふかき未來の契り。浅くしき盃にあらず。何と思召ひ事ぞと。いはせもはてず房右衛門。其方がいふ所は皆それがしが心にある事なり。既に我さいごに近し。それに何ぞや夫婦の盃を致さんや。さあればとて民右衛門殿。娘に外の男を持せ給ふ。心底に非ず。女も某といつたんのいひ名付なれば兩夫にまみへまじき爲に。これへきたりて。さかつきを望む。われ相果て後は。尼墨染の身と成べし。是を近比ふびんに思ふ契約いたしたる上は。女は民右衛門殿の家をはなれて。某が家のものにて某が心のまゝにすべきはづなりそれゆへ身が媒をして其方と夫婦にする早々夫婦の盃を致すべしおいくも民之丞を。其方が夫と思ふべし。夫婦中むつまじく仕りて身が敵を打てくれよと。ことばをならべて道理をつめける。扱も有がたき仰と。三人房右衛門が心底をかんじ此上は敵を打て無念をやすめ奉るより。外に親兄の孝養是なしと。房之丞が落涙は。取分尤ぞかし。既にひまとなる夜風疵にしみて苦しみ。びとふるいして房右衛門。かたぐさらばといふこゑを。あとに残して。浮世の花。彌生のすへの三日の夜に。ちりて哀れをとはれける。三人涙にかきくれて。房右衛門死骸を屋敷に入て野送りし。源藏ことをきくにお國を逃て津の國あしやの邊に。かくれ忍ぶよし。房之丞兄のかたき討申度願ひを申上。御暇を下され。民右衛門が娘おいくと夫婦の契約して。此女を同道する事。もと房右衛門爲には。さいごの砌子分に成しゆへなり扱も葉岡源藏は菅屋の庄に落付けるが。房之丞夫婦付ねらふよし。爰にもあんどしがたく播州しかまづに所縁を求め夜通しに立のくを。房之丞夫婦菅屋の里にて此趣をき。すぐに追かけけるに。市の河原にて。それよと見付。夫婦名乗かけて。二人の家來を切てすて。源藏にげ行を房之丞おのれいづくまであますべしと。後より房右衛門を切付たる。所は爰かと。深くと切付れば源藏ふりかへりさまに。むねんといふてどうとるしかる。すかさず房之丞首を取て源藏が絞の付たる小袖の片袖を切て。是に包み夫婦何事なく河州にかへり殿さすへ右の趣を訴へけるに早速召出され。有がたきお詞の上

にて二百石の加増仰付られ面目身にあまりける。かつ又戸川民左衛門を。御前にめされ。武士の契約を忘れず。さいごに近き房右衛門と。夫婦の盃仕らせんとて。暗壁の場所へかけ付し心底。あつばれに思しめし。侍大將に仰付られける。げに有がたき君のめぐみ。猶忠義をおのくつくしけるとかや。

文武君が代硯石 卷之三終

文武君が代硯石 卷之四

二の手の討手は三人の鉢巻

殺生は立身のさまたげ
きつねも助大刀を討ためし有

世の中の。よしや吉野の河は。糺の川にながるゝとかや。爰に昔すめる浪人。巨勢野助右衛門と云男。心に望あればいまだ妻女もぐせず獨身にて。ひたすら弓矢に魂を入れて。更に他念なかりけり。比は秋の野のにしき。虫の啼音もおかしく月にうかれて家をはなるゝころ。たゞちの薄をしわけ。いかにも年へたる狐。助右衛門がむかふにまはると見へしが。忽美しき男のすがたと成。舌みじかに申けるは。私は此野に星霜をかさねたる者なりされば。御弓勢のすぐれたるによつて。多の一族を射とられ侍りぬ。哀向後我くを御助下さるべしさもあらば恐ながら御武運をもまもり奉らんと。しみぐとこそねがひける。助右衛門いか様。過し比よりおゝくの狐をいとりたり。おもへば無用のことなり。成ほどかさねてはゆるすべしとうけがいける。男有がたしとて。元の秋草の中にかくれてすがたは失て跡なし助右衛門此上は殺生を止めて的のけいこのみに。經營しける。同年の十月に。當國藤代の城主より助右衛門義を召出されて。先祖のかんじやうを指上弓馬の申立に初知行二百石。被下御馬廻りをつとめける。しかるに。冬野外記と云さふらひ。殿様に御ふそくを申上る子細あつて御いとまを申ずてにしお國を立のきける是を御立腹のうへ。正木甚之丞。森山兵左衛門に仰付られ外記を討て參れとの御意をかうむり御國境。までほつかけ御立腹の義を申て。外記に双むかいけるに。かくお國を罷出るからはいかにも討手を下さるべきかくご也と家來十三人ぬきつれて。外記をかこいぬ。甚之丞兵左衛門方にも主從十八人上意をそむくせ者申ふんによつて我く了籍をいたし腹切せんとおもひしに

さやうに手むかいに及ぶからは、一寸ものがさぬと。火花をちらして切むすぶ。され共外記かたには。何も心剛なる者どもにてまくり立〜あとへはひかず十八人を追つめて十三人まで切ころし二人は討もらし甚之丞兵左衛門もふか手をおいてたおれ死しぬ。此おもむきを聞し召殿様御せきなされて二の手の討手には巨勢野介右衛門を仰付られぬ。外記是を聞て甚之丞兵左衛門をうち取うへいかにも切腹仕るべき所存なれ共逆もあひはつる身と云。助右衛門かさねてむかふよしきやつは。新參ながら糺の川のほとりに整居せしを武藝のすぐれたるよしをき、及び給ひ。召出されて御奉公仕る。然ば古傍輩よりははぢ有。それがしが手なみのほどをも見せんの間。待うけてはたらくべししかしけらいの内に。生ながらへんとおもふことのあらば必ず。われ恨に非ずとく〜何かたへもおち行べしたとへ某一人にても助右衛門にむかい勝負を決せんとあたりを見まわして云ければ十三人の者ども。いかで日ごろの御恩を忘れ。かかる詮度を見はなし申さんや。いかにも命を爰にすて名を残さんと何もおもひ切たるふぜいにかさねてさすべき刀に非ずとわれも〜と。さやを切すて、主に所存を見せける外記。是を見てよろこび。しからば此松原のおくなる。春林寺に取こもらんと住持を初弟子同宿下おとこ迄を理ふじんにおひ出して。十三人かけ入て大門裏門をさしかため討手の助右衛門をぞ待にける。すてに巨勢野助右衛門上意を蒙り。若頭二人めしつれて。春林寺のおもて門に。密つけ。殿様へ御ふそくの義を申。お國。出奔仕るさへあるに。御使の兩人をあやめ申さるゝだん。ひとへに。日ごろの所存にたがひ。野心のかくごと見ゆる也。早く腹を切申さるべし。もし猶豫におよび給ひなば。門をふみ破て。押て首を取べし此たびのうつては。こぜの助右衛門也。必ず見れんのふるまい有べからずとて申ける又裏門をたゝき巨勢野介右衛門城主の御意をかふむり討てに罷むかふたり。いそいで切腹仕れ。異義におよば、此門をしつぷし。一〜に繩をかけ。しばらくびをうつぞと。わめきける。さすが死物ぐるひにかくごをきはめし外記が。家來。兩方より同じやうに各乗かけられ表へやうつて出ん。但しうらへやふせがんと。心まち〜にて。武勇愛にて。たいまんしける。

外記とかく表門をひらき勝負をけつせんと主従十四人ぬきつれて。討て出る。助右衛門は弓をつとつてかたきををびき出して討てとらんと。引もうけるしかるに裏門より助右衛門なるは明ぬか明ずば門をたゝきわらんと。あまたの人数かけや大槌をもつて門も解もたゝきこぼす其音におどるさまづ。裏門こそ大事なれ。あれほどの大勢こみ入なば我〜いかにたらくとも。つゝには繩めに及ぶべし。ふせぎて門をやぶられじと。うら門をかためけるうちに。はや助右衛門主従は寺内に入つて。大きな榎の木の本堂の前に有けるを木だてにとつてさんぐに射てはなす。外記がけらい。前後のかたきに。斗を失ひ。其上おもて門より。助右衛門亂れ入りたることなれば。逃れがたくぞおぼへける。助右衛門が矢さきにかかつて九人は即時にたおれける。外記もひぎの口をふかく射られて。立あがること叶はずむねんや。かほどに心を。かためたる。十四人刀に血をだに付ず。うたるゝこと侍冥加につきはてたり。腹きらんかいしやくせよと。おしはだぬいたる時。助右衛門うしろより。とつたと云て外記をふみ付なはをかけける。四人のけらいは助右衛門がわかとうかい〜しく動てのこらず首を。とつたりけり。此時うら門のかたにて。あまたの狐。時をつつてどつと云て立さりけるこそふしぎ也。おもへば助右衛門古狐にたのまれ。殺生を止ける。其恩顧を忘ず助右衛門一大事の討手をかうふりけるにうら門よりあまたのきつね。助右衛門と名のり外記に斗を失はせ。助右衛門に手がらをとらせけるこそ神なり妙なり是情によつて武を立るちかき例なり扱助右衛門は外記になわをかけて。御前に罷出ける城主御機嫌よろしく外記ほどの侍を生捕に仕ること助右衛門が武勇。浅からぬ故なりとてまづ三百石の加増を下され。外記は。ごりつぶくのうへことに甚之丞兵左衛門を討しことなれば。しばらく首をうたせられける。誠に助右衛門が武功これよりいよ〜國にはびこり。高祿を得て子孫はんじやうしける。

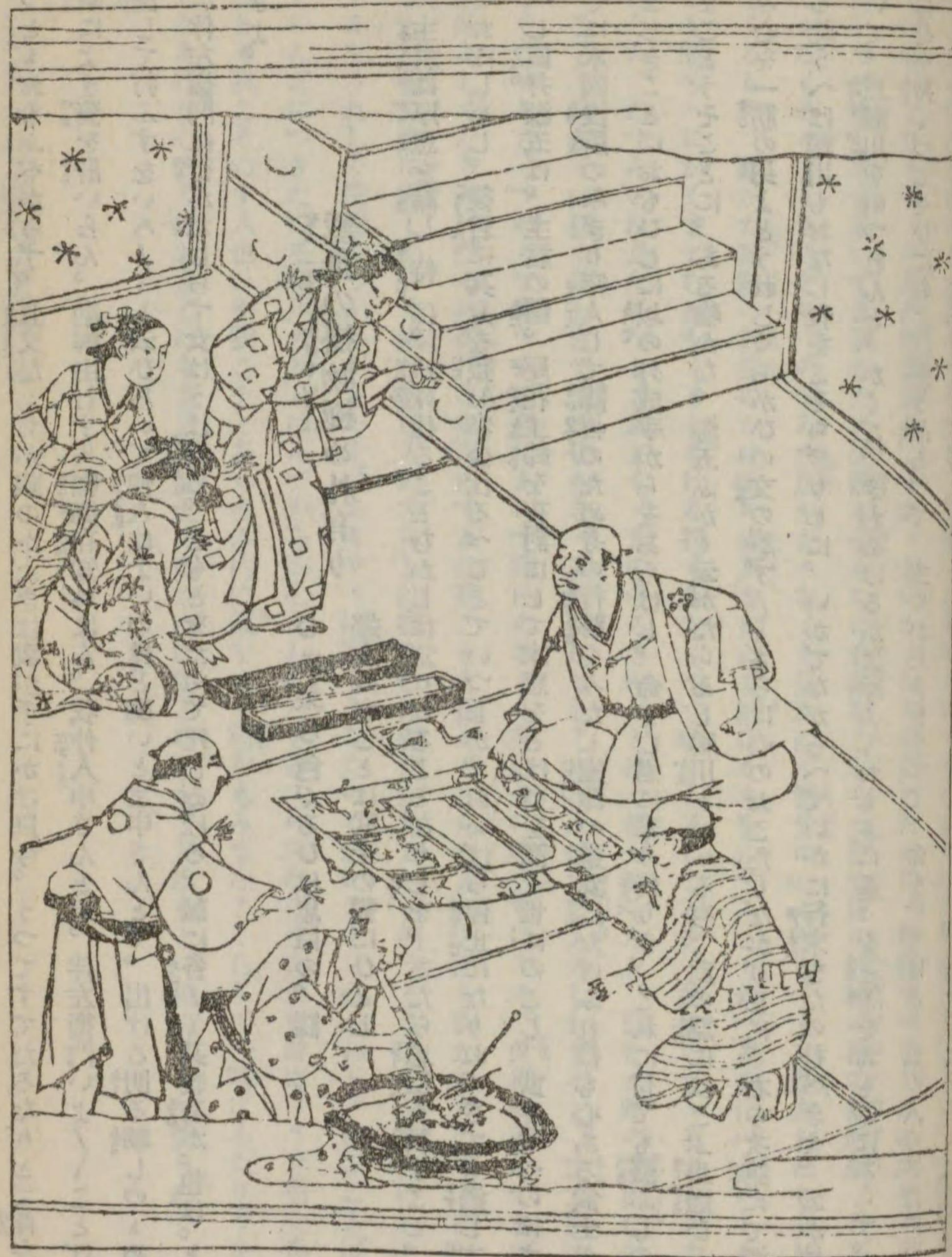
男女手習の指南

敵としれつゝ子中なす
心は男に負ねども身二ツゆへ

人の心ははかりがたし。事を面にそれとあらはさざるは生得の厚き所是武のかた端文の實たるべしされば世につれそふ夫婦の中。さま／＼おかしきは。此道のすへぞかし。實に鏡嶋家の侍竹河清左衛門。末子清十郎は。江州信樂城家に母かたの叔父。原尾市左衛門むすめ十六にて。生れ付もうるはしく。上がたにちかき武家の風俗よいことを聞覺へ女のするほどの手わざにかしく二親にも孝行なるを清左衛門北國へ下向のじぶん。しがらきに。とうりうして見とゞけ侍りぬ。しかるに市左衛門年よりたるゆへ養子掣ほしき相談談こそ有つらめ。さつそく清十郎を遣すはづにやくそくして國にかへり殿様へも御耳にたてよ。清十郎江州へ参りぬ扱も／＼はる／＼としたる所を。掣入にゆくこと人の行末はしれぬ物かな。これに付ても近年お家へあひ住し有田數右衛門が夫婦の身の上を聞に。ふうふ共に江州の生れにて數右衛門三上の邊に窄人の時分二見勘解由むすめおはる今の妻女成しが。是に戀暮して。何とも思ひわすれがたき。病となり。身命をくづをるゝ折から櫻井文五郎と云ふ。窄人のおやとけいやくして。勘解由むすめを遣すはづにきはまりしと聞より數右衛門何ともかんにん成がたくかげゆかたのやしろへ参詣してかへるをまちかけ首尾よくうつてすて其場を手ばやく立のき身のふぜいを作りかへすぐにかげゆかたへかけ付むすめにあい我こそ其方と云なづけの夫さくら井文五郎なりかげゆどのゝかたきはそれがしとるぞきづかいするなといさめければむすめは名ばかり聞ておもてを見しらず數右衛門をまんまと文五郎とおもひなげきの中の悦びおやのかたきをとつてくれとなみたつきせぬえんとなりそれよりかたきをねらはん爲に江州を立のき都。上御靈の邊に住宅いたしいよ／＼ふうふの中むつまじきに付てもかたきのことを女はひたすら忘す討てくれよと云によりせひなく。しれぬかたきのよすがを尋るに毎日毎日らく申らく外を廻り後にはやまとを。かけて四五日十日又は津の國。はりまちいづみのかたなどへ廿日三十日の旅をしありきなんのあてどもなき行さきに尋ぬると云かたきは此身なれば。所／＼の名所舊跡を詠めあるき京にかへりては。女房の顔なつかしく外へ出ることいやに成て内のみ、女ばうはとかくにかたきを討にいてよと。せがみたつる

さりとはこひにこがれて女ばうの親まで手にかけてよこしまなるふうふと成けるにそも。江州を立のきより此かたもの五日とひとつねまに。入す只方／＼としあること。さてもうき世はおもふやうにならぬことをかなしみ侍りぬことさら旅かけのたくはなく金銀にことかき。手習子を預りし宮越源介といふものゝきもいりにて金子十兩借附いたし方／＼へ参りて此度は紀州和歌の浦のけしきを見がてらに。心にもなき旅をいたし廿日ぶりにて宿に歸りければ。宮越源助きたりて。數右衛門が女房を己が妻女なり。此方へわたせと云。扱はるすの内女房と不義をはたらき。かゝるらうぜきを申こと何ともかんにん成がたく。ぎん見して。源助を打はたさんと云時源助をのれこそま男よ。其方は村田伴左衛門ならずや。我こそ櫻井文五郎と云ふものにて此女とはおや／＼が言なつけのおつとにまされなし。其證はこれなりと。女房が親二見勘解由より文五郎が親。文左衛門へ縁ぐみの義を。申かはしたる書狀を取出し。女房に見せけり。女ばう見て成ほど親。勘解由どのゝ御手跡に紛なし扱は源助どのこそ誠のおつと櫻井文五郎どのなること。なみだに心をみだしおもわぬ不義を致しはんべりぬ。免し給はれとなきしづみけり。誠の文五郎言なづけばかりにて。顔も見しらざればあの數右衛門を我とおもひ。夫婦に成けるは科にあらずそれがし元來大津の遊女かしは木と言ものと。ふかくいひかはして。外の妻女は持まじき心ていにきわめけるを親文左衛門ことの外異見を加へとかくきりやうすぐれたる女を嫁にもらい私にそわせなば。それに心うつりて遊女のこと。自からおもひわするべしと親のじひよりその方。おや勘解由殿と。うなづき合。某が。さい女にもちいおき婚禮を急がんといへども此身。柏木がことわすれがた。く。さま／＼に祝言を言のぼしおきける所に。かげゆどのを何者やら討て立のき。其方をもつて行衛なし。親文左衛門我に申さるゝは。たとへ祝言こそゐたさね其方が妻に。きわまつたる女を人に。奪れしうとをうたせ。さふらいの一ぶん立がたし。いそぎさがし出しかたきをもうち女もうばひかへせと御んしかりなさるゝにも及ばずいかで此ままにすてをき申さんや。女房にもつた。もたぬは内證ごといかにしても世間へ侍の義理立がたくいろ／＼やうすを

開合するに。村田伴左衛門と言者こそ。勘解由むすめに執心をかけ人をもつてたび／＼もらいかけられ共いか成しさにや。かげゆ得心なく。櫻井文五郎嫁にやくそく致されし此意趣にてさだめて伴左衛門が。勘解由をうつてしかもむすめを。つれて立のきしと評判するをきけば尤におもひ。おや。文左衛門にいとまこひ江州を出さま／＼心をくだき尋れどもやうすしれずさればいつしか其方とふしぎに。こんい。になり今の名は有田數右衛門とかへてゐれば伴左衛門ともしらず。金子の用に迄相たちたび／＼のるすをも心へ。内外ともにかたりあいて。此ごろ此數右衛門は。何しにあるくことぞと女に尋ければ只今迄御ねんごろに預りゆへとも。ふかくかくし申せしが誠はわたくし親のかたきを尋に出らるゝと云。扱國はいづくぞ。もと。いかなるしさいにて。おやはうたれ給ふと聞に女のかたること我身のうへにて。其方作り名をして。櫻井文五郎となり。此女と夫婦になつてくらすことまさしく古しへの名は。村田伴左衛門にあらずや。誠の文五郎は我也其方まおとこといひ。しうとのかたき。ゆるさぬとつめかけける。さい女も今までしらぬ。くやし扱は。親のかたきの伴左衛門のがさぬと。文五郎より一こしをもらい。數右衛門にきつてかゝる。數右衛門も心へ。たりとぬきあわせ。二打三ちはうちはうちうけるが。どうと。ゐ。すわりて云やう。成ほど我文五郎にあらずあまり其方に執心して勘解由殿をうつて。文五郎と名のり。其方をつれ。立のき夫婦とはなりぬ。かく名のる上は文五郎と一所に。我をうつて勘解由どのにたむけられよ又文五郎殿申さんまことに。色の道は大丈夫ものびがたくこそゆへ。我今迄本意にあらぬふるまい。心ながらもやみがたくて。かゝる仕合に罷成ゆことさぞや。御にくしみにおぼしめさん。早々我首うつてせめて御腹いせ下さるべしとなみだぐむ。文五郎もとかうのことばなく誠に我柏木に心を取りだされしこと。おもへば。かうのたぐひなり。後世いましてもみましめがたくあたり身に疵をかうむり侍るは我とても逃れがたし。しかりといへども義に於てはゆるすべからずとて。文五郎。刀をすりとぬき。伴左衛門がくびすぢもとをうつと見へしは。むね打にて。かげゆむすめにむかい汝はけふよりして。離別仕るの間。我をお



つとよもふべからず。且又なんぢが親のかたきは我が手にかけ只今。うつてすてたるなりとて伴左衛門に云やう貴殿によき妻を肝いらん。勘解由むすめ嚙御存知はん。我仲人申さんと云。伴左衛門いよ／＼ことばなくなみだを。流して打ふすをいろ／＼と云ひらいて仲人はよいのほど御いとま申さんとて。出ける明る朝しのゝめの比。行てみるに伴左衛門は行がたしらず女ばうは自ら。心もとをたちて死しおける。誠に各々其義有が。色は。とかくに人のかたきよ。

雪舟の掛物極め札有り

心に染る色ぐるひは忠臣の。謀遊女のまことは武士の誓にひとし

主君に厚恩を請し侍は。殉死仕ることむかしは定りたることなりしを。あたら忠臣を殺すこと。世にをしきこととおぼしめし。後君に其身を致し奉公仕るべしとていつしか。おいばら停止になりぬ。さても過し大和田の城主に仕へし眞井源五は。主君の讎。尾花主命を夜討にして本意をとげ名を高く世にのこし。武をすへのほまれとはなしぬすてに本國没所のみぎり窄人して謀畧のため身の行跡をみだし室津の遊女にたはふれ扱も心ある武士の目からはさは有まじきことにおもひしに以の外成手があらはし。命を亡君に奉り侍りき。これに付ても憂ふしの女。偽りの中にまことうそことに。ある物かな。源五ふかく云かたらあし鶴川といへる有。武の爲にはこぶ里通ひともしらず我にのみ心を一筋の男よとうれしくちかひの文のかず／＼さらに心のおこたりなかりしに。右の次第にて源五忠死をとげける此うへは鶴川もおなじ世をこそちぎりしに。いかでながらへていかに行末をたのむべきぞ。云かはせし男にをいついて。三瀬川を引つれんと。かくご。きわめけるがよく／＼おもふに是。をとこをおもふにあらす。窄人の内。遊女に身を持つしげひにおよばざる品あつて。主のかたきをうつて。命をすてけると世の人のさたにいわせてはさぞやむねんに有べし。爰は我死なぬこそ男への誠なれ。されども又ながらへてはなきなしとかくにもちあましたる身のう

へこれも鶴川が心のふかきゆへぞかし。傍輩に又生嶋といへる遊女。梅雨秘主馬といへる神職の人と云かわし。しげきかよひぢに。主馬内證難義のこと共。あいかさなり金銀のために。切腹すべきしなに成けるを生嶋是をくろうにして。よしなき心いでき親かたの土藏の長もちに合鑑をこしらへ惣女郎の蚊帳の沉衣緋紗綾。ひぢりめん。いつほしとなくそろ／＼とほどき。ぬすみ主馬かたへをくり是れにて當分のなんぎをすくひ猶あわぬしゆびのはし／＼に心をくるしめ。親かた秘藏の雪舟のかけもの表具を切ぬき繪ばかりをぬすみとりぬ。是らは。女のちゑには出まじきことを戀ゆへにかくまでむねをくるしめける扱もうたてやつゐにしるしことを。遊女のかゝるさもしき。しわざはぢにならぬ。ぬすみとは是なるべしされども。天のゆるさぬことははせむもなし。親かた晴の響應に此かけ物を取出しくる／＼ほどくに扱もふしぎや繪を切ぬき。表具空にせしこといか成大盗人のしわざぞと。主立腹大かたならずきびしく。せんさくつりてぬす人は外にあらす家内の者ども身ばれに鐵火をにぎる。此期に及んでおぼへなき人も少は氣味あしくなりぬ。然るに鶴川幸かなぬす人は我こそと扱も。しらぬ人のとがを引かつぎたる。ぬれ衣湯どのにて自害して書おきに殘しぬいく嶋は成ほどぬすみしは我なるに鶴川が此とがを引うくるこそかなしけれといまだいきのかよふをうれしく生嶋みづからがとがを。ありやうに顯しそなたのしがいこそ。心へねと。いふことばの下に生嶋も双をのんどにつきたつる鶴川ざりとはみづからが心をむになざるゝのみならずあたら身に。うき名をあらはし給ふは何ごとぞ我こそぬす人也いや我こそとあらそふ内に氣をはり精をもみまなこくらみて一時にふたりうき世の。花をちらしぬあはれ心ざしはおとこにもまさり武士のなざけにまよひしもことはりと。世につたへ侍りぬ。

文武君が代 硯石 卷之五

子は親に似る 釣鬚

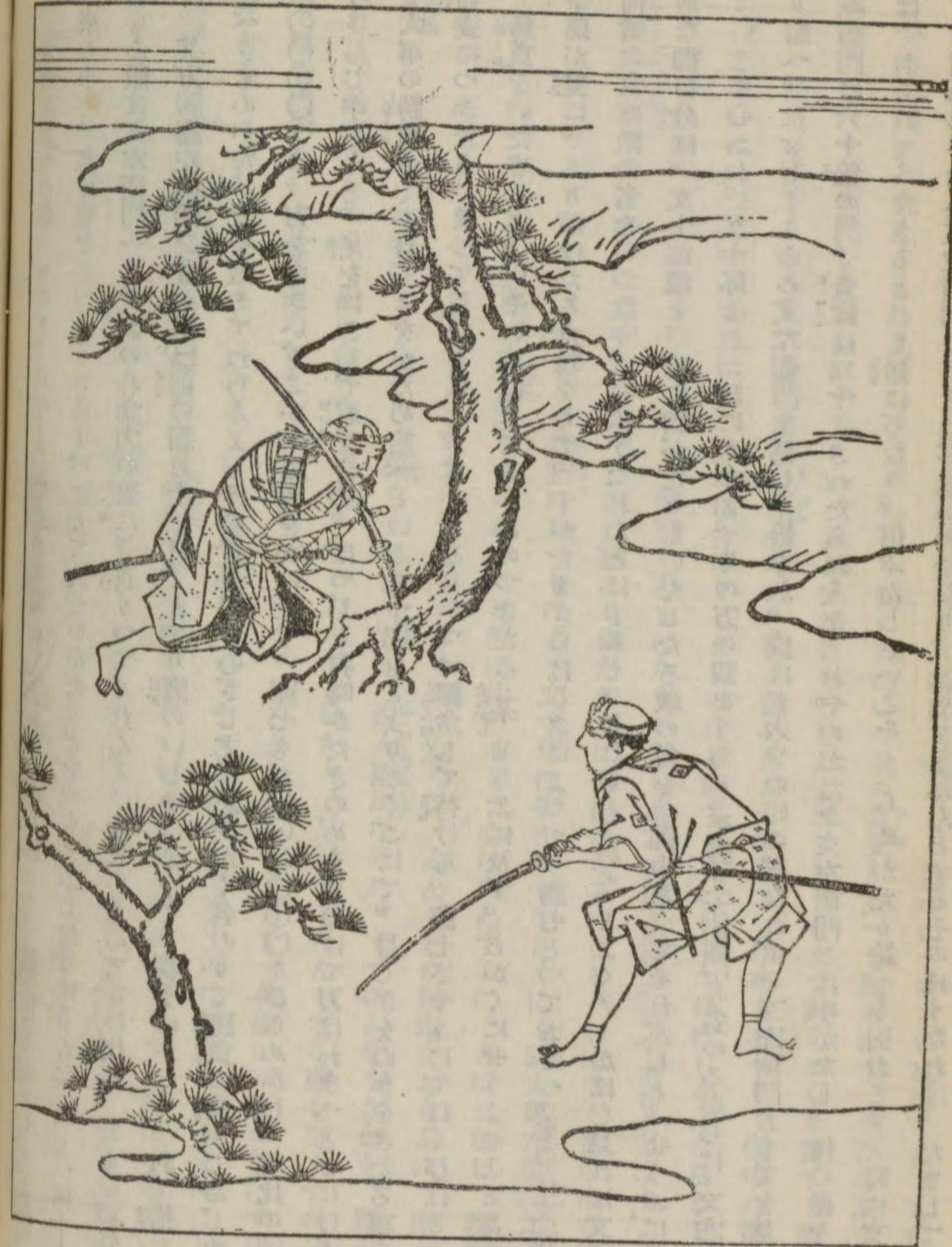
敵ながら打れぬは義理の只中
相打は孝にとゞまるしなく

そのかみ平野文左衛門といふ侍。身をしのぶしさい有て。寺田太郎左衛門と變名して久しく牢人の内。京都に罷有しが。羽州最上にするべあつてたづね下りける。人何にても心得べきことなり。太郎左衛門少有職のはし／＼を承り。山科流のゑもんを付覺へしを。申たてにして。最上の城主へさつそく三百石にてあり付。安堵仕り京都へ人をのぼせ。妻子をよび下しける。太郎左衛門女房。一子文十郎が悦びこれに過ず。誠に侍と金はくちて朽せぬ光をあらはし。あたるのかた／＼も立振舞して。首尾よく京都を罷りたちぬ。文十郎はのりかけ馬。母はのりものにて下りけるが。あけの日より母のゝぞみには。みづからもはや此かいだうを。かへりのぼる事も有まじ。いはゞ見はじめの見をさめなれば。所々の風景をもこまかに見覺へがたくおもふなり。乗物にてはうつとしく侍れば。馬にて下り度との事。文十郎何が扱御心にまかせ給へ。仰のごとくさまでいそぐ道中にもあらずと。のりかけ馬に母人をのせ參らせ。我身は廿五のたつしやざかり。山坂とてもなくならず。かちにて御供仕らん。御くたびれのぢぶんはのり物にて召給へと。あはづの松ばらの並木をかぞへ。つゝなれば石山にも參詣をす。め母も心つよく土山まで來られしが。何とかして落馬し給ひ。むねを木のねにてうち給ひて。絶入して扱も斗方にくれて。文十郎なんぎの折から。廿六七と見へし旅人の侍。とをり合せて扱々きのどくなる義。見るめもせうしに存るなり。近比そこつにおぼしめさんが。私もながの道中仕る故落馬の薬をくわいちう仕りぬ。是をしんじ申度がいかにと有ければ。文十郎扱々御停候なる御事。何しに

そそのの御座有べし。御覽の如く母たるもの落馬いたし。いき絶たり。はやく下されよと望て。殿の侍是をしんせられよと。粉ぐすりを興へけるに。早速息を吹出し。くるしやとの給ふ文十郎よるこび。まづ店屋をかり。それへいだし入ける。猶も薬を用ゆるにさりと妙方にて。氣力すこやかに見へければ。御禮申上つしがたし。定めて御急ぎの道ならんに。御ひまをとり。かたじけなく存じ奉ると。ていねいに一禮をのべければ。旅の侍いさゝかくるしからず。拙者もさのみ急ぎ申道にも非ず少し人を尋ね申ものなりいまだ御病人のていも氣づかはし。幸むかふの店屋に泊り申べき間。御用有ば何時にても仰せ下さるべし。尤後ほど御見廻申べしとて。旅人はむかふの家に一宿をかりけるが。又來りて病人はいかゞと尋ける。文十郎立出段々御心ぞへにあづかり。忝く存じぬ。ことの外御藥にて。くわいきいたし。大かた平生に替ることなしとあいさつするを。奥より母聞て。是へ通しませいと申さる。間。いざ是へと一間に同道して。親子ことばをそろへ。まことに命の親と申す御かたぞや。御縁とてふしぎに御藥を頂戴いたし。きうなんをのがれ申たり。扱私共は。北國へくだり申ものなるが。御自分様には。いづくへ御通りなさる。ぞ。同じ道ならば御供仕りたし。且又羽州最上へ御出はゞ。國かたにて御馳走も申上たし。さいぜんも御たづねなさる。方々の有よし。御しるるいさまがたにいたしますか。せめての御をんにやうすをうけ給りをき。さやうの御方を承り出しなばさつそくいつかたへも御しらせ申べしと。世にしみ／＼と申ける。其時旅の侍。小こゑになつてかたりけるは。私は攝州廣田の家中におゐて。富永藤左衛門と申もの。廿七と申もの廿ヶ年いぜん親藤左衛門を。ほうばい平野文左衛門と申もの討てのき候。其時分は拙者六つとしにて。何のわかちもなく母かたの叔父いづみの濱尾に出家いたし罷有。そのかたにかくまはれ。十才の時に母にはなれ侍。くはしくかたきのやうすをかたり。文左衛門をうつて父藤左衛門にたむけよと。くれ／＼ゆいげん仕りをきぬ。それより私十二の時。叔父坊にいとまをこい。敵文左衛門を見知りたる。普代の家來を召つれ。泉州を罷出。つくし中國にとりういたし。畿内にも足をとめて。敵を尋る

内に。けらいは旅にて病死いたしぬ。此時のかなし杖にも頼みし。道中にてけらいにはなれ。しかのみならずかたき文左衛門を。それがしは見しらず。かたきを討ぬ内いづみの叔父かたへも歸られず。せひに及ずきつたへたるを便りに。文左衛門をたづねめぐるといへ共。此年月をむなくおくり。今まで敵にめぐり合す。北國がたいぶかし。此たひ罷下り申なり。しぜんは最上へも立こへ。御めんどうにまかり申事も有べし。道中は御一所に参りがたし。しさいはいづくいづかたにて。敵に出合申まじきものにも非ず。そのじせつはげしきはたらきを仕るべし。しかれば道づれにて。いかやうにむづかしく罷成らんもはかりがたし。第一御母義様にあやまちあつてはくやむに詮なし。明朝拙者は。心まかせに立申さん間。こなた様にも御かつてに御出なさるべしと。しばらく世の中のはなしなどに。夜もふけたりとて藤七は。むかふの旅宿にかへりける。文十郎は物がたりをきくに。親太郎左衛門が。いぜんの名にて。手にかけたりし藤左衛門が伴藤七をのれかへり打に仕らんと。心にあんずるに。さにてなし。我親かれが親をうちしゆへに。かたきとてねらふこれ武士の子たるべきものゝならひ。みんぐわの道理をおもふに。藤七が思ひこみし念力にて。つゝには我親をうつべし。扱もそれとも知ず。母人落馬なされ。すてにあやうき命を。藤七がたすけくれば。此方のためには母の命のをや。大きなおんをうけたり。又父をうたんとする藤七を。子の身としてたすけなく事も成がたし。是ぞ道のちまたのわかるゝしあん。しろき心のいとすぢを。善悪いづれの色にや染ん。扱もぜひなき身のうへかなと。なみだにかきくれけるぞ哀れなる。やゝしあんして文十郎は。藤七がみをほへし小袖をぬきすて。つゝらを明て親太郎左衛門がかたへ。持参する小袖をちやくし。大小の引はだをとつたれば。是よいのすがたに非ずかみには有合せたる水の粉をふりたれば。まことのしらにひとしく。其うへにはちまきして。墨ひげを作れば。かほもすかたも文十郎にあらず。よく鏡にむかい。ふうぞくをこしらへ。藤七がとまりし家の戸をたゞき。これに郷州廣田の住人。富永藤七やをはする。それがしは平野文左衛門なり。御意なき事あり。是へ御出といふ。藤七

扱も天のあたへの親のかたき。只今こそ年來の本望とぐべし。しかし何とて。我爰にありとしりて敵のかたより名り来る事ぞ。是は我をかへりうちにすべきとて大ぜいかたうどを。もよふし参りけるよな。たとへ何十人あればとて。おもふ敵は文左衛門一人。おのれ念力の刃に。首うつてくれんと。身をかためてかけ出る。おもひの外に敵も一人にて。其方親藤左衛門を廿ヶ年已前の霜月十三日。とまり鷹のいしゆによつて。我手にかけて。討て捨たり。侍の伴は持べきものかな。我を敵とてねらふよしほのぎゝて。心ざし尤に思ひかく名のりて勝負に及ぶじんじやうに仕れと。〇〇〇〇〇に。刀をぬきいざこいとこゑをかけた。藤七もお〇〇〇〇〇をひらめかし。年比の。うつふんたゝ今さんじ申さんと。足をはこんで刃を合せ。はつしと打時かたきのめくぎぬけて刀はわきへとびにけり藤七刃をひいて大事の勝負とくと目くぎをかため給へといふ文十郎もとよりかくごにて。目くぎをぬききたる事なれば侍の運命爰につきたり。よつて首をとれと。どうとみしかつて観念して待ける。藤七さやうにてはくびはとらじ。立あがつて勝負をいたされよ。いやいかにしてもうんのつきたる某せうぶに及ず。とかくにせうぶせよとあらそふ内に。文十郎が髪に。ふりかけたる水粉をちて。すがたまぎらはしきによつて。藤七とつておさへ。をのれ文左衛門にあらず。何者なれば敵の名をいつはり。我にうたれんとはするぞ。しれものかなとよくかほを見れば文十郎なり。是はいかな御自分は。文十郎殿よ。宵に物がたりをいたしたる敵の名を。御申あつてそれがしと。せうぶに及び給ふ。しんていこそ心へね。文十郎よししたれにもせよ。その方の親をうちし。平野文左衛門と名のるからは。文左衛門にして首とり給へ。たゞしまことの文左衛門を見しり給ふか。成ほど六ツの年の義なれば。文左衛門おもてを見知す。しかし文左衛門は六十餘の男。貴殿は三十にさへたらぬ人を。おやのかたき文左衛門とは申がたし。侍の敵をうちあやまる事は。おくれうたざるよりも猶はぢなり。何ぶんしさいこそあらめかたり給へと引おこす。時に文十郎其方の敵とて。付ねらひ給ふ文左衛門は。それがしがおやなり。おやをうたんとするそのほうなれば。だましてなりとも。かへ



りうちに住るべき事なれども。今日母の命をたすけ給りたれば。母の命の親。是ほどこうをんを請し御自分へ何をもつて報ぜん。命をすつるより外なし。親の敵をうたんとおぼしめすも孝のみち。又それがし親の命にかはりてかたきと名のりうたれんと申も孝のみち。是おなじ道にて二人が心底にある事なり。いかほどにたづね給ひても。それがしが親のかほを。見しり給はねば。本望をたげ給はんたよりなし。今六十餘の文左衛門。其うちには病死いたさん。しかれば御自分何をもつて。御親父藤左衛門殿へ御たむけなざるゝぞ。さいわるによき親のかたきはそれがし也。此文十郎をうつてほん望をとげ給へ藤七いかにも尤なり。しかし親のかたきのみやうだいをとる事。古今ためしなし。たとへかほをしらぬ敵なりとも。それがしが念力をもつて。天地のうちにさへかくれなばつゝにはさがし出してまことのかたきをうつて。父にたむけん。其方をかほりにうつ事はならずといふ。文十郎それはおなじ事。その方念力をもつて。文左衛門をたづね給はゞ。又それがしも念力をもつて。父文左衛門をかくまい。申く其方にはうたせまじ。しかしさいぜんも申とをり。母をたすけ給はり。恩あれば何とぞりやうけんのうちにて。それがしが首をとつて下さるべしと。なみだともねがひぬる。藤七もしあんにゆきあたりしが。成ほどせうぶをいたさんと立あかる。藤七もめくぎをかため。ふたうちみうちあひけるが。藤七くびをさしむけて。文十郎にうたれんとするこれはどうするぞとつきのけ。文十郎藤七に。又うたれんとする。時に藤七ざりとはわるきがてんかな。それがしがかたより。いかに其方が心ざしを。もつともにおもへばとて。かたきの身がはりをとるべきとはいわれず。其方我をかへりうちにすれば。いづれの道理もすむ事なり。文十郎それはやすけれ共さようにはならず。いかなればその方は母人の命の親なり。そのをんがわすれられふか。それがしをうつてくれよと。たがいにせり合。藤七は文十郎がかたなもつた手をとらへて。我身に切付る。文十郎も又。藤七が手をとつて身をつかれて。兩人爰にてあいはてける。母は是をさくよりはしりきたり。若きものどもの死す。かたをみて。につこりとわらひ。てかさたりてかしたりと。うはぎをぬきて。藤七がしがいをおい。我子の文十郎がしがいは共まゝにさしおき。兩人がまんなかにて。しがいして死しにけり。これをきいて太郎左衛門も。國もとにて腹切てあいはてける。誠に武士の義理ほど。世にせつなきものはなし。

腹は借り物半分の主

君きみたる道すじしんは
臣たるの政道後にぞ知るはらから

あやめ草。引手もたゆく長き年の。めでたき國のかみ浅香の城主。民部大輔喜完ときこえしは。仁政をほどこし。文武兼備の御家。代々の執權職は。長井縫右衛門父將監があとをついて國守の補佐となりける。爰に又御歩行目付。横田嘉右衛門世がれ嘉平次。いかなる事にや御奉公のはじめより。殿様の御機嫌にいつて。だんく立身仕り。今三千石の知行をいたゞき。家老中のおつぎに座上仕り。殿の御内存をはかり。萬事にさしいで。御奉公をばげみける。され共小身ものゝ世がれたる事をわすれず。ずいぶん身を卑下して慮外をはばかりける。當年京都へ御名代を。御のほせらるゝ御佳儀あつて役人を御ゑらびなざるゝ。縫右衛門申には。金田兵藏義。御普代と申。其身も才覚ものにて。御用を相つとめかねぬもの。これを御のぼせらるべしとの時。殿の仰せには。横田嘉平次しかるべしと。御さしづをもどき。縫右衛門せひに兵藏を御のぼせと。申つるゆゑ。殿様もいかやうにもと。すでに兵藏此たびの御用をう給はり。上京仕りぬ。是を嘉平次にしらせたる人有て。縫右衛門がさゝへによつて。大事の御役を仰せつけられず。殿様の御内存には。此たび京都をしゆびよく相つとめ申されなば。又御かぞう仰付らるべきもの。残念なる事哉と。ひとりならず。あれこれの口入にわたり。嘉平次何とやら。諸傍輩の手まへすまぬものになりて。縫右衛門へひと理くつ。申さでかなわぬしゆび侍の身ほどきのどくなるはなし。此折ふし盤手の山の明やしきを。嘉平次かねてのぞみまかり有て。殿様へも内々に申上げるを。縫右衛門取つぎにて菊畑三之丞へ。はいりやうの義をねがひける。嘉平次も御前にまかり有て。此明屋しきは。私へ仰せ付られ下さるべし。たゞ今までのやしきを。染之丞へしんじ申べし。私宅遠方

にて急用のみぎり。登城仕るに延引にまかりなり。めいわくいたすのだん。縫右衛門へ申せば。それは其方の御かつ手づくとも申ものにて。外さまへは出申さぬりくつなり。やしき遠方ならば。ずいぶんはやく登城申さるべし。出勤をそければ。いかほどちかきやしきにあ申されてもおなじ事なりと。あいさつもなうきこへければ。嘉平次ことばなくせきめん仕り。おつぎに罷立ける。其ふぜいたゞならざれば。殿様御内用仰付らるゝ間。嘉平次義。つぎに相まち申せとの上意。かしまり奉りぬ。擬明屋敷の義は。縫右衛門取持に御まかせなされ。染之丞へくだされける。染之丞まかり出で。ありがたきむね申上て。たいしゆつ仕り。縫右衛門も御前へ御いとま申時。殿様縫右衛門。嘉平次兩人ひそかにめされ。御さかづきを仰付られてひとつきこしめし。縫右衛門に下されて。ひとつ心よくうけ持べし。身が其方によきさかなをとらすべしと。嘉平次が手を御とりなされて。是は其方が弟なりとの上意の時。縫右衛門仰せながら。何とも心へがたく存奉りぬ。されば其方はしるまじ。親將監めしつかひの女にたはふれ懐胎したるを。歩行目付。横田嘉右衛門へえん付たり。その女の子にて。嘉平次はまこと將監がたね。其方が弟なり。是を存じたる者は外に有まじ。其方たちが親將監は。ばつくんの忠義をつくしたるものゆへ。今もわすれがたし。あとめは其方がついで。家老職をつとむればべつぎなし。嘉平次義も。將監が心にしては。其方どうぜんふんふかゝるべし。その心底を思ひはかり。段々嘉平次にりつしんさせ。三千石に取たてける事。ひとへになんぢらが。親の忠義をおもふゆへなり。いよ／＼まぎれなき兄弟なれば。中よくして。萬事申合して。忠義をつくせよと。有がたき上意のうへ。縫右衛門嘉平次に盃を仰付られける。兩人御前ともはゞからず。かんるいたもとにしたし。さて／＼御厚恩申あぐるにことばなし。私共夢にもしらぬ兄弟の義。これをほどまでおめぐみ下さるゝだん。あまりにみやうがなき御事。只今まではかやうの御賢心とも存ぜず。ちかごろびろうのやつを。御近習にめしつかはさるさへあるに。萬端にさし出申事。きくわいに存じ。わたくしの我意をはたらき申せしだん。とのさまの御めよりは。さぞ此縫右衛門めを。おかしくお

ぼしめされん事。今さらはづかしく存じ奉る。さりとして是迄のりよくわい御免下さるべしと。御わび申上て。弟にてありけるよなど。嘉平次に取つく。嘉平次もしんじつの兄ともしらず。すでに宿意をふくみ。うちはたさんと存じこみし事など。今さらくやしきはづかし。縫右衛門に取つき。たがひのなみに殿の御恩をおもひ親將監を存出し四ツのたもとをうみとなしぬ。かさねての上意に。いよ／＼私宅に歸り一家の祝義を申せとて。御奥にいらせ給へば。兄弟御うしろかげをおがみ。同道して退出し。家門ならべ忠義をつくしける。これ主君のふかきめぐみによつて。義をわすれぬ武士の手本。誠に忠のおしゑや。

稻荷壽福の參錢

乞食もなげやる物はくらわず
ぬす人もころにはぬすまず

あすか川ゆきゝの岡の秋萩は。けふふる雨にちりやすぎなん。眞土六郎左衛門は。ほうばい竹川藤内。すこしのぶてうほうによつて。殿の御勘氣をかうふり。浪人して行衛しれず。藤内親は。六郎左衛門が名付親なれば。日ごろ藤内事なつかしく存じける。しかるに此度みやこ清水寺へ。殿の御代參として。六郎左衛門上京仕り。むかしの五條通りの河原にて。あみがさをふかくかたむくる男。扱も藤内にてはなきかと。馬よりとんでをりて手をとれば藤内もわるびれるふぜいなく。まづ殿様の御機嫌をうかゞひ。六郎左衛門御一家御をく才べつして。只今の御上京はいかなるしさいにやとたづねければ。六郎左衛門御代參のあらましをかたり。お國を立のき申されての後。さだめてなんぎいたされつらん。されども無事成ていを見て。まんぞくいたしぬと。世にたのもしくみへにける。藤内されば／＼。五年いぜんに和州を罷出。さま／＼のくらう。中／＼ことばにもあまる中にも八わたつゞみにて。よる／＼旅人にさか手をこい。これを翌の糧といたし得りぬ六郎左衛門なつかしきあまりに。さやうの苦勞をいたされしか。侍のつち切ごうどうにて。世を渡る事さまでちじよくにあらず。扱どうめされたるぞと尋ねければ。藤内されば冬季になりては。往來すく

なく。此かせぎもはかどらず。糶たぐにつきはて淀よどの人家じんかにをしこみ入て。仕合しあわせいたさんと心をつけて。内うちに福者ふくしゃの家を見たて。夜やじりをきつて。ざしきのしたやまでしこみし所に。雨戸あまどをしづかにあけて。手しよくをかゞげ。何ものなるぞと。出たるをみれば。若き女なるが。長刀ながなたのさやはづして。しきみのうへに立たるすがた。扱あつかもをそろしやぬすみする心からは。命いのちこそをしけれ。これにたてづきて。あやまちあつては。くやむにかいあらじと。とつてひつかへしけるが。いかにさもしや。女にうしろをみせん事。有まじきとつてかへし。立たいりむかい。かたなに手をか。あるじとこそみへたれ。我らうにんのかてにつかれ。此家にをしこんだり。明日あすのかてに成ほど。合力がうりきいたされよとにらみつけていひければ。女これをがうりよくに致さんと。手ばやく長刀ながなたを切こんだり。それがしかたなのつかにて請ながし。女のうしろにいつて。とつてふせんとためらふに。中ちゆうはしかくはたらきて。よせつける事にあらず。是思ふにちがふ女かなと。それがしも刀をぬきはなし。爰こゝを證あてとたゞかい。つゐに長刀ながなたをふみをとし。取てふせければ。ゑゝむねんやとふりあをむくかほを。よくく見るに。拙者せつしゃいにしへ。いひかたらひし女にて。しかもあかれぬわかれをせし中。そふにそれはぬ世のおもはくあつて。みとせさきをこぼるるなみだをたがひのかたみに。なきかはして戀しさつねにわすれぬものにあい。扱あつかもふしぎやと取つきて。しのびなきに袖をしぼり。拙者せつしゃが身のうへをかたれば。女も二世三世にせさんせいのちぎり。むなく引ひわかれまいらせての後。中ちゆう男は外にもつまじき心底しんていにきわめけるに。げにもひとり世にたてりがたく。心の外に人のあいさつにしたがひ。此の家のあるじの妻つまとなりまいらせぬ。よるくのかかせまくらにも。御事ごじのみ思ひ出し。今の男にそふ心は侍はんべらず。ざりとも御ごそく才さいにて。こればかりあんじまいらせたるよりはうれしけれ共。御ごなりわひに御ごなんぎなされ。かゝるおそろしき事をなさるゝこそ。身にたへかねてかなしけれ。もはや此身こゝろもおつとをもちたれば。いかほど御事ごじを戀こひしくおもへばとて。かへらぬむかしの。なきもの共おぼしめし下さるべし。幸さいこよひあるじるすなれば。御ごたすけに成ほどの御ごかうりよく仕らんと。ゐまに入て金

子二百兩取て来り。兩袖りゆうしゆうに入てはやくかへらせ給へよ。けらい下々のきゝとがめては。しゆびよろしからずと。おもひきる所もつよく。言ことばをはなつて。ぬす人やらぬときつてかゝり。我をおいにがしにせんとする。心づかひうれしく心になみだいくしほか。そめしむかしのなつかしく。かくごも爰こゝにみだれけるが。よくくおもふに。此大ぶんの金子をうけては。うしろぐらし。いかにしらねばとて。今の男の身みになりては。かんにん成がたき事なり。まへの男の。ぬすみに入しをたすけかへすさへ有に。くわぶんのがうりよく。まことの不義ふぎなくして。不義ふぎにもまさる心づかひ。天道てんたうこそおそろしけれ。此二百兩の金子何とて請かへらるべきぞと。女に一禮をいひ。事の道理をあかして。貳包ふたつかの小判をなげかへして立かへる。女又袖またしゆうにすがり。みづから何とて夫の金子を他人の御ごかたへしんじ申べきやうさらになし。是はぬすまれたる金子なれば。其のまゝぬすんで御ごかへりなさるべしと。むりやりにふところにおしこむをいやいかにひまはしても。道理にあらざと。つゐなげかへしてかへりぬ。ざりとは此女の心ざし。今とても忘れがたし。そのゝちは又。入わたづゝみに出て。まへのごとく旅人をはぎとつて。身命しんみつをつなぎ侍りしが。不仕合ふしあにて夜あけまで待ちほうけて。かへる野道のちみちにこつじきあまたあつまり。何事をかいひのゝしるぞと。立よつてきくに。おのれらが小屋にかよふ道の小溝こみちに。丸木をわたしてけふ吉日にて。此ほそばしのわたりぞめとて。あつまりける。さらばたれかは此橋をわたりぞめする事ぞ。扱あつかも世にはおかしきこともある物かな。後のかたり句にもと。いよゝやうすをみるに。七十ばかりの男こつじき。此橋を我年われねん老らうなれば。わたりはじめんといふ時。四十ばかりの女非人おんなひにん。その方けふのわたりぞめのしうぎつとむる事無用むじゆうなり。これなる人こそ此橋をいくばんせいとわたりはじめ給へと。六十ばかりの男に申ける。さいぜんのこつじき。橋は年かさのものわたりはじむることなるに。我よりわかきものに。わたりぞめせよとはいかに。されば。其方そのかたとしはたけたれども。心ひくし。此ごろも旅人りよびんのおとして行手ゆきでぬぐひをそれともいはず。ちやうとひるひとつて。こもの下にかくす。これぬすみにおなじ。みすくおとしてある手ぬぐひを

ひろひとつてかくすしやうねにて。此はしのわたりぞめせんとは。さりとはけがらはしやいまはしや。是なる人は。そなたより年わかけれども。心のすななる事見とゞけたり。此春いなりのはつむまのとき。参詣の人に一のはしより一錢をこふに。御神前までくちをたゝかせてくれず。神前にて此人十二灯の一つゝみをなげけるに。くんじゆにへだゝりてめんつうの中へなげこみたり。見る人もなければこれをそのまゝ取申さるべき所に。中ゝわるびれたるかほつきもなく。わがめんつうに入たる錢を。手をのぼして神前へなげゝるに。しぜんとみすにとまりぬ。是はめてたき事。此福を買はんとて。大ぜいの人百文の錢をもつてあらそひけれ共。それもさのみよろこばず。さいぜんの人を見出して。こなたの十二灯の錢を。私なげ申たれば。神前のみすにとまりぬ。當年の御仕合。猶も神慮をあをぎ給へと申されて外の。参詣の人に錢をこい申されぬ。かの人さいぜんは一錢をくれざるに。二百文取出して。いわぬなりと申されしをうけられける。此心をかんじ入けふの橋のわたりぞめを。たのむなりと申ければ。大ぜいのこつじきとも。これはむよくのお人かな。一だんのわたりぞめ。此人にあやかり。たとへこつじきにてなりはつるとも。ぬすみなどはせまじきと。六十ばかりの男を。橋の翁とあをぎ。わたりぞめをことぶき。おのれゝが小屋に入れる。これを見きくにつけて。此身の科かひとりはづがしくふつゝ。おいはぎをやめて。京にのほり。なんぞ。つみのほるびる事としあんし。此所にて小石をひろひ。一石に二字づゝ。法經華をうつし。往來の人に一錢をこひ。水中にながしければ。諸人立よつて。まいにちほどこしおほく。此ごろは小石をひろひくるゝ人あり。硯のすみをすつてくるゝもあり。御らんのごとくかやうに小屋がけをしつらひ。らくゝと世のわたりやうは有ものかなと。手をうつてむかしにやまぬきじやうはなしに。六郎左衛門も大わらひして。扱ゝあらゆる御くらうなされしこと。身のうへにはなしを御もうけなされしこそ。手がらなれかくおめにかゝるうへは。ひそかに國へ同道いたし。家老中をたのみ。城主へ御勘當の御ねがひを申あげん。申ても竹川の家は。殿様も他事なくおぼしめすこと。御歸参遠きに有べからずと。たつてすゝむるうへは。

藤内ともかくもよろしく頼み申と。うちつれ大和にかへり。城主へ御訴申ければ。御憐愍のうへ。竹川藤内歸参仰付られ。本知さうあなく。役義もむかしにかはらぬ。物頭をうけ給はり。二たびつかへて御奉公をはげみける。これ眞土六郎左衛門が。入魂といひ。法華經書寫の功德武運の行末のまもりと成けるぞ。有がたし。

兼好一代記の序

兼好の生涯と文学の概観

兼好一代記

兼好の生涯

兼好の文学的業績と思想

兼 好 一 代 記

序

心こころに移うつり行ゆくとは物もの知しる人ひとの至いたつたせんさく筆ふでをとれば千ち話わ文ぶをかき事ことを思おもひ三さん味みをとつては主しゅ親しんのばちがあたるもし
らず見みる事こと聞きくことに心こころの散さん亂らんにまかせてよしや吉よ田したの高たかき名なをかりてそこはかとなく書かつゞくれば全ぜん部ぶ五ご卷まきに成なりぬこ
れぞ誠まことにあやしうこそ物ものぐるはしく我われながら腹はらをかへて初はつ春はるの笑わらひぞめにとねがふのみ

作者

其 自

其 笑

元文二巳の

あらたまの春の日

兼好一代記 目録

一之卷

第一 花盛月は彌生衣裝競の女中盡

男目利に上臈の笑ひ聲 扱も高い鼻見幕

徒然に出かけ姿は器量吉田の 兼好が遊山

戀の仕掛と見るから和かな 當風の箱入娘

第二 人間の種ならぬお姫様は天人のおとし子

身を忍ぶ戀衣きて見る 侍従が館

雲の上人とは我白梅 たをられぬ花の姿

女の口車にのせられてまはりのよい 田舎さふらひ

第三 忍ぶ夜に障有は玉の 盃に底なき心地

手管事むまふまいつた浅原 爲頼が心のはな毛

侮て文付た仕形證據を見せる 自筆の艶書

密通と聞て顔つきは しふ梯の眞守

二之卷

第一 金銀持て廊の榮花大盡の大獲

うかれくる若男吞掛た酒の神崎のけいせい町

第二 三味線はどうもいはれぬ 女郎のしなせぶり

紋日の物入は大夫がはまる 借錢の淵

病人にいひ兼好が勘當の 訴訟取持一門

うらめしき揚屋の座敷籠は 歌にうたふ籠の鳥

年寄の夜道はなにと疝氣が おこつた不仕合

第三 あふさきるさに思ひ亂るゝ大夫が心遣ひ

主君ゆへに盜賊をするが小判は 忠義のさふらひ

遊所で銀を見せれば樋で俄の 大臣よばはり

間夫きらすは嘘のかわ客を およがす女郎の手管

三之卷

第一 硯にむかひて心にうつり行三下り半

先妻よりは掘出しの瓜ざね顔の 娘かりはつ

繼子に家をつがせんとは又と 内儀が賢女の鑑

理をいふ女房を去程に 不得心の夫

第二 不幸の愁にしづめる浪人の身の上咄

義理ゆへに氣は亂髪いふにいはれぬ 繼母が貞節

三寸之進が心の的あたつて見る 弓取の新五兵衛

第三 忠義に身をつくしさいふの金の さんげ物語
勢ひ猛にのしる敵とのつめひらき

つけねらふ手詰の象碁 歩あしらいな妹むこ
父の名をさらしな月よどみ落し 薬のむくひの赤子
塵界も一度はうんを開いた 花待御前の御守役

四之卷

第一

傾城の思ひ入た愛著の道其根深し

通ひ廓の大夫を枝折我宿に 手生の花

お顔のかどやく留り姫今よめた 八文字

悪縁をむすび昆布自根元の 敵同志

第二

遊女も若い時命長ければ恥多し

古主の自害を取とめた 忠義の侍

親は七ツ子は三十よみと歌有 二人が中

一座はむすばれた黒髪 髻をきりがやつ

第三

夕の日に子孫を愛して祝ふ誕生日

夫への忠節兄をたらす 父の敵

胸の劔さやにさまれぬ 和陸の盃
心の底をあらいながした魚と 水との傍輩中

第一

五之卷
獨燈のもとにて讀て見る 古の色文

身を墨染の兼好法師 心の花と双の岡

そりり揚屋で舞たり打たり 太鼓の輕口

分里と見しは夢かや峯の松風 粹方の悟

第二

手足肌などの清らにみゆる傾城の果

女の紙子に古編笠かぶつて買った 色道の秘傳

追手も爰迄はしらぬが佛 身をたすかる佛段の下

女を見ては欲くま鷹の 爪のながい妾の口入

第三

下戸ならぬこそ上戸の寄合祝儀の酒盛

爲頼があやまり顔手のよい 女祐筆

麥飲て戀をつりよせる 千話文のちらし書

繁昌の吉田の家萬歳うたふ 春の賑ひ

終

兼好一代記 一之卷

花は盛に月は彌生 衣裳競の女中盡

つれづれなるまゝに日ぐらし。硯にむかひて心にうつりゆくよしなしごとを。そこはかとなくかきつくれば。あやしうこそものぐるをしけれ。いでや此世に生れては。ねがはしかるべき事こそおほカンめれ。わけて其中に。たゞかのまよひのひとつやめがたきのみぞ。老たるも若も。智あるも愚なるもかはる事なく。艶なる女の容を見て。あはれ此世の思ひ出に。あの君と枕をならべて。一夜成ともねてかたりたやとねがふは人情ぞかし。しかれども此道にふかく染ぬれば。身をそこなひ家を破る事。古今そのためしすくなからず。ただ慎むべきは好色の道ぞかし。爰に天兒屋根尊井七代の孫。從四位下左京太輔兼顯の三男。吉田の兼好とて。器量すぐれしのみにあらず。神道はさらにもいわけ。儒佛道を兼備へ。和歌にあやしく妙にして。天性やさしき男也。舎兄民部太輔兼雄。上北面の役義をつとめられ。官瀧口にて有ければ。内裏の宿直に参りて。つねに玉體を拜み申され。有がたく。忝き身の役目。そらおそろしく。暫時も油斷なくつとめらるゝといへ共。近き比病身に成て。内々此役義を舎弟兼好にゆづり。役目をのがれんとかねていひ渡さるゝによつて。今部屋住の無夜の中。心のまゝに遊行して。あそび置に氣をなくさまんと。小ざうり取り歌藏一人めしつれられ。その比榮へし法勝寺法成寺は。たゞ喜見城の春。盛の花の最中。先法勝寺の花を心ざして。ゆきて見るに。同じ櫻もよき所に咲て。よい女中に見らるゝこそ花も一入の仕合也。さながら芳野を爰に花の都とは此寺の事なめり。唐門向より末の松陰迄。唐織の幔幕打せ。袖がさねの衣裳つくし。鹿子ならざる小づまもなく。美をかざりての女酒盛。撥音の色糸。或は一重切に吹立られし。すそがへしの紅裏などほの見へ。神通にしまりのない久

米の御人が見とれて。踏はづして落られたも。驚ぞかし。誰に人の心はあるか。或はかたかな。宿はたゞはかりの御なるに。けふの晴にと取て置の衣裳に留木のうつり。掛香などのえらぬ匂に心ときめき。上ずりに成て水茶屋の床机に腰をかけて見るに。下には水鹿子の白無垢。上には紫しほりに青海浪。所々に金糸にて網をぬはせ。當流とはちがふて古風成もやうも。其比はばつとして目にたち。帯は紫のつれ左巻結びめうしろに。粹目の角に鉛のしづを入。髪は水引かけて。黒繩子のきどく頭巾。先は首筋の白き事。木地のつら笠に白き紐を上むすばす。足踏は白綾子に紅を付ぼたんがけにして。ばら緒のわらざうりはきつれて。廿三人同じ年比同じ揃の風俗。供の女も若黨中間辨當持も。はるかに跡にさがりて行。是はかはつた一つれの女と。水茶やの女に聞ば。あなた方は此中毎日あの風にて出かけさせらるゝが。どふでも御歴々の御女郎様達。あの中に上一人様も紛て。御入のよしとさゝやく。どれ共見分がたく悪銀見るやうに。大勢の艶顔をながめまはせば。女中方も兼好の美男に見とれ。たがひに見合咲はふくめどいづれがお主もしれがたく。色の富をつくやうに思はれて。どれへあたらふも。第一番の君はしらすや。水茶屋の腰かけに。目白の鳥のをしあふごとく。大勢一所にお腰を掛られ。兼好を取まはして。花よりは此男を此比心がけて見に來りしに。けふといふけふ願とどいてあひみる事のうれしと。六道の辻にて地藏并に。子共の取付ごとく。立かはり入かはり。盃造はまたれじ。先茶にて成共と。兼好の吞かけられし茶碗を取て。濃茶のごとくひとりひとりいただいて。のんでまはさるれば。さすがの兼好もまじめになられ。詞も出ず臆しておはするこそ。斷なれ。向ふの唐織の幕の内より。うつくしき散切の女童子出て。多き上臈の中にて。けたかく見へ給ふ御方の前に畏りて。何やらん申上けるにて。御主様とはしられける。さらば此殿も幕の内へ御供せんと。辭退せらるゝを大勢寄てむりにをして。兼好を幕の中へ伴ひ來り。いづれもきどく頭巾を取て。一人の上臈を上座へ請じ申。御ねがひの兼好をやう／＼今日つりおふせて。此幕へ誘引いたし申ぬれば。是からはお姫様のお上手次第で。手がひになつさせられませと。申にても口利と

見へし女の。ひとりして取持。しやれものを能く見るに。過しあふひの祭の比。加茂にてちよつと詞をかはし。それから度々文をくれし。侍従のつぼねといふ女也。我にふかく戀あるよしにて。艶書を付けてどきしが。今お姫様へ取持事は合點ゆかずと。和漢の書籍に眼をさらし。唐土天竺我朝のそらんじたる兼好も。是斗よめぬとふしんしておはする時。侍従のつぼねそばちかく來り。みづからをよもや御見忘れはなされまじ。いつぞや加茂にてあいまし。それから文して歎き申せし。侍従のつぼねと申もの。有やうはわたくしのそもくは思ひかけし殿ごなれ共。お姫様のいづかたでどふして。こなたを御覽じ初られしやらん。御事ゆへに御煩ひも出る程に御思ひふかきによつて。御主の爲に殿達は御身がはりにも立て。命にても捨らるゝはみやづかへするものゝならひ。思ひかけ天事のおもはくの男なれど。みづからが戀は思ひ切て。お姫様へ指上申さんと。心底を打あけ。わたしの仕かけたる戀を。あなたへ進ぜまして。半からの艶状は手がちがひ申べし。其儘お姫様の私にお成なされて。おぬしの筆を染られ進ぜられし所に。さりとは御器量に似合ぬ。御行義かたく障りある身なればゆるせと。文の使にお詞にて御返事。侍従兼好から詞の返事に。さはりあるとすげない返事して來たが。どふせふぞとおいとしやおむつかりて仰られしゆへ。戀と申物はおぼろけにてはならぬもの。やるせなふ思召す。お心なが御文をつかはされませ。人皆岩木ならねば。いか成心づよき男も絶ずしたふに。なびかぬものやさふらふべき。今一度御文をつかはされませと。おすゝめ申。憚成事ながら。お主にかはつて書し中に。おほくの詞はなくて。返すさへ手やふれけんとおもふにぞ。我文ながら打もおかれずと。書て進ぜし歌にめてゝか。始て御返事をつかはされ。折を見てあふべきのかへし。お姫様御覽なされ。ことない御悦びにて。折を待ておはしませど。そのうちこなたより。今におとづれなきゆへに。あこがれさせ給ひ。御床にもつかせらるべき。御風情にて見へさせ給ふによつて。我いさめ申。法勝寺の花ざかり。戀人の見に出られぬ事はさふらふまじ。いざとせ給へとおすゝめ申。此二三日御身によはせられんとて。かやうに毎日此處へ御趣あるそはす。此御心ざしをいとをしう眼で。今御御屋かたへ恐ひ來りて。御思ひをはりさせ進せられ下されと。いやといはせぬ侍従が取持。兼好も姫君の艶成おすがたになづみ參らせ。渡りに舟の心地はすれども。いか成やんごとなき方の。姫君に渡らせ給ふや。お名も所もしらいたの。見だれて心とけがたく。成程仰にしたがひ。今宵忍び參るべきが。姫君様の御屋形は何方にてさふらふぞ。どなたの御息女様に渡らせ給ふや。つぶさに仰聞されよとあれば。侍従引取て申は。子細有てわざと御名はあらはし申さぬ。御まくらをかはされてからは。御様子もしれ申さん。先それ迄はわらはが名にして。侍従のつぼねと思召て必みづからが住かた迄御忍び有べしと。侍従のつぼねが所をいひて契約し。さあお姫様比月の戀の重荷を。今宵おろさせ給へと。女中一度にいさみ出し笑ひ悦。すてに御盃事はじまり。兼好も心よく盃をかさね。よいきげん最中の所へ。御迎とて金物づくめの蒔繪の御乗物に。歩行若黨大勢來り。はや御立とすゝめて。姫君を御乗物にのせ奉りて立歸れば。兼好はゆめ見た心地して。歌藏をつれてしづかに私宅へ歸られける。

⊖ 人間の種ならぬお姫様は天人の殞し子

世の人の心まどはす事色欲にはしかず。随分おさめて正しき行跡の吉田の兼好も。姫君の容色になづみ。今はあなたの戀よりけつく増りて。今宵こよとの仰うれしく。春の日のくれかねるをとけなく思ひ。夜に入とはや衣紋つくるひ。侍従のつぼねがもとへむけて忍び行。内の首尾いかゞと。忍ぶ身なれば門もたゝかれず。いづくよりはいいりなると。表に立てこはづくろひなどして。内よりの便を待て給ふ所へ。大の男向ふの軒下よりつかつかと來て。兼好のむなぐらを取て。ム、扱は我思ふ侍従が方へ忍ぶ男はをのれよな。我日來侍従のつぼねに心をかけ。數通の文をつかはせ共。手にだにとらずかへすゆへ。思ひにあこがれとかく筆を取て。からの大和の詞をもつて。歌まじりにやさし

く書事は。内裏女郎が得ものなれば。我等がやうな田舎武士のふつゝかな。角杭を見るやうな堅い筆先にて。此書づらに似合ぬ思ひまいらせ候ては。とても返事はせまいと思ひ。此間侍従が内縁を聞出し。これより様々いひ込めれば。契約の男あれば。思ひ切と手をはなしたる返事。犬を入れて聞合見るに。さして定たる夫もなきよし。扱は人しれず忍びくに出あふ男あるゆへに。我になびかぬものと推量し。此比かやうに夜に入と。此門外に忍びあて。何者にても侍従方へ忍ぶ者は。身が戀の敵と心かけてうかゞひる所に。今宵といふこよひ戀敵の汝を付出した。さあ侍従を思切て身にくれるか。いやといふと血くさい事は。長袖方とはちがふて。武士の手強さ。直に今眞剣を以てもらふが。どふじやくと兼好を門へし付。いなといはゞ指殺さん勢ひ。長袖の兼好びつくりし給ひ。是く必聊爾めされな。身共は侍従とわけある男にあらず。去方に思ひかけられ。侍従のつぼねの媒にて。其御方へ忍ぶもの。侍従とは見ぢん色がましき事はなし。卒忽して後悔あると申されるれば。ム、それに偽りはないか。然らば和殿へ早速ながら頼申す。某は聞も及び給はん。甲斐源氏の末葉浅原判官爲頼といふもの也。若禁裏のお役など勤る人ならば知てもみられん。當屋形は御后様より侍従に下され。去年より此亭に移りる所に。先帝の御外戚早田の宮の姫君弘徽殿の梨壺の御前。御傍の御煩ひによつて。御養生のため侍従拜領の御屋形へ入らせられ。御心儘に御遊山に御出ある。そも此姫君は禁中第一の美人にて。雲の上人此君を花にたとへられしに。梅は匂ひふかくて枝たをやかならず。櫻は色異なれ共其香もなし。柳は風をとむる緑の糸露の玉ぬく枝異なれ共。匂もなく花もなし。梅が香を櫻か色にうつして。柳の枝にさかせたらんこそ。げにも此君のかたちにはたとへめとて。稱美ありし御器量。いづれか心をかけざる人なき中に。徳大寺前相國道基公の君達。見ぬ戀にあこがれさせ給ひ。御命もあやうく見へさせ給ふ程に。戀したはせ給ふによつて。父相國此比嫁公に御ねがひ有て。大形首尾調ひかゝり。近々御結納の御祝儀も。つかはさるゝ程の儀子。去によつて姫君の御身にさはりなきやうに。某は守護仕れとの勅にまかせ。去年の冬より信州から上り。在寮して此邊に罷在る。然るに當春御宮の御氣色御うかがひのため。當屋形へ伺ひし。侍従の歸に御聞し。一かたならぬ戀と成。夷心のわくかたなく思ひにせまり。今申通り骨の田舎侍。花車風流の調づかひは知らぬ身。俄に伊勢物語や。うす雪の戀の文ある草紙をととのへ。始て思ひとてを書ならひ。奉書をついやし幾度か艶書をつかはせども。つみに一度の返事もなきゆへ。思ひあまりて此仕合。貴殿侍従が媒にて。外の女中と忍び逢との事さいわいかな。我此切なる思ひの段を侍従に咄し給り。此戀今宵埒の明やうに取持て給り。頼入といひければ。兼好聞て大きに化轉し。扱は今日法勝寺の花見の場にて。こよひ忍ぶ契約せし姫君は。聞及びし梨壺御前にて有つらん。誠にたくひなきうつくしさと思ひしが。扱は今の世の美人にて渡らせ給ふもの。道理かなく。部屋住の身とてかゝるやんごとなき御方共しらず。仰にしたがひ忍び來り。ひよつと枕にてもかはし。仇名など立なば。父兄は我ゆへに勅勘を蒙り給はん。其上兄兼雄は徳大寺の諸大夫。旁以非道の仕わざに落なん所を。はからずも浅原に見付られ。此様子を聞たる事。ひとへに氏神の御たすけ。一家の破滅を引出さんとせし。身の災難のがるゝは。今此儘にて歸るに増たる。思案はあらじと分別して。爲頼に向ひ。某は宮仕の身にもあらず。數にもたらぬ卑賤の身。侍従のつぼねの仲人せんと。たはふれになぶつて仰られしを眞にして。これまで忍びに來れ共。今とくと分別を仕れば。身にも應ぜぬ上臈方に戀慕して。後日に若顯れては。首はねられふも存せねば。先此戀は止にして。拙者は是より歸り申す。跡にて侍従に御出合なされ。随分と口説見給へ。互に今夜の事は沙汰なしと。歸らんとし給ふを。浅原むつとし。こりやまで。たつた今迄侍従が仲人にて。今宵此屋形の女中と手筈して。忍び來るといふてをき。今又手のうらをかへすやうに。侍従がなぶつての媒。後日に知れては身の難と。是迄來てすごとくと。歸らふといふは合點ゆかず。どふしてをのれは侍従とふかい。忍び男に紛れなし。今此屋形へつれはいり。侍従にあふて實否聞ほし。をのれがいふにたがはず。外の女中にしのびあふにちがひなくば。見ゆるしてくれん。若又侍従と前かたよりふかき男

めならば。此段を奏聞して檢非違使の手にわたし。急度罪科におこなふべしと。脾胃き微力の兼好を引つかんでうごかせず。片手で門をたゞきければ。侍従はかゝる事共しらず。こよひは兼好忍び來らるゝ契約あれば。宵より心がけて待たる折なれば。さあ姫君様思ひ人が御入。御悦びあそばしませ。私出て伴ひ參らん。女房達男めづらしがりて。必ざわつくまいぞとたはふれいひて。くどりをそつとあけ。かねよし様お姫様のお待かね。持せぶりにておそふ御出は。小づらのにくい男自慢。お主様の事ならずば。人手にかけ殿御じやないに。あつたら男をお姫様に上ます。御歸り品には失念なく。仲人にもお情の御禮を待ます。さあお内の首尾はよいはいらしやんと。爲頼が手を取て引入る。闇はあやなし神ならぬ身は。それともしらぬが因果密々の姫の戀路をさゝやきし。口は是禍の門といふのは是ならん。爲頼とつく聞とめ。兼好を引たて内へ入奥へ通りて。玄關の次にどうと座を組。ホ、侍従けつかうな取持てかされた。大事の姫君たるによつて。かやうの虫の入ぬやうにと。某に守護いたせとの仰付。役目の冥加に叶ひ。姫君の不義の相手を思ひよらずとらへたり。かゝる大事を明日迄は手のびなるゆへ。直に是より參内して。此旨を奏聞する。此男は急度其方へあづけた。取にがしたら越度の上の越度ならんと。目をいからしてねめませば。侍従ははつと肝つぶれ。何といふべき詞もなく。さしうつふいてゐたりけり。兼好は最前より生たる心地はなく。わちん／＼ふるふておはします。暫くあつて侍従思案し。何とぞなだめて事なきやうにおさめんと。動氣をおさへにつとをしやくし。男でも女でも。器量すぐれて諸藝に達し。萬にいみじくても。色の道をしらぬものはいとさうざうしく。玉の卮の底なき心地するといひつたへしごとく。戀せぬものは物のあはれもしらず。情の道に疎しと申。心の色なくては戀歌もできぬゆへ。お姫様にも其心がけにて。眞の事はわらはがついてゐるからは。けがな事させませねど。心にての戀は歌よむ女中はお姫様に限らず。たはふれば仰られます。かたい田舎氣で不義いたづらのやうに思召は。大層の風儀を御存なきやへ。とが／＼しうのたまふは。ほんにあづき難そや。こゝな難儀心なら。人にはれさん

しても返事せずば。エ、まだるいとついでをく氣か。女の身にて隠蓋から。交付られたはうれしもの。返事せぬは其男の心を見ぬいて。永ふあはふと思ふて。わざと返事をいたしませぬ。わしが心を恨みてそのあたりで。此やうに仰山にのたまふか。情といふはこんな所をば穩便に。見ぬ顔さんすがほんの戀知り。世にいふ粹といふものぞ。コレ戀人様とせなかをほと、打ければ。げに大象もつながら。女にあふてのびかゝる。鼻毛と共に面長なる。爲頼ふはとのせられて。ム、おもしろい／＼然らば此事を見ぬかほして沙汰なしにせば。今でも我等が心にしたがひ。枕かはしてくれる氣か。ハテそりやいはんす迄もない。情ふかい心がしたこな様なれば。何しに今迄のやうにつれなふあたからふよぶがない。どふ成共おまへにまかす此身じやと。淺原にむつれかゝれば。入まんコリヤ忝いとうつゝをぬかし。餘念なくねめまはしたる眼を細め。侍従が仕かけにほだされて。酔るが如く成けるは愚にも又あさましし

㊦ 忍ぶ夜に障り有は玉の卮に底なき心地

女のはけるあしだにて作れる笛には。秋の鹿かならずよるとぞいひつたへしが。あしだにあらぬ舌さきの。侍従が口笛に吹のせられて。のぼりつめたる爲頼。よい事を見出して。思ひもよらぬ戀の埒。今宵あくぞとそぞろに悦び。引立し兼好のむなぐらをはなし。僉儀して罪科にも行はんと思ひしが。侍従のつぼねの變によつて。宥免して無事にかへす。重而からはたとへ姫君の御召ある共。此屋かたへ足ぶみしたら。以來はゆるさぬ早く歸れとつきはなせば。網代の魚をのがれたる心地にて。侍従にも暇乞なくにげて宿所へ歸らるれば。侍従うれしくすましたりと心おちつき。よりそひるる爲頼を。ひつしよなくつきのけ。いかに田舎の土氣のおちぬ武士なればとて。女中ばかりの屋形へ夜中に来て。耳にも入ぬたけふれごと。姫君守護の役目をつとむる身として。じだらく千萬ぶ作法の至。宿直の侍衆の耳へ入ては。且はこなたの爲に成まじ。早々歸り給へと。以ての外成けしきにていひければ。爲頼きよつとし

て。それはどふしたいひぶんぞ。たつた今迄日來の思ひを今宵とげさせ。枕ならべてねやうといふてから。手のうら
 かへすやうに。却而身共を放埒者のやうにいはるゝは。扱は某をあとつてなぶらるゝな。よし／＼此上は大事の
 お姫様へ。行衛もしれぬいやしい奴を引込。不義の仲人せらるゝと。傳奏迄うつたへ。今に思ひしらすんと。氣色か
 けつて立んとするを。是／＼こなたの戀を叶へぬとて。形もない虚言を申上。結句めいわくいたされな。さあ姫君の
 不義いたづらをあそばす。みづからが媒したる。何ぞ慥な證據があるか。ハテ證據は今連て來た男めが慥な證據。イ
 ヤハヤ男たてら跡形もない偽り。此屋形はみづからが拜領して。わらはが住宅とはいひながら。大事の姫君御氣色御
 養生に。御入あそばしてござれば。晝夜共に心を付。男たる者は中／＼門内へは入ず。きびしく吟味する所へ。何者
 がはいらふぞ。證據もなき事いひたくばいふてまはられよ。かりそめながらお姫様の守護とあれば。つき／＼の女中
 迄。みだりがましき事のなきやうに。いひ渡さるべき女中御守の役人として。みづからに執心なと度々こされし。艶
 書あまた取て置ぬれば。其狀を證據に。不行義の段々を申上るが合點かといわれて。爲頼行あたり。證人にとらへし
 男はかへしてしまひ。あまつさへ名さへきかねば。何を證據にいひ立べき印もなく。結句僉議に成ては。現在自筆の
 文共をとられるれば。身一つの科に落て。我と蹄にかゝる道理。エ、口惜やたばかられて。今てはいひかぶりに成て。
 戀の段にてはなく。むねの中はくら／＼と。わかかへるやうに腹はたて共何をいふても。自筆の艶書を握られるれ
 ば。いひつゝの程ねてゐて吐唾にて。身にのみかゝりて人は取て落しがたく。扱々上がたの女は。坂東武者の智謀斗
 略に達せしよりはすさまじい智恵。おろか成女童共とおもひあなどり。エ、むごいめにあふてのけた。もうぜひがな
 い今宵の事は。沙汰なしにしてやるべし。其代りには取てをかれた身共が文共。一つも残さずかへされよと。口をす
 ぼめて詫言ぐち。侍従おかし。人の所へ狀文付てかへせとは。こなたの國の作法かはしらぬが。都にはない事。此
 殿は堪忍して御上の御取へは入まじ。雷でから今のやうな形もない。わんざんをおつしやると。見初まいらせ候て。

しづが心ばとの文共を出して。大府で大駭をかゝせませす人のしらぬ中に。駭られよといわれて。無念ながら。御
 頼は。あたまをかいてす／＼と宿所へ歸り。思ひまはせば口惜いやら無念なやら。女づれにたばかられ。ほうさい
 ものにせられし段。此まゝにては堪忍しがたく。何とぞ此遺恨をばらしたふ思へ共。自筆の艶書をとられるれば。あ
 かりへ出て物いわれず。討果さんも女なれば相手にしがたく。分別にあたはぬゆへ。幸一家の内齋藤左門義守は。
 早田の宮の女中預り。京の住人にて物馴たる男なれば。密／＼に内談し。侍従めに怨をなさんと思ふ折から。齋藤左衛
 門をとづれ。渡りに舟の御尋。忝。まづ／＼奥へと伴ひ入。思案かるべき下心有ゆへ。いつ／＼よりはもてな
 しつよく。けふは貴公は非番たるべし。打くつろいで晩迄ゆるりと語られよと。客も亭主も好物の酒汲かはし。義守が
 熱の廻りし時分を見て。爲頼酒きげんの上調子をひくめ。小聲にて申けるは。今日貴殿方へ智恵をかりに。行所にて
 ありしが。幸の御出。某が身の上にとふも。分別にあたはぬ事あり。此度我等早田の宮の姫君。御氣分あしきに
 付。侍従が屋敷へ御養生に御入によつて。和殿と我等はちかき一家たるゆへ。わざと召のぼせられ。御邊と同役の。
 姫君様の守護を仰付られ。去年より在京せし所に。生國信州の山家の。猿同然の女を見たる目にて。京女郎の容儀を
 見て。極樂世界へ生れ出。天人を澤山にみるやうに思ひ。いづれをみても心ときめく中に。わけて侍従のつぼねの艶
 色になづみ。數通の玉づさを送れ共。曾て以て承引なき故。外に忍びあふ男あると推量し。様子をかがふ所に。京
 そだちの物髪の色男。侍従が方へ忍び入を見とがめ。彼男をとらへ僉儀にかゝりし所に。あらふ事か姫君の戀男を侍
 従が取持て。其夜合せ申手組のよし。大形ならぬひがこと。貴殿へも直に其夜知らせ。急度吟味をとげんと思ひし所
 に。先達て侍従へつかはせし某が艶書を以て。此僉儀せば。身共が戀の次第つぶさに御上へ申上んと。恥しい事な
 がら。様々書くどいた身共が。千話文共を證據にしていふ故。何いふても侍従に身を握られてゐるによつて。表向へ
 出られず。無念ながらとらへし忍び男めを。宥免してかへし沙汰なしに仕舞しが。此後もかやうの不屈見出して。吟

味にかゝらば。又艶書を出してこまらしをらん。然る時は姫君に不義あつても。どふも兼儀成がたし。去によつて侍従が方へつかはせし文共を。残らず取戻すやうの思案してもらいたい。一生の恩にきるべし。思案し見て給はれと。つまず語頼めば。ねてゐて聞たる齋藤左衛門。むつくと起なをつて。コレ爲頼。先某を何役の者と思ふて。左様の密談はせらるゝぞ。其方こそ去年召上せられて。新規に女中の守護仰付られ。昨今故に役義の存違へなど。胡亂ながら陳謝も成べし。我等は關白の御めがねにて。惣而女中の目代役に仰付られ。女官を始かろき宮仕の女の身の上に。不義がましき事。聞のがしに仕るまじきと神文に血判し。年をかさね相勤。過分の祿を給はり。妻子を安樂に過す事なれば。たとへ兄弟一家成共。預りの女中へ不義がましき事。聞がさいご用捨ならず。殊にお姫様に外より男を取込。合せ申さんなどの企。聞捨にはしがたし。其返されし男は何方の者にて。名は何といひし者ぞ。貴殿侍従への艶状いつ比より何程つかはれ。侍従よりちよつとの返事にもいたせしや。白状めされ只今此旨關白公へ訴申さねば。身が役目立がたしと思ひの外にいひ分。爲頼きよつとし。そりや左衛門酒きげんか。たとへ外より身共が此品を耳へ入ふと。一門がいにはだまつてくれらるべき其方。關白の御耳に入るとは近比聞へぬ。殊に其男はとらへし斗で名所もしらず。思案してくれるがいやならばいやで濟事。一家の品の訴人せんとはふたのもしといへば。左衛門打笑ひ。用捨も事によるべし。役目なれば一家とても見のがしに成がたし。其役目を蒙るからは。親疎をわけず耳に入事はつまず申上。奉公に私なき心を顯さずしては。職を盗む不忠也。役目の某に遠慮なく。咄されしはそなたの因果。随分いひ拔るやうにめされよと。立んとすれば。ム、扱は必定申上らるゝか。ハテくだい事。只今參るといひければ。爲頼今はたまられず。引拔て大げさに打はなし。家來を呼付。某は今立退間。汝らは跡を仕舞國元へ參れと申付。時。金の懐中して逐電す。誠に非道の侍と。にくまぬ者はなかりけり

兼好一代記 一之卷

○ 金銀持て廊の榮花大盡の大饗

我身のやんごとなからんにも。まして數ならざらんにも。子といふものなくてありなん。げに子は三界の首城とは。今身に覺へぬと。左京大輔兼頼。今度爲頼が齋藤を討てたちのきし意趣の發りは。姫君と兼好と戀慕の事につき。侍従が媒不義放埒の噂。誰いふともなくひそ〜と。呷あひけるを聞つたへられ。誠に中書王前の太政大臣。花園左大臣。みなぞうたへんことをねがひ給へるも。斷かな我子の兼好。早田のみやの姫君と密通の沙汰。若實事なる時は。卜部の家の瑕瑾。大職冠より退轉なく。相續せる家を。我子の兼好ゆへに斷絶させん事先祖への不孝。家を潰す俸を持んよりは。なきにはしかり。御上より御僉議のなきさきに。勘當分にて他國へ追籠置べしと。遠慮ふかき兼頼。思案を極められ。譜代の家老神樂岡三寸之進を兼好に付られて。津の國猪名野左衛門後家。妙吟は兼好の嫡たる人なれば。此許へ預置れぬ。元來後家の妙吟は。夫果られてより子はなく。禁裏の御役を勤跡めもなきゆへ。御扶持も召上られ。ぜひなく夫の生國なれば。猪名野の里に蟄居してかすか成暮の所へ追下され。思ひがけなく兼好は。彼繼基の中納言のいひけん。罪なくて見ん配所の月。あかしくらししておはせしが。妙吟の子飼の下部。半六といふ浮氣も。兼好爵散の爲とて。神崎の遊女町へ是非にとすめられて。始てくるわへ行て見たまへば。實名に聞及し程有て。あまたの女郎顔をつくるひ。小袖に美をつくして。格子に並みたる粧都にもまさる風俗。分別なしの若いむすこ共が。跡先知すふかい所へはまつて。およくこそ斷なれ。なづましき聲してうたふ小歌の一ふし。色音の糸の長くひびき。夕の鐘に待人有。別るゝ人ありて。親のいさめ世のそしり。烏の啼と思はゞこそ。曉ごとのきぬ〜袖に思

ひを殘させ。此世のあらんかぎりには。契を先の見へぬ國迄ちかひ。うそとは思へどかゝる心。こりには。うそともにおもしろく。或は行末の身を頼むに。稀に眞はいへど。其男も過し浮世にながらへしも。萬心にまかせざれば。慈悲なる神は罰をあて給はず。かはす詞はをのづからうそに成て。しらぬ田舎にさそはれしより。縁のあるが皆まことに成ぬる例も有。見るにつけ語るにつけ。聞事觸る事。戀より起て絶ぬ此道ぞかし。兼好も早田の宮の姫君に。花見の場にて詞をかはし。其夜忍びしに。爲頼に妨られてより後は。たがひに遠慮してをとづれもなき内に。かふした田舎へ追籠られ。身は猪名野にありながら。心は都に残りて。姫君の御面影忘れもやらず。内裏女郎とは各別世界の歩行ぶり。入文字の道中も目につかず。あらましに格子を見て廻られしうちに。世には似たるおもかげもある物かな。まざり。都の姫君に見まがふ程の大夫。客からの文を見て少し物あんじ顔成躰。是はと心とまり。遣女にちかよりお名をとへば。吉田様と申す。扱は我名氏を名に付しもしかるべきゑにし成べしと。下部の半六がちかづきをさいわいに伊丹や萬平といふあげやへ入。ていしゆ夫婦を頼み。吉田をもらふて始ての一座。暮る迄酒汲かはし立歸られしが。兼好のけいせい狂ひの病出し。くだらるゝ時分妙吟様の方は御浪人の御身なれば。ふ自由に有べしと。家老三寸之進が心を付て旦那にかくして袖の下から卅兩兼好へ參らせしを。今此時の爲とほつかれ毎日の里通ひ。第一女郎の方から美男になづみて。外の勤をかきて心をつくしける程に。次第にかわゆう成て。彌たがひに偽り去て。一日あはねば大も思ひにしづみ兼好も通はれぬ日はなく。時代ちがひの姨の異見更々耳に入ず。通ひつれば。妙吟も異見つきて。都へかくといひやられければ。石よりかたき兼顯。以ての外の腹立にて。とかく生て置ては家の滅亡をまねく道理と。近習の侍大源五右衛門に。急ぎ猪名野に行て。兼好が首打て来た。用捨して助なば七生迄の勘當ぞときびしきいひ付。主命もだしがたく。お請を申夜舟に下るよし。家老三寸之進聞やいなや。自分の家來長八を招き。ひそかに此首尾をふき送。波今より夜通しにいな野へくだり。此段を若旦那兼好公へ申あげ。早いづかたへ此兼好身をしのばるべし。御きげんの辨を見て。遊衛衛尉兼好公に。御説言をいたすべし。田舎の船に此ながら一歩さらしと。長八に渡し。随分道を急ぎ。源五右衛門より先へ下着するやうにいたせと申付て下しぬ。かゝる都の首尾とは。しらぬ日のつくしかゝる身のならひ。次第に向上に成て。紋日役日も一人して請込み。あげや夫婦下々迄諸事悦ぶ上をすれば。一足のおぎうりを三人程してなをし。何かにまはりつよく。門番の與右衛門もあたまを地に植てうやまひ。早お歸といふ聲を聞て。あげや町の白犬迄名残の聲を出して三たび吠けり。定つて大夫かぶるをつれて。道迄をくれば。宿の女にやりて下男。座頭あんま取迄此大臣おひとり。大道をせばめ。五町あまりの野道をさはぎ道中。女郎かいの幅は爰也。とても及ばぬ者の目から。生れかはりてあの身にと。うらやましがるも斷ぞかし。朝日の出るにもおどろかずして。大夫と手を引あふてよいきげんにて歸らるる所へ。長八都よりの早使に下着。御宿にござらねば妙吟尼に様子を聞。直にけいせい町へいそぎゆく。道にてべつたりとおめにかゝるとそのまゝ。御袖を引て片かけへ寄。親旦那御不行跡の様子御聞なされ。御家來大源五右衛門を討手に御下しなざるゝを。拙者主人三寸之進聞やいなや。早速に某を指越申せしは源五右衛門着。仕らぬ内に。一まづいづかたへぞ御忍びあそばしませとの。御知らせのため指下候と。三寸之進が狀を參らすれば。ゆふべからの酔と共に興さめ。太儀に早知知らせに下りし段祝着せり。成ほど是よりすぐにかげをするべし。なを親父のきげんを見はからひ。首尾のよいやうに頼むと。三寸之進へくれぐれいふてくれと。長八をかへし。熊手松右衛門といふ末社に。都のぶ首尾を吹こみ。大夫には何事なき顔して。立わかれ因幡の山の松右衛門方へすぐに行て。其日はそこにあかし。姨妙吟の所へ人やとひして様子を聞せにやれば。源五右衛門下て見合次第に打て捨ると。近邊をさがせば。かならず此邊へうろたへ歸るなどの内證。聞と其儘がつくりと力も落て。きのふの調子とは一めいりめいりて。我心ながらまじめに成て不自由がちな太鼓持の所。氣のいる朝夕の飯を。悔て歸らぬ是迄の行跡。親の立腹尤と。誰が異見せねど合點のゆき時遅し。大夫は此程絶て音信

ひを殘させ。此世のあらんかぎりには。契を先の見へぬ國迄ちかひ。うそとは思へどかゝる心。こりには。うそともにおもしろく。或は行末の身を頼むに。稀に眞はいへど。其男も過し浮世にながらへしも。萬心にまかせざれば。慈悲なる神は罰をあて給はず。かはす詞はをのづからうそに成て。しらぬ田舎にさそはれしより。縁のあるが皆まことに成ぬる例も有。見るにつけ語るにつけ。聞事觸る事。戀より起て絶ぬ此道ぞかし。兼好も早田の宮の姫君に。花見の場にて詞をかはし。其夜忍びしに。爲頼に妨られてより後は。たがひに遠慮してをとづれもなき内に。かふした田舎へ追籠られ。身は猪名野にありながら。心は都に残りて。姫君の御面影忘れもやらず。内裏女郎とは各別世界の歩行ぶり。入文字の道中も目につかず。あらましに格子を見て廻られしうちに。世には似たるおもかげもある物かな。まざり。都の姫君に見まがふ程の大夫。客からの文を見て少し物あんじ顔成躰。是はと心とまり。遣女にちかよりお名をとへば。吉田様と申す。扱は我名氏を名に付しもしかるべきゑにし成べしと。下部の半六がちかづきをさいわいに伊丹や萬平といふあげやへ入。ていしゆ夫婦を頼み。吉田をもらふて始ての一座。暮る迄酒汲かはし立歸られしが。兼好のけいせい狂ひの病出し。くだらるゝ時分妙吟様の方は御浪人の御身なれば。ふ自由に有べしと。家老三寸之進が心を付て旦那にかくして袖の下から卅兩兼好へ參らせしを。今此時の爲とほつかれ毎日の里通ひ。第一女郎の方から美男になづみて。外の勤をかきて心をつくしける程に。次第にかわゆう成て。彌たがひに偽り去て。一日あはねば大も思ひにしづみ兼好も通はれぬ日はなく。時代ちがひの姨の異見更々耳に入ず。通ひつれば。妙吟も異見つきて。都へかくといひやられければ。石よりかたき兼顯。以ての外の腹立にて。とかく生て置ては家の滅亡をまねく道理と。近習の侍大源五右衛門に。急ぎ猪名野に行て。兼好が首打て来た。用捨して助なば七生迄の勘當ぞときびしきいひ付。主命もだしがたく。お請を申夜舟に下るよし。家老三寸之進聞やいなや。自分の家來長八を招き。ひそかに此首尾をふき送。波今より夜通しにいな野へくだり。此段を若旦那兼好公へ申あげ。早いづかたへ此兼好身をしのばるべし。御きげんの辨を見て。遊衛衛尉兼好公に。御説言をいたすべし。田舎の船に此ながら一歩さらしと。長八に渡し。随分道を急ぎ。源五右衛門より先へ下着するやうにいたせと申付て下しぬ。かゝる都の首尾とは。しらぬ日のつくしかゝる身のならひ。次第に向上に成て。紋日役日も一人して請込み。あげや夫婦下々迄諸事悦ぶ上をすれば。一足のおぎうりを三人程してなをし。何かにまはりつよく。門番の與右衛門もあたまを地に植てうやまひ。早お歸といふ聲を聞て。あげや町の白犬迄名残の聲を出して三たび吠けり。定つて大夫かぶるをつれて。道迄をくれば。宿の女にやりて下男。座頭あんま取迄此大臣おひとり。大道をせばめ。五町あまりの野道をさはぎ道中。女郎かいの幅は爰也。とても及ばぬ者の目から。生れかはりてあの身にと。うらやましがるも斷ぞかし。朝日の出るにもおどろかずして。大夫と手を引あふてよいきげんにて歸らるる所へ。長八都よりの早使に下着。御宿にござらねば妙吟尼に様子を聞。直にけいせい町へいそぎゆく。道にてべつたりとおめにかゝるとそのまゝ。御袖を引て片かけへ寄。親旦那御不行跡の様子御聞なされ。御家來大源五右衛門を討手に御下しなざるゝを。拙者主人三寸之進聞やいなや。早速に某を指越申せしは源五右衛門着。仕らぬ内に。一まづいづかたへぞ御忍びあそばしませとの。御知らせのため指下候と。三寸之進が狀を參らすれば。ゆふべからの酔と共に興さめ。太儀に早知知らせに下りし段祝着せり。成ほど是よりすぐにかげをするべし。なを親父のきげんを見はからひ。首尾のよいやうに頼むと。三寸之進へくれぐれいふてくれと。長八をかへし。熊手松右衛門といふ末社に。都のぶ首尾を吹こみ。大夫には何事なき顔して。立わかれ因幡の山の松右衛門方へすぐに行て。其日はそこにあかし。姨妙吟の所へ人やとひして様子を聞せにやれば。源五右衛門下て見合次第に打て捨ると。近邊をさがせば。かならず此邊へうろたへ歸るなどの内證。聞と其儘がつくりと力も落て。きのふの調子とは一めいりめいりて。我心ながらまじめに成て不自由がちな太鼓持の所。氣のいる朝夕の飯を。悔て歸らぬ是迄の行跡。親の立腹尤と。誰が異見せねど合點のゆき時遅し。大夫は此程絶て音信

なければ心ならず。筆の命毛のつゞくほど文書つくし。外の客には大かた涙でつとめ。藝づくしの品々。一塵興に入ておもしろがれど。大夫はたゞおもひにせまる胸をさすらせ。けふも又みへぬかと。人しれぬ涙の袖口へかぶるが彼御方の文一つ指込。心はさきへ飛で箱階子をりさまあけなく。小座敷へ入てあくる間もおそくよみ初るより。つねとはかり哀をこめての筆のすさみ。親の不興かうふり。姨の方をも立のけば。又あふ事もかたいとの。むすび置にしまの契もはかりがたし。今よりは我事わすれ給へ。さらに恨に思はずと。讀も終らず忍びておはする松右衛門所を聞て。是より御返事申べしといひやり。翌の日早く金子廿兩文にそへて送り。とかくあひまして申上たし。不便におぼしめさば夢のまも早く見え給れと。くれぐれ申つたへける。さすが思ひ捨てたくて。兼好はたゞひとり。忍びて柵迄たより。顔見合て一度に泣出して。是にて語るもよしなし。御世話にかけず。私のはからひにて。是迄のあげや伊丹や方にてゆるりとあひましてと。かぶろにかくとさゝやき。先へあないさせて。小座敷を明させ置て。ふたりつれ立行ば。あるじめをと罷出。コレハ旦那花めづらしき御出。此間はお噂のみと。かはらぬもてなし。我事此中は都の親父機げんわろく。姨たる人のしばらく此節遠慮せいと。いひ渡しゆへ。先此里やめぶんにて忍び来れば。今迄のやうに萬かさ高になきやうに。いつもの手相の末社共へも沙汰なしに頼むと。小座敷へ通れば。大夫は兼好のやつれられし顔を見て。少の中なれど。御心を傷められしゆへかお瘦が見へてかなし。親御様の御勘當と有ば。かふした所へ御越なざる人様には。どれとても有ならひ。御機げんのなをる迄は。數ならぬ私が身を捨て。命をかけて逢ませいではをくまじ。御氣苦勞なされず共。かならず毎日來てお顔を見せて下されと。涙ながらいさめ。歪心よくのみかはして。其後は一日もかゝさず逢けるに。身あがりの物入積れば。壹匁もないかわよしにはかくして。我身の年切増て。内證にて百兩かりて渡しぬれど。逢つてはとめどなく。あげやのさし引大分残り。つるには兼好借銀と成て。濟すべき方便なく。勘氣ゆるさるゝ迄との斷。いかな／＼聞届す。情なくも障の法とて。兼好を止てかへさず。納戸の時へをし。切まどより鏡裏を遣はし。きびしく鎖をおうして。時／＼大夫が面影も見せず。今の機依の代取

② 金がなふては揚や共に木の端の様に思はるゝ

人の身みやむ事を得ずしていとなむ所。第一に食物第二にきる物。第三に居る所也。人間の大事此三ツに過ぎず。飢ず寒からず風雨におかされずして。しづかにすごすをたのしひとす。但し人皆病あり。病にをかされぬれば。其うれひ忍びがたし。醫療を忘るべからず。左京大輔兼顯。かりそめの風の心地次第に重く。名醫を招き生薬をあたゆれ共。更に験もなく。日々たのみすくなく見へければ。一家の人々寄集り。子息兼雄は病身ゆへに。先達て御断を申上られ。上北面の役義をあげ。岡崎に閑居あれば。兼顯存命の中に。跡目の事を極め。禁廷へ願ふべしと。色々内談あるを。家老神樂岡三寸の進罷出。御子息兼好殿。若氣の至りにて不行跡ゆへ。討ても捨てきやうに御立腹にて御勘當なされ置れぬれ共。若き時は兼好公に限らず。世間に多く有ならひにて候へば。他よりの御養子の御内談を止られ。何分兼好公の御勘當。御赦免を御願ひ下されと達而ねがへば。尤我々共。如在なく。此間兼好勘氣の訴訟をして見つれ共。かれが事は。ひ出して給はるな。聞ば却而氣色のさはりとなれば。かさねてから此者の噂はして給はるな。とかく一家の中よりいづれ成共。急々に子息達の中を跡めに入て。家相續を頼入と有て。兼好事は詞の端にも出しがたし。去ながら現在血をわけられし子息を指置。此座に並ある親類の中より。我等が伴を跡めには。どなたにてもいわれぬ場なれば。所詮兼好のかくれ家知てもあらば。急に先呼よせ。少々病人の心に合ず共。我々病床へ伴ひ出。無理にをして赦免を願ふて見るべし。肉身を分られたる子の顔を見られなば。さのみ腹は立まじ。片時も早く迎につかはさるべし。兼顯息の有うちに。對面させて見たきものと。一統に申さるれば。三寸之進力を得て。然らば拙者心あたりの

所候へば。尋參て何分御供して歸るべし。いよ／＼頼奉ると出んとするを。一家衆呼歸され。是／＼存命の内に。たとへ病人の氣にかまふとも。ちよつと對面さへさすれば。今生にて勘當ゆるされたるも同然也。若其内に果られなば。勘當といふ事諸大夫仲間にも知てゐらるゝ事なれば。死なれた跡では入にくし。とかく早く誘引して歸られよと。一家の衆如在なき詞うれしく。三寸之進は我宿へも歸らず。直に主人方より立て。心ざす所は神崎のけいせい町。足をそらになして。時つけの飛脚のごとく。人をもつれず只一人神崎へ馳行。兼て聞かたる伊丹やといふ揚やへ行て尋なば。大かた御在所はしれなんと。飛がごとくに急けり。げにや羅網の鳥は高く飛ざる事を恨み。呑釣の魚は飢を忍ばざるを歎くといへる。古人の詞にひとしく。吉田の兼好は納戸の内ををしこめられて。大夫が身の上。又は都の事を思ひつゞけて。人の氣を慰るあげやの内にあても。かふした身では泪の外はなくて。今迄遊びに來た時は。迎が來てもみぢん戻りたき氣はなかりしに。今の歸たき事。籠鳥の雲をこふ思ひ。是皆世に有し時。ねふたがる太鼓女郎に。夜更て投節をこのみ。あいた見たさはとうたはせしむくひにて。生をもかへず籠の鳥と成て。うらめしき今の身の果と。さまざまの事思ひ出して。先非を悔ておはする所へ。三寸之進息切て伊丹やの内へはいり。主萬平にあふて。兼好殿の在家を尋ければ。御息才にて是に御入と申せば。大きに悦び。いづれの座敷にござるぞ。急用あれば早く合せて給れといへば。萬平苦い顔して。あげ錢の残り百五兩二歩の方に。くつわからのいひ付にて。納どへ押籠置申。右の金子つかはされねば。當節季に大門口に七日さらして。追拂ますぐるわはの法。おなじみなれば私等は。おいとしく存ますれど。此里の掟なればせひがござりませぬ。御親類方でも。金御持參なければ。合せます事成ませぬと。にべもなくいひ切ば。三寸之進よつとしてあきれしが。何をいふても火急につれまして歸らねばならず。かゝる事のあらふとはみぢんも思ひがけなく。金子の用意もなく。其儘にて屋敷を出て來れば。渡すべき物もなく。是／＼草鞋。親且那十死一生につき。御勘氣ゆるされ御家督を直に御ゆづりなざるによつて。都より我等急々に御迎に參れば。御供して歸るやいなや。百兩が貳百兩でも權意なく。急使持を指懸べし。松の壽にて心せき。取あへずかけ來れば。壹兩の用意もなし。違のない所は我等證文して渡すべしと。色／＼と斷つて共。私壹人のみ込みまして。女郎の親かた町の年寄組中が合點いたさねば成がたし。とかくがらりに金子御渡し被成すしては。何程仰られても埒のあかぬ事と。きせるくわへて輪を吹てあれば。三寸之進力も落て。心斗は早瀬川の水のごとくなれど。金にせかれてゆきあたり。今立歸金子調へ又是へ來れば。京よりは是迄は凡四五里の所。行つ戻りつに三日四日かゝれば。其内に親且那おめふさがれては。湯をわかして水へ入。千日劫た萱一時に亡といふもの。とあつて今金なくては若旦那はつれましては歸られず。所詮此上は立歸て金子調へ。又是へ持參する迄御臨終あそばさねば。若旦那の御仕合。御運に叶ふといふもの。逆埒のあかぬ事に。一時も大事の時刻に隙入てゐる所でなしと。尻引つまげ。エ、不了簡なる亭主じや。百姓町人にちがひ。大分の御知行取の若殿。めくさり金貳百兩や三百兩の事に相違すべきか。所に住ほどにもない。人によつてきつしくいふたがよい。今より都へ夜どをしに取てかへし。立歸り明後日の朝飯時分に。金子を持て來るべし。それ迄はいよく大事にかけましておくりやれと詞を殘し。伊丹やを立出。野はづれにから尻馬にてもあらば打棄て。追立て行べしと。ゆふぐれにかけてゆく所に。一里塚の松の下に。旅の僧腹をかかへてくるしむ躰にてゐたりしが。三寸之進へ詞をかけて。廻國の修行者腹痛いたして難儀に及ぶ。御藥があらば佛に供養すると御召て。御意にかけられ下されと。たへがたさふにいひければ。心は先へ／＼とすゝみし三寸之進も。出家の難きを見かね。懐中の紙入より丸薬出してあたへければ。忝なしといたたくとて。懐より小判ならば百兩あまり入たる財布の落しを。くるしさに取上る氣力もなく。先丸薬をのみて。いたむ所を自身をしてゐるを見るより。三寸之進是天のあたへと心つき。立寄て何と薬をまいつてから。心持はいかゞとへば。近比忝き仕合。拙僧六十餘に成申が。若き時より疝氣持にて。寒暑の時節は指込めいわく仕り候。今俄にさしのぼつていため申は。子

子

細有て去方よりことづかり。神崎のけいせい町へ届てつかはす金百廿兩を。人に見られじと内懐へ直に財布を入しゆへ。冷てかやうに指つめ。くるしめ申所に、御薬のお影で少いたみややはらぎ。有がたふ存ると咄をするを聞ほど。心あての金子の高に都合すれば。今から京へのぼり。金調へて又神崎へ來り。金を渡して若旦那を御供して又立歸れば。十四五里の所を以上三度往來せざればならず。たとへいだてん程かけ走ても。三度の道中四十四五里の行程。四五日も際どらねば。御屋敷へ御供しては着しがたし。是非此金を借りて。急成場の役に立んと分別きはめ。是修行者。もはやくれに間もなき日ざし大分の金子を持って。年寄の不用心なる街道を。今から神崎のけいせい町迄ゆかふとは近比あふなし。是からけいせい町へは凡二里半あまりも有べし。佛へ御奉公と存ずれば我等隨に届て進ぜふ。氣づかひなしにことづけ給へと。念比にいひかゝり。俄に脊中などさすりて。追跡する下心こそおそろしけれ。

㊦ あふささるさに思ひ見だるゝ大夫が心づかひ

抑人は所願を成せんが爲に財を求む。錢を賤とする事は。願ひを叶ふがゆへ也。所願あれ共叶はず。錢あれどもちひざらんば。貧者と同じ。修行者の金を見て欲きさは。財をかん心にあらず。主君の爲に願望を遂んため。見かけし金を是非かり取て。火急の所願を叶へんと。行衛もしらぬ廻國の僧を。親の如くに看病するも金に心の有ゆへぞかし。一目もしらぬ男の深切ぶりといひ。殊更前後揃はぬ詞を聞て。旅僧ゆだんせず。扱々そなたはすかぬ人也。けいせい町は是より纒廿町迄は有なし。其上御自分は上がたへのばる躰と見ゆるに。遊女町へことづからふとは合點ゆかず。コレ若追剽山賊めらにても出なば。其爲の用心に此錫杖に鍵を仕込置たれば。うさんなものにもし出あへば。此鍵をもつて胸腹へ穴を明て通れば。少も御世話になされて下さるゝなど。弱身を見せぬ爲にや。痛む腹をこたへ。膝衝をふところへ入る。鍵杖に仕込し水のやうなる鍵を抜て見せ。金などに手をかけば。つき坎んけしき轉へるれば。

コナ之進此賊をみて。至り山賊窟にはあらざ。一睡り時軍備解心の上は。各解心も申べし。主人の爲に火急に財令金子百兩餘り入用あれ共。某旦那は京都の住人。屋敷上がたにていへば。着時之間に並がたし。近比幸忽成無心にていへ共。四五日の間私へ其金子御借下され。則主人屋敷も拙者名も書。當所にて懺成請人も相立申べし。ちがひなく四五日の中には返納仕り申べしと。據なくいひかゝれば。拙僧が金ならば品によつて暫くの内かして進ずる事も有べきが。此金は人より預り。届に參る金子なれば。得御役には立まじと。次第に腹痛も心よく成しと見へて。最前とは格別氣象に成て。勢ひを見せん爲に。手巾といて衣の上にたすきをかけ。いか様鍵の一手も習ひ覺し法師と見へて。下段にかまへ少共ゆだんせざる躰。今ははや結構づくては迎ゆくまじと。胸をすへて。侍の事を分て申に聞分て給らぬ上は。命をかけて是非に無心を申入。薬ゆへに金子を見付られ給ひしが因果と思はれよと。近寄所を汝まことの武士ならば。渴しても盗泉の水をのまずといふ事をしれるや。義を立てるを武士といへり。盗泉と名の付たる水さへのまぬを實の侍といへり。夫にかすまじきといふ金を。命をかけてからんとは無躰千萬。ム、扱は此街道に徘徊する盜賊ならん。常の法師と思ひなばあての髓がちがふべしと。いひ様鍵をつゝかけるを。是非に及ばず刀を抜てあしらい。しばしいどみあひて。なんなく鍵を打落し。すぐに付入あてみをあてれば。うんといふてたをるゝ所を取ておさへ。ふところへ手を入財布をとらんとするに。正氣つき下より三寸之進が頭髮をつかんで引よする。今ははや是迄と。刀を取なをし肝さきをえぐれば。くるしき聲をあげて。をのれ此一念幾程か有べし。をのれにも主人にも。追付思ひしらせんと。牙をかんでのゝしるを。そのまゝ引よせとめをさし。刀に付し血をふきさやにおさめ。財布を懐へをし入。手を合て死がいを拜し。三衣を着する僧を害するは。ひとへに佛身より血を出し。佛の箔をこそげるも同然の小判を奪ふは。五逆罪とは知ながら。主人の爲に此身の罪科にかへて殺しぬ。則此金子追付調へ。靈地の寺へ指上。法花經一萬部轉讀たのみ。九品の淨刹に至給ふやうに。念比に吊ひ參らせんと。暫く回向し取てかへし

て又くるわへかけ行。伊丹やの亭主にあひ。兼好殿これ迄の揚代雜用等、百五兩貳歩とある。只今相濟すと財布より金百六兩出し。早々若旦那を渡さるべしと。包ほどき小判をならべて渡しければ。亭主悦び金請取。早速納戸の鎖を明て。兼好を伴ひて三寸之進に渡せば。主從悦び泪をながし。子細は道々御咄申へし。火急なれば早お立とせりたて、伊丹屋を立出。擬出口にて早駕かりて。兼好をのせ四枚肩にて飛がごとくに走らせける。かゝる首尾にて兼好都へ歸られしとは。神ならぬ身とて吉田は露しらず。何とぞあげやのわけをたて。納戸のくるしみをたすけ參らせんとは思へ共。わが身も兼好ゆへに年を切まして。百兩といふ金をかり過しせしものなれば。此上の無心親方へもいひがたく。どふしたものであらふぞと。様々分別して思案をねり出し。少にてもいんつう自由の幅ある大臣を見ては。余の女郎とふかい中は知てゐながら。わざと其大臣になづみたる目つきして見せ。其上にて執心なるよし文を付て。餘所のお敵を引なびけ。手管を以て中戸。或は柴部屋にて我物をたどふるまひおいて。その上にていやといはさぬ仕かけにて。五兩十兩の無心いひかけ。はや四五人ふづくりと卅兩斗もらひため。まそつとて百兩に成ぞと仇名にかへて金をしこだめる。心中知らぬ人はゆび指て笑ふも斷ぞかし。伊丹の可。盃といふ大臣は。ありまやのみさほといふ大夫になじみのお客。今取出のばつとしたる大臣にて。名題の末社引つれ。四ツ門の時分御歸り見かけて。跡から申くと。揚屋の中居が呼かけければ。何の用ぞと見かへれば。去方からと名書もなき文一つ。懐へ指込。様子も申さずにげて行。去とは心當なき文。宿に歸て見る迄は遅しと。揚屋町のはづれの辻行燈に立忍び開てみれば。我にほれたとの心入深く。命を取程に書つゞけたり。少男自慢して。つれたる末社共に見たか。此方よりくどきても埒の明ざる事も有に。あなたからの思召入端女郎でもある事か。今全盛の大夫様からじや。世間に若い者も多けれど。我等が鬘厚きゆへぞかし。此男にあやかれと。彼文をいただかせば。末社共詞を揃へ。合點が參ませぬと笑へば。せき心に載て。大夫ともいはるゝ女郎が。我にうそをいふ物か。是見よとありし時。飛上りの宇平次といふ太鼓が申す。某文見ます遊に於て。今の世の御方の神託御田助と申。大夫殿より參りてござりませしよといへば。能として掛かけを掛たこととはるれば。イヤ其女郎ならば。さのみ御扱ひなされますな。子細は。おまへに限らず此中も和國様のお敵にもそのごとく。又吉野様の御客にも御書簡付られ。人の男を取るゝ事。此比の仕出也。此心のいやな所は。更々戀にはあらず。紋日かゝさぬ程の大臣に斗此仕かた也。男ぶりにもかまはれぬ證據には。河内の庄屋の一番子に。ざくら鼻にひがらめ。きんかの十筋右衛門。文盲無事成客にも。執心の状を付られ。湯殿でちよつとあふて。其明の日百姓を見たて。米十石の無心。律義な土せりのむすこ。ぬすんであふてからはいやといふ事がならぬとかたふ覺。大夫殿の指圖の出口のあみ笠茶やへ。馬に三駄送られたるを。即座に賣拂て。いんつうにしてしこだめられたを。體に存てをりますといへば。大臣興さめ。其女郎に日錢の利は何程でかざるゝ開てくれと。どつと笑て其沙汰くるわにかくれなし。かくて三寸之進翌朝早々屋敷御供して歸れば。一門喜悅有て往生も程有まじと。兼好を一家頭の式部大輔伴いて。病人の耳へ口をよせ。兼好今生の御暇乞に出られたり。是迄の事御勘氣御赦下さるべしといわれしに。兼顯はや言舌聞へね共。式部大輔うなづき。御赦免の段忝なし。兼好今より心を改められ。不興は御免とあれば。兼好はつと泣入れしは斷也。拟家督相續の願ひ奏聞あれば。有がたき宣旨にて。各悦びの酒盛納り。程なく兼顯往生有らば。兼好喪にこもり給ふ内。其身の不孝を悔て。せめて孝養の爲とて。晝夜法華經三座つゝ讀誦有て。かたの如く丁寧忌中をつとめられけり。

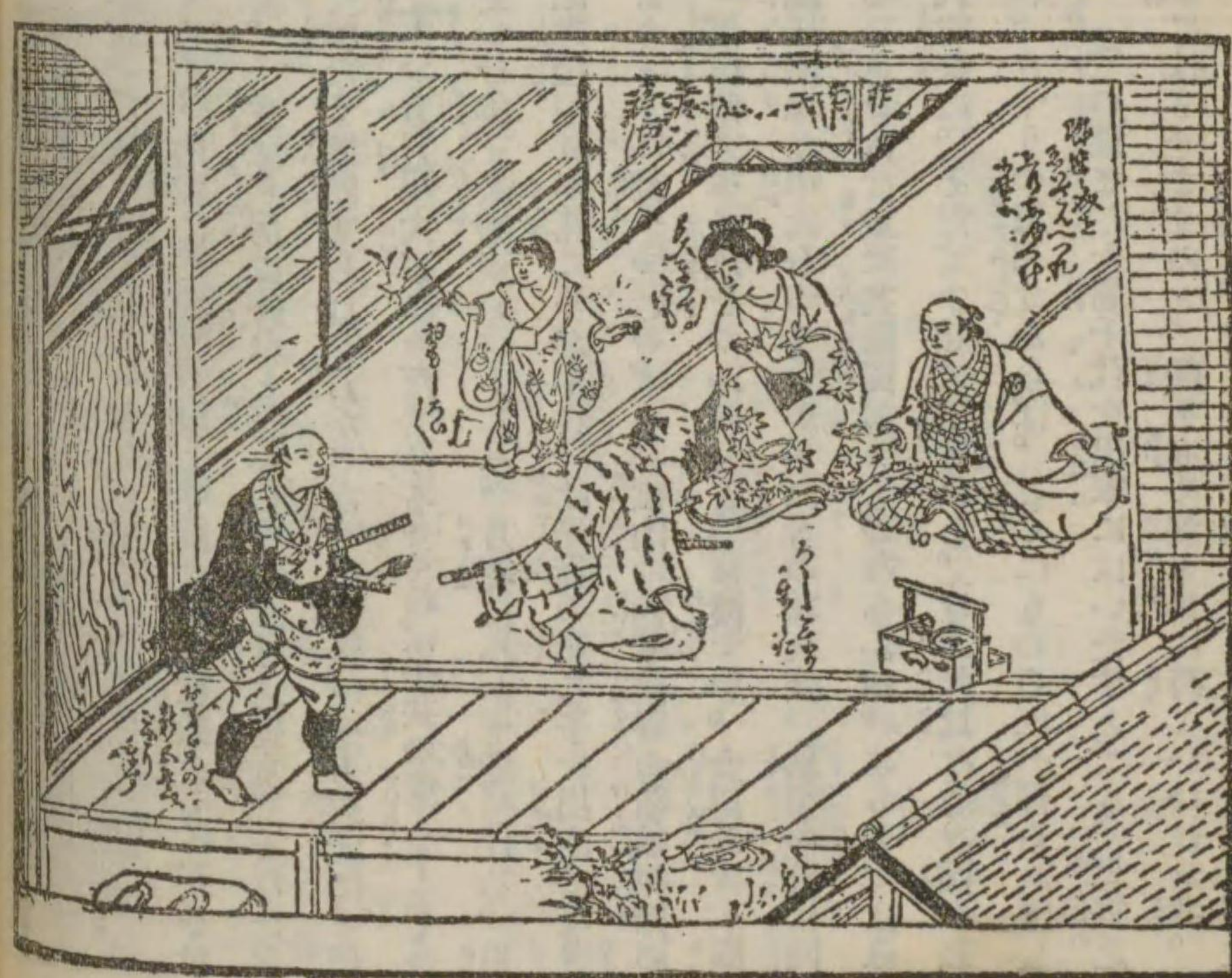
兼好一代記三之卷

○ 硯にむかひて心にうつりゆく三下り半

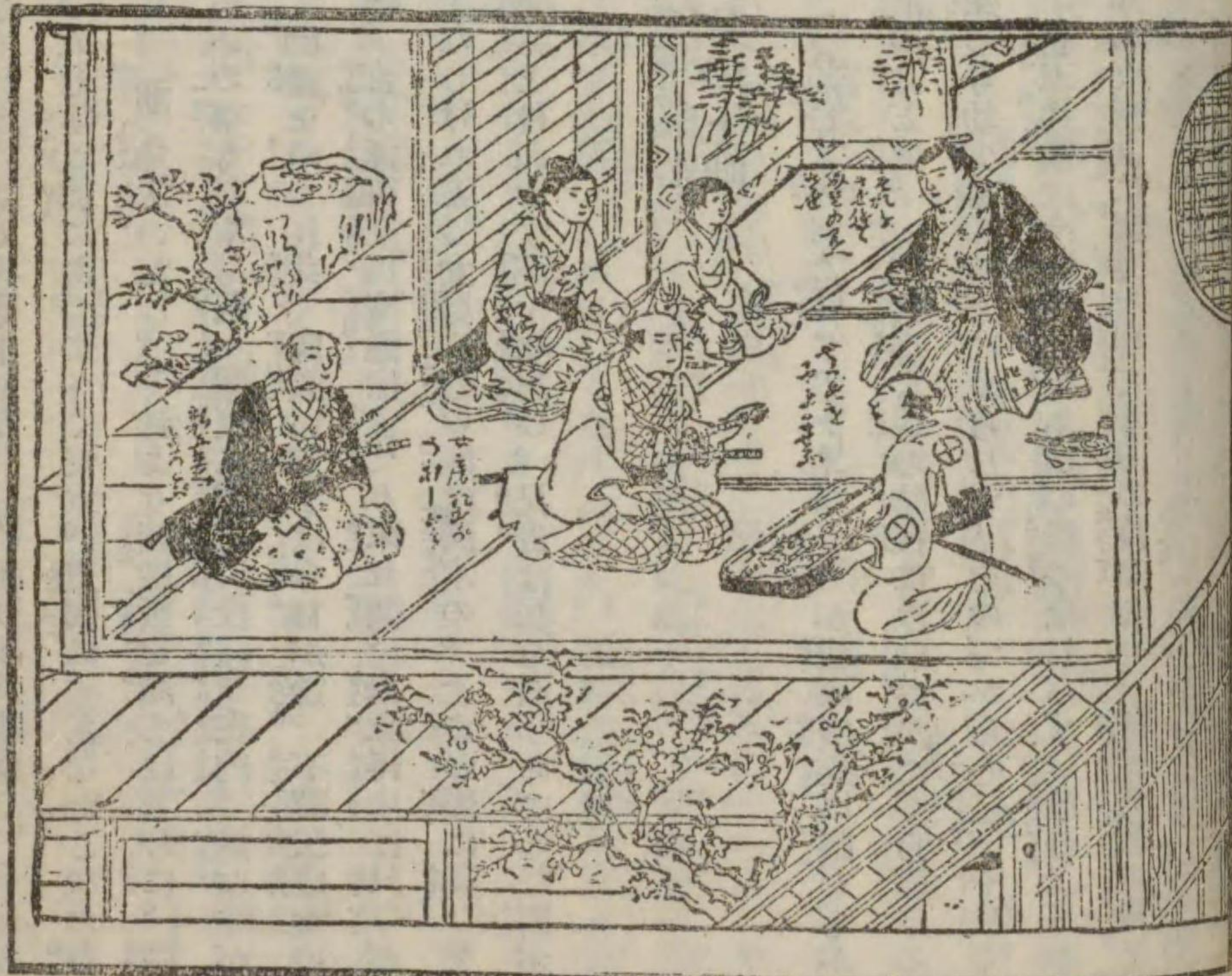
人のなき跡ばかり悲しきはなし。中陰の程山里などにうつるひて。便あしくせばき所にあまたあひみて。後のわざどもいとなみあへる。心あはたし。日敷の早く過るほどぞ物にも似ぬ。はての日は供佛施僧のいとなみおろそかならず。執行したまひぬ。されば世を立る身とて。装束あらため。衣紋引つくるひ。禁廷の役義に出られ。父兼顯にかはらぬ大役滞なくつとめられ。君の歡感諸卿のもてなし。残るかたなき首尾にて。益家門繁昌せり。かくふたゝび父の跡をふまへ。榮花の身と成事も。ひとへに家老三寸之進が忠心ゆへと過分に知行を分られ。常に賞翫有てへだてなくし給へば。いよく有がたく覺て。無二の忠勤を盡しける。然るに三寸之進妻女。此比初産やすく。しかも男子を儲て悦び限りなき所に。産婦兒枕を惱み。様々りやうぢをつくせる甲斐もなく。廿の春の暮に花と共に散行。三寸之進愁にしづみ。果報なき件やと。乳母を取てをだてさせ。笹之助と名付。女房がわすれがたみと變て不便がりしが。母なくて幼稚の子は。男の親ばかりにしては。つどく心に心つかざれば。をのづから養育疎略成物とて。乳母を付て子ををだてつけし。夫婦ある筋目よき人の許を頼て。里につかはし。無妻にて四年の春秋を過しけるを。主人兼好心を付られ。似合敷後妻の事を世話にせられ。出入人にも申付られけるに。西の京のほとりに。後家の娘おすがとて。廿一二成が。去年一人の母にはなれひとりくらし。先祖正しき浪人の娘。其容うつくしく。しかも利發ものにて。人皆夫妻の望あれ共。母存命の内に男をもてば。をのづから不孝なれば。男を持事はせぬと取あへぬを。扱は一人たが夫を持て。男といふ物に働いていやといふかと思にさもなく。花の盛をいたづらに振袖とめて。人に見られたき

わいと三寸之進方へ仲人しかけ。時めく御家老職といひ。たのもしきお侍なりとすめければ。母果られし上は。先様にさへ御合點ならば。御茶の通ひに成共參るべしといへば。其通り神樂岡の一家家へ咄に。心やすくて是幸の縁成べしと。一門同心し。せひにと辭退ある三寸之進をすめて。内證にて祝言首尾よく調ひ。千秋樂をうたひける。器量能てしかも先妻のおもごしにどこやら似たる所有て。一生女房は持ぬと堅いひし三寸之進も。そなたを女房によびひてよいものかといふ程に中よく。熟縁の印とて程なく懐胎せられ。月かさなりて安産。是も男子にて母子共に達者なれば。三寸之進悦び。珊瑚の珠と秘藏して。龜千代と名付。大事にそだてける。されば子共の成人すると。正月の日の立ほど間のなき物はなくて。早四つに成ていたつけ盛。夫婦のいつくしみ。月花にかへて愛しける。里に預け置し先腹の惣領笹之助。今年七つに成けるを。三寸之進後づれの花にめぐれ。此先妻の産し子を出家になさんと思ひ立。或時譜代の下人長八を呼て。汝は笹之助を里よりすぐに都へつれのぼり。叡山の西塔南谷の敬戒律師の方へ伴ひ行。學問させて給はれと。頼て山に置て歸るべし。則律師方へ此状をつかはせといひ渡すを。女房おすが聞て肝をつぶして。夫に向ひ今迄里に置せらるゝは。世中の繼子繼母の中はむつまじからぬものなれば。幼少の中に内へ入られては。もしやわらはつらふあたりやせんと思召。ちいさき内は里に其儘置るゝものならんが。さりとはみづからが心にへだてはなきに。あはれ内へ入られ弟の龜千代諸共に。そだてさせて下されと。けふ此比はこな様へねがひもせふと思ふてゐる所に。思ひよらぬ長八への仰渡され。さやうの思召立あらば。とくにもわらはへ仰られずして。出家になされんとの御事。世間の人の思ふ前もあれば。私の産ました龜千代を出家にはいたすとて。兄笹之助におゐるは。今みづからいとまを下さるゝとて。出家にはさせませぬと。顔を赤め涙を目に持ていひけれ共。更に承引せざりければ。女房悲しく諸親類へ人をまはし招きあつめて。皆様御聞なされて下され。つれあひ三寸之進

殿には。どふした心になられましたか。疵片輪にも生れつかぬ。しかも惣領の笹之助を出家にせられ。弟の龜千代に家をつがせんとお思ひ入と見えまして。今長八を笹之助に付て。ひえの山の敬戒様の方へ出家させにつかはすとの申付。もしさやうにいたされ。弟に此跡をつがされたる時は。皆繼母のわざと私を。世上にて鬼のやうにいひ立るのみか。第一主を女にまはさるる男と。後指をさゝせますが悲しうござれば。是非に是思ひ立を各様に異見して止てもらひませふと存て。呼にまはしましたれば。急度御異見なされて下さりませと。泣悲しみて頼ければ。諸一門尤と感ぜられ。三寸之進にあふて教訓せらるれば。それほどの事を女に教らるゝ我等にてはなけれ共。先妻笹之助を産落して間もなく果し時分。血の上にて死ゆく身なれば。後の世の事心もとなし。必あの子を出家になして。我なき跡をとほせてたべと。くれぐれ我にいひ置しゆへ。成どほ出家させて菩提を問せんと。末期に約束せし詞あれば。出家にせずしては。草の陰にて亡妻の恨ん所もあれは。是れは御異見を蒙りてと。此の御異見の御説



は御免下されと。御説する長八をわめつけ。主人のいひ仰を聞ぬ不届もの。笹之助を山へつれのぼらぬにおひては。手討にするぞと氣色をして見すれば。長八是非に及ず。旅用意するを。内義立出。是程に親類衆迄頼みても承引ないかはせひに及ず。然る上はわらにはいとま給はるべし。龜千代をいざなひ。いづれの寺にても頼み。みづからも龜千代も。出家と成て浮世を捨申すと。涙をながしていとまを乞女房の心底。天晴賢女といひつべし。此沙汰開程の者は。聰明にして生先頼ある笹之助を出家にせんとは。大きな親の無分別。先妻と死際に法師にせふと誓紙迄取かはした。堅ふ約束せられた物で有べしと。三寸之進をそれ共。空耳つぶして泣悲しみて。まことをいふ女房がいさめも聞ず。猶堅意地に。そちがいとまを乞はとて。笹之助を坊主にせずにはおかず。是が氣に入らずして隙がほしくば。成ほどいとまをやるべしと。硯引よせ三下り半を書かゝる折ふし。女房おすがが兄の轟新五兵衛。遠國より歸がけに立より。案内して内に入れれば。女房おすがかくと聞て悦び。奥より出てよい所へおたづね。さいわいぬしも宿になれ



ば。ちかづき成て下さるべしと。座敷へ伴ひ三寸之進に引合すれば。新五兵衛申やう。私義親類共關東にこれあり。相應の奉公の口もあれば。罷下れと度々申越たるゆへ。五七年以前にあづまへくたり。東國にてあなたこなた有付の家を承り合す内に煩つき。永々一家共の役害に成て。漸全快いたし。それより諸屋敷を聞まはりしに。様様の故障心にまかせず。武運いまだひらけざるにや。さいわいの事もなく。久々關東に逗留仕罷在內。妹おすがを迎へられ下され。御不便をかける段。先達て書中にて御禮を申つれ共。向顔いたすは今日が始。不調法成女の義。定て御世話のみと存る。いよ／＼御頼申入と挨拶すれば。仰の通御互に文通は。仕り來れ共。御意得申は只今がはじめて。能こそ御たづね下されたりと。おく底もなくもてなしけれど。女房の心の底は濁水の。すまぬ顔に笑ひをつくりて。酒など出して始て犂小舅の。盃事取結ぶ。心の糸もとけぬおすが。物思ひ。兄貴はしらぬうちこのむ酒が徳なるべし。

㊦ 不幸の愁にしづめる浪人の身の上咄

飛鳥川の淵瀬。つねならぬ世にしあれば。時うつり事去。たのしみ悲しみ行かふならひ。某が親は瘦馬に腰をもかけ。鎧の一筋も持せ。時めきたる武士なれ共。子細有て牽浪の身と成。私共迄も親の時代にはゆたかにくらしけるに。いつしかたのしみつきて。今かゝる境界と成くたり。妹も幼少より貧家にくらして。をのづから心造いやく成。何かに付てさもしき行跡。いかい御世話でござらふと。新五兵衛は今日の夫婦あひの様子しらず。酒心よくのんであいさつすれば。さればさふ仰らるゝにつき。早速ながら女房共に異見を申てもらひ度事あり。此度先腹の仲を出家に致さんと申せば。いとまくれよと達而わがひ申ゆへ。夫を見かぎりいとまをねがふ女はたのもしからず存。只今離別状を誂むる所への御出。惣じて見れば。おや女房。女子は母おやにしたがふが定れる法にて候所に。是成

親の龜千代と申奴を。我輩落した子なれば。いとまをくれるならつれ歸らふと申に候。其入わけを申聞せ候へ共。世間をしらぬ女の義。道理にくらく合點仕らず候へば。とくと御異見仰られ。其身斗際取捕出候やうに仰聞られ給はれと。段／＼をいへば。新五兵衛肝をつぶし。是は存よらざる事を承り候。子中をなし候ものゝ。たとへ貴公のいとまをつかはさるゝと仰られ共。仕損じあらばお詫でも申て。其儘をる筈が女の道にて候所に。女房の方よりいとまを乞のみならず。龜千代迄をつれて出んと申段。言語道斷不屈の至り。先離縁の事は今暫く御待下さるべし。妹めに様子を承り。何分御詫を申べしと。おすがに向ひ先腹の子を出家になされんとあるは。定て三寸之進殿に思召入有ての事成べし。先腹も當腹も皆血を分られし三寸殿の御子。あしく思召て法師になさるべきや。但し此義に付いとまを申請ねばならぬといふわけあらば。速に申せ。道理にさへかなふ事ならば。成程身もとに龜千代ぐるみにもらふてやるべし。心底残さず申せといへば。おすが涙ながら。先腹の物領を出家にして。當腹の次男の此龜千代に。神樂岡の家をつがされては。皆繼母の仕わざと。世の人の口の端にかけ申さん所。いかにしてなげかしく。親類衆迄頼み段々異見してもらへ共。曾て承引なく。今日家來長八を惣領笹之助に付られ。觀山へのぼさるゝに極り申ゆへに。私はいきあかれもせぬ中を思ひ切。いとまをもらひ此子と共に出家をとげ。繼母の仕わざと申悪名をのがれたく。いとまを願ひさふらふと。顔に袖をあてゝさめ／＼と泣ければ。新五兵衛妹が詞を聞て至極し。いか様是は其方ない名を立らるゝ。三寸殿の了簡ちがひ。家を繼は惣領に極つた事。出家をさせられねばならぬいはくあらば。それこそ庶子に生れし後。龜千代を剃髪させらるゝが順道さふに存るに。替たる御思案。第一繼母が繼子をにくみ。むかしから様々て、親に讒をかまへて罪に落すは。畢竟其男女房にめて。心をとらかざるゝより事おこれば。御自分も世間にて嘲申さん。此段は今一應御思慮有べしと。遠慮なくいひけれ共。三寸之進更に得心せず。女房にいひ妨られて我子を我心まかせに得せぬは。それこそ女房にまはさるゝといふもの。兄弟共に男子なれば。皆我等一人の仲共也。總領を

出家はをろか。打切て弟に家をつがさふが。身が思ひ立たる通に仕とげねばおかぬ男。詞ついでに御教訓は御無用と。法外なるいひぶん。新五兵衛むつとして。互に詞あらに成所へ。主人兼好家來に大文庫を持せ來られ奥へ通り。新五兵衛にも對面有て。三寸之進が妻女の舎兄と有よしさいわい。我今爰に來れるも。笹之助といふ里にさしをく總領を出家にせんとお思ひ立。此間おすが并に一家迄も詞はつくして止れ共承引なく。けふ多いざんへのぼすと聞しゆへに來れり。コレ三寸之進。既に親兼顯死期に。某が勸當をゆるさせ。家をつがせんと。其方十五六里あるけいせい町へかけ來りて。此節屋敷へ入ずしては。名跡を繼事ならぬと。心力をつくして働し忠節によつて。今吉田の家を相續せり其心の其方が總領を出家にせんとお思ひ。則今日笹之助が目見へを請ん爲に。神樂岡の定紋を付させ小袖上下を相續せり。總領を總領に立て家をつがせんとお思ひ。則今日笹之助が目見へを請ん爲に。神樂岡の定紋を付させ小袖上下を祝儀に持せ來りたれば。是を着させ只今爰へ出さるべしと。家來にもたされし大文庫の中より。小袖上下を出され。のつ引ならぬいひ渡し。三寸之進至極めいわくし。誠に以て冥加に餘り有がたき仕合。此上に御意をそむくは恐れ多き事ながら。出家をとげさせなき跡をとせくれよと。亡妻が遺言もだしがたくいへば。何分此義は御高免くださるべしと。いはせもはてず何先妻が遺言黙止がたきとは。日比のそちが心には似合ぬ。近比愚癡成いひぶん。もし先妻末期に及て。我産の上にて死すれば。此度出生の子は。命の敵なれば。必死後に殺してたべと遺言せば。手にかけて殺すべきや。武士に似合ぬ未練成一言。嫡子を捨て庶子に家を繼すは順ならず。此家は身が目がねを以て。嫡男笹之助に繼する間。早々呼につかはせと。主の權威を以て推て急度いひ付らるれば。女房すが兄新五兵衛大きに悦び。誠に理非明らか成御主人の御意と。感涙をながし笹之助を里へむかひにやらんとするを。三寸之進しはらくとどめて。兼好公に向ひ。たとへいかやうの事あり共。此わけは生涯の中には口外せまじと存つめいへ共。かくの如く手前が罪に罷敷い上はせむに及ず。出家をとげさせ申す御教訓を打明御教訓申すべし。女房共はいふに及ず新五兵衛にも及ず

外へ御沙汰は御無用。先年親類御氣の御。御存生の中に御教訓をゆるさせ奉らんとして麻へ入り。伊丹やの御主にあひ様子をきけば。揚錢難用の滯百五兩貳歩あるゆへ納戸へ押籠申せば。金子御持參なくは。お貌も見せぬと申切。御館には親殿の御容躰今宵せ知す。一刻も早く御供して歸たく心はせきにせきぬれ共。金子の用意なければせひなく。又金子調にはるくんと立歸る道にて。廻國の修行者に行合。懷中に金子の有跡を見届しゆへ。四五日かして給はれと詞をつくして頼ければ。山賊追剽のやうに思ひ。錫杖に仕込し鎧引拔て無二無三に突かゝる。せふ事なさに刀を抜て。鎧打おとし取ておさへて心もとをまぐりし時。エ、無念や此怨念をのれに付そひ。大事に思ふ主に怨して見すべきぞと。ねめ付て相果ぬ。扱御家督めてたく納つて後。某が先妻懷妊いたし。程なく平産男子をもふけしに。赤子なれ共顔つき彼手にかけて修行者に生うつし。扱はとむねへあたりしが。此怨念にや先妻は間もなく相果。それより手前に指置事は毒のこゝろみと存。里へつかはしやういくさせるに。成人にしたがひいよくだんの法師に。其まゝ所詮さし殺して後の災を斷んと存せしが。いや／＼殺さば怨の上の怨かさなり猶々御主人にたゞりをなさんと。是のみきづかはしく。出家となして過去の怨を消滅させんと。それゆへに出家にいたし申也。此段聞召分られ。そのまゝ法師になし下さるべしと。始終の様子をかたりける誠に人の怨念ほど世におそろしきものはあるまじ。

㊦ 勢ひ猛にのゝしる敵とのつめひらき

其物につきてその物をついやしそこなふ物。數をしらずあり。身に虱あり家に鼠あり。國に賊ありゆだんのならぬ世の中。見せまじきものは道中にての肌付金。是より發る三寸之進が盗人氣。人をそこなひ金を奪ふ出來分別。忠義といひながら。是等を旅に賊ありとはいひつべし。轟新五兵衛三寸之進が段／＼の咄を聞て。只今の御物語はいつ比の事にていぞや。何共其意得がたきお咄。今御主人の御權柄にて出家を制し止らるゝによつて。證人もなき頼智の因

果物語を述べられ。主君を欺き。そのまゝ笹之助を出家にせんとの方便の長咄。此新五兵衛はのみ込がたし。何と修行者を殺して金子をうばひ。主君の難義をすくはれしといふ證據やあると請つけねば。三寸之進色を正しうして。扱は某主人へ偽りを申上ると思はるゝか疑心ふかき貴殿へ證據を見せんと。佛檀の戸をひらき。下段より柿色の財布と。金子の包紙を出し。七年以上の今月今日。七回忌に當ると存。此包紙に其修行者の名と覺て。塵界法師と書付あるを位牌となして。女共にもかくし。今朝靈供そなへ回向をなしぬ。是見給へと包紙を開き見せければ。新五兵衛見るより刀追取。ヤレうれしや七年以來親の敵を討んと。世間へは奉公かせぎといひなし。諸國あてもなく天運にまかせ尋めぐりしに。今思はずも汝ひとり口ばしりて。親を殺せし物語。是ひとへに敵をうてと。父尊靈引合せ給ふと覺たり。我こそ其方が手にかけて害したる。修行者塵界法師が伴新五兵衛。親の敵覺悟せよと名のりかけしを。女房おすが泪と共に。新五兵衛が前に立ふさがり。今迄は親のかたき共しらず枕をかはし。子迄もうけぬることあさましけれ。みづからも女ながら敵を討ん爲に。母様お果なされ足手まとひのほだしなき。ひとり身と成しをさいわいに。たのもしきお侍と聞て。こなたより願ひて夫婦に成けるも。敵の在家聞出さば。是非に頼て討てもらはんと思ひしに。今にては夫なれば兄弟と一所に成て打にも打れず。悲しきものはわらはひとり。いづれが打勝給ふ共。龜千代が事を頼上ると。新五兵衛が刀のつかを取て引拔自害せんとするを。新五兵衛おどろき目前に敵を置ながら自害せんとはうろたへたるかとをしとむる。兼好も肝をつぶされ。塵界法師といへる修行者の子共とあるはふしん也。逆の事に其方が身の上を語られよ。敵打とあれば武士道。家來なればとて用捨は成がたし。成程尋常に勝負さすべしとあれば。新五兵衛刀を鞘におさめ。先以御目通りにて勝負をとげさせ下さるべき段。身に取て本懐の至り。忝し。某が親は相州鎌倉北條駿河守宗方の愛妾。花待御前の乳母子にて。俗の時は藤新九郎と申て。下屋敷を預り。花待の御守役をつとめ罷在り所。宗方に悪徳の餘りに。災の事を申立にして。むたいに追放せられ。是非なく我々兄弟姉妹の時分。

母も共につれて所を並遊難波にしろるべくて。はるるの道へて彼地の勝が家に居住して。うき世帯を遊る中に。宗方謀叛の企有によつて。貞時入道殿より宇都宮貞綱を討手につかはされ。急に責られ宗方腹切て死給ひ。家門忽に滅亡し。彼宗方の妾花待御前は娘るり姫を伴ひ。やう／＼のがれ出られ。是も難波にゆかり有て忍びおられしに。親新九郎行合。古主の落目見捨て。我身も半浪の身ながら舊恩を忘れず。日影の力と成て参らせし所に。花待一人の姫を何者にかかどはかされて失ひ給ひ。さま／＼尋られし所に。月をへて姫の在所を開出し。何とぞつれ歸りくればよと歎き悲しみ給ふゆへ。所を開ば同國神崎の傾城町におはするよし。早速くるわへ行て姫のいとまを乞ども。金子三百兩なくては隙をくれぬに極りしゆへ。元來人にかどはかされてかくの仕合なれば。所の御代官へうつたへ。取戻し申さんやうに親共存ひへ共。悲しきは此姫宗方の娘成ゆへ。謀叛人の落人。表向へ言上申がたきによつて。無念ながらす／＼と立歸り。お袋花待御前に。右の様子を語ぬれば。たへこがれ給ひ。終に病と成て果られぬ。餘りにいたはしく。妄執のたねと成て。未來も迷ひ給はん。供佛施僧の營より。此るり姫を廓より出し参らせ。何方へも縁に付て進し申が。何よりの追善ならんと思ひ立。某を奉公に出し。少々に給銀の此金の足にと思はれぬれ共。九牛が一毛にもあたらす。さま／＼と溜る調練。かやうに申せば親の悪を揚るに似たれ共。申さねば親共の出家いたせし因縁しれず。若き時去人より相傳いたせし。名方。世上の醫師の忌申す。墮胎の薬。俗に子をろし薬と申にて外を。存出し拵て。人しれずうられしに。家中の端半女のいたづらにはらめるを。即座におろす奇妙の薬と評判有て。段々賣出望姓はわづか成に。薬代は過分に取。少の内に金百廿兩たまりしかば。此くらみにうれなば追付三百兩に成て。願望成就せんと。段々薬拵して多く賣用意せられし所に。夜ごとに寐所へ隣の緒の付し赤子。頭に胞衣をいただき。あまた現れ出。たま／＼人界へ生を受けて生るゝものを。明りもみせず殺せし怨み。思ひしれと親どもがねたる前後にあつまり。ちいさき手して打た／＼おそろしさ。此世からさへかくあれば。來世はなをしうき責にあふべし

と。それより菩提心に入て。出家をとげ諸國の靈佛場を拜みめぐり。罪業消滅をいのりしが。溜置し百廿兩の金子を懐中して。るり姫をかへし親かたにあひ。是非歎て隙をもらはんと。某が奉公いたせし屋敷迄来て物語仕。出行てより間もなく。神崎より半道計北に殺されてゐるよと。見知ものつけしによつて。私つとめゐる屋敷より五六里有。聞やいなやかけ行しに。はや死がいは土中に埋み。札を立て置しゆへに。所の庄屋の許へ行て様子を尋しかば。書付したる菅笠。身に着られし布子を出して見せけるゆへに。無念骨髓に通つて。敵を討んと主人にいとまをもらひ。母や妹を京成伯父の方へ頼みつかはし。それより諸國をねらひめぐり申せしが。思ひもよらず七年めの今日めぐりあふは。武運にかなふ仕合。いざ三寸之進用意がよくば勝負せんと。刀に手をかけ待かけたり。兼好始終の物語を聞召。横手を打て扱は其方が親はるり姫の家來にて有けるよ。そのるり姫こそ神崎のけいせい町にて。吉田といふ大夫職にて我二世を契。一旦此女郎ゆへに親の勘當を請たりしが。今聞るゝ通。三寸之進が忠節によつて勘當ゆるされ。家督をつぎ父死後に三寸之進にもかくし。吉田をひそかに請出し。今別家に抱置。北條宗方の娘とて兼て咄に聞つるが。扱もふしぎの縁也。尤敵と有からは。打たく思はるゝは道理ながら。様子を聞ば自餘の敵打とはかはり。因縁もある事なれば。先今日の勝負は兼好がもらひ。其上にて了簡すべし。暫く延引いたされと。和談の口ぶり聞と新五兵衛面色かはり。此年月の敵に出合ながら。此場は延引成がたし。最前より詞をかくるに相手にならぬはをくれたかとのゝしれば。たまりかねてずんど出。主の御意を指置すゝみ出るは慮外と扣るを。臆すると思ふか。いざ勝負せんと刀拔んとするを。兼好をしとゞめコレおすが新五兵衛をなだめよ。了簡ならずば日を定て勝負せんと。兩方龍虎の勢ひ有かりを。様々詞をつくしなだめ給へば。兩人共に暫くしづまりひかへたり。

三之巻終

兼好一代記四之巻

○ 傾城の思入た愛着の道其根深し

風も吹あへずうつろふ人の心の。花になれにし年月をおもへば。あはれに聞しことの葉に忘れぬ物から。我世の外に成行ならひこそ。なき人のわかれよりもまさりて悲しき物なれ。くるわにありし時の事を思へば。よふも命はありし事ぞかしと。吉田は今身請せられて。ふかき兼様と思ふ儘成契。過し思ひの數々今咄に成て。笑のたねとは成ぬ。何やらん用の事あれば。三寸之進殿方へ參れとの御使心もとなく。是迄かくしておかせらるゝ御家老の許へ。何しにめさるゝ事ぞと。心ならずも參れば。粹様ほど有て。はやわしがおぼつかながる心を汲で。氣づかひな事でないそち引合す人があると。新五兵衛兄弟をよばせられ。是がそちたちの親の主人。花待の娘のるり姫。あの男はそなたの咄めされたお袋のめの子。轟新九郎のむす子新五兵衛。あの女は三寸之進が女房おすがとて。則新五兵衛妹じやが。段々の様子有て。今昔物語を聞て。そなたの咄をしたれば。親の御主様の姫君なれば。お目見へがしたいと有ゆへよびにつかはした。あふてやりやれ。何とふしぎな事ではないかとあれば。新五兵衛かうべを疊へ付。おまへをくるわから出し奉りて。何とぞ然るべき方へも御縁につけたいと。様々心をつくしましたに。親どもは三寸之進が手にかゝつてやみくゝと相果ました。存命でかくのごとくるわを出させられました様子を見ましたらば。いか斗悦びませふに。エ、無念と半分申さしてすゝりあげてなきけれ。吉田は兼好の引合の物語を聞て。扱はそなたがたは。かねて母様のお咄なされた。新九郎の子供衆か。ちいさい時なれど。新九郎のかほを覺てゐるが。親子とてほんにどこやらがよふ似た。三寸之進殿は妹ごのつれあいなれば。そなたの爲には妹むこ。新九郎はしうと。しうとは親てな

いか。其親同然の新九郎を。むこの三寸之進殿が。手にかけて殺されたとは。どふした事ぞ合點がゆかぬとふしんすれば。兼好おつ取てコレ。ねどひせまい。高が皆そなたゆへ也。けふそちを爰へよびよせたは。若氣の至りとてわけもない事に神々をおどろかし奉つて。二世の契の證人にたて申。ゆびさきから血を出して判をおし。たがひに取かはした起請と三くだり半のいとまの狀を取かへ。そなたに隙をやらふと思ふての事也。かふいひ出してはひるがへす所存にあらねば。くどくした愚痴な事いふて。いとまを下されふより。一思ひに手にかけて殺して下されなど。もたれた事いふて泣めざるな。いとまをやるはそちが親同然にせねばならぬ者の。敵をうたさふと思ふての事なれば。世間の男のいとまをやるやうな。飽てなんどいふ事にあらず。離縁するもいとさゆへじや。守袋に入ていやる。おれが書た起請をもどしやれ。身もそなたから來た誓紙に。いとまの狀を添てやるぞと。硯引よせ三くだり半を書かゝる手を取て。コレ兼好。先のさき迄ことばの釘をかへして。おつしやるからは。町の女衆のやうにくどくとした恨は申ませぬ氣なれど。是ばかりはほん降てわいたやうな俄事。もつたない事なれど。私が眞實の親を打た敵でも。こなんにはなれて討氣はない。まして海山程恩をきた。親同然の人でも。親でない人の敵をおまへに見かへて打事は。さりと望はごせんせぬ。女の身なれば武士がたのやうに。たとへ腰ぬけじやといはれてからが。はぢ耻辱にも成ませぬ。わしやおまへにはなるゝ事が何より悲しい。敵とやらをうたしてやらふと。世話に思ふてくだんすであらふが。其世話はやめてくだんせ。たしなんで泣まいと思へど。あんまり思ひがけもない事聞たりや。ひとり涙がこぼるゝと。兼好の膝の上に顔を當てしくくなけば。兼好吉田を取てつきのけ。扱く世につれてあさましき心に染たる女かな。好堅樹は地の底に有て芽百圍をなし類伽羅は卵の中に有て聲衆鳥にすぐるゝといへるに。男の色にほだされ。當然義理有てうたねばならぬ敵を打まじきとは。見さげ果たる不器用もの。そちが出所がつね味のとめする女のごとく。ぼくりやの娘の。棚やの女童のといふて。ならぬ親の爲に身を賣たけいせいならば。賤き胤なればことわりと思ふてすまさん。母の睨にて世間の事は聞てゐつらん。誰ありふそ今時本六十餘州を。兼好ににぎり。天下の執權職。北條相模守貞時入道の一類。駿河守宗方の娘。るり姫といふ身ではないか。たとへ今けいせい遊女に身は成共。心はなぜに武士の娘の氣質を持ぬ。由緒正しと見る人の。心おとりせらるゝ本性見ゆるこそ口惜けれ。品かたちこそ勤の身に染共。心はなにかかしこきより賢きにもうつさばうつらざらん。其方が母の花待は。さすが宗方の妾ほど有て。わがみ流浪して飢死ぬる共。名ある人の胤を人にかどはかされて。けいせい遊女にする事むねんなど。家來の新九郎を頼み。口惜いといひ死にめされたとある。新九郎も忠義の武士。花待の遺言を忘す。未來を取はず身の罪科にかへて。道ならぬ薬をこしらへ。此世へ生を受て來る胎中の子共を殺して。金を拵ため。そちをくるわから出し。遊女の氣をぬいて。然るべき侍の妻にもせふと思入た念力の金を。三寸之進にばひとられ。其金ゆへに害せられて死だ新九郎は。主人花待の遺言を守つて心をつくしたは。則母の花待がせらるゝ同然。然れば現在母といひ忠義の家來といひ。一かたならぬ新九郎を討た三寸之進なれば。身に願ふて成共いとまを取て。新五兵衛兄弟と一所に成て。三寸之進を討取。母や新九郎が昔の下の怨をはらさせ。成佛さする心はないか。某と縁をむすびるれば。身に又忠をつくした三寸之進じやによつて。女房の味方をして。三寸之進は討す事がならぬゆへに。いとまをやつて本望をとげさす合點じやが。是程にいふてもいとまをもらふて敵を討氣はないかと。段々道理を立ていひ聞さるれば。吉田は當惑して返事もなく。只泣入てゐたりけり。三寸之進は最前よりわざと勝手に入てゐけるが。段々を聞てつくと出。吉田が前に畏り。おまへが若殿の不便がられますお女郎様にてましますか。大事の御家來新九郎入道塵海を討て。おまへをくるわから出さふと。辛苦して拵られた金を取た。三寸之進と申非道もの。御手にかけられて。先立給ふお袋様。新九郎入道へ御手下さるべしと。刀を抜て吉田が前に指置。さあそぼせと觀念して座してゐれば。女房おすが此跡を見て。吉田が側へ來り。おまへには此刀

ればことわりと思ふてすまさん。母の睨にて世間の事は聞てゐつらん。誰ありふそ今時本六十餘州を。兼好ににぎり。天下の執權職。北條相模守貞時入道の一類。駿河守宗方の娘。るり姫といふ身ではないか。たとへ今けいせい遊女に身は成共。心はなぜに武士の娘の氣質を持ぬ。由緒正しと見る人の。心おとりせらるゝ本性見ゆるこそ口惜けれ。品かたちこそ勤の身に染共。心はなにかかしこきより賢きにもうつさばうつらざらん。其方が母の花待は。さすが宗方の妾ほど有て。わがみ流浪して飢死ぬる共。名ある人の胤を人にかどはかされて。けいせい遊女にする事むねんなど。家來の新九郎を頼み。口惜いといひ死にめされたとある。新九郎も忠義の武士。花待の遺言を忘す。未來を取はず身の罪科にかへて。道ならぬ薬をこしらへ。此世へ生を受て來る胎中の子共を殺して。金を拵ため。そちをくるわから出し。遊女の氣をぬいて。然るべき侍の妻にもせふと思入た念力の金を。三寸之進にばひとられ。其金ゆへに害せられて死だ新九郎は。主人花待の遺言を守つて心をつくしたは。則母の花待がせらるゝ同然。然れば現在母といひ忠義の家來といひ。一かたならぬ新九郎を討た三寸之進なれば。身に願ふて成共いとまを取て。新五兵衛兄弟と一所に成て。三寸之進を討取。母や新九郎が昔の下の怨をはらさせ。成佛さする心はないか。某と縁をむすびるれば。身に又忠をつくした三寸之進じやによつて。女房の味方をして。三寸之進は討す事がならぬゆへに。いとまをやつて本望をとげさす合點じやが。是程にいふてもいとまをもらふて敵を討氣はないかと。段々道理を立ていひ聞さるれば。吉田は當惑して返事もなく。只泣入てゐたりけり。三寸之進は最前よりわざと勝手に入てゐけるが。段々を聞てつくと出。吉田が前に畏り。おまへが若殿の不便がられますお女郎様にてましますか。大事の御家來新九郎入道塵海を討て。おまへをくるわから出さふと。辛苦して拵られた金を取た。三寸之進と申非道もの。御手にかけられて。先立給ふお袋様。新九郎入道へ御手下さるべしと。刀を抜て吉田が前に指置。さあそぼせと觀念して座してゐれば。女房おすが此跡を見て。吉田が側へ來り。おまへには此刀

で。お袋様や私共の親の怨敵と思召て。お打なされます御心入にてさふらふか。御心根が承りたいと。心底を
 いてみれば。吉田は涙をしのごひ。顔ふり上げてそなたは。親の敵じやとて。つれそふ夫の三寸之進を打心底か。まづ
 そちの心ねをいふて聞されよといへば。女房此返答に行つまり赤面してみたりしが。暫く有てム、すりやおまへには
 お打あそばされぬ御心入にてさふらふな。女の道には三従とて。おさない時は親にしたがひ。嫁入しては夫にしたが
 ふがならひなれば。先道をいふて見た時は。親にかへて夫につかへるが女の道。おまへも憚ながらおいとす思召
 ます。殿様の爲に人を害し。身のうき苦勞にかへて働かれた。三寸之進事なれば。そこは教ますてはなれ共。御心
 の有さふな事と。なぞをかけるやうにいひまはせば。殿様を始此座にゐる衆中が。三寸之進よりまだ大切な敵の有事
 を御存ない。根本の敵といふは。此吉田といふ女じや。敵といふわけをいふて聞さふか。殿様をあげやの納戸へ押籠
 させたやうにした。根元の發りは。揚代が濟ぬから也。其あげ代はわらはが身の入目。それゆへ納戸にをし入られて
 ござるを。急に出して親殿様の御死去なされぬ内に出しまして。御家の跡めにせふと思て。時の間を合せたさに殺し
 てとられた金は。殿様の御身の爲の金ではない。皆わしから發つた金でないか。又そなたの親の新九郎入道が。今聞
 ば罪のふかい賣薬を。調て金をためられたも。おれが身をくるわから出さふ爲の金。たとへば加茂川桂川大和川木津
 川と名は様々にかはれ共。落込所は淀川。其淀川のふかい罪人といふは。此吉田が事なれば。外に敵はない今爰て死
 で。先立給ふ母様や新九郎に冥途であふて。此段々のお断を申せば。三寸之進殿を討たにはまさつた手向じやと。
 前にある抜刀を取て自害せんとするを。皆く取付様々いひなだめて。吉田が自害をとりとめにけり。

② 遊女も若い時命長ければ恥多し

あだしの、露きゆる時なく。鳥部山の塵立さらつてのみ。住はつるならひならば。いかに物のあはれもなからん。世

は定めなきこそいみじけれ。命ある物を見るに。人ばかり久しきはなし。かげろふの夕をまち。夏の朝の朝霧をしら
 ぬもあるぞかし。つくく一年をくらす程だにも。こよなふのどけしや。あかずおしと思はど。千歳を過すとも一
 夜の夢の心地こそせめ。住はてぬ世に見にくすがたを傳えて。けいせい年のよつたと。犬張子のはげたと。役
 に立ぬものと。末くあかれて何かはせん。命長ければ恥多し。生がひもなき身なれば。爰を放して死したもと歎
 くを。新五兵衛おすが先刀を取て。おまへを死しましては。果ました親共へ立ませぬ。どふぞ思案も有べきに。おぼ
 しとどまり給へやと。敵打の事はわきへ成て。吉田に取あつかひかねて。兄弟は側をはなれず。是は兄様どふおさめさ
 んするぞと。たがひに顔を見合せ。吐息をついでゐるより外はなかりき。兼好人々の様子を見て。つくく思案して
 のたまふは。新九郎入道塵海が殺生と知ながら。墮胎の薬を賣て。金銀をため三百兩の金子にせんと。罪もむくひも忘
 れて。一心に金を拵る事のみにかゝりしは。古主のるり姫をくるわより取戻さん爲ならずや。其るり姫は某が身
 請して。くるわの苦患をのがしぬれば。塵海が存生の時の心に成て見よ。いか計。悦ばん。其身害に逢たるは。多く
 の子共を胎中にて殺せしむくひ。天道三寸之進が手をかつて。伐せられしものならん。此道理を兄弟共によくわきま
 へなば。誰を怨む事もなく。是自業自得果。親の罪に罪をかさね。地ごくの釜の下のもゆる所へ。兄弟して薪をそふ
 ることばりならずや。かく利害を解うへにも。迷を取て心決せず。まだ三寸之進に怨をする心底ならば。明朝辰の刻
 に。右近馬場にて勝負をとげさせ。汝らが存分にして得さすべし。三寸之進其用意仕れ。扱吉田にはいよくいとま
 をつかはす間。今一たびくるわへ歸り。昔のつとめの身と成て。身の代百廿兩を。抱し親かたよりもらひ。其金を
 以て塵海法師が遠忌の佛事を執行ひ。佛果ぼだいを祈るべし。それ誰か有吉田をつれて。くるわへ伴ひゆけとあれ
 ば。新五兵衛罷出。親新九郎入道存命の節。くるわより出し奉らん爲に。心を碎きゆるり姫様を。二度ながれの身
 に沈め申ては。たとへ萬僧供養をなし。善つくし美つくして。いかやうの弔をなされ下され共。父聖靈全く受

は仕らじ。憚ながら拙者願ひの一通り御聞下され。所存の通になし下されは。有がたからんと申上れば。ねがひとはいかやうの事成ぞ。先いふて見らるべしと有ければ。三寸之進總領笹之助を。出家にせんとお思ひ立は。塵海が怨念こりかたまり。生れ來ると覺て。塵海法師に其儘の忤なるゆへ。自然御主人に怨をなさんかとの。後の禍をおもひばかり。法師にせんとお事とあれば。是父が再來に極つては。只今此席へよびよせ。最前よりの段々申聞せ。父が魂魄に紛れなくば。幼少成共。存念を申べし。然る時はたとへ三寸之進と勝負を相止。和談いたせと申ても。正しく父塵海が了簡と存いへば。現在親の敵を目前に生置ても。親が申付と存れば。無念にもいはず。鬱憤はれいへば。あはれ笹之助を召出され。かの忤が了簡次第に仰付られ下されなば。有がたく存ずべしと申せば。げに是は尤也。急で召つれ參れとて。早速に呼よせらるれば。笹之助何心なく來る躰。新五兵衛見るよりぞつとして。さつても似たり上手の佛師にうつさせたり共。是程に父聖靈の御影はよもや作るまじコレおすが此子をみやといひければ。妹もそばに立寄て。今迄里へ幾度か見まはふといひしかども。そちがゆけば里の親くが如在にもするかとおもふて。見にわせるかと心がまはれば。預けてをく内水くさふ思はれ。子のためにならぬと有ゆへ。つるに里へも行ず。よびにやつて見た事もなければ。總領は有と知ながら。あふたは今が始しやが。なふ其儘のと様のお顔じやと。笹之助に取付。今更父の事を思ひ出して。すより上て泣にけり。新五兵衛も涙をこぼしながら。過去世にては父。今日にては身が爲には甥。妹が爲には腹をかさぬ子。何といふてよからん言葉つかひもしがたし。今いふ詞は過去世の父に對して申詞也。誠に隔生即忘と聞時は。生を隔ればすなはち忘るゝとかや。御身は我父塵海法師にて渡らせ給ふか。我こそ忤新五兵衛妹おすがにていが。忘れはしたまはずやと問ければ。笹之助物はいわずに兩眼よりはらくと涙をこぼしけるが。俄に眼を見つめ。一身より玉の如く成汗をながし。大息ついてあらたへがたやと大きにうめき出し。手足をのちへちめくらしむてい。新五兵衛見奉おどろき。左右よりだきかへ。顔に水などそそぎ。笹之助の何と

しけるぞ。氣をつけよとよびいける。音を聞て。兼好吉田三寸之進並出て見給へば。笹之助のしき内に眼を見出し。三寸之進をはつたとねめ。よくも我を殺して金をうばひ取しよな。我等主の爲とはいひながら邪見非道のわざをなし。生あるものゝ命を多く取しむくひによつて。此世から責苦にあふ。此苦思せめては日本國中の靈場を廻り。靈驗ある佛を拜し。經を讀念佛を唱へ。身に於てつくる惡業消滅をいのり。未來を助らんとお思ひ立し所に。をのれに思はず害せられ。くるしみの上にくるしみをかさねて。今生を變ても日夜のわかちなく。暫時も責苦をたすかる間なし。此うらみ多生劫迄忘れはせじ。汝が主人と頼む兼好をはじめ。をのれが一類を悉く取殺し。思ひしらせん。我無量のくるしみを受たる有様を。目前に見すべしと。いふ聲の下より。いづくより來る共なく時の間に。袍衣をかぶりし赤子共數百人惣身に取付。くるしめる躰身の毛もよだちおそろしく。又不便也。新五兵衛此躰を見るより忍びがたく。血の涙をながし悲しみが。かゝる苦患をのがれん爲に。法師と成て諸國行脚をしたまひ。佛に懺悔し此むくひを助らんとし給ふを。殺害して猶くるしみをかさねさせし三寸之進。見るに付てもうらめし。もはや生ては置がたし。さあ覺悟仕れと。順志の劍を抜て打てかゝるを。おすが兄に取付て。夫をいとふてとめ申てはなけれ共。三寸之進殿を打給ふとて。あの困をのがれ給ふべきとは思はれず。却而修羅道のたねを植らるゝ成べし。さらく父の佛果の便とは成まじ。いかりをやめて僧をも供養し。善根をもなし給はゞ。せめても父の罪滅し。佛果に至り給ふべしと。涙ながらに止めけり。三寸之進も此困の躰を見て。法師が怨むねにこたへ。誠に一念五百生繋念無量劫と聞時は。互に世々生々まで怨念つくる期有まじ。某爰にて切腹して。塵海法師が最期の惡念をはらして得さゞば。わが後の世もあしからじと。をし肌ぬいて刀を抜。腹へ突立んとしけるを。兼好周章とどめ給ひ。塵海法師が苦患は身が請取て。速に成佛をさすべし。暫く待と與へ入給ひしが。其後音もせざるゆへ。三寸之進心もとなく内へ入て見まはすに。いづくにもおはせず。學問所の机の上に。通世するとの書置に。もとどりを切て添置れぬ。三寸之進おどろき。御書

置を先ひらき見るに。舎兄兼雄の一子兼丸を養子にして。三寸之進新五兵衛和談して後見し。吉田の家を相續させ、くれぐれと書残され。此切捨し黒髪を。塵海が再來に見せなば。怨をばらして眼前に。困を助らんと記置れければ。三寸之進御書置にまかせ。御髪を笹之助にいたゞかしけるに。忽あまたの赤子。春の日の雪のごとく。悉く消失ぬれば。笹之助もともに息たへ果にけり。扱は兼好公の御出家によつて怨をばらし。再來此世を去て。善所におもむきしと覺たりと。人々奇異の思ひをなしぬ。然れ共此まゝにては指置がたし。先御跡をしたひ。一旦御出家をとめて見んと追々に御跡を求てしたひ行こそことほりなれ。

③ 夕の日に子孫を愛して祝ふ誕生日

若き時は血氣内にあまり。心物にうごきて情欲多し。身をあやぶめてくだけやすき事。玉をはしらしむるにたり。たゞ勇る心さかりにして。物とあらそひ心にはちうらやみ。好む所日々定らず。色にふけり情にめて。行をいさぎよくして。百年の身をあやまり。命を失へるためし世に多し。轟新五兵衛は兼好の出家の功德によつて。父塵海苦思を遁魂魄消失し有様を現に見るといへ共。親の敵生置ては。世間の人に腰ぬけと。後指をさゝれん所無念成と。血氣にまかせ前後の辨へなく。只一筋に思ひ込て。兼好の書置にて一旦心をひるがへし。和談せしを起しかへして。忽野心をふくみ。打て捨んと心懸しが一度和陸の盃して。兼好公の跡をしたひ。御目にかゝつて御遁世達とゞめ申せ共。家を出姿をかへし上は。再び塵俗に還る事にあらず。兩人心を一致にして。兼丸をもちたて。家を治てくれよと。誓を立て御歸館なきによつて。是非なく兩人すくくと立歸り。此上は兼丸殿を招待して主君とあがめ。互に心を同じうして。家を守らんと。心の角を折て。心よく盃取結び。今更和談は破つた。又もとの如く親の敵なれば。勝負せんともいひがたし。所詮何にても事を改めいひふんして。それを以て討果さんと胸をきはめる所存とは。妹

のおすがは露しらす。夫と和談の上は。いよゝ一家の因ふかく。別心有まじと思ひ。世間の一門のごとくしたし。かりそめの問談合にも。心をかす行たり呼だりしたりしが。けふは龜千代が誕生日。伯父様を呼ませんと。新五兵衛方へ人をつかはせば。それはめてたい行て祝はんと。夕飯前より三寸之進が方へ行ば。龜千代は氏神より下向し。伯父様御出なされしかと。おとなしく挨拶すれば。御家老の子程有て。他の子共よりは公儀ぶりがかくべつ。成人せば親三寸殿にかはらず。御家のさばきをしかねまい生れつき。おすが大事にかけて育めされ。扱三寸之進は何方へ行れしぞ。定而誕生日の祝儀に。身共も夕飯によぶといふ事は知てあるべきが。客の來も忘れてか。近所ならば呼にやられよ。但しけふ身共呼るゝは其方斗が心得にて呼に越。三寸之進は我等が來るといふ事をしらすかとへば。成ほど主が申付られ。龜千代が爲には大事の伯父ご。今日の正客と云はそなたの兄貴。一番に人をやりやと。こなさまの好物共を知て。献立を自身して。若黨の伴内庖丁がきいて有ゆへよび付。料理の仕やう迄をいひ付て。追付歸らふと行先も申さずい出られました。もうやがて歸られませふ。龜千代將某盤持て來て。伯父様に此中の詰物をしておめにかきやと。夫の歸る其間のまを合せてゐたれ共。どこに何してゐるやらん日もはや西にかたふけば。けふにかぎつておそい事。御屋形へ立よられ。何ぞ俄の御用出來。それゆへ歸り申されぬ物でかなごさんせふ。御料理の加減損ぜぬうちにぬしが歸られずと。御膳を出せといひ付れば。新五兵衛むつとした顔つきにて。いやゝ膳出す事無用。客を呼かけ置て。亭主出ちがひ暮かゝる迄歸られぬは。能々身共を馬鹿にして踏付らるゝ仕形。戻られぬ事あらば。家來にても歸し斷をいはるべき筈を。不届成亭主ぶり。いふても今日は龜千代が誕生日の祝義。身共を伯父と執してよばるゝからは。三寸之進は我等より年かさなれ共小舅。三寸之進は妹むこ。禮儀をいはゞ出迎もせらるゝ筈。それに入出入の下々を呼て物くはすやうに。肝心の亭主が他所へ出て歸らぬといふは不禮千萬。何方にらるゝぞ。あふて禮儀いはねばならぬ。行れし所知てあらば。我行て對面せん。さあどこじや先をいへと。是をいひ

くさにして。遺恨を取結び。勝負せんと。さのみに氣色をかゆる程の事にもあらねど。わざと角め立て立腹すれば。おすがは新五兵衛が心の底をしらねば。コレ兄様。他人の所でさへ心安ふ念比な中は。客の亭主のといふ差別もなく。子の祝ひに戻りたふおもはれふが。何ぞ能々の用てかなあらふ。こちらはひもじい。ていしゆの戻らるゝ返は待れぬ。早ふ膳を出しやといふて。きげんよう膳にすはり。妻子の悦ぶやうにさつしやるが誠の懇意。ましてこな様は一家の事。けふの亭主といふはこな様の現在の甥子。ひとり悦んでも下されふ所に。他人他門が始て何ぞ式作法の振舞に來たやうに。客を呼て亭主が留守は。馬鹿にするか贈付るか。ことくしい何事てござんすぞ。きげんなをして膳にすはつて心よ祝ふて下さんせといへど。武士は町人とちがふて一家でも禮をみださずかたふするが肝要じやと。すへし膳にもなをらず。腹立さふにしてゐる所へ。三寸之進が草履取の八内。あはたどしくかけて歸り。柳原にて何者かうしろより旦那を一通にして。行がた知れずにげうせい。町人共出合ひへ共。得取得ず見失ひひゆへ。先御しらせ申さん爲。面目なきながら馳歸りゆと。汗をながしてひひければ。おすがをはじめ家内の男女。是はくんと肝をつぶし蚊のなくごとく泣にけり。新五兵衛聞やいなや牙をかみ。エ、無念な。身が手にかけて。打て本意をとげんと思ひし内に。外の者に打せ残念千萬。コリヤ八内。また三寸之進は死きらぬか。あたりから早速出合なば。とどめまでさしてはにげゆくまいな。威ほど仰の通。うしろよりして旦那の肩さきから。乳の下迄切さげて。すぐに立退ゆといへば。エ、猶豫して人に先を越れたな。責てとどめ成共指て。鬱憤晴さんとかけ出んとするを。おすが引留。ム、すりやこな様は兼好様の御出家によつて。笹之助と生れかはり給ふ父上の罪障滅して。困をのがれ給ふを見て願志の角を折。和談の盃迄して。しかも御家の臣と成。三寸之進殿とは一家といひ傍輩。中よくなされ御幼少の兼丸様をもちたて。家を治ふとの仰合を變じ。又意趣をふくみ討て捨んと御心底でござるの。ヲ、其通一旦和談はしたれ共。現在親の敵と和談し。新參者として敵に引連さるゝは世間も恥かしさに。約を變じ討氣に成たゆへ。何ぞ遺恨

を取結び。謀果さふ斗に。けふも腹立したは身が計略也。そちが爲夫ながら現在親の敵しやとあ我に併せて。いとどめを共々指て。父に手向ふぞと。いさみ出るを。ア、こな様は兄はながら久く浪人なされて。武士道を忘れ給ふと見えたり。此比ぬしを見給ふ目づかひ。心の底に劍が有と見ましたれば。三寸之進殿も目高で。新五兵衛は和談したれ共。心底解ぬとみへる。あの者心とけねば。萬事相談はだく成て。御家の爲にならねば。心底あらはし見て教訓せふと。主が智略でけふこな様を呼まして。三寸之進こそ何者か道にて打て立退たといはゞ。新五兵衛が心底あらはれふと。八内にいひふくめ。打れ給ふといはせたは。こな様の心の中見よふ爲の斗略といへば。新五兵衛が心をつくりする所へ奥より三寸之進出て。段々と理をつくして教訓すれば。新五兵衛恥入。今より心を變ぜぬと神文書で。心を改め水魚の思ひをなして。兩人中よく萬事を談じて家をおさめぬ。

兼好一代記五之卷

○ 獨燈のもとにて讀みみる 古の色文

山寺にかきこもりて。佛につかふまつるこそ。つれなくもなく心のにこりもきよまる心地。今此身に成てこそしられ
けれ。塵海法師が因果の有様を。目前にあらはして見せけるは。我ためには善智識なり。かゝる事をみずば。世俗の事
にたづさはりて。生涯をくらし。佛の道に疎かるべきに。今此善心の氣さす所を。いかで空しくなすべきと。終に誓
を切て身を墨染となし。兼好をそのまゝに兼好法師と改名し。花とならびの岡のべに。草庵をむすび行すまして
まぞかりける。しづかに思へば萬に過にし方の戀しきのみぞせんかたなき。人しづまりてのち。長き夜のすさびに何と
なき具足取したゝめ。残しをかじと思ふ反古などやり捨る中に。吉田が紋日を頼み越たる文のくろみがちに。御かへ
し待入參らせいとく所にも書ちらしけるもおかし。此時分は我も粹ならず。女郎も本實の心なくて。物入をく
つけん筆さきに無量の上手を書てこし。涙といふ字さへ今かぞへてみれば百斗も有てけうとし。こちも随分はまら
ぬ氣で。都にそくすてゐるゝ母かたの伯父貴を殺し。忌中なれば姨の手前ありて出にくしなどゝ。見ぬ京物語で
何事をいふてうそをつかふとまゝ也。あそびも此間が花ぞかし。たがひになじみて。外の客をきらひ。こなたからもせ
くほどの中に成て。萬に氣が張て。揚屋女夫こわい顔する遣女迄に小判て笑はせ。二階のあげられてゐる餘所の女郎
迄。こちの座敷をおもしろがりてかりにもやらぬにあなたから御出なされて。そのおもしろさ四角四面な親父が。時代
にはあはぬ古文眞實な異見など。耳に入らぬは尤ぞかし。爰を打こして戀の時にのぼりつめると。さのみ物つかはず
しておもしろふ成時分には。すつきりつかひ捨て。あげやの門も夜なうらぬやうに成。あいたい大夫には合せ

ず。おもしろい事はわきへ成て。日々にくるしく。三枚給着た身が。袂解のうるみたる黒髪二重の根から細の出るを
恥ず。顔半見に忍びて行時分は。なぐさみといふ物ではあらず。氣ほわ折にゆくやうな物ぞかし。地女房とちがひ。
すべて女郎の打とけたる床の中。いもねず身をおし共思ひたらず。たゆべくもあらぬわざにも。よくたへ忍ぶは。つ
とめを大事に思ふがゆへ也。誠に愛着の道其根ふかく源遠し。六塵の樂欲おほしといへども。皆厭離しつべし。其
中にたゞ此くるわ通のひとつやめがたきのみぞ。粹もやほも金銀有も無も。心にかはる所なしと見ゆる。されば女郎
のくぜつに切てなげ出した髪筋をよれる綱にては。代つゞきし銅瓦の家屋敷を引こかし。女のはける木綿たびに
茶を入れて煎じ出してのめば。ふみ付られて。必床でふるゝとぞいひつたへ侍る。みづからいましめておそるべく
慎むべきはけいせい狂ひぞかしと。此身に成て悟をひらき。さびしい折はひとり燈のもとにいにしへの女郎の文を
ひろげて。名に高き絶達を友としてなくさみねいりに。遁世者の思出には。夜晝の差別なくねたい時にころりと一睡。
たのしみひぢまくらの中にあり。大勢の女郎の中にも。名さへ吉田は艶顔ひかりかゞやき。すき通る琥珀の二ツ櫛
を。指て三ツがさねの小袖。紅吹かへすばつとした裏。わざとならずひらめき。雪と見まがふ肥あぶらづきたる太股を
みせかけ。素足道中くり出しのうけあゆみ。あげや入の飛足。内へ入り下く迄にゑしやくし。しづかにゆたかに
座敷へ通り。色付の床柱にもたれかゝり。町にては女のぞんざいなとしかる。足つき出してのゑすまい。所とて位有
て見よく。小ゆびそらしきせるゆたかに持。ほそく煙吹出したる風情。又あつた物ではなし。けふは何と思召
てか早き御出。いつも君が御來臨を待て。鬢先が白ふ成ますに。時節もあらふ物じや。待かねて呼たてに進せいでも
早き御入。いな事てふるまい雨がふつたと思ふたが。もつたいな大夫殿が早ふ御越なされふとある前表であつたな。
急病の時呼にやるに醫者のおそいと。さびしい時の女郎の尻がるにこぬはにくいものじや。もつたい付て位を取といふ
は。なじみのない田舎の客になさるゝ事。ちと折は我等より先へ來て待てて下されても。あんまりしかりてはこ

ざるまい。何と願西さふてはないか。なじみの有客もない客も同じやうにせられてはうれしうないぞやと。待し恨みをかこてば。當客の兼好大臣には返答せず。太鼓持の願西に向ひ。わしが口から初心なといふは。なめ過た事なれど。遠國のかたい侍客のやうに。春の日の長きにはやり芝居見物に行も早い時分からあげやへ来て。一日をばに引付置。あからめもせずまもりて。おもしろふもない盃斗の取やり。ほれた女郎でも自由に長の日一日見てゐさんしたらぬも。なをあらはれに情ふかし。男女の情もひとへにあひみるをばいふものかは。あはてやみにしうさを思ひ。あだ成契をかこち。長き夜をひとりあかし。遠き雲井を思ひやり。あさぢが宿に昔を忍ぶこそ。色このむとはいはめ。餅つき之夜しば部屋にてちよつとあい。親かたやりての目を忍び。中戸で頼ずりし。格子で吸付たばこ指出し。人の聞ぬ内にたがひの思ふ事。あとさきに咄すなど。私や間夫がないによつてしらねど。間夫ぐるひする女郎衆の。親方のきびしき折檻。やりてが齒にのせてかむやうにいふてもやまれぬは。つとめはなれた本戀なれば。やまれぬが尤と思ひますとのいひかた。願西手を打。今の世の御戀知様とはおまへの事。道中して八文が茶わん酒のうまさ。牧方のならちやのすゝむを思ふては。今日かやうに結構なお肴で。澤山にたべます酒は。有やうがうまふござりませぬ。色も此格で。平生に自由に成我女房のうつくしいより。出合もの、薄見つちやがわすれられませぬといふを。兼好大臣コレ願西むしやうにはほめまい。大夫今の言葉では。世界の金つかふてあそぶ客よりは。錢なしにたゞあふ間夫がかわゆいとこのいひぶん。さらりとけふより大臣やめにいたして。向後あげやの拂もいたさず。身貧に成て。お定りの紙子ひとつにやぶれあみ笠着て。あげややりての目を忍び。間夫と成て大夫殿にかわいがられませふとひぞらるれば。なんぼ腹立さんしたとて。金の威光の中には。女郎のまことはしれぬ物でござんす。ぬすみあひこそ本戀なれと。さりとは大夫殿のそりやわる物ずきと申物。かならず且那あのお詞を。まうけになされて。お腹たてられませぬと。あるじ夫

婦手をあてる様にきのどくがれば。太鼓の願西。うか／＼と大夫殿にひよんな柄纏うつたとめいわくがる。兼好も其日は終日おかしからぬ離して。いつよりは早きお歸り。惣じて一邸の女郎に位につくは。いつからにても客次第也。儲成男あればをのづからはりつよく。一座もできる物成に。よい大臣をきらふて。あかるゝやうないひかたは。我身しらずといふ大夫殿じやと。そしれるも。斷ぞかし。兼好あんまり不審さに宿へ歸りて。書物箱より出して文選のあはれ成巻。白氏文集老子の詞南花の篇。此國の博士どものかける草紙共をくつて見られる共。錢なしにたゞあふ男を。好るけいせいといふ事を見あたられず。どふした事ぞ是には一子細有べしと五七日も。里通ひやめて様子うかゞひ。くるわのうはさ聞つくるひ給ふに。姨の珠數袋のうちに。大夫が延に書た文有を。ふしんさにそつと出して讀て見給ひ。扱は我等毎日通ふゆへ。異見しても本人は馬の耳に風じやと思ひ。吉田が方へ直に頼に文をやられしゆへに。忍びてあいこいといふ。大夫が心ざし今よめた。斷の文をまざ／＼と。一睡のうちに見られ。まことをこめて書た文には。魂のやどるゆへ。夢に見えし物ならんと。取あつめて反古どもを。茶の下へくべてのけられぬ。

③ 手足肌などのきよらにみゆる傾城の果

折ふしのうつりかはるこそ。物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと。人ごとにいふめれど。それもさるものにて。今一際心もうきたつものは。春のけしきこそあめれ。鳥の聲などもことのほかに春めきて。のどやかなる日影。冬とはちがひ。あたゝかに成て。かさねし小袖もぬぐ時分に。にげなき女のやぶれ紙子に古あみがさ。男ならば女郎買の果とも思ふべきに。しかもみがき入たる素がほのうつくしさ。あの器量にてさまの見るしいは。ろくる首かてんかんやみか。さなくば手なが鯛といふわるい病が有物ならん。疵物でなくば。誰てもかへて。置そふなものと。見る人ごとに艶色と形の見るしきを見て。ふしんを立るは。斷ぞかし。袖乞かと思へば人の門にも立ず。人

立多き法會の場に。ちいさい圓座を敷。前に札を立て。笠かたふけてあるを。はやがてんのものは。守宮の黒焼うりと推量をするに。さにはあらで札みれば。女郎に床てふられぬ秘傳書代金壹歩に賣ひるめるとの書付。扱も世界はひろし。是を買にあつまる物を見れば。月代そりたて當世の髪つき。伽羅の油にいたため。八寸の袖口の。大臣仕立の衣裳を着て。少ても色づかにぎる若い男共。をしげもなく壹歩出して買てゆかぬはなし。イヤはや何かうれまいとはいわれず。半切紙二寸ほどに書たる物を。壹歩に買てかへるは。よくく大臣の爲に成物で有べしと。しれる若い物に。どんな事が書てあるぞと所望して見しに。一切の女郎男をきらふてふるにはあらず。大かた大臣かしらに粹顔をするゆへにふられ給ふ也。又粹だてもせず。別の事もなき男を。あながち初會じやとてふるにてもなし。大夫に初てあふ男は。萬女郎に氣をのまれ。仕かける時分のしほあひぬけ。しらけて起わかるゝ事もあり。とかく初對面ならば。上手をやめて粹がほせず。隨分と女郎の氣にさからはず。人の見る事にてはなし。床の中で手を合して拜みて成共。あふが第一の秘傳。此上にふられふかと心もとなく思はるゝお方は。此封じたる守を首にかけて床へ入給ふべしと。外に九重の守り程の物あり。いか成秘文が書てあるぞと。悪晒なもの封をし切て明て見れば。ちいさい紙に筆ぼそに。此男一人門御通し可被下ゆとあり。つもられしと腹はたてど。いふ程鼻の下の長いやうに沙汰せらるゝが恥かしさに。壹歩損にしてだまるもの多し。扱かの紙子女。開帳場の参りの衆も蟻のごとくに東西へかへり。南北へ下向してさびしくなれば。圓座風呂敷に包。賣出しの壹歩廿四五も有を懐の財布へ入て歸りぬ。あれほど金を取込。あの見ぐるしきなりはと。是又ふしんしけり。此女をつけて究竟の侍跡より行しが。家なき野邊にて女に追付。此中あふていふ通りに。我等がいふごとくに妾奉公に出らるゝと。其身はいふに及ばず。親兄弟一門送うかみあがる事じや。目見への小袖はいかやうに結構なも身が方にこしらへあれは。きせて出すべし。わるい事はいわぬひらにとすむれど。紙は男持事はならぬ身。心にふかひ願都ゆへに。顔をさらして人並多き所へ出。此秘傳書を賣て金をためま

す。此すがたを見て禁止に思召で。御世話になされて下さるゝ御心ごしは。悉くござりますすれど。御申すす御り。男に肌をふるゝ事のならぬ身。御ゆるされて下さりませと。いひ捨てしてゆかんとするを。件の男袖に取付。そなたの様子を此間繪にかゝせて。去御歴々様の御めにかけたれば。大分御氣に入て。千兩萬兩出して成共。抱へん間早々つれて参れとの仰付にて。けふは是非に伴ひ行合點で。開帳場へ出かけた所に。仕舞ていなるゝ躰さいわいの所を見付た。いやでもおふても同道して行ねばならぬ。さあおじやれと。紙子の袖を取て引立れば。是はむたないやと申ものを聞わけのないお侍様じやと。ふり切てかけ出せば。かふいひかけてからは。にげてもはづしても雲のうら迄追かけ行て。つれてゆかねばならぬと聲かけて。跡より追て行ば。女は爰を大事とにげしが。女足にてとらへられさふなれば。兼好法師の草庵へにげこみ。内よりあみ戸をたてゝ。庵室へはいり。跡より追手のかゝるもの。影をかくして下さりませといへど。庵主は留守と見えて答るものなし。扱は亭坊様は内にござらぬか。どこへかくれた物であらふぞと。あたりを見まはし先爰へ成共身をかくして見るべしと。佛だんの下の戸を引あけ。身を横にしていはり。内より戸をさして南無觀世音并。此難をすくふてたび給へと。心中に祈念して息をもせず忍びある所へ。かの侍追かけ來り。あみ戸を引ちぎつて内へ入。方々をさがし。佛だんの下より外にかくるべき所なしと。戸を引明て。もふかくふかど見入てからはのがしはせぬ。命でもとらふとはいわず。其方を出世させ。榮花の身にしてやる事を。こわい事いふやうににげまはらるゝは。身に付た果報をさらへおとすといふもの。さあく出やれと。帯に手をかけて引出しみれば。紙子姿にてはあらず。縫入の御所染の着る物着たる女也。是はちがふたとつくく顔を見て。ム、そちや侍従のつぼねてないか。大かた見忘れられたであらふ。某はそもじに命を打こんだ。淺原判官爲頼なるが。そなたへ艶狀を付たる事と。早田の宮の姫君を仲人めされた僉儀の事につき。齋藤を打て立のき。諸所方々と流浪し。近い比から高の武藏守師直公の方へ女色目利の役人に召かゝへられ。洛中はいふに及ばず。近在の中に媚すぐれたる

女を見たてありき。美女を見出して指上申と。下さる扶持切米の外に。御ほうびとして金子百兩下し置るゝによつて。毎日美女を見て廻る所に。此中替つた姿の女。器量すぐれてうつくしう。粹な風にて紙子を着。人立の所へ何やら賣に出る。しやれた女めづらしい風俗成ものゆへ。御慰にもならふかと。繪に寫させて御覽に入れば。此繪の通に違はずば。妾にかゝへんとの仰によつて人立の有所を心ざし。開帳場へ行し所に。たつた今内野にて見付。出世する事なれば。是非にこいといへど。男と肌をふるゝ事はならぬといひ切てにげしゆへ。きやつ取にがしては。百兩といふ金を取はずすゆへ。追かけ来れば此庵室へにげこみしゆへ。はいつてさがすに。かくれてあさふな所は。佛だんの下と思ひ引出したれば。思ひもよらぬ君にあふたは。とかく縁がつきぬもの。是迄世間せば成て。所々方々と流浪し。漸と知行取か。わづかの切米取に成しも皆こなたゆへじや。もふ十年斗も立たれど。昔より女房ぶりを仕上られ。いよゝ以前に十倍の思ひ。あふたこそさいわい。是非に今思ひをはらさせて給はれ。紙子女の事は打捨てぬれかゝれば。侍従はうるさくつきつけのけ。ア、しつこい。まだ思ひやめられぬか。戀といふはたがひに思ひあふてこそおもしろけれ。いやがる女とむりに枕をならべたとて。何たのしみに成ませふ。ふつゝり思ひ切て下され。よい殿御なれど縁がないやら身にたへてうるさい。手を合して拜みます。思切て下されと。身をふるはしていひければ。爲頼眼を見出し。去とはしづとい女じや。とくにも打切てしまふやつなれど。うぬが色にほだされて。どこぞでは叶へてくれふものと。戀ゆへに宥免してをけば。いよゝ愛相もなき根性ほね。もはやけふが絶命絶命の場じやと観念せい。年来心をつくしたかかりに。なぶり殺しにして。せめては腹をいんと。侍従を取て引ふせ。用捨もなく兩手を。しろへねおまはし。そばにありし手巾にてつよくいましめ柱にくゝりつけ。刀を抜てさあ是でも心にしたがふ事はいやか。返事次第でむなもとをるぐるかと。おどして心にしたがはず未練な心から。刀をひらめかして見せければ。侍従は身をふるはしながら。是。感觸。わらはに脚を付給はせ。そなたは首を獄門にかけられ給はん。みづからも今は高の

鐵直公の御妾達を擲け。大勢の女中がしりを。大勢の御つかへを擲。以前よりは過分の敵を取て。鐵直公がにて女の出頭。今日此庵室へ来りしは。師直公の御内證の御使に参りし所に。御庵主お歸なさるゝ迄此庵に待てるたりしが。庵の中女のひとりあるは。亭坊の大黒かと。所からうたがひては。庵主に浮名立るやうなものと思ひ。それゆへ庵主の歸らるゝ迄は。人に見られまじと。それゆへ佛だんの下にはいりゐたり。こなたの爲にはつらき女ゆへにあたら一命をはたされ。師直が女頭を打たる物なれば。以後の見せしめにと慥にごくもんにかけれ給ふはしれた事。よく分別をいたされよと。いましめながら段々の子細を語れば。師直の女頭と聞より爲頼びつくりし。何かなしにいましめるとき。後悔の跡見えける。是皆師直が威光のつよさ。名斗聞てさへ恐れをなして繩をほどきぬ。

㊦ 下戸ならぬこそ上戸の寄合祝儀の酒盛

狂人のまねとて大路をはしらば則狂人也。悪人のまねとて。人を殺さば悪人也。まねずして心から邪を以て人を殺さんとせば。生得の極悪人也。爲頼侍従が師直の方の女中頭をつとむると聞て。繩を解あやまる顔をするは。師直へ取威をしてもらひ候を以て出世をせんとの心にて。俄に面を付かへ。以前の如く大内のおつばねと思ひしに。高師直公にて御女中頭をなされ。口を利るゝ女中ありと聞しが。扱はこなたの事にていか。某御心にもあはぬ戀を仕かけ。一家の齋藤左衛門を討て。廣き都せばくなり。様々と流浪し漸此比美女の買出し役人に。小切米にて有つき。人らしく罷成ゆ。爰を仕損じては。もはや金の緒に取つかず。一生浪人して渴命に及び。悪縁が善縁に成と申はかやうの事。向後こなたへ心をかけし事はさらりとあいやめ申べし。其代りには師直公へよろしく御取成下され。引上られ近習をもつとむるやうにひとへに頼み存る。此度御館の風俗を見るに。奥女中の方から仰上らるゝ事は。何によらず御取上有て。早速首尾能明ば。ひとへに頼入申と。追蹤するこそあさましけれ。留守のうちに人有とはしら

ず。兼好法師は他所より歸給ひ。庵室へ入て見給へば。其むかし出合給ひ難儀せられし淺原判官。姫の媒をせし侍従也。兩方たがひに顔を見合せ。是はくつと肝をつぶし。横手を打より外はなし。侍従申は。世をのがれさせ給ふよしは承及つれ共。みづからも是成爲頼殿の。齋藤殿を打てのかれしより。姫君へ仲人せし沙汰あしく。御上の御聞に立。大内の住み成がたく。身を退て九條あたりへ引込。女筆の指南をして日を送りし所に。高師直公より。女の祐筆をかへられんとて。わらはを召出され。段々御意に入て。今は女中頭と成て。師直公をたてふとふせふと私次第。然る所に先日御不快にて御慰に。檢校衆に平家を語らせられ。頼政があやめの前を。鶴を射たる御ほうびに下されし段を聞給ひ。あやめの前の美人成噂ありしを。みづから御伽申てをししゆへ。何心なく早田の宮の姫君の。容色世にすぐれ給ふ物語を仕いへば。しきりに見ぬ戀にあこがれ給ひ。何方に其姫君は渡らせ給ふぞと。餘りにつよく尋られしゆへ。過し比鹽治判官高貞。禁廷にて惟鳥をみるとめられし勸賞に。頼政の例になぞらへ。おしきかな此姫君を宿の妻に下され。痛はしや姫



君。御身機ならでいとふかふ態にし給ふといへ来。頼命もだしがたく。玉昭君が胡國の夷にとられし思ひをなして。鹽治の妻と成給ふ。其人の奥方と成給ふ姫君へ。文をつかはしくれよと。達而御たのみいろく御辭退申せ共御聞入なく。此使をせぬにおいては。汝が母もろ共科に行はれんとこの事。道なき使をせぬゆへに。殺さるゝわらはが命はいとはね共。年寄たる母を殺さん事悲しく。非道を孝にかへて。艶書の使をせし所に。貞節の姫君。中く御取上もなきによつて。師直思ひに見だれ此比は物狂はしく成給ひ。姫君が返事を取歸らずば。母にうきめを見すべきと。科なき母をむたいに一間へをしこめられ。母たすけたく思はゞ。早速に返事取來れとの。御むたいせめて返事成共取歸り。母が難儀をたすけんと。色くつと姫君へ。斷をつくし御歎申せ共。更々御聞入なきによつて。私思案仕り。今において姫君様には。おまへの事をしほしも忘れさせ給はず。いつそやも参りし時。此兼好様は御出家とげられ。御室ぢかくにおはするよし御替りなされし御すがたを。今生にて今一度見たいとの御噂。然れば此度の文は。おまへを頼まして。師直公艶書を書いてもら



禁短氣三編

禁短氣三編 總目錄

一之卷

第一 女郎一人に客二人は三物情の飲宴

ぼんのうをさます貳貫五百目の銀

娑婆はこれ狂言世界やるまいぞくとのしは大盡も乗られてはづむ紙ばな

一まい平等に紋日をくまり付給ふ白人如來のおたすけをしるす

第二 遊事は錢ほど光るあみだ笠

密夫を見付られては胸が踊帷子

ちはや古市中の地藏錫杖の輪にかけ給ふ紋日の相談壹匁ツ、かと思へば二

分づゝの銀札中居が手をとる綱が太刀先より恐ろしき事をしるす

二之卷

第一 黄金のはだへは千五百兩の光明

今時のたいこを打て論ずるいたりせんさく

諸客入相の鐘をごとと撞鐘木町のむかしつゞけ遊び五千日の回向さんけい

のぞめき衆至大盡の心の池ひろきさばきより名を廓に残す事を記す

第二 吳服屋の高賣は終にはがす佛の白人

禁短氣三編

かべに耳をそろへし小判の寐所
此一派繁昌の由來を委尋奉るに三尊てはなけれ共新三本木で作らせ給ふ
くら物の本尊今は上白の米と成しわけをしるす
三之卷

第一 嘘としても戀には二階から投金

仲居が欲あか洗ひかねし賀茂川

五十文に四十八願と出るさへ道中めきしにくぜつの外にしかけの拂を井の
位と定めはらはぬ客に女郎のなんぎをしるす

第二 肝煎和尚の五重相傳

女郎の難くせをさすの巫の沙汰

まぶのある女郎難行苦行なされて仕かへ者に出現あそばされさきんへ密
夫付て廻り出世の本懐をさまたぐる事を記す

四之卷

第一 若家前世の縁を怨勤

大盡のふらす金の花代高直の始

前の世のむくひによりて此世にてのかんな尻もむすばぬ法師の説法ぬす
まるゝ金は光かゝやかせし袈裟の見せかけを記す

第二 入齒もぬけ目のなき仕組

ふり袖の戀はわきのつまらぬ身振

野郎二度のつとめ二度のほつたい紫帽子と十徳と着かへてみる世わたり

色即是空穢のよりし姿をしるす

第三 身請の起請より恥をかき仕かけ

としより客にはまらす了簡ちかひ

佛説に我を立るによりて佛かならず多力に有ざれば成佛しがたしと説給ふ
我ちを以てはめてみれば客は其ばを老功にてすくふ事を記す

第四 自前遊びは色身の外の思ひ

西瓜にかぶりつく口元で耻しひわいなアとは

衆道濟度有んとて黄金客待せ給へ共自力を頼て邪嬖におかされ夢うつゝの
世に酔つぶれたるまよひの次第をしるす

五之卷

第一 敵の有家根を堀江の水入す

色だんぎのあみだ池はまらせてみる工夫

ありかはしれながらうつにうたれぬは四十八枚のあみだの誓願御手の糸を
取繩にかへて降摩の利劍をとくわけを記す

第二 子に逢て子に別るゝ老の思ひ

孫の立身に一念發起の實惡の開山

愛別離苦の四ツの相を顯し大黒の槌もあての違ふたるうちはの歎ふてにも
かゝれぬ鶴の者のもらいなきを記す

第三

雷の落口はしれぬ契情の行衛

戸大夫が云分はきゝのよい家老の思案

隣を杖とも柱もとむらのいつわりいな光の跡のなき工夫身の置所夏と秋と

のさかい金剋火のわけを記す

第四

魚荷も義と情と荷ふ老心

内證の狀通あけていはれぬ隱家の子細

敵をうつゝの世にまぼろしの修羅道苦艱をのがれてたのしみの國入子孫さ

かへさかへておさまる事を記す

目録終

禁 短 氣 二 編 一 之 卷

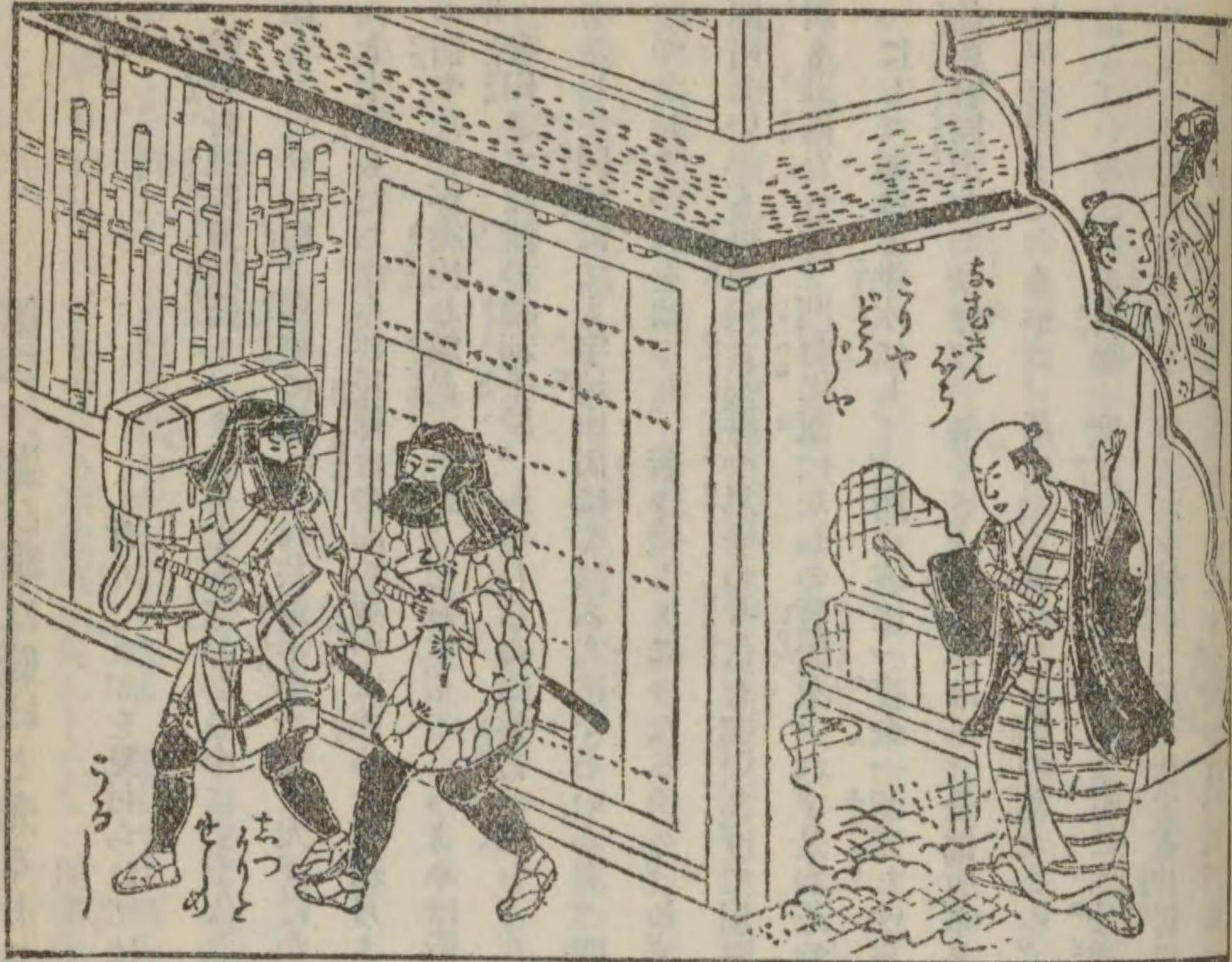
第一 女郎一人に客二人は三物情の飲宴

付り ぼんのうをさます二貫五百匁のかね

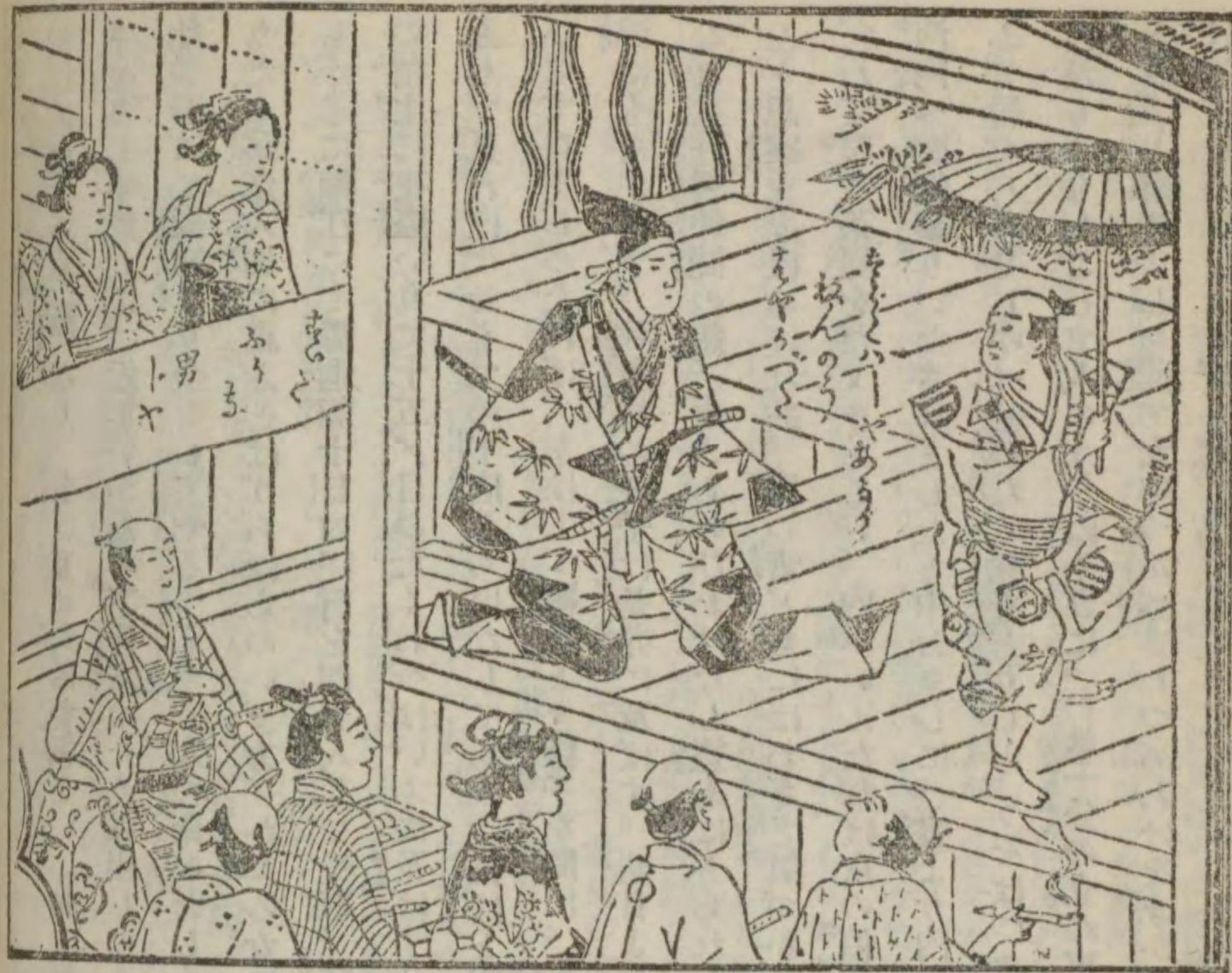
使者役仰付られし武士の馬をこはがると。野郎の座敷で食物に眼のつくは見てゐて笑止なものといへば。齒ぬけのかき餅このみと。錢なしの遊び好は心ばかりでゆきとどかぬ物となん。貧家に九十になる祖母の有と。たいこ持のにはか大盡になりしとは。いきすぎてきのどく成事多しと申傳へたるもむべなるかな。一代男經一代女論にときおかせ給ふ大盡の立。白茶の長つかの脇さしむな高にさしうねたびかならずはかねばならぬ事とし。千筋の下着はながみは家頼にもたせ。すこしはり腕にての揚屋入それは五十七八年まへの事なり。卅五六年まへ迄もふた彥輪の紋所くじらざしにてさし渡し三寸五分。くる羽織腰ぎりにて帯の結びめをあらわしたるを大臣立と申せしに。羽織次第になかく小袖とたけを争ひ。むな紐のむすびはたびのむかふへかゝり。菱につくりしもん所一寸にたらず。かわり行世の風俗かと思れば。おれきくは天正慶長のむかしのまゝにて。黒はぶた糸の下着淺黄無垢はをり。長からずみぢかからずもんは家に寸法ありて。みぢん大小をこのませ給はぬ事なるに。太平の化にほこりて在たきまゝは中人より下の汰汰なり。鎌倉衆の袖口に綿をいれらるゝ事夜着のごとしと見れば。京腰元のこしにわたをうすくする事給をあざむく。いづれさまぐの中にもかはらず。はやる物は遊女てかねをまく事と。ねてゐて金のほしき欲と是程からはらなる事は又と有まじ。新町は各別の沙汰道頓堀を始めとして。高津新地難波新地坂町北堀江安治川のすゑ迄。遊道場のにぎはひ道頓堀につゐては北の新地なり。そのかみ牡丹花宵柏といふ雅人のたて給ひし五花堂の跡を。堂嶋と稱

じ其西に中町とて店つき女郎の繁昌。それを北へ出て濱側の西を鯉川と名付。松坂や菱屋鯉屋さか屋など目をおどろかす大茶屋たてつゞき。川を北へ渡りては東ばりに櫻橋みどり橋の邊すべて曾禰崎新地といふ。是寶永のはじめまでは民農の家なりしを引かへたる有様。その北うらを裏町とてちよいとまわく間短國までとぼし連たる夜のさはぎ。實大湊のしるしなるべし。こゝに江波といふ客もとは人のしりたる福者なりしが。親の代に新町つかをにぎり過て。本宅を立のき天満八丁目に借宅し花奢道具の見せ。さすがもとのよきしるしとて。今の世に稀なる金屏など建めぐらし。人も眼をとむる見せつきにて。うは手代二人下男小でつちも壹人ざんぎりにして。つかふはよい衆のふうぎ残り家賃のうつへぎ銀拾五貫目を。堂にも藏にもと心づもりのうへ。能狂言をしながらひあかつきも有ればと。すこしもとての有だけにて衣裳も人にまけず。やい／＼太郎冠者有かないものは金にて。狂言仲間へ壹兩かられ五十匁無心いはれ。それだけに功なき内よりおも役をあてがひ。堂嶋藥師うらにて稽古ばやしの間へ。狂言五番たのまれ江波法師が母といふ。狂言をつとめさばきがみにてつとめしを。此里の女郎あれ見物にきたり。よい男じやと沙汰しける中にも播磨屋の小さよといふか。目もはなさず江波の顔を守りつめ。はやしもはてけるに江波年若なれば心にかゝり。名を聞せてそね崎のしるべ有茶屋よりよび出しければ。女郎もすいた男と思ふ上に狂言のおもしろかりしに思ひつき。はじめの客にはしつぽりすぎし出合。江波も心うちとけてあひ初しより。互にふかき中とはなりにき。すべて女の男に思ひつく事何から思ひつくといふ事のしやわけなく。うつくしき男に思ひ付も有り。あらみつちやなれ共きつとしたといふ所。又は三味線あるひは浮るりゑくぼかれた聲。ちんばのひきやうがしほらしいの鼻のわきほくるがうつくしひのと。老僧のたんぎの殊勝なるより有がたひと思ふが。惚の始りと成もありて粹自慢に思ひ付も有れば粹じまんを打込たがるもあり。千差萬別物好のわかれ有を引く／＼つていへば。女はおもて實貞につくりても内證うわきなる物にきはまれり。江波も十五貫めの光につゞけ買も成てもん日も受取氣なれ共。此女郎眞實に思ふ證據は物のいる事は外

の客へく／＼り付て。此男をよけよるも。先は女房のなきを相懸のかたづきと。目を付けるゆへにやと悪口仲間の口のはにかくるも。斷なり。昔は互に起請誓紙といふ物を取りかはし。結構な袋に入善光寺の血脈と一所に肌身をはなさざりし事成しに。近年いかなる下作者のたくみ出したる事にや。女郎の方より客に借金手形を書せ。もし心かわらば此手形にて表向より金をしてやるつもり。人の命のおしくも有かなはげしかれとはいのらぬ物をなど。男の心のかはりたる跡迄大切に思ふとはうらはらのいき方。かゝる女に亂れくるふて身上を棒にふる事誠にあほう力といふべし。しかるに堀江にて勸進能十日の狂言を四五人して受取。狂言方の給金貳貫五百匁江波かたへ預かりしに。新地がよひの留主に夜盗いりて十五匁目のたくわへはいふに及ばず。かの貳メ五百匁も取あつめて立のきぬ。夜あけまへに立かゑりて見れば。おもての下店こちはなしてあり。是はと内へ入しに手代うづ男でつちともに。く／＼ならべて手ぬくひにて口をしめたれば。あはて／＼繩をとき様子を聞に。かぶと頭巾にて顔をかくしたれば。見しりなしとの義江波は泣にもなかれず。我所持の金子は是非に及ばず。明日より肩に棒をになひ賣するとも。我身につきし貧といふものなれ共狂言仲間の銀。今さらいひわけなし盗人にとられしといふたり共。疑ふものに成ては一分すたる事。何とかせんと思案をきはめけれ共。内の者どもにはわざと氣づかひするな。せんぎの手が／＼りありとすぐに新地へ心ざし。まだねて居る茶屋をたゞきおこし。内へいんだれば京の伯父貴がくだりてゐられ。夜どまりのいひ分なくとまりがけに。河内へ開帳参りいたされましたと申おきしに。晝より内にお歸りなされては首尾かあしきと。手代共が辻まで出むかふて居てしらせしゆへぞひなく立もどりしと。うそはつき次第の世の中にて座敷へ通れば。女郎はまだかへらず寐入ばななりゆりおこして人のきかぬやうに。われ一分の立ぬ事ありて鎌倉へおもむくなりいとまごひせずば恨みられんと。わざ／＼来るよしを聞て女郎つかへさしつめわけをきかずばわが身より先へ死なんといふゆへ。いふてせんなき事ながら貳貫五百匁。仲間の銀を盗まれしわけを打あけてかたるにぞ。はてお心のよわいわしがかり出す客の心あて有。



て謝たれ共。小さよを女房に持しうへは。貴様ゆへを尋ね此銀子おくりとゞけて返辨申さんとのしよぞん。しかるに小さよ我身の年を切まし貴さまの一分をたてさせし由。斯まで心中ふかくしてはわが女房にうけ出したりと。魂は貴様の方へ常にとびてぬけがらのうつせみを。てうあいするもおなじ事と始めて色道の悟道發明いたし。自身さんげいたす上はぬすみにはいりし科。いかやう共心にまかせ給はれといへば江波も手を打。何が扱色ゆへのぬすみ其銀封もとかれぬからは。うたがひ申べきやうなし。此上は以來一家もおなじ事とまじわり申たしと。すぐに其銀貳貫五百匁にて増年をもらひ。残りし年半年あまりは壹貫五百匁にて身請し。鴈風を兎分にたのみめて度ふうふと成しが。鴈風は大身躰にて小さよ心底を感じ江波をまことの妹むのごとく鐵商賣にかへさせ。望銀を仕おくり親の賣し家迄取もどさんした事。女郎の意氣地より起るといふ物女郎にまことのないといふ。やぼてんさん方の耳へはいらぬ事とぞんじまする南無あみだぶつ。ほやかず共よく聞れよくはちの衆生たち。



明日までまつて下さんせとなきくどき。男をとめおき身じまひに歸ると内へもどり。五年といふ年をきりまし貳貫五百匁うけ取て江波にわたせ共。年を切ましたる事つゆしらす一分をたてさせしは。なんと有がたい事ではござんせぬかへ。かくすとすれど此さたおのづからに知て。おなじ茶屋へくる鴈風といふ客。何とぞ江波にちかづきに成度よしをいゝぬれ。參會し涙をながし持せ來りし銀拾七貫五百匁をまん中におきて。今は何をかつゝむべき貴様方へ盗人にはいりしはわれにて。友だちをかたらひよしなきわざをしたる事。まつたく銀子にのぞみありての事にあらず。そのしるしはぬすみかへりし銀子封印のまゝにて。一包も手をつけ申さずわれらあの小さよに首だけのぼり。何とぞのちゝは女房にもとぞんじかよひ申すうちに。小さよと貴様ふかく成て中々わが手にまはらず。しよせん貴様の身の上のたゝぬ様にして。大坂の住居だにさせずば小さよをわが女房にもつにさまたげなからんと。狂言仲間の銀貳貫五百匁あづかられし事を聞出し。そのかはりにたてらるべき銀子の根をさらへ

第二 遊び事は錢ほど光るあみだ笠

付り まぶを見付られては胸のおどり帷子

蔵言野魂抱童媼とさまに興文わかる中に。あんやの本寺は伊勢の國古市中地藏にして。あさましや往來の人にとつたひし由。舊跡に見へたれ共近年そのさま大きにかはり。京大坂よりの仕かへ女郎もこゝにあつまり。およそ六七十軒もたちならび長峰合の山の坂中に色めき。正月より五月頃迄は芝居もありて。參宮人にきやかにして船渡しの宿やなどが案内し繁昌すれ共。七月すぐるころよりは所の客ばかりにてはもてがたく。女郎をちわりて四日市神戸一身田さては津の徳利茶屋。人のしらぬは桑名の海をこぎわたす六百といふ村中に。しれて知ぬ非有非空の身のうへ。まさしく同國にても宇治山田にてはあんにやといふを。四日市邊にては猫とよべりはたごやに泊りて寐すみて後年若むつかしきつれをはつし。若き衆こゝにきたるゆへ。ねずみをおどるかすとの心のよし四日市にて猫のすむ所を。川原町といふも近在の百姓小息子の身代をすいあげて川原にするといふ義とかや。古市中の地藏はその本山にして家居も莊瀬なれ共。門口に蹴はなしの敷居をいれず是水茶やと申たてたるその水こそ。此邊の身軀を高天原に紙衣ひとへにしてのける洪水にして。所の客は一夜金一步尤しゆらごめなるに。他所の客は金貳歩しかももぎ取にして地の衆他所客同道してゆけば。ちくざと聲をかける。是他所衆との合詞にして。常は油燈なれども蠟燭にたてかへ。座つきに何を出すとおもへば。所にたくさんなる鯛のあたまでの。焼て三日にも成をあたゝめもせず。臺にのせてその外取ざかな二いろ三いろ吸物一度夜食は。京の石かき町に四分通りもおとりぬ。此地札づかひなれば銀壹匁づより壹分二分迄の札を廿四五枚も。客これを懐中して給仕する仲居に二枚三枚ちらす事にて。神鏡なれば是を日本紙ばなののはじめ共いふべし。芳原にてかりそめにも金壹歩はづみ。よければ壹兩貳兩まくとは雲泥のちがひなれ共。札五枚取あつ

めて三匁四分いたゞきあがほつくるも一興なるが。此調子はづるれば朝かへる時おきもあがらず。おまへ方ははき物はくつぬぎの左にたててござんす。それ奥のお客方のよいせきだとはきかへて下されますなといふた跡は高いびきもにくし。惣じて地の客かけてはとれにくき所にて。きわになれば下男仲居がはらひ給へきよめ給へとせがみにありけ共。根ぬけのせぬ事ゆへ千はやふるかみつく様にもいはれず。又山田下中の郷近くにもいさゝかのしのび所あれ共評に及ばず。志州鳥羽には船つきなるゆへうかれ女多く。是にも上下のわかちありて古市邊よりおくるも有とぞ。駿河の二丁町播磨の室の津大かた似たかよつたかの事にて。其内うづら野といふ所は各別に落たり曲線經などにくはしく見へたればこゝに畧しぬ。とつと昔淡路屋二平といふ芝居師中の地藏にて歌舞妓芝居興行看板を見れば。立役市川蟹藏澤村惣九郎中村八藏姉川新三郎。實悪藤川源九郎嵐八五郎。敵役中嶋四甫右衛門。若女形瀬川菊の助佐野川千菊。道外松嶋茂平三とはさりと似たる名共かな。大かた上手の一門でかなあらふと講參りの田舎者大入のみぎり。立役の内に津淵門五郎といふに久須見屋の若菜といふ女郎のほりかゝつて。いかに芝居で見せめしとて棧敷のおり場をしらず。親方喜右衛門さまにせいすれ共きゝいれずして。外の客そでに成けるが此女郎に楓橋といふ客あり。身上あつくしかも粹のひんぬきなりける子細は。一年を半年づゝは京にくらして嶋原祇園町にたのしみ。名高き野良子供もわが國に居る時は芝居やすみの間をよびよせ人に物くるゝ事當世に稀なる大盡にして酒をのまるゝ事。谿川へ水をあけるがごとくなれば山田の大蛇と異名して。さあお出といふ時はさきへしらせてまぢうくる牽頭も八人。尾からついで来る牽頭も八人合せて十六むさと手管にはまる客にあらず。ある時あげ屋傳十郎をつれて久須見屋への來臨。ちそうつねに殊にして女郎も盆をたのむ心あり。惣じて川崎おんどゝいふ事近年のはやり物にて。川崎に文句の作者あれ共さみせんの手をつける事は奥山何がしにて。尾勢兩國專にうたふ事と成。上方にてもはしくうたわぬにてはなけれ共。さのみ賞斷にはおよばず是をうたわせておどる時は。かべぬりにてんかんのおこりし時のやうなる手

つき臨終きわなどに。おもひ出さば空をつかみかねまじき所作なるが。此里の女郎は是になれておどり帷子の趣向を。楓橋大盡に相談せしかばさつそく京へ申つかはし。越後ちゞみの極上淺黄と花いろを。たてわけ水まきにそめさせて地白に金銀の泥にてさまゝの水草水鳥をあきまもなくかゝせ。汗のためとおなじもやうに貳ツこしらへさせ。はたつかけの緋ちゞみをそへて四五日さきにおくりおかれたれば。めしつれられし牽頭どもあまり染ばへのしたる物ぞ見たきといふ者あり。出して見せられよとあるゆへ女郎勝手へたちひとつ取出して見せぬ。いづれも是はよきお物好とほめて何と是を着ておどつて見まいかと。いふにしからば今ひとつもといはれ女郎當惑のていにてあの物の隙どり出しかぬるを。大盡はきのどくかり内證のつまらぬ事ありてわけもなくやなしぬらん。切角心をつくせし物をとほ思ひながら女郎には多くある事と。はらもたてずおどりはさはがしかるべし。いざ氣をかへて傳十郎方へ行まいかと女郎もろ共なりこみ酒になりすましける。折ふしかつてより小めろが女郎の袖を引て封じたる文を渡せば。袖にくろめ用事にたつふりにてつきへ行しは文よむためと見へたり。大盡何心なくたいこ共との大酒わかな様〜といづれもわめくゆへ。爰に居るわいなと出るやさきへ同道せられし醫者八嶋と替名せしが。どんぶり鉢にてさせば是はこわやといふ手をおさへて。のませけるをすぐにおさゆるやつありてにげてもにがさず。まはり〜て五ツ六ツに若菜正躰なく床へかき入れ。いづれも酔つぶれてされなりにこけて性念のあるはなかりしに。さすがおろちと異名せらるゝ楓橋大盡いさゝかも酔目見へず。手水にたゞれしが誰がおとせしか封じめほどけし。男の手のかな文おちてあり。是はと取あげよみて見らるゝに。おどりがたびらの事御申こしけふは芝居もかはりめの休みゆへ。ふた見へまいりしが只今歸り御文見よてきのどくに存。さう〜もたせ遣しより心をつくし京へそめにやりたる物を。ひそかに我等へおくられ盆に成ばふたりそろへにてぞめき申さんとの事客へしれて。そもじ殿ためいかゞにやはや〜此かたびらうつそり殿へ。御見せゆて御たらしおきよ〜。こよひは大かた客もはやる様子にゆへは入つ過に傳十郎方迄參れとの。又

の御しらせ心得〜との文てい楓橋むつとせられけるが。いや〜こゝろがあそびに出る者の智慧のいる所と。京馴の八嶋といふ醫者を起しわが工夫のたけ得と申ふくめて後。たいこ共皆々ゆすりおこしいやがる若菜をむりにせせり起させ。勝手へもしらさず八人のたいこが手を引腰をかゝへて。よろつくを介抱し裏道より和泉屋へつき合にゆかんと。路次の戸を明て楓橋はじめ出てゆかるれば跡をしめて。残り八人の牽頭臺所へ出おもてのかげがね明戸をくはら〜とあくれば。おなご共目をさましたれじやといふに。旦那ははやおかへりなされたおひつかねばならぬとみなみなかけ出すゆへいくたり共しれず。是はまあ〜ね入ましてぶてうほう致しました。お前がたもなぜおこしては下されませぬと見おくり。奥へゆきて床を見れば若菜酔たびれてふとんをかぶりねいりたるてい。さらばおもてをしめてといふ時こそあれ。門五郎おもてより時分はよいかと頭巾着ながらおくへ通りて。是は又きつい寐様なとなめかけふとんあけてはいらんとするを。八嶋とらへてうごかさず。水まきのおどりがたびらいかさま似あひさうな男じやとわるがらす最中へ。楓橋大盡たいこのこらず一所に成ていづみ屋の女郎四五人仲居もろとも。わかなをさきにたて〜おもてをたゞき。あそびたらぬゆへ道から戻りしとわりり込を。是はならぬと勝手とめてもとまらず。お夏なつ〜夏かたびらを何にそめよそと門五郎にとへば。淺きに花いろ水つくしよいやなとうたひつれて入こめば。門五郎とわかな顔見あはせ吐息をつき何としまひをつけん。あぐみはてたと見て若菜おびゆる聲に。主人喜右衛門たれじや二階に晝寐してゐるそうながおびゆるおとがする。おこしてやれといふに。小めろ共ゆすりおこせば若菜目をさまし惣身汗に成て。傳十郎座敷にはあらで我内に晝寐したるゆめに。宵よりのしだら皆夢中のありさま是よりふつ〜悪性をやめて。實貞に成といなや女郎ははやりやむものにて。よき事はふたつなき世の中悪性にも仕様こんたんのある事にて。未熟なる内はかならずすまじき事なりと。すべて遊事は錢程に光る阿彌陀經の異説に見へたり。

禁短氣三編二之卷

第一 黄金のはだへは千五百兩の光明

付り いま時のたいこを打て論ずるいたり兪鑿

佛妓王に對し艶客經にては美男の客をなじり。童奴經にては役者のなりたちを説。工面のあしき女郎を手管の極樂へ導給ふ。其音三味の一よりも高く身あがりの質種に流轉すべき所を。古手の辨舌といふて昔より名高き女郎の客をとりこませ給ひし容をもつて。内證を見つがせながら。客無益の贅花をふらさんとすれば目前損じやと。わが身へなでこみ給ふ中にも三ヶの津は此道の上品淨土なれ共。こゝに生ずる事甚かたくそれにつゞきては。人の身代をたゞきあげんために。御建立ありし鐘木町と申はめつたにのぼしかくる山城の伏見十丁目にしてそのかみは嶋原の大夫をふりすて。三枚肩にて京の大盡も通ひし所なるが。近年どる町はすたりて中正嶋といふ廓外なる新道場出來てのち。自然と此里ふ繁昌になりゆき色燈すてにたへなんことを難き。歸忘山專遊和尚といふ大盡一代男世之助五拾年忌がてら。わが十七歳より今年卅六にならるゝまで。諸方遊所へ一夜もけだいなかりし五千日の回向をとりたて。鐘木町再興の御説法もとより有玉大盡なれば。山ぶき色のけさをいびつなりにけもんびにむすんでかけ。翠簾屋の座敷を色談所とさだめ。元祖椀久上人のもたせ給ひし三味代の竹杖をかまへ。動樂大師の釋にはくと。高聲にのたまへば女郎やりて花車遊びに來あはせし。取出の大盡達出口の茶屋五百羅漢のごとく。肩ぬぎしたる船人車つかひまでたかりかゝり。此さとふたゞび粹不粹不捨に身をうたすべき。ありかたき場所となるべしと耳をかたふけて。聽聞しけるに上人しめしての給はく。近年本大盡といふものたへて女郎を買の。かはぬのと金づくの事へかゝり色ゆへ通ふといふ情をはなれ。あげ屋も始末する客をたしかなりと。のみこみぬるは客の固本をもしらさずかゝりあひに取こむゆへなり。むかしの揚屋は其所に名ある身代のよい衆とよぼるゝにあらざれば。大夫を引合さずいかに淺季末世なればとて。きのふ迄茶屋の庭廻りしたる男。一拍子のあきなひより大屋敷の主となればとてとれるをめあてに大夫の中でも。全盛に口きかるゝに似あはす。みんきたむしのかゆみ迄かいてやらるゝ事あゝおとろへたるかなや。かなしきかなやこづま木綿の越中ふんとしても。金さへあれば買るゝ物といふに成ては。その大夫の相婿に成てあそぶ事人品よき衆のおもしろからぬ事にあらずや。上京琴澄といふ大盡は古一文字屋の花菊といふ大夫にふかく子細ありて。くつわまで念頃にせられしが親方佐次兵衛勝手つまらぬ事ありて。琴大盡に御無心申百兩かり五拾兩かり五百兩につきもりぬ。その金四年にもなれ共利足もとられず。また用もあらばとの大様なるあいさつ。春ぎくを受出して本妻にする段に成て。あげ屋のていしゆよりおや方へ相談させらるゝに佐次兵衛聞て。春ぎく事は我家のたて物外のお客へならば。千五百兩より一兩もまけぬて居ましたれ共。琴様事は段々御恩もあれば千兩にいたしとまつかわすべし。さてあなたより手前への借金元ばかりが五百兩何とぞいたし御返上申さんと。心はやたけにそんずれ共近ねんふけいきゆへ鹿略いたし申わけもなき仕合せ。右春ぎく身の代の内五百兩は御貸下されし。元金にお引なされのこつて五百兩うけ取なば。異義申まじきとの返事あげやよりおしらせ申けるに琴大盡つくづくときかれ。ちか比佐次兵りちぎ成いひぶんかんじ入たり。しかし春菊事はわが一生つれ添女房にする物を。借金とさし引したとありてはいかにしても心すまず。そのうへ外へならば千五百兩より一兩もまけぬ大夫を。まけてもらふてうけ出す事は大盡の本意にあらずと。千五百兩もたせつかはし。日頃貸おきし五百兩は此たびの祝義におやかたへ下さるゝとの義。古今にまれなる女郎のうけ出しやう。のち／＼までもかたり句と成て大盡ともよぼるべき身は誰もかくこそあるべけれと。皆かんるいをぞながしけるとなり。今時世智がしこき大盡に此ばをさせて見たらば。我請出すといふてはおや方高ぼるべしと。まはしものゝ客

をこしらへさて外人ならば千五百兩とは。おいかけといふ物その手は青ひ客にきかしたがいと千兩を七百兩からねぎらせ。つまる所八百五拾兩に手をうたせてかしおきたる金子はどうで。うけ出す心ゆへ一度には太義と思ひいれこみおきたり。利はやすくしてとるが此里だけと元利あはせて五百五拾兩貳歩三匁八歩五リン。此様な事はそろばんが物をいふとおきたて、見せ。のこつて貳百九拾九兩壹歩餘なればこゝは。きればなれて三百兩つかはすとつめだつてのさし引。すべてむかしの様なる本大盡と極上の朱墨あきなひ氣をはなれし茶人。扱は聖人といふ者近世のきれ物にてあそびゆたかならず。客がたいこまさりにしやべり。何もかも知た顔のすかたんをわきよりそやされ金氣はなれて。こまがねやる事をかしこしと覺へちと金がさ。つかへばそれを功にきて無理をいひならひ女郎をいぢり。外のきやくのあそびをあざけり。節氣にやうく才覺して自身ふところへいれて来て。拂ふ金と遠慮なしに手前勘定場でおもてはれて。わたす金をひとつにおもはれてはめいわく。入用ならば不時にも手代共へいやれ。おそらくくるわへ入込客あまたあれ共さあといふ時。あてのちがはぬは身共であらふと。僭上のくせに拂ひには仕かけをくはせ。大へいのありたけをつくす。氣からはむかしの本大盡をたわけの様におもはるべしといへばあげやいてうなる程御教化の通りもはやお客にすまいと節季く。小判錢のくろちがひに修羅をもやすばかりかはおぼへぬ。それはひぐとつけのおもてにしるしを付られ。自分のかぶりになる事何の因果に此商賣はする事ぞと。ほつといたせどもあの物のといふて拂はぬお方。きわになると田舎へ急用でござりましたと。手をつけられぬから見てもまだも取得かと。はつばとはひつくばひの大盡様とうやまふ事なり。しかるに近年お客まれに成て。此さとは申に及ばず嶋原もにぎやかになき事。ひとつに祇園宮川の繁昌に責らるゝ故なり。すべて茶屋にもせよあげやにもせよ。ぼつたりと客だへして二階にらうそくのひかり見へず。さみせんの音たゆれば節季から節季までの買がよりしがたく。當座のふりまはしならぬ事有ゆへ。ちとしり残りの有いやなお客をしぶくあげて。此菓子たよくはれはせまいかと思ふ心より。あるへいとを干菓

子に仕かへ御所柿を皮とつて。茶くはしぼんで半ぶんづいだす。ちさうぶりのわるきもはらひきはおぼあればは客是をとがめず。来る節季までは三方にかざりしいせ海老のひげをあいいしらふ様に。あぶなく半分もとるれば鬼のくび取た様におもふ事に。引くらべてはしかけ給ふはまだ如來さまの様におがんで居ませねば成ませぬといへば和尙客廓人其心と成しより客ますく野郎になりぬ。くるはの人心下品におち始末する客を。たしかに思ふより客あそびにはゆかて。世智辨の稽古場となる又まへかどのいたり牽頭共は大夫づかも。にぎりし見事大盡のはてにて京の仕はては難波にくだり難波ののらは都にのぼりて。取出の大盡につきしたがひ。さすも引も高上なる事ばかりすむる故。わが手の大盡自然の果を得て。本粹の極樂へおもむく事なるにいま時のたいこといふは。はじめからたいことして上座にねころび。引船に足のゆびいらはせたる事なきかしまし仲間といふものにて。大盡にいやしき事をすむるといへ共。上むいた沙汰はもとよりしらず。客是をめしつれて女郎のわるい事を。聞出しあげ屋との手くだの裏を工夫し。大盡なる所へおちかぬるとは何となげかはしき事ではないか。牽頭仲間然らばいつ審もつて参りませふ。むかしは大盡のはてがいたりたいこになられしならば。今も左様にあるべき事なるにひとりもその様な人のなきはいかん。和尙の是いかによき審なり。さいぜんも説きかす通りきんねんの客。本大盡にあらず世智をさきとしぬかれまい。やきてをくふまいとせらるゝゆへ大盡の時より。小しやくにして高上ならず故に仕はてもすくなく。仕果てからがおのく同前の下卑牽頭にはなるとも。專齋丸西佐橋光琳などいふ様な。いたりだいこにならずとあればたいこ。げびだいことはちか頃和尙ともおぼへぬいひやう。今一ごんいはるゝとふみのめすぞ和尙。それがすなはちげびたるしるしなり。上大盡のはては物事きやしやにして。たゞのふむのといふ事なし。そのあかけなきころを客へすゝめ金のとれる間は頭を地につけ。さあこれぬ段になつては道で見ても見ぬ顔をし。よい身代であつた物をうかへはな毛をのばしてあのなりはとあざけり。先から久しくあはぬことばをかくれれば。あた大へいなくはふ物もないなりして居ながらとい

はるゝ口と。たゞ今引ずりおろしてふまうのたゞかふのと。いはるゝ口が一所でおじやればそのけいこめされ。いたり法談は耳へいるまいしゆもく町再興のため大盡衆。せい出してかよひたまへさいかうの奉加。

第二 吳服屋の高賣終にはがす佛の白人

付り かべに耳をそろへし小判の寐所

和尚香を炷拜をなしての給はく。西鶴大師の時分までは白人派いまだおこなざれざりにや。一代女論にも小歌の傳授女といふものありと。のせられしをよく見れば此道の濫觴にして。そのうち都の東南土手町におこり本の素人に仕立。元祿のすへ寶永のはじめ比より白人變じて黒人派と成。契情派をおさんとのいきほひそのもと今時のこそといふ物なるに。一ざ銀壹兩夜明まで三つづめ寶永七八年の頃より。そろ／＼もん目をこしらへ末世の今は。祇園町ぼんと町をその宿院の上品とし。四條上ル東川ばた宮川町を中品とさだむ。上品上生の白衆はどんぐりの辻子に法會所をきはめ。中品中生は宮川町に道場をたてならべ。下品下生は古宮川に法燈をかゝげ是さへあるに祇園新地四六街道の繁昌繩手につらなる茶たて女。石垣にかゝやかすめしもり女茶に酔て身上を仕廻。食にしる付られて家督を食傷する事もろ／＼の醫書にもその療治見へず。七條の新地北野番町の楊柳七軒の花ぞの。今出川さがる中筋しらみの辻もいつか絹物を着かけ。祇園石だんあがるこつぼり町は古書にも見へたる名所なれ共たへ／＼に成。八軒は昔にかはらず清水坂大きにさび果。高臺寺まへはありてもはへなく是みな白州に高くいり。四六州にひきくとどまるゆへなり。祇園町ぼんと町の料理物ずき諸國にすぐれ廊遊をながしめに見。みせつきを直下にあなどり朝四つ時分からあそびかけて。あげて歸れば朝づめの。大早。早出。晝出。暮。後。あさづめと六つづめ一座拾壹匁六分なれば銀六十九匁六分。此雜用かぎりなく金貳兩よのあそび大夫よりは高直なる物。しからば大夫を出かける方ましならめといへば。木綿袴子

にふるしきに入し商ひものあづけ置てもゆかるゝ一座切ても。遊ばるゝだけでも繁昌する所といふ人あるはひがことなり。ちよつと出す取ざかなもおもしろく工夫をこらし吸物。夜食にも手をつくし客あがるといなや娘分の色よきが二三人も取まはして。さみせんひけばひんぬきの仲居が六七人もいれかはり。おあひいたしませふとたいこ末社日比おめかけらるゝ役者も聞およびに取まはして。たとへ對する色がなくても座敷へ。是へお出とつあたてのこなたよりおくれずさらりとせし姿にて御來臨。色も雜用もこめて何程ときはまりしあそびその上に。ちと馳走したとて別にも付られぬゆへ。あてがふてこしらゆるとはちがひその夜は御きげん次第にて。女郎の花代より雜用の方五双ばいもおほく入ても。大盡此はづとのみこまるゝ事仕たてよき所あれば成べし。白人といふもの禁短經御説法のみぎり迄は新三本木の西にあたつて。大黒町鐘田町袋町新町といふあたりよりひそかに出たれ共。今は祇園八軒宮川町にも東石かき繩手の茶屋にも見せつきの外に是をかゝへ。未熟なる内はどんぐりの辻子のまはしの所へ出はりをさせ。さしこみにやつてもらふ工面ちと口きく段になりては内にゐるを。つじのまはし方宿屋よりよびにゆけばまはしの下男駕をもつてむかひに行事なり。又年明などしてよい鳥がかゝつて女郎の二三人もかゝへてくれ。それ／＼に見たてゝ宮川町の中白。又新地すぐれたるは辻子へいだしおや方も共つとむるもあるに。夫婦すみながら身の上つまらぬ事のみにて。ふたつになる子を夫にまかせその身は色つくりつとめに出る。是をなづけてひきがたりといふ。どうでも夫の心をこずみのせぬ理にて。ふつと糸のきれた時仕様のなき身の上の事とかや又中をはたらかせよほどいきほひある故つじへ出して見れ共。づじばかりにては心もとなく二宗兼學の女郎を此へんにてつるべといへり。兩方へはたらく水仕事なればなるべしその内自前にてふ勝手なるは。吳服屋にせつかれ帯はたらず有ものはしち屋へとぶ。小便取か大こん貳本おいてたごもつて出るを。庭へとびをまめ一ほんおかしやれすはやる事ならぬと。たこ緒にとり付てせりあふ所へ井筒屋からと駕まはして來ればうちではうそ。よこれたきる物着ながら首から上はつくりたてゝ尿瓶に

ぼたんをいけた様にしてゐるゆへ。さつそくくろひきる物に着かへさきて着るもの。もしつき合のはれもやと二三番ふる敷につゝみたるが。大かた身代きりなり宿屋の勝手にてはだ付のひぢりめんずつと出た所はしんじつ。手まり買てやつたらばうれしかるべき顔つき大豆は味噌の中から。はゆる物かへとしらゝ敷あどなきおやかたがよりはそのおやかたによりて。うる日うらぬ日と顔てきつて見せ是もていしゆは大方なれ共くわしやにこまるがちにて。今をさかりとはやる女郎にも衣裳を。おもふ様に着せずはなかみの敷よんでわたすなどふたの物にくゝりし丁子をはじめ。自分の買物つき合の物入借銭の淵に鹽からき勤の中にも。役者とのうわ氣沙汰此心にあらざれば。だてもなくだてがなければやりもせぬなり。愚僧在俗のみぎりなでつけをかくしぼんと町のさる宿屋にて。辻子の女郎をよび夜明て歸りさまに戎の新地に念頃なる米屋ありて。立よりしかば所に似合す商賣がらとて朝とくより起。からうすの音さわやかにして亭主是は先お入とたばこ盆出しけるゆへ。すぐにいなりへ參るがあまりわふたしちとやすんで參らふ。何が扱と奥のはなれ座敷へいさなひふとんまくらかせし故とろゝとねんとせしが。かきまばら成となり女の聲いか様四五人もはなす事。寐ながらと聞へて一人がいふは。わしは夕へ大黒屋へゐたが例のから贅いふ木七といふ客。沈香を取出してさるおかたより拜領の名香じやとてたかれたがそのまゝいつそや旦那さんの買てござつた。來臨香の様な匂ひのする物を。たいせつな伽羅じやけれ共まほりにもなる事すこし進せたきが。縁がきるればわるひぬすまつしやれとのうのうとぬかしたゆへぬすんでも。もし縁がきれまい物でもないといふたをうれしうな顔して。いなり祭り二日ながらうけとらせたといへば又壹人がいふは。わしはいせ屋へよばれていつもの醫者ほんくろきづきんをすみ折にかづき男の丸太見るやうな。あたまつき此邊の事しつた自慢さいちうに。近江屋のおとこが通り合せ是の二階のお客さまは寸庵様と。聞へましたお聲にきよおほへあり。ちよつとわたくし方へ御供して歸りたしといへば。その通仲居衆がつぐるにびつくりしたるがんしよくにて迎つけ。あとからといはれても此男がてんせす。しからは是でちよと御めにかゝりたしといふにはひかれず。内へはいるにおよばずそれへ出んと。かどへてられたを二階の櫓子から見てゐたれば近江屋の男。何やらこわる顔していふてい。醫者殿は聲がたかいたときのどくがりがりいつ迄といふ事かしかときこへね共羽織とわきざしを。わたしてかへされ又二かいへあがつて明日あたご參りするとて近江屋の男がはをり脇ざしを。かせといゝかかられては此大盡ひかぬ心とのはなし。茶屋の男が醫者殿のりんずの長羽織いかゞと。おかしながらそれから勝手より。亭主がでられ女房共がおやりにむつかしき病人がござりまして。いやといはれぬ無心申こしましてござりまする。時分ならね共一仕切明日にもおわたし下されませいとのをせう。いしや殿いかにもゝ四百目ばかりてよいか。明日はどうもならず明後日は精進日なり八日は藥師の御縁日。よいゝ十三日ごろ持て參らふとおもしろみもさめたるにや。後にもならぬにいつも駕いふて來いといふ人が。つるこそゝとかへらんしたと物がたり。中にも惣姉女郎はけさ歸りしと聞へてねふたがる音猶さら聞ごとくかべに耳をよせてきけば。はてねふたいのおれがゐた所かほんど町お客は文月さんといふお方本名ははじめてゆへしらず。づきんふかゝとかぶつて床へ入てからいはるる事には。こなた粹にあふがおもしろいがふ粹にあふがおもしろいかとのたづね。粹にあふがおもしろなうて何とませうと。いふ所なれ共此たづねはくせある事と思ひてといふ聲。わが夕べよびし女郎にして文月とはわが替名問かけしことにもおほへあれば。こりやならぬなをゝ耳のあかをさらへし時のこる女郎共の聲にて。して又おまへは何と返事なさんしたへといへば。はてかはつたお尋粹も粹によりぶすいもふ粹による事。かわひらしると思ひつきしが女郎の縁とこたへし跡にてしたが。いかによい男でもぼんさまとなてつけはいやらしひ者でもしとまり屋などすればねざめにそつとする物と何心なくいひしに。さらば拙者あたまあめにかけん頭巾とらんとしたれば文月様はなでつけあたたまひよんな事いひしと。はてうそではなしとこゝが女郎のあとへさがらぬ場といへば妹女郎の聲ときこへて。その文月様わしも一度よばれて行ました。よう肥て布袋様見るやうにあらふがなかんじんの時むねを。おさへ床

ながうて何でもない事に。つゝ損な商ひして戻りしとわらひぬ。此損なあきなひと申事愚僧さまに學問いたせ共今にしがたし。是へよらせられし女郎衆かならず客のうわさをなされふならば。どこぞの土藏をかつてなされい聞づらひおかしひ物でござる。是から見せつき一道の説法は明日おすまい。

第一 うそと知ても戀には二階からの投金

付り 仲居がよくあかをあらひかねし加茂川

さて見せつきの女郎むかしより石垣なわてははんじやうし。高臺寺まへより八坂の邊までは諸しよく人の手間とり。銀かけてあとよんで見る衆のひまなる時にぎわふ所にて。むかしの見せつきすべて今の世のやうに。ざしきへはかりをもつて出てきやくがかけたせば仲居がかけなをして見。いつぞやのは三分たりませなんだもついでにまそつと。目をせるきやくをまたせおきてそれ此かねむかひのみす屋で見てもらふて來いとそのあいだ。客は二かいに人じちにとられたるやうなかほつきしたる事にはあらず。一座の代きん内よりつゝんで來て香でんのやうに思ひもどりさまに。ちやがまのきわにおゐて出れば。手ばやくも目をひいて見てもらふて來い。見せにやりたるに。いふんもかるめなければもとよりわる銀をかつけるといふ事みぢんもなく。ちや屋へさし出す銀は百性のみしんより大事におぼへしにいまどききやくをうごかさずにおきて銀の。ぎんみをするもことわりなり。五度に一度はむごひ目にはすもあればにや。見せ付はまづかけあきなひせぬ銀まわしのためなれども。さふばかりいふてはきやくが來ぬゆへに。六七度もしやうを見た其うへでは。かけてやる事は當座ばらひにする。五節句まへにやるとは同じ出す銀も心かちがひて二座でいぬるものも。とまりに成はゞを見せんとつれをもいざなひ。高てはいる心なれとも見付らるゝ様にしてそのかどを行過。羽をりのひほをちぎられて後にもやつかせてからあがるは未熟な客のたのしみのひとつなり。石垣一座六匁でひとり客に。夜食くはれ酒をのまれ女郎をあてがふも繩手四匁五分にて。吸物取ざかな壹匁八分

ほどの鯛のかた身すの物にして女郎をまかすも。勘定して見ればざりとはあはぬ物なれ共。二座めよりがすこし勝手も見へとまる段がはらひさへよき客なれば仕て見まい物でなし。とつとむかしの事西國方の人學問のため京へのぼり講釋きく入用にも書物買ふためにも。逗留中の飯料にも心あてゝ持のぼりし金子一步にさせて六拾兩ぶん。ふだんはだをはなさず石かき町の女郎になじみ出来て。毎度とまりてかへるゆへ彼財布より一步づゝ出して。銀にしては拾五匁その頃は是にてすみたる事なるに。座敷まはりする女ごに心もちあしきものありてねんがけるとは客。夢にもしらずぬる時は枕の下へふとんあげて。おしこみ置たりある夜逗留する宿の重手代に用事仕廻れたらばおそく共跡からかならずと。約束して暮ごろよりいつもの茶屋へ行。ことに酒もつねよりしみて女郎も酒に正躰なくねいれば。はやおもてのかけあんどどうも引て白人の後むかひは過七ツむかひにはやし。ひつそりとそともしづまる折から。宿の手代忠兵衛といふもの仕切の用事やう／＼九ツ半に仕まひて。もはやおそすぎたれ共せつかくのおやくそく。せめておことわりに成共と假橋をわたりて石垣をさがり。たしか此いゑと戸口にたゞずむはまつくらやみにて。二階の障子ほそめにあけてらんかんたち。人待ていの女うへより市介殿かといふを。忠兵衛はすこし耳遠なるゆへ。扱は人をつけておかれしと。おつとばかりいへば上より。是いまのといふて財布をなげたり。ひろひあげて見ればしつかりとおもし。是はいかなる事とがてんゆかずたづさへ辻ぎはの番所まで行て火のかげにて。ひらき見れば金子しつかりといれて。中にこよひさきへるるゝわが所の逗留客の名あての國よりのふみ二通まであり。扱は女郎仲居がぬすみて。たれぞに相圖してなげたるなるべしと。正直の心より大きに驚き是を懐中して何心なく茶屋をたゞき起し二階へ通。お國もとより急な義が申て参りしと客を起させ。人なき一間へいざなひわけをかたり財布を渡せば客びつくりして。貴様の手に入ればこそなれ近頃忝しといたゞき。今宵にかぎりつるにおほへぬ大酒に前後を忘れたり。その内にぬすまれし物ならん。急度せんぎせんといへば忠兵衛おしとどめ。此金ていしゆが知ぬ證は二階より外へなげたり。是程の見せをはる物かやうの事ありては。申々たゝぬ道理しかればぬすみし者は一人なるべし。はつと沙汰あつて此茶屋のゝといふ物。こゝはなざけといふ字を御分別ありて。まづ今宵は御歸りしかるべしと。國元よりの用事を申たてゝいざなひ歸りぬ。こゝに此家の料理人市助は玉といふ仲居としめし合せおきたれば。外へ出て四五度もゆきつもとどりつして見れ共二階よりよびかけねば。扱は首尾を仕せんせしか心もとなしと。内へはいるに玉はさゞやき。中には何程ござつたととふをおれはうけとらぬといふ時玉氣色をかへ。市助どのかと詞をかけてなげた物を。うけとらぬとはきこへぬいひぶん。こなたとめうとなり祇園の新天地でよひ屋をするもとて。女にはあはぬおそろしきぬすみをさせながら。さては日頃北どなりのおりんととちぐるうてゐるゝをわしがしるまいと思ふてかわしをだしぬき。こなたりんめと一所になる氣じやのと。それより女こゝろをさるのはしたなく氣を取のぼし。おほへずしらす亂心の様に成て市助にしがみ付。其金こゝへ出しやとわゝれば家内めをさまし。亭主聞てゐられぬ首尾に成て。だん／＼玉がしやべるにつけて。お客の金をぬすんだと有ては我家のめつぼう。明日は早々兩人共請人にあづけせんぎせんと夜中ながら。年寄五人組へ相談のうちに夜はほの／＼とあけ。それ市助め取にがすな玉を二階へつれて行番してゐよ。はかまよ覗ばこといふ所へ忠兵衛きたり。いまだちか付ならね共拙者は此間たび／＼御出なさるゝ。旅のお客のお宿申す所より参りしものなり御てい主にあひ申たきといへば。そりやこそしりが来たはと上を下へかへし。てい主もみ手に出るを忠兵衛みつ／＼にあひ申たきとおもての間へともなひ。夜前のわけはしくかたり金子は別條なく此方へとりたれ共。それがしが來かゝりてうけ取しといふは互に仕合と申もの。名さかのたゞぬやうにしまびを付らるべし。安堵のためひそかにしらせ申すとは。一ねちもねちさふな所をさすが名ある問屋のだんなの指圖と見へて亭主二度ひつくりし。かす／＼禮をいふてためいきつく。なかにも是を御縁になされまして。御のぼり衆がござらばおさしづを頼上ますると。扱もきつる所へ欲をさしこむ世の中忠兵衛かへりて後。ひどいめにあはすほど所の名がたつと兩人ながら。

川ひがしの奉公をかまひて。いとまを出しぬ。此やうな事今はさら／＼なき事なれ共。田舎衆金子がござらば定宿へあづけ置くゝが上分別なり。したが今時の繩手あたりの客おもたき錢を懐中して。たらふく一座あそんで後一メ文十三匁する時も六拾二文せに、勘定し。四匁五分に貳百七拾九文たゞし八文の目はまけるが商ひの習とさし出せば仲居きよつとして、せめて六拾八文錢になされと皆までいはず。こゝばかりが茶屋かいづ方へ行ても是ですんで通るが當世風といふ物と。貳百七拾九文たけの我まゝ立腹まぎれに。蛸かまぼこくるまゑびのふたつぎきひとつものこらず。ちり紙につゝみ内に猫が待て居るしりやる通りおれがつかは六七人もある。又跡の月から立かはり入かはりこゝへもよほどつかふでないか。云分が氣に入ぬゆへ今からひとりもおこさぬと。たつをかなしやかれ木も山のかざりにて女郎はどうでかゝへてある物なり。三百ぢかき錢にて吸物取さかな一人まへに貳合あての酒が。たとへ七八合入てもさのみそもゆかず。さびしき時節につれまでじやませられてはきのどくと。亭主がさしづを新ぞうの女郎仲居にさゝやくゆへ。今のはわたしがお調法でござりました。御きげんよくまひとつあがつてお歸り下されませいと。さかづきあらはせてより何となく二座になり手代どもが。子供二三人もむすこがもりによんでおくが。わるさしてどうもならぬとの咄し。おかねさんかきませふといふ時。もはや持あはせなしといふに。とてもせりあふてもすまぬ事なれば。かさねて御出のじぶん迄はわたくしがうけ合おきませふと。仲居がおくりいづるよりかゝりぐちに成て。かし屋のふしんばなし出入の兩替がたをるゝ所を。三百兩かして取たてたうわさ問もせぬ事ばかり。いか様五六度もかさみぎわに成ても持て見へぬゆへ。いろ／＼に所を聞出し。下男がうけ取にゆけば一間まなかを一間は見せにして。古障子をいれ半間の入口うらは相がしや。友井戸くむ音もかしまし女ぼうと見へしは節用集の口にかいて有。びらん國のあたまのごとくかきみだし。しぶまへたれにてこしぎりのもめんのすそをかくし。庭に菜をきぎんで居れば十二三なむすこが蹴球も。皮もむかずにかぶつて居る。おもての方にかの客丸はだかにもつかう下帯のめんもやぶれてもるゝ所を。

きびすにておさへ扇のかなめけつて居ながら。おれが腕にはゆくのにとふたこと三こと。小腰にしいひし後にはやるまいではなし。高て四拾五匁のめくさり銀掛の乞やうがわるいとつづ三文やらぬといふ。庭よりはこなたどこの人ぞ。ろくな所からはわせまいこちののらをそなたの所へ。引こまるゝゆへ仕事が出来いで。此きわ何ほどの難議とおもはしやるぞ西のとりの地屋の旦那殿の。せひ来てくれよとたいこにたのまるゝといふて内を出くさつて夜どまり日どまり。見事なさまのと夫につかみつけば。いろ所の人も来てゐるに男に耻をかゝすか出てうせよといふに。いかにも出て行ふほどにおれがきたときのもめん夜着。せんだく物ではあれ共つぎのあたらぬ布子三ツ。あはせ壹ツさらしの染かたびら三ツ。大友びしのつむぎの帯今うけてかへしやとさわがしきを。兩どなりよりかけつけて取あつかふ中にも居られず。しからば今明日に御ぢさんたのみ上ます。さておつれの茂兵衛さまの所はとゝへば。四五けんとなりとまなこをすへながらいふゆへ東へ五けんめに。つるが屋の茂兵衛様はこれでござりまするかといへば。六十ばかりなるおやぢ昆布をきぎんでみられし。是も賃仕事と見へてみせにそのていなく。茂兵衛といふは身共が悴の事成がありさまはどれからござつた。駕かゝるゝ用ならば急な間にはあひますまい。敦賀へいつもの通り歩荷に行ましたとのこたへ。日頃茂兵衛にあはるゝ女郎衆がめいようあのお客はから鮭の匂ひがすると。いはれし事迄思ひ出されるすにいふてすまぬ事と。繩手にかへりあたぼこしもないとつぶさにかたれば番頭の女郎さし出。今からあまり古布子やつぎのあたりしかたびら着て来る客はとめぬがよいといふを。くわしや聞いていや／＼黒はぶたへの晝頃な客にはまるだんに成ては。此様な事でないといつそわらふて仕廻ひしとなり。客は女郎にぬかれまいとしておとし穴へおとされ。茶屋は客にはまるまいと目かどきかしても欲の目かどゆへふかい所へはまる。その上ちからに及ぬは毎晩見へてたしかなるむす子殿が勘當うけられ。家内の仕着のせわまでしてくれらるゝ手代殿があづけられしは。手も足もつけがたくおやかた合點づくにしてしたる客なれ共。此段に成てはあひかたの女郎にねすりこといわれ夏書もやくにたゝぬ物と悲

しく。毎月十八日清水へ朝参りせしがひもなみだにくれてうらめど。参詣のとき此客かけおちいたされぬ様にも勘當うけられぬやうに共。たのまざりしかば観音のふとゞき共いはれず。向後清水をめやみの地藏へまいる客を見る目きゝをいのるべし。さるにてもわれ前生はいか成ものうまれがはりにて。かゝるつらきめにはあふ事ぞとたつとき御出家にたづねければしばらくかんがへて。まいら戸の内の鼠なりしがたつたひとつある秤の緒を喰きり。さあ銀かけるといふ段になつて。ふ自由なめをさせしむくひによりて此世にてくげんをうけ。百五拾匁でかふてもらひし櫛をきうな時。拾八匁三分のかたにわたす様には成しと因果經にのせられたる由しめし給ひしとなり。

第二 肝いり和尚の五重相傳

付り 女郎の難くせをさすのみこの沙汰

大昔建仁寺町のすへに。油屋彦上人と悟道發明の御肝煮一人。おはしますその本地をたづね奉るに用分ばさつの再来にして。仕かへものゝ女郎を一見内心の法にて三寸やらす。こゝをもつて御弟子あまたまし。京大坂堺奈良伏見いせの古市まで此手をまほらずといふ事なし。一時新きも入たちをあつめ給ひ御説法有けるはおなじ京にても、上京やなぎの辻子へんにうまれをだちし子はかけ目かるく。下京六條邊はおなじとしおなじかつかうにてもかけめ重し。是水の清濁によればかけ目輕き子はおひたつて自然ときやしやなり。かけめおもき子は後にふつゝかになる事流れをたつる身なれば。水を以てかんがへしらるべし。歴々なれ共今は内證に火がふり此火をしづめんため。息女をはなさるゝ心なれ共まだ世間を張てくらさるゝ所へ。しこむにはめたたぬ様に商人などに成てよそながら、見に行に近江のおぼこの大身躰の跡取にござつたと。賣はなせしあとにてもふかくつゝまるゝ方と見たらば。こゝがきも入こんたんのいるばとしるべし。色町近所のひんな家がらはつとめさする事を手がらのやうに。おもひ直に近所へ出してこち

の娘も。月に百も賣げにござると近所への風説。此娘のとり様には手もなくたゞ跡から親たちの。さいく無心にわせぬ様にはじめにかためて。肝入物なりとかくおそろしき物は。仕かへ物にて何ぞわけがなければ仕かへるはづなし。きりやうよくさみせんつてはつめいに見ゆる程。まへの親かた仕かへらるゝ心の底はかくして。きもいらさるゝものなればためし見ざれば。得意の門へはつかはしがたし。それ女郎の難といふは。勞咳とやの仕ぞこなひ。おもてへは見へねども身内をくゞり。おりく聲をからす病。朝おきずきにて火を見るとねふたがるくせ。はぎり高いびきねこといひ。夜尿たれ。なき上戸。客を手くだにのせるではなふて。おやかたへつくうそ。ちかがつゑ。甘松がちなる匂袋いれては。腰氣か。胡臭のせんぎすべし。めつたに法花すゝめるくせ。客によつて腹たてる物なり。ふだんしるけの出るきしゆやみ。うがひぎらひの女。きんだまを見ればおこるてんかん。しかれ共是らにはりやうお灸くすりも有べし。醫者殿の工夫にもおやかたきも入の手にもあはぬは。むしのつゐてゐる女郎にて此むしになるおとこ。かならず粹のはてにておやかたがおもてからもつてかゝれば女郎にうらをかゝせ。こきつけてきびしくして見ればこねて金まうけしてあてがわず。ゆるめて見ればありたきまゝに男を引こみ。しかつて見れ共かいるのつらへ水かけた様に高をくゞり。あまつさへりちぎにつとむるわかき女郎まで。悪性をふきこみ其身ばかりか家内の女郎をならすものにしたてゝ。のけるゆへその時きも入よび付られて。かさねてその家へあしぶみもならぬやうに。なる事なれば是きもいり一道の學問肝要の所と。ときける時。此むしつきのめきゝはいかん。きもいりてやるさきの所をゑらひそれはとをひのちかいとの。このみ事をいひひたいて人を見ごともなしに氣のうかぬところありて。いふ事は發明なる物なり。むしにせられて自然と女郎も痒いつともなしに目の下くぼみ。何事を聞てもうれしがるていなきは。大かたむしありとしるべし。又奥美濃のあたりより七人も十人も。あか頭の九ツ十ヲばかりなるを數珠つなぎのやうにして。つれてきたるをそれくゞに賣つけるは直段もやすけれ共そのせわ。たいていならず小使させ。さかなやへはしら

せ銀みせにやり。昨日はあづまの人の花。けふはつくしのと小人嶋のすまふをよぶやうな。かんばりし聲にてわれより大きなる三味線かゝへて。いろはにほへとより書ならひくらかゝると。あれ太郎さんのよらずに通らんすぞへと。ちよつと門ぐちからあひかたの女郎にしらせ。大和ばしまておつけ袖に取つきどういふてもはなさぬ事。合の山の小びくのごとし。酌するとねむたくなりさかなに目がいきて。のどはごくつけ共手もさゝれず。たまゝなさけある客がおれは大事ない是へと。はさんてやつてもかならずくふなど。かねておやかたのいひつけおそろしく。鶺鴒船のかゞりかげもなき小めろなりしが。仕立られてるより次第につくものはわる智恵にて。おさなき時おく美濃にすみし比は金山の外には聞もおよばぬ。間夫といふ事を仕おぼへ是もだん／＼五六人まではかはる物なり。そのふみとまりがむしと成ていく所か仕かへられ。後は貳貫目の代物三百目に成とも。はなして仕廻ふおやかたの心此うらみ。きもいりにつもりてつるによき口錢をとる事に。あひがたしとあれば新口入かやうな虫つき大坂にて虫のある女郎は奈良へやり。北野にて虫のあるは堺へやつてはいかん。是素人の了簡なりさあ。あはれぬ程遠方へ行ては欠落の難義外へはかゝらず。まはしの手へかゝつてゐて女郎をふる敷包持つてゐてありく男が。ゑてはくどきおとし念頃いたすとうけ給はるしかれば是。獅子身中のむしと申て虫のなかでも。むづかしき虫と存ずる此義いかん。若きおとこの夜中に女郎とたつたふたりありく事なれば。あるまい事ともいはれずさりながらつとめなれし女郎には。いひかくる事あたはず町内儀出。むく／＼のしらものはつゐてありく男こなしやすさのまゝ。わけもなき事もありんかしその女郎まつたく。そのおとこを眞實の色にする心にはあらずうゝしさにたのまねばならぬ心より。おくりむかひの間の小宿さた男も又此女郎ならてはとおもひこみてくどくにはあらず口かずいらすになるものを。しよしめる事なれば。互にむしせんさくへはゆかず。その身いたづらにて武家町方の奉公も氣づまりにてくら屋ばいりがこうじ。新地などへ出てのける女ありおつとて是にはよき。きりやうなきものにてその身違者すぎたるより。此つと

めをのぞむことなれば上品のすがたにてあるべきやうなし。懸じて女郎といふ物はたとへ無窮そく才てもあつつかへがおこりましてといふは風流なれ共。達者自慢するはげびたる様におもはるゝなり。此まへ上京の林水さまといふお客は嶋原のうきはしといふ大夫職。からしの香に目をまはされしを。物にたよはき所ありとて千兩にてうけ出され。大坂の里杏様といふ大盡は新町のあづま屋といふ大夫しよく。とてもわづらふならばきのかたをやんで死たいのとことばにほれて。八百兩にておく様になされたり。かゝるお客方へかいなしこぶつにしてもちつきにはひとつすも手つだひかねまじき女いかでか氣にいらんや。しかれ共千人よれば千人のものすきにて是をこのむ客あり。酒なしに肩からの鐘いり道成寺の亂びやうしの敷をあわせて。かへらるゝ衆へは又かやうの女郎もなければ叶はず。女郎は花なるに是らは赤松うちわつた様なれば花の外には松斗共うたふ成べし。博勞が馬を賣つけるにかなのよわき馬には尻へ。干山椒をはさみそれがづゝなさに尾をびんとさして上かんの馬のやうに見ゆるが。女郎衆のはつめいになきは肝入も仕たて方なし。尤拵へ事して肝入ば向後の商賣の邪魔になる。爰をつゝしむが本肝入といふ物と。のぶるとき又問て御説法のおもむき尤に存じまするが町出むく／＼の外はつきありく男に。わけを立さす事なきと仰らるれ共私存たるまはしの下男が二三人も。其覺へあるはなしをいたせしといへば。はてやくにも立ぬ事をねをおしたがる人じや。其身はよき女郎と思ふてゐられても呼にこぬはせひなし。此場に成てまはしの男に嬉しからする事一度も有ば。其男外の女郎を宿やへおくり込し時ていしゆまな板きわに居なから。おつれが三人跡から御出なされたおなじみはなげな。どれぞそちの見世によい子共衆はないかといふ時はめてさしこみにやる事。實正明白なり是佛のまうけさせ給ふ方便軍道のはかりこと。女郎道の手管その本一にしてかりの枕のなかのかりまくら。中／＼むし所へはゆかずこのさとなれたる男がその情につかはるゝを見ればどう見ても穴賢／＼との談義に。各きも入一道のさとりをひらきしとなり。其女郎二三日おゐて見たいと親かたとりとめてさしがみも出さぬに。とつばしのうら宿よりよびにおこす

女郎はおしくともおかぬがよしと下心。僧都もときおかせたまへり。

三之巻終

禁短氣三編四之巻

第一 若衆前世の縁を恨勤

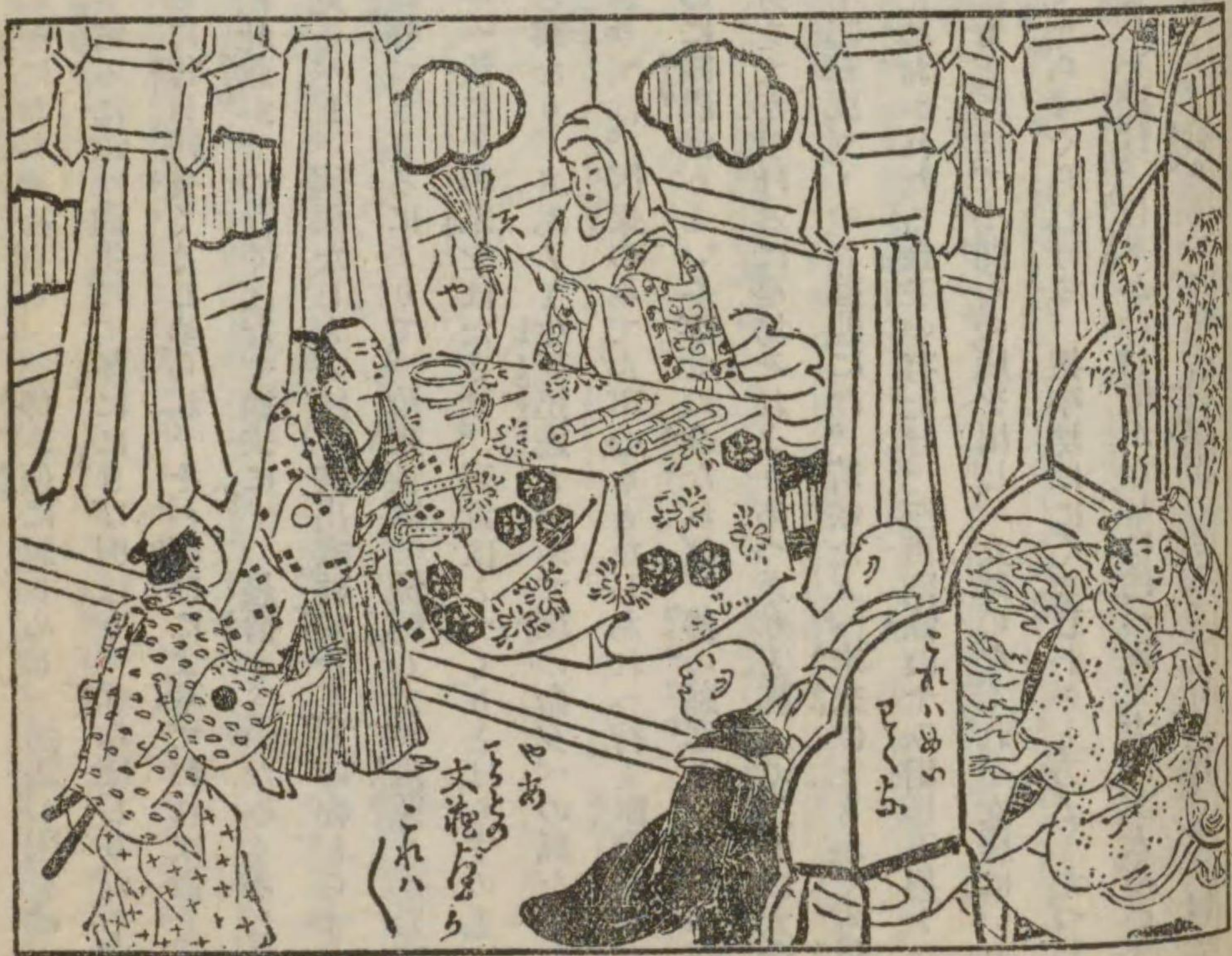
付り 大盡のふらす花代高直のはじめ

平等世界施一切衆道と。きく時は宮川町堺町吹屋町道頓堀はいふにおよばず。諸國の飛兒蔭間も一枚看板出世の素懐。てゝおやは置つきんにて着屋をあしらひ。伯母も從弟も臺所まかないにはいり。そのむかしたつた錢三貫にて親方へ賣はなせしを。髪中のしらみのせうやくより。しらくぼの藥さみせん功を経て。若ひ者まかせに田舎へとびめぐらせ。ちと小錢もまうけらるゝ土地へ旅芝居がゆくと聞ては。地衣裳舞臺衣裳切こみ給金とらずにこしもと役に出してもらひ。まだむなづくしといふて銀の百五拾匁か貳百匁は大夫本の仕入にとられ。座敷の花代をたのみにくだせばかならずさきの所にて。地小屋かける仲間から博奕をすゝめて。屬て往たるわかき者大きにこかさされ。その子の衣裳まで打こみ花代一錢ものぼさず暇乞なしに行衛しれぬためし。思へば仕たてあぐる親かたの恩大方ならず。都大歌舞妓とどめられての後に。村山又兵衛物まね狂言づくしに仕かけ。大夫子も一夜金二歩にさだめそのゝち大夫成とて。東山にて座ぶるまひして銀五兩茶屋へ銀十匁程つかへば。大々盡様とよばれし事思へばちかき事なり。伊藤小大夫といふ若衆紅絹のふたの物して座敷つとめをして見て。諸國の野郎ふんどしをはづし始けるとぞ。金次第になる男色行はれて寺々の新發意も苦艱をたすかり。昔の出家衆は律義に若衆より外は罰があたると思はれしにや。こゝに河内國信貴山のふもとにし三十七八なる律僧祈禱の施物に。寺賑ひ近在より十五六なる小童をかへ磨みがきさせて。晝は供にもつれられ夜るのたのしみと心がけ給ふに。六七日つとめて此小童おやもとへにげ歸り。心やすき人にかたりけるはた

またまはぜひもなし。夜るばかりにあらず晝もさびしき時は庫裏へまねかるゝくるしみ。たへがたくにげ歸りぬとの沙汰より。たれいふ共なく信貴山の日尻と申たてしより。でつちにやらんといふ親なく。金はくさる程あれ共寺法にて京大坂へも出る事あたはず。いかゞせんとかけ出る駒をしづむる心にてくらされける所に。鞍坂の地藏開帳の群衆をめでてに大坂より中芝居くみたて。かつほくはよけれ共口上のゆかぬ立役。音は高けれ共辰巳あがりなる敵やく。きりやうは見事なれ共ぎく／＼とする女形。取あつめて初日よりの繁昌お寺がちなる所を。こころあてに新部子の物もえいはぬをぶたいへつきならべてのおどり所作事。庄屋の息子大百姓の二番ばへそへまねき。こゝへよびける中に花村歌之丞とて生年すでに十九さいなれ共。ふりそで着たる所は十六には過じとぞみへし此子第一の藝には拍子あしく。舞臺からすまたをふまるれば。よんでからいかゞと見あはずに思ひの外。きやくごなしにて大食客にはゞからず。楊枝つかへばはしやうがわるくなると聞こみ。隙なる夜はいかなる所作



をか自まへに稽首めさるゝや。晝は八十ばかりなる老翁に聞まがへ。中／＼立身心もとなしとかゝへの親方もあぐみはてたるに。すつる紙屑あればひらふ髪なしぎやくありて。信貴の日尻是になづみうけ出してお寺小性にせんとのかはだて。座本へ人をいれて相談あれば座本はその子の親方とちかき親類にて。あづかり來れ共親方へ申つかはすに及ばず。來年はげんぶくさせてそりさげにして。樂屋がよひ晝食もたせる覺悟。しかるにうけ出さんとあは天のあたへと心やすく手を打。金拾八兩にていとまもらせそれより寺へ呼とられ。小性仕たてにつくりなされさて亭坊いふても十八兩のかはりと思ふより。あけても暮ても抱てねられけるまゝ。此若衆廿日あまりにせいこんつきはて命ありてのつとめと。さまん／＼にわびこといへば亭坊あざわらつて汝おさなきよりつとめにのみかゝりて。佛法のありがたき事を聞さるゆへなり。先その方が宗旨はとへば。若衆こたへて親代々淨土と答ふ。その淨土にもせよ法花にもせよ因果應報といふ事あり。前生にて人の物をかりてかへさざれば此世にてせひかへさねば



ならず。此世にてその果をつくさざる時は未來にて地獄の釜におちせめらるゝを佛ふ便に思しめし。過去の因をげんぜにてみださんとみちびき給へり。今汝と愚僧がちぎり考るに汝は前生にて顔にきび引はり。赤みばしりたる山寺の強藏法印にして。その時愚僧は若衆なりしが汝がために毎日毎夜くるしめられ。その報ひによりてわれは僧と生まれ汝は若衆となりて。日夜汝をさいなむにいたるそれ程此勤がせつなくばなぜ過去にて。愚僧をさいなみくるしめしや此因果の道理うたがはしくばいか成出家にも問て見るべし。因果なしといは、其出家破戒むざんの物しらずとしるべし。此世にてわが思ふまゝに汝をさいなまざれば此報つきざるによりて。汝來世にて流轉し永々末業うかむ事有べからず。われ五百戒をたもち慈悲の行を第一とするゆへ汝にその果をはたさせ。來世はとつくりとはちすの上尻のすはる様にしてやらんと。あけてもくれても苦勞する事なり。さあ、生死迅速といふて朝の命夕べの風をまたず。せつながうちもゆだんのならぬ娑婆世界暫時もたゝおきては。因果のみてん事心もとなしあれへ行と眠藏をゆびさせば十九に成て。わるがしこき事は覺へぬいたれ共つみに談義参りといふ事せぬ身なれば。佛の慈悲といふ物は扱扱せつなき物と涙くみぜひなく。二三日もまた亭坊に身をまかせけるに亭坊それよりめつきりと高ぶり愚僧は太義なれ共汝をふ便に思ひ。かくは行ふぞと思にきせて晝夜十二三度ヅ、のお慈悲には。若衆たとへ未來はともかくも爰を欠落せんと人の見ぬ間に。眠藏なる金箱へかゝりしこためおかれたる金子の有たけ。三百兩餘ぬすみ出し下男となれあひ非時参りの留主に。大坂へぬけ行くだんの三百兩をもとてにて小間もの店を出し。女郎のなぐれを女房にいれて河内屋の太郎右衛門とあらため。いとびんに成て誰はどからずくらしける。扱亭坊はにくきしわざと方々たづねさせ。二三ヶ月も過て大坂に。のうくくとして居るよしを聞付。自身かけ付何かなしに内へ入て大ぬす人めいきずりめと。衣の袖をまくりあげてせけば。太郎右衛門をぬす人と仰らるゝに何ぞ證據がござるかといへば。十八兩とふ金子を出してよび取おきし身が我まゝにぬけ出るのみならず。三百兩餘の金子をぬすみ取てはしりしが。大ぬす

人てなくば何であらうと。ひたいに筋をたてゝぞ申されける太郎右衛門けら、わらひして。御事おさなきよりみせん小歌にのみこゝろをいれて。御説法と申事かつてうけ給はざりしに。先日御しめし有かたくそれゆへかけおちいたしましてござる。是も前生にてそなた様わか衆の時かけ落なされしむくひにして。前生にてわたくしの金子三百兩餘をなた様がぬすまつしやれたにより其報ひにて。此世にてわたくし方へうけ取しと申物。しかれば大ぬす人大がたりといふそのもとはこなたの事よ。それ程とられて腹の立義ならばなぜさきの世でわしが金をぬすまつしやれたぞまいます。大がたり大盗人めがとうでまくりしてのゝしれば。かの僧も理にせまり持た棒てといふはわが身の上かと。せめて其内百兩らいせまでかして下されよ。來世にて急度返辨せんとなげかるれば。それでは業因はてしなし因果はな

第二 養齒もぬけ目のなき仕組

付り ぶり袖の戀はわきのつまらぬ身ぶり

近年たへたる物南京糸あやつり。女中棧敷見やらぬ野郎舞臺へあがつてのゆび切。むかしよりかはらぬ物は古手屋の舖のくらきと。新部子のいねぶると。色所の者の粹じやと女郎もおもしろがると思ふはまり。扱は家賃いれてかよふ大盡の贅いふは。ちはやふる紙衣ひとへになるまでやまぬ物なり。安藝の宮嶋備後の轡をはじめ。旅といふ旅へ出して見ても。無器用にてせたけ斗のび親方の心には。鉢植の梅の枝ぶりのびたるこゝちになしめ共。かへらぬ物は年波とともに顔に小皺もよれば。小歌うたひに成ともせんと思ふ折ふし。鬚くふ虫ありて有後家御のお氣に入そめ。下さるゝ程にしてやる程に内證福つんとはねたる身となり。此後家御内々より手を廻して身請し給ひ。花川色之助とい

ふ名を清八とあらため。手代ぶんにて内へいれ夜の御伽をつとめけるが。あまりかせがせ給ふおどもりにやつゐるに後家御はむなしくなられ。かたみわけはおもてむきより臨終まへにお袖の下より千四百兩もうけ取。そのうちいとま取て世をのがれ醫者ぶんのなでつけあたま。くわへの様なる髪さきにもいまだ腎虚せず女房をもち男子一人もうけて。質と兩替の舗を出させ一子成人して八郎左衛門と名のりしかば。色之助も法躰せられ川野流徳とあらため。参り下向にのみ打かゝつてゐられけるに八郎左衛門めきくゝと金をつかひ出し。三年たゝぬ内に親流徳にかくし家藏まで書こみ。過分の金子をかりつまらぬ場に成てゆくゑしれずかけおちしけるを。いろくゝとさがせ共しれず金箱は皆空がらと成諸道具いつの間にかはぬすみ出して。錢に成物ひとつものこらず流徳はとあきれはつる内に。家質ながれてもとの木阿彌と成六十日を。おくりかねたる所に北野にて新芝居の興行。立役かたき役は大かたにそろへ共若女形のたて物たらず。芝居師ふと思ひつきて質屋の隠居流徳はもと花川色之助といひし女形。六十七八になられても若き時よりみがかいれたる顔のいろつやのこれり。今むすこにわかれて内儀よめ。かけ落せし八郎左がわすれがたみのおさなき孫共をはごくみかねらるゝ由。むかしが昔なれば此度めづらしく若女形のたて物にたのんで見まいかと。うはばみの七兵衛といふそれしやをかけて相談しかけて見しに。今外に心あてなき老のいりまへあんじくられたる身なれば。何とぞつとめて見ませふといちまいもなき齒を惣つなぎにいれさせ。ときみがきむかしに歸り初日より駕にてのがくや入。樂屋にてかづらも帽子もかくる事なれば。内よりは坊主あたまに丸頭巾にてゆかるゝ間。惣座中色之助さま共大夫様ともいひがたくいかゞせんと評定して見るに。頭取が了簡を出し色之助老とあしらはせ。大ふり袖にてお姫様やく世界はとかく化物のより合なり。遠目からはあつばれの色若衆と。見へける故にや諸見物のかけ隣。よいや金箱めとほむれば其金箱はせがれめが。あきがらにせし物とおぼへずほろりと涙をこぼしける。是ぬれ事のさい中なれば眞實の涙大きにあたり上手にきはまつたとの取きた。爰に西の京茶宇問屋の娘におみねとて。晋に聞へし品もの樂ら

らひして。親の心をいためしかも外に悪性もきこへず。身は近町につゞくものなき。大のり物にてこしもとはしたあまためしつれ。此芝居見物にきたり色之助を見せめ。しづこゝろなく心うかれある茶屋をたのみせめて。盃を成ともといひこみければ。色之助も世にうんじ果たるみぎりむかし後家御のおかけかうふりしためし思ひ出して。所躰をつくりかづらかけて行べきかいやゝ座敷ではかへつてしがの見ゆる物と。むらさきちりめんのゑりまきをかしらにかけ。茶屋へよれば色之助さま御出とのしらせ。娘は初戀しのぶ戀うれしいやら恥かしひやら心ときめきする所へ。あつはれほれられ自慢にて色之助老すこし身をひずみて。座敷になをりしりめにいろをもたせてかの娘を見れば。娘びつくりしてくわしやをよび。ひそかにあれなる白藏主の様な御隠居様はいづかたのお人ぞ。わしはつかへもおこらねばおゐしやさま。よんで下されよとも申さぬにはやういなしまして下され。色様のござんした時じやまになりませふとあれば。あれがおしたひなさるゝ色之助さまと聞て。娘なみだをはらゝとながしみづから父母のそはさふと有むこをきらひ。あまりおとこのみせしおやのばちにてかゝるばけ物に出あひし事は是にて觀念し。今より二親のお心にしたがふべしと色之助老へはことばもかけず。取いそぎのりものに取のりとばかはとしてぞ歸りける。あとにのこされし色之助老へ茶屋より申譯もなく。亭主が出てあたまをかけば色之助老思ひの外きげんよく。われそのむかしは女形なりけれ共四十年ほど中だへて此道にかゝらず。しかるに只今の娘御われらを見てびつくりせられ。こはがられし身ぶりびんしやんとしてのり物へのられし所。若女形の眼のつけ所此外になし。嬉しや一時に役者道の發明をひらけりと宿にかへれば。表より頼ませうといふてはかまきたる手代つり臺をもたせ。おかけによりて手まへ主人の娘おや次第に躰をいれんとの養ひとへに。御自分様の顔の皺よりおこればちりめん十卷白銀三十枚進上との口上。おもひよらぬ徳つきてきげんよく翌日の舞臺。きのふの娘の所躰をうつけければ其まゝの女じゃ。とても事に菊之丞のせられし無間の鐘をさせて見たいと諸見物より。のそむゆへにはかに狂言をかへてめりやすの場のけいこ。何をいふても行